転生無双　至高の武人伝

時語り

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転生無双　至高の武人伝

【Ｎコード】
Ｎ１１４１Ｍ

【作者名】
時語り

【あらすじ】
現世で死亡した北郷一刀は、とある理由から転生の道を選んだ。その世界で彼は、激動の中を生き抜いていく。武人として、生き残りたい一人の人間として。　＊当作品はオリ主の転生物ではありません

プロローグ　転生先は……（前書き）

当作品に興味を持って頂き、ありがとうございます。
こんな転生物はどうだろうと考え、思いきって書いてみました。
もう一方の作品と一緒に進めていくので、更新は遅いかもしれません。
こちらは董√か蜀√になると思います。
どちらになるかは、今後のお楽しみです。
ではどうぞ、お読みになってみてください。

プロローグ　転生先は……

剣道大会の帰り道での出来事だった。
赤信号を飛び出した子供を助けようとした少年が、大型トラックに跳ねられた。
地面に叩きつけられた瞬間、これまでの思い出が頭の中を巡る。

（これが……走馬灯ってやつ……か）

途切れた少年の意識は、二度と戻ることは無かった。
北郷一刀、僅か17年の生涯だった。
だが北郷一刀の意識は、とある暗い空間にいた。

「ここは……どこだ？」

何も見えない真っ暗な空間で、水の中にいるように漂っていた。
しばし周囲を見渡していると、どこからか音が聞こえてきた。
それもまるで、馬群が近づいてくるような轟音が。
恐る恐る音のする方向を振り向くと、そこには化け物がいた。

「ご主人さまぁぁぁぁっ！」
「うぎゃぁぁっ！　なんだお前はぁ！！」

完全に目に毒なその男を目にすると、思わず顔面を殴り飛ばしてしまった。
顔を抑えて痛がるその男の格好は、ピンクのパンツ一丁のマッチョ男。
しかも坊主の割りにモミアゲだけ残して、それを三つ編みにしている。

「いったぁい。もぅ、ご主人様ってば何するのよ」
「それはこっちの台詞だ！　お前は誰でここはどこなんだぁ！！」

クリーンヒットした割には鼻血も出ていないが、それ以上に現状が知りたい。
故に一刀は、ご主人様という呼び方も気にせず、殴った男にも強く出ていた。

「そうね、まずは自己紹介しましょう。私の名前は貂蝉。外史の管理者をしているの」
「へぇ、貂蝉ねぇ……。って、貂蝉ってまさか、あの三国志で有名な！？」
「正解よ。さすがご主人様」

拍手をされても、全く嬉しくもなかった。
傾国の美女とも言われる貂蝉が、こんな厳ついおっさんなのだから。

「まぁこの際、そんな事はどうでもいいや。取りあえず、説明を続けてくれ」
「あら、今回のご主人様は切り替えが早いのね。それじゃあ説明してあげる、何故あなたがここにいるのかを」

貂蝉からの説明で一刀は自分が死んだ事。
そのために外史というパラレルワールドに歪みが出来てしまった事を知った。

「何でその外史ってのが歪んだんだ？」
「さっきも説明したけど、この外史っていうのは尽くあなたを必要としているの。だけど、あなたは自分が行くべき外史に行く前に死

んでしまった」

つまり行くべき存在が消えたため、外史の歴史が捻じ曲がってしまったらしい。
それを修正するために、貂蝉ら管理者は一刀を行くべき外史の過去に送ることに決めた。
死んだ魂を回収し、外史の過去へと転生させるために。

「なるほどなぁ、元々俺がいた事にして事態を修正しようっていうのか」
「そういう事よ。という訳で、早速行ってくれるかしら？」

こうは言われたものの、やはり不安だった。
外面的には外史という世界を守ることになるが、自分は戦乱の世を生きる事になる。
しかし一刀は、一度死んだ身なのだからと腹を括った。

「……分かった。正直どうなるか不安だけど、俺として生きられるなら行ってもいい」
「その点は保障するわ。あくまでご主人様として、向こうに送ってあげる」
「ありがとう」

礼を言うと同時に、空間に光が差し込む。

「さぁ、あの光の向こうがあなたの行くべき外史の過去よ」
「あぁ。それじゃあ行くか」

意を決して、一刀は光の中に飛び込んだ。
意識が遠のく中で、そういえばどんな処に転生するのだろうと考え

ながら。

五原郡九原県にある、とある家。
そこに住む夫婦の間に一人の男の子が生まれた。

「ご主人、産まれましたぞ。元気な男の子でございます！」
「おぉっ、俺の跡取りが！　妻は大丈夫か？」
「はい。奥様は疲れきっておりますが、母子共に健康でございます」

医者の報告に男は腕を天に掲げて雄たけびを上げた。
逸る気持ちを抑えて妻のいる部屋に入ると、妻の隣には自身の息子がいた。

「あなた……」
「良く頑張ったな。今はゆっくり休め」

妻に笑顔を送ると、男は子供をじっと見つめる。

「こいつが俺の息子か……きっと良い男になるぞ」
「ふふふっ、あなたったら。ところで、この子の名前は考えたの？」
「あぁっ！　姓の呂に続いて、名は迅（じん）、字は烈堂、そして真名は一刀だ」

こうして一刀は外史に生を受けた。
それは後の乱世に名を轟かす、究極を越えた至高の武人の誕生でもあった。

プロローグ　転生先は……（後書き）

お読み頂き、ありがとうございます。
前書きにも書いた通り、更新は遅いかもしれないのでご了承ください。
分かる人には分かっているかもしれませんが、果たして一刀はどこに転生したのでしょうか。

一刀の決意

諸々の理由で転生の機会を得た北郷一刀。
しかし転生先は、外史と呼ばれる一種のパラレルワールドだった。
しかもその時代は後に三国志の時代へと突入する前、いわば嵐の前の静けさな頃。
それを承知で一刀は、転生の道を選んで呂家の長男として生を受けた。

「じゃあ一刀、お父さん仕事に行ってくるぞ」
「いってらっしゃい、お父さん」

転生した一刀は呂迅と名付けられ、両親の愛情の下すくすくと育っていた。
だが、はっきりと意識が繋がった時は色々と大変だった。

（しまった、転生って事は赤ん坊からやり直しって事じゃないか！）

今更ながら気付いたが、既に赤ん坊に戻ってしまったので、喋れない上に思い通りに動けない。
それでもどうにかしようと、日々もがいていた。
傍から見れば好奇心旺盛な子と取られるので、周りの大人達もほのぼのとしていた。
それが生後半年で歩けるようになったのだから、周囲は驚いていた。
さらに二ヵ月後には、ある程度の会話も出来るようになった。

「いやぁ羨ましいね。これほど優秀な子なら、将来は有望だな」
「優秀な文官になるのか、天下無双の武人になるのか、今から楽しみですな」

周囲の褒め言葉にも、父親は軽く返した。

「この子の将来も大事でしょうけど、いつまでも家族で仲良くやっていければ、俺は構わないですよ」

仕事は何に就いてもいいから、家族で一緒に過ごす時間を大事にしたい。

ささやかな幸せを願う父に、一刀は複雑な思いを抱いていた。

（今は何もないけど、この先は戦乱の世に巻き込まれるんだよな）

先の事を知っているだけに、父親の望む幸せに不安を感じていた。

そんな一刀に、嬉しい事が起きた。

「一刀、お前に弟か妹が出来たぞ！」

母親の妊娠が判明、前世では一人っ子だった一刀にとって、初めての弟か妹が出来たのだ。

これには父親と一緒に大喜びし、生まれるまでの間を楽しみにしていた。

そして数ヶ月後、無事に妹が生まれた。

しかもその子は姓が呂、名が布、字が奉先、真名は恋と名付けられた。

（えぇっ！　という事は俺って、あの呂布の兄って事か！？）

性が呂だったので、呂蒙か呂布の関係者だったらなと思っていた。

ところが実際には呂布の肉親、それも兄という立場。

しかも弟ではなく妹という点に、この世界がパラレルワールドとい

う事実を再び認識する。

（呂布が女の子なんだ、他の有名な武将や軍師だって……）

ならば、呂布……恋を戦いの道に行かせなくて済むかもしれない。
いくら最強の武人とはいえ、こんなに可愛い妹を戦いに巻き込みたくない。
何よりパラレルワールドならば、呂布が武人にならない世界があってもいいんじゃないか。
そう判断した一刀は、大事な妹に代わって武の道を進む決心をした。

「武を学びたいだと？」
「うん。父さんや母さん、恋を守るために強くなりたい」

本当は戦乱の世で両親を守る意味もあるのだが、現状ではこう告げるのが精一杯だった。
父親はしばし考えた後、問い掛けた。
人を守るための力を手にするのは、敵を倒す力を手にするより大変だと。
しかし一刀の覚悟は決まっていた。
どんなに困難な茨の道であろうと、歩いて行くと決心した。
全ては恋を戦場に出さないため、代わりに自分がその役目を請け負うつもりだ。
自分が呂布の代わりに武人となって、戦乱の世で家族を守るために。

「分かった。父さんの知り合いに頼んで稽古を付けてもらおう。ただし、一度決めた以上は逃げるなよ」
「はい！」

力強い返事によろしいと頷いた父親は、早速知り合いの男に一刀を

預けた。
厳しくしてくれと頼まれたのか、修行はかなりハードだった。
日も上がらぬうちから何里も走り、時には一日中走り続けることもあった。
それが終わったら、ただひたすら基礎訓練の繰り返し。
頭ではなく体に覚えこませるため、似たような動きを何日も掛けて叩き込む。
これが数ヶ月、一年と続き、内容は変わらないが、月日と共に量だけは増えていき、既に二年目に突入していた。

「ぜぇ、ぜぇ、まさか二年も基礎訓練をするなんて」
「当然だ。膨大な基礎訓練があってこそ、確かな地力を得られるのだからな」

そう言いきるだけあって、師となったこの男の実力は高い。
一撃必殺の攻撃力には欠けるが、打ち合いで持久戦に持ち込めば敵う相手はいない。
ところが、この戦い方は多人数相手にはあまり向いていない。
なので、兵や武将として仕官するのは諦めざるをえなかった。
だが、初心者の一刀に基礎を教えるには最適な師だった。

「さぁ立て。この後は錘(おもり)を付けての持久走、続いてそのまま型の確認をするぞ」
「はい！」

元気良く返事をして修行を再開するが、終わった頃にはすっかり性も根も尽きていた。

「ただいま……」

気力だけで体を動かし、どうにかこうにか帰宅する。
このまま玄関で寝ようかなと考えるが、待っている人を見たらそんな気は無くなった。
彼を待っていたのは、ヨチヨチ歩きで出迎えた幼い妹の恋だった。

「……にちゃ、おきゃり」

まだ舌足らずな処はあるが、兄に見せる笑顔は純粋そのもの。
それを見ただけで疲れが癒されたような気になり、元気が湧いてきた。

「ただいま恋、元気にしてたか？」
「恋、にちゃ待ってた。いっちょにご飯、食べりゅ」

話は通じていないが、だからこそ良い、と一刀は心の中で叫んだ。
ここにいるのは武人の呂布ではなく、砂糖と可愛い物で出来た妹の恋なのだと断言したかった。
口にしたら頭は大丈夫かと言われそうだが。

「今なら俺、妹萌えの気持ちがすっごく分かる！」
「……みょえ？」

訳が分からず首を傾げる様子に、思わず鼻を押さえて膝を着く。

「くっ……これはまさに最終兵器。こんな可愛い妹、誰の嫁にもするものか！」

まるで父親のような発言をすると、恋を抱き締めて頬ずりする。
恋は遊んでくれているのかと思ったのか、キャッキャと笑い声を上げる。

笑い声を聞いた両親が様子を見ると、そこには理想の兄妹像のような、仲睦まじい我が子がいた。

「あなた！　私は今、猛烈に感動しています！！」
「俺もだ！　一刀が武を学ぶと聞いた時は心配したが、あの子達の絆はこれくらいで壊れやしなかった！！」

ひしっと抱き合う夫婦の姿は、親バカ爆発そのものだった。
両親の存在に気付いた一刀が呆気に取られるほどに。

「……とうたま、かぁたま、なかよち」

無邪気な恋の言葉で我に帰った両親は、自分達を見ている子供達の視線に恥ずかしくなった。
しばしの沈黙の後、呂家にようやく夕食の刻が訪れた。
こんなやり取りがたまにありながら、更に五年の月日が経った。
修行の方は二年前にようやく基礎修行から、武器を使っての実践訓練が行なわれるようになった。
待ってましたとばかりに飛びつくが、基礎をたっぷり積んだのだからと内容は濃かった。

「たぁっ！」
「相手の動きに集中するのはいいが、もっと周囲にも注意を払うんだ！」

師の男は、自分のように欠点のある武人にはしないと、早い内から上の段階の修行をさせていた。
普通ならば体が付いてこないのだが、五年も基礎修行を続けた甲斐もあって、付いて行くことは出来た。
内容の濃さに毎日四苦八苦しているが、師の男の一刀の素質に驚き

の連続だった。

「う、うむ……。だいぶ良くなったな」

「本当ですか！？」

だいぶどころか、普通に手合わせしたら敵わない程だ。

得意の持久戦に持ち込んでも、逆に自分が先に疲れて一本を取られる。

五年の基礎修行の間は気づかなかったが、まさか二年で自分を越すとは思いもしなかった。

これ以上は自分が教える領域でないと判断した男は、ある決断をした。

「強くなったのは本当だ。だが、まだ決定的に足りない物がある」

決定的に足りない物。

それは何かと、真剣な表情で次の言葉を待つ。

「戦場を知らない事と、そこで人を殺せる覚悟が有るかどうかだ」

「っ！？」

考えに至らなかった点を指摘され、一刀の表情が苦々しくなる。

これまで強くなる、家族を守るとは言っていたものの、一刀は戦場と人を殺める事を知らない。

つまり、今の一刀は道場剣法を収めたに過ぎない。

さらに上に行くには、戦だろうが野試合だろうが実戦経験が必要になる。

住んでいる邑が平和なのは良いが、それ故に実戦経験を積む事が出来なかった。

「そこでだ、お前を俺の知り合いの下に送ろうと思う」
「師匠のお知り合いの方ですか？」
「あぁ。以前にお世話になった方だが、中々気前の良い方だ。本当の武人になりたいなら、是非行くべきだ」

その人物の下に行けば、戦場での経験も積めるし、人を殺めるという意味を教えてくれるという。
何よりその人物なら、この子を更なる高みへ導けると信じていた。
嬉しい申し出だが、そうなると家族の下を離れなければならない。
それも長期間で、いつ帰れるかも分からない。
自分一人では決められないと判断した一刀は、後日返事をすると返して、家族に相談することにした。

「という訳なんだけど」
「ふむ……」

息子の話に厳しい表情をする父親。
返答を待っていると、隣にいる恋が服の裾を引っ張る。

「アニィ……遠くに行っちゃうの？」

まだ決まっていないというのに、既に泣きそうな表情になっている。
つい、行かないと言いたくなるが、ぐっと堪えて恋の頭を撫でる。

「心配しなくても、兄ちゃんは大丈夫だよ」
「恋は……やだ……アニィと離れたくない」

寂しそうな表情で落ち込む妹の姿に、決意が揺さぶられる。

（ちょっと待て、なんだこの可愛い子は。俺の妹かぁ！）

最初にアニィと呼ばれた時は、どこの外人さんかと思ったが、今となってはすっかり定着している。
それどころか、普通にお兄さんやお兄ちゃんと呼ばれるよりも、破壊力があるように感じる。
前世で一人っ子だった故の錯覚かもしれないが、一刀は別に構わなかった。
これはこれでイイ！
と割り切って、兄ライフを満喫している。

「分かった、行ってこい」

急に話は本題に戻り、父親は息子の旅立ちを許可した。
現実に引き戻された一刀は、慌てて緩んだ表情を引き締める。

「いいの？」
「うむ。お前が武の道に進んだ以上、いつかはこうなると思って、父さんも母さんも覚悟はしていた」

ちらっと一刀が母親に視線を向けると、寂しそうな表情はしつつも、こくりと頷いて見せた。
出来れば一緒に行きたいのだが、生活の事もある。
一家で相手の下に押し寄せる訳にもいかない。
かといって、行った先で新しい仕事が見つかるとも限らない。

「分かりました。立派な武人となって、必ず家に帰ってきます」

家を離れる事を許してくれた両親に、深々と頭を下げる。
恋はよく分かっていないようだが、母親は薄っすらと目に涙を浮かべる。

父親は気丈に振るっているが、しばしの間とはいえ、家族全員で過ごす時間が無くなることが寂しかった。
数日後、決心を告げた一刀は師からの紹介状と邑の人々の餞別を手に、邑を旅立つことになった。
別れ際に恋が大泣きし、一緒に行くと我侭を言って一刀にしがみ付いた。
両親の手で恋が離されると、一刀は恋の頭を撫でながら伝えた。

「大丈夫だよ、絶対に帰ってくるから。その時はちゃんと「ただいま」って言うから、待っていてね」
「ひっ、ひっく……わかった。恋待ってるから、帰ってきてね」
「うん。約束だ」

最後にとびっきりの笑顔を見せて、触れていた手を離して背中を向ける。
邑の人々の別れの言葉にも、一度も振り向くことなく歩を進めていく。
その一歩一歩が、一刀を至高の武人への道筋を残すようだった。

一刀の決意（後書き）

家族を守るため、妹を戦場に出さないために決意を固めた一刀。
行った先で待ち受けているのは、果たして誰なのだろうか。

知るべき真実　知るべき場所

真の武人を目指して旅に出た一刀は、野を越え山を越え、目的地へと向かう。
道中で商人や農家の荷車に乗せてもらい、暇を見て基礎鍛錬をしながら旅を続けた。
幸い盗賊に襲われることも無く、無事に目的地の益州に入り、教えて貰った巴郡に辿り着いた。

「ここかぁ。やっぱり街は大きいなぁ」

初めて見る街の大きさに、思わず溜め息が漏れる。
ともかく紹介状の人に会いに行こうと、城門を潜ろうとする。
すると、警備をしていた兵士が一刀を呼び止めた。

「ちょっと待て、何の用でここに来た。見たところ商人ではなさそうだが、旅芸人か？」
「いえ、僕は知り合いの紹介で……この人に会いに来たんです」

懐から紹介状を取り出し、裏側に書かれてある名前を見せる。
その名前を見ると、兵士はどよめきだした。
しばらく待てと言いつけ、どこかに走っていってしまう。
言われた通りに待っていると、数人の兵士と一人の女性を連れて戻ってきた。

「こやつが親父宛の紹介状を持ってきた儒子か？」
「はっ！　おい、さっきの紹介状を出すんだ」
「は、はぁ」

親父宛と言ったのだから、おそらくは娘さんだろうと紹介状を見せる。
受け取った女性は裏面の宛名を確かめると、紹介状を開いて内容を読みだした。
ざっと目を通した後、再度じっくりと一刀を眺める。

「ほぅ、中々良い気をしておる。よかろう、ついて来い儒子」
「えっ、あっ。は、はい！」

満足そうな表情をして、どこかに向かう女性の後を追う。
街中で珍しい物をキョロキョロと眺める。

「なんじゃ、街を見るのは初めてか」
「えぇ。ずっと田舎の邑にいたんで」
「はっはっはっ。そうかそうか。それでは仕方ないな」

最後に色々と、と小さく呟いた言葉は一刀の耳に届かなかった。
やがて一刀が連れて来られたのは、この街にそびえ立っていた城だった。

（えっ？　なんでこんな処に？）

理解出来ない状況に首を傾げるものの、今はついて行く事しか出来ない。
やがて到着したのは、この城の玉座。
一刀は初めてこんな場所に入ったのでうろたえていると、案内してくれた女性が玉座に座った。

「我が名は厳顔。この巴郡の太守で、お主の紹介状の宛名にある人物の娘じゃ」

「あっ……こ、これは失礼しました。太守様とは知らず、ご無礼を」

相手が太守と知り、慌てて膝を着いて頭を垂れる。
その様子を見た厳顔は予想通りの反応に笑みを浮かべる。

「そんな堅苦しくせんでよい。それよりも紹介状の件じゃが」

話が紹介状の事に移ると、途端に厳顔の表情が曇る。
そして告げられた内容は。

「すまぬが、会わせてやることはできぬ。わしの親父は……既にこの世におらん」
「えっ……」

ようやく目的の場所へ辿り着いて、さぁこれからという時に、目の前に突きつけられた事実。
一刀はただ呆然として、厳顔の言っている事を聞き続けた。
亡くなったのは先月だということ、田舎の邑にいたから知らなかったのだろうと。
だが一刀にとっては、そんな事はどうでもよかった。
せっかく踏み出そうとしていた道が、踏み出す前に通行禁止になってしまったのだから。

「そんな……」
「……儒子よ。わしで良ければ親父の代わりに鍛えてやるぞ？」
「……え？」
「わしも親父の下で鍛えられた武人じゃ。仕事の補佐をする、という条件付きじゃがな」

それを聞いた一刀は、厳顔の背後に光が見える気がした。

一度閉じた道を、この人が再びこじ開けてくれた。

「よろしくお願いします、厳顔様！」

「うむ。ではお主の名を教えてもらおう、いつまでも儒子という訳にもいかんからな」

「はっ！　姓は呂、名は迅、字が烈堂と申します」

元気良く答えると、うんと頷いて席を立つ。

玉座を降りて一刀の横を通り過ぎると、振り向いて一言。

「早速じゃが、荷物を部屋に置いたら付いて来い。書簡の整理を手伝ってもらう。ある程度の読み書きは出来るのじゃろう？」

「はい！　すぐに準備します！！」

頭を下げたまま返事をすると、待機していた侍女に部屋へ案内してもらう。

その後姿を見ながら、厳顔は満足そうに呟く。

「良い返事、良い行動力じゃ。さて、久々に血が滾ってきたわい」

上唇をペロッと舐めると、楽しくなりそうだと言いながら執務室へ向かう。

こうして一刀の新しい生活が始まった。

厳顔の仕事の補佐は、とにかく忙しいの一言だった。

片付いた書簡や竹簡を次から次に運び、整理しながら次の仕事も運んでいく。

右へ左へと走り回っているが、基礎修行を五年、その後の二年も基礎続けただけに、疲れらしい疲れは見えない。

もっとも、疲れないというだけで、忙しいのには変わりないが。

「さすがは太守だけあって、仕事量が半端じゃないや」

やっとの事で訪れた休憩時間で、前世の記憶から厳顔の事を思い出す。

といっても、劉備の家臣、黄忠との老将コンビで名を轟かす等程度で、あまり詳しい事は覚えていない。

「それがこっちでは、あんなに綺麗な女性なんだよな」

想像できた事だけに驚きはしないが、やはり慣れない。

呂布も厳顔も女性であることに。

それでも慣れないといけないと、自分を鼓舞して休憩を終わりにする。

「厳顔様、今日の仕事はこれまでです」

「そうか。よし、この後に兵の調練があるから、それに混ぜてやろう」

「はっ、ありがとうございます！」

返事をして書簡を片付けると、そのまま調練場へと連れて行かれる。

到着すると、既に来ていた兵達が準備運動をしていた。

調練開始前に体を温めている辺り、しっかりと教育が行き届いているのだろう。

「呂迅よ、今日の調練は基礎鍛錬じゃ。お主の基礎がどれだけのものか、しかと確かめさせてもらうぞ」

「御意」

厳顔の言葉から、自分が試されていると判断し、気を引き締めなおす。

準備された鎧を身に纏、先に来ていた兵に頭を下げながら準備運動に加わる。

「では調練を始めるぞ。まずは城壁の外周からだ！　いつものように、集団ではなく個人走で二十周だ」

『はっ！』

隊長らしき男が指示を出すと、兵士達は一斉に走り出した。
集団走ではなく個人走をするのは、個人それぞれの限界を確かめさせるため。
同時に競争心を煽って、調練に身を入れさせるためだ。
そのために全体的な隊列訓練も別に準備し、こういった訓練は五日に一度に限定した。

「さて、果たして呂迅は何番目辺りかのぉ？」

色々と楽しみにしながら待っていると、早くも先頭が戻ってきた。
先頭を走るのは、やはり前々から訓練を積んでいた兵士。
その後も兵士が続いたが、八番手辺りで一刀の姿が見えた。

「なっ！　こんなに前にいるじゃと！？」

目の前を通り過ぎていく一刀を見送りながら、唖然としていた。
紹介状で基礎訓練ぐらいなら付いて来るだろうと思っていた。
だがこんなに早いペースで、果たして二十周も走れるのだろうか。

「五週目、第六番手です」

「八週目、未だ六番手にいます」

「十三週目、四番手に上がりました」

「十七週目、先頭を捉えました！」

「十八週目、とうとう先頭に立ちましたよ！」

周を重ねるごとに上がる順位に、調練を担当している武官達がざわめく。

まだ十歳程度の子供が、付いて来るどころか先頭を独走している。

それも序盤ではなく終盤で。

「なんという……」

呆気に取られている間にも、遅れた兵士達が目の前を通過していく。

その隣を一刀が軽快な足取りで追い抜いていく。

周回遅れになった兵士達は、子供に負けるかと体に鞭を打って走り続ける。

だが、差は縮まるどころか逆に広げられ、あっという間に一刀の背中は見えなくなった。

「な、なんて子供だよ……」

置いていかれた兵士達は、息を切らせながら、最後まで走りきる速度へと切り替えた。

そんな事はいざ知らず、何事もないように走り続ける一刀は、二位に半周以上の差を着けてゴールした。

「ふぅ、始めて鎧を着て走ったけど、いつも付けていた錘ほどじゃないな」

「なんじゃと！　お主、鎧よりも重い錘を付けて走っておったのか

！？」

「えぇ。でもこんなことなら、もうちょっと速く走っても良かったな」

次々と告げられる衝撃の連続に、武官も厳顔もポカンとした。
これほど早いペースで走ったのに、まだ速く走れるのか。
しかも、まだ体力が有り余っているとばかりに、軽快に動き回って後続を待っている。
その後の基礎訓練も、最初こそ古参の兵士に先を行かれるが、最後には先頭になっていた。
それも始めての参加だからと、幾分か抑えているかのように。

（なんという儒子じゃ。親父殿、お主の友人は、とんでもない逸材を紹介してくれたかもしれぬぞ）

武において土台となる基礎がしっかりしているどころではない。
武官達が民の家ほどの土台で、厳顔自身が城ほどの土台ならば、一刀の土台はこの街以上。
すぐにでも本格的な修行を課せば、元服する頃には一流の武人になれるはず。
そう踏んだ厳顔は、早速行動を起こすことにした。

「呂迅よ。お主にはもう少々、調練をしてもらうぞ」
「はい！　それで何をするんですか？」
「まずは得意な戦い方を教えてもらおうかの。剣か、槍か、それとも弓か？」

得意な戦い方を尋ねられ、しばし考えてみる。
邑で教わっている間は、剣と無手での戦い方を教わっていた。
剣は前世でもやっていたし、無手も妙に戦いやすかった。

その事を伝えると、剣と無手の両方を鍛えようという事になった。

「よし、どこからでも来い。わしが直々に鍛えてやるわい」

「お願いします！」

こうして始まった修行だが、その内容は凄惨たるものだった。

「その程度で家族を守れると思っておるのかぁ！」

「立て立て立て！　それでも武人を志す男かぁ！！」

「どうした、お主の強さへの決意はその程度か。よくこの程度で、家族を守るなんて言えたもんじゃな」

事あるごとに罵っては、全力で殴るか蹴りつける。
ちょっと褒められて調子に乗ったら、馬鹿者呼ばわりして殴る。
倒れた状態からなかなか起き上がらなければ、ぐずぐずするなと蹴りつける。
血反吐を吐こうが深手を負おうが、容赦なく怒鳴って手を上げる。
とにかく徹底して、反抗心や恐怖心を持たせようとしている。

（やばいって、想像以上だ。本気で死ぬかも）

一刀はそう言っているものの、やっている内容は大変なものだった。
普通の武官なら一時間もしないうちに倒れるほど、ハードな内容なのだ。
それを何だかんだ言いながらも、ちゃんとこなしているのだから、周囲の評価は高い。
故に、いつかは来るべき時もやって来る。

「呂迅よ、お主を明日の賊討伐に同行させてやる」

本当の戦場を知るべき時が。

「じゃが、その前にやるべき事がある」

そう言って、一本の刃物を一刀に投げつける。

放り投げられた刃物は放物線を描き、地面に突き刺さった。

これをどうするのかと見上げると、厳顔は冷たい目つきで言い放った。

「その刃でわしを刺せるか？」

冷酷な口調で言われたので、思わず背筋に寒気が走る。

「どうした？　日頃の鬱憤が晴れるぞ。殴ったわしが憎かろう、恨めしかろう」

このために、日頃から厳しくしていた。

ここでどういう行動や発言をするかで、今後も大きく左右される。

そういう気持ちで、厳顔は一刀を見下ろしている。

「これより戦場に向かうのに、人一人刺せぬ腰抜けか、お主は」

溢れ出る殺気と、鬼のような形相で睨まれる。

普通の人ならば逃げ腰になるだろうが、一刀は逃げようとしない。

刃物を抜いて立ち上がり、キッと睨み返す。

掛かって来るのかと構えるが、握られた刃は遠くに放り投げられた。

「なんじゃあ、人を刺すのが怖いか」

「いえ……僕にはあなたを刺す理由がありません」
「理由じゃと？　お主は日頃より、わしに甚振られておるではないか」
「修行の身とあらば、それは当然の事。その程度で厳顔様を刺しては、欲に塗(まみ)れた賊と変わりません」
睨んでくる厳顔から視線を外さず、淡々と語る。
自分がなりたい武人というのは、私怨や感情任せに動く人物ではない。
家族を、大切な人を守るために力を振るう人物であると。
一言一句聞き逃すまいと、真剣な表情で聞き届けた厳顔は、うむと大きく頷く。
「それでよい。もしお主が刺してくれれば、その場で破門にするつもりじゃったが……正直、わしの想像以上じゃ」
厳顔の予想では、怖くて刺せないが良い処だと思っていた。
しかし、実際には己の力の使い道を捉え、それを説いてみせた。
そこまで殺生に関する考えがしっかりとしているならば、誰も文句は言うまい。
「お主は戦場を、人を殺める事を分かっておらん。明日の賊討伐で、それを知る勇気はあるか！」
「はっ！」
「我が領地に住む民を救うため、欲に塗れた賊共を殺せる覚悟はあるか！」
「はい！」
「人殺しの罪悪感と悪夢とも戦い、武人としての心を保てると誓えるか！」
「誓います！」

自信を持って答え、真剣な表情を向ける。
その表情から体全体までじっくりと眺められ、やがて厳顔の表情が緩む。

「よかろう。呂迅よ、お主はわしの傍で、明日の賊討伐を己が目に焼きつけよ」
「御意！」

こうしたやり取りを終えると、明日に備えて一刀は兵士達の準備を手伝いに走る。
少し大きくなった背中を見つつ、厳顔は小さく呟いた。

「やれやれ、大したものじゃ。まっ、しばらくは慣れんじゃろうが、あれだけの覚悟があればじきに慣れるじゃろう」

本当の戦場を知ったときは、誰もが一度は戦慄を覚える。
初めての戦場が怖くない者などいない。
厳顔も昔は嘔吐を繰り返し、壊れそうになりながら人を殺めていた。

「あやつは絶対に壊れさせん。親父殿、我が一番弟子の行く末を見守ってくだされ」

そこまで呟くと、翌日の出立に向けてその場を後にした。
そして、ついにその日がやって来た。

「行くぞ、皆の者！　我らが地を荒らし、畜生へと成り果てた賊共を滅ぼしてくれようぞ！！」
『おぉぉぉっ！！』

先陣に立つ厳顔の号令で兵士が雄叫びを上げ、隠れ家から出てきた賊に向かって走り出す。
その様子を一刀は、厳顔の横でじっと見つめていた。

「人が……死んでいく」
「当然じゃ、ここは戦場なんじゃからな」

あっちこっちで上がる血飛沫。
断末魔の悲鳴に、倒れた兵士や賊を平気で踏みつける姿。
死んだ人間の醜い形相、大地に染み出る大量の血液と体液、人ならざる目で襲い掛かる賊の姿。
どれもこれも初めて見るもので、あまりの凄惨さに胃の中身が逆流してくる。

「うぶっ……」
「吐いても構わんぞ。その代わり、何度吐こうがこの光景を目に焼き付けるじゃ」
「げっ、げっ、は、はい……」

胃の中身を吐き出した口を拭い、息を切らせながら戦場を目に焼き付ける。
一度覚悟した以上は、ここから逃げるわけにはいかなかった。
何度も嘔吐をしながら、今にも気を失いそうな表情で、必至に目を向け続ける。

（よく耐えておるな。こんな小さな体の、どこにこれほどの強い心があるのじゃ）

指揮を執りながら一刀にも目を向け、耐える姿を見つめる。
格好悪くても、必死にもがいて強くなろうとする姿を。

（わしも昔は、こうだったのかのぉ）

自身の昔の姿に重ね合わせて見ていると、兵士の一人が報告に来た。

「報告！　敵前線は総崩れ、敵本陣が落ちるのも時間の問題とのこと」

「うむ、分かった。聞けぃ、皆の者！　我らの領地で重ねし罪の数々を、奴らに後悔させてやれ！　総員、突撃！！」

『おぉぉぉぉっ！！』

兵士の雄叫びと共に後方に控えていた部隊が突撃を掛ける。

賊の頭が討たれたのは、それからすぐのことだった。

「終わった……」

「あぁ、終わった。お主もよく耐えて見せた。帰ったら、そのまま寝て構わんぞ」

「いえ、そんな訳には……！？」

反論しようと倒れそうな体を動かすと、頭の中が回転するような感覚に襲われる。

額に手を当てて顔を振ると感覚は消えたが、妙な感覚は残っている。

「強がらんでもよい。大丈夫と思うても、心の疲労は体力とは違う。よいな、しっかりと休め」

それだけ言い残すと、一刀の事を部下に任せて戦後処理に動き出した。

城に戻った一刀は千鳥足で寝所に辿り着き、バタリと倒れ込んだ。

薄れいく意識の中で、自身の手が震えていることを実感しながら。

「ははっ……これが実戦か。僕もまだ……まだ」

薄れていた意識は、完全に落ちて夢の中へと誘われる。
やがて日が落ちた頃、戦後処理を終えた厳顔が部屋を訪ねていた。

「ふふふ、よぅ寝ておるわい」

寝所の端に腰を掛け、眠っている一刀の前髪に触れる。
燃える業火のような赤い髪の下には、年相応の寝顔があった。
これが先ほどまで、歯を食い縛って戦場を見ていた少年とは思えない。

「呂迅よ、お主はきっと良い武人になる。その時まで、わしが見守ってやろう」

そっと髪をどかして額を覗かせると、そこへ唇を落とす。
再度一刀の寝顔を見た厳顔は、満足そうに微笑んで部屋を後にした。
明日からは、どうやって鍛えてやろうかと思案しながら。

知るべき真実　知るべき場所（後書き）

無事に目的地についたものの、待っていたのは過酷な日々。
戦場を知り、命を知ろうとする一刀の修行はまだ始まったばかり。

あなたを想って

本当の武人になるため旅に出た一刀は、厳顔の弟子として修行に打ち込む。
普段は太守である厳顔の補佐をし、ひとたび修行となれば、厳しい内容を怒鳴られながらこなす。
時には兵士の調練に混じったり、武官と手合わせしたり。
そして、戦場で人の死に直面する。
こうした生活が半年ほど経ったある日、一刀は初めて戦場で人を殺した。

「どうじゃ、呂迅。人を殺めた気持ちは」
「……重いです。命を奪う武器の重みは変わらなくても、命を奪った重圧が積み重なって。凄く……重いです」

ギュッと衣服の心臓辺りを握り、洗い流したはずの血が目に映る。
人の体を斬った時の肉の感触、吹き出てくる大量の返り血。
周囲から聞こえる断末魔の雄叫びと、醜い死に顔。
命を奪われて肉の塊となった、さっきまで生きていた人の山。
その全てを恐ろしく感じた一刀は、自分の体をしっかりと抱えている。
取り敢えず、最悪の方向である快感には目覚めていないようなので、ほっとした。

「呂迅よ、お主はぶつかるべき壁にぶつかったに過ぎん。それを乗り越えなければ、真の武人にはなれぬぞ」
「……はい」

返事はしたものの、表情はあまり良くない。

このままでは、いずれ一刀の心が壊れかねない。
もう少し経験を積まそうにも、この状態では逆効果になる。
そう考えた厳顔は、玉座を降りて一刀に歩み寄る。
そしてまるで母親のような表情で、一刀の体をしっかりと抱き締めた。

「げ、厳顔様！？」

突然の事にうろたえる一刀を気にせず、両腕に力を入れて身を寄せる。

「大丈夫、大丈夫じゃ。人を殺めたのが怖いのなら、わしを頼れ。こんな事でいいなら、いくらでもしてやる」

優しい声でそう言われると、心に住み着こうとしていた重い物が消えていく気がした。
段々と軽くなる気持ちに、つい一刀も厳顔に抱きつく。
まるで淋しがりやのような素振りに、抱き締めている厳顔も心が温かくなってくる。

（ふふふ、これではまるで母親ではないか。まだ男も知らんというのに）

しばらくそうしていると、表情に生気が戻った一刀が離れた。
ちょっと惜しい気もするが、渋々厳顔も手を離す。

「ありがとうございました。もう大丈夫です」
「そうか。すまぬな、こういうやり方しか出来ずに」
「いえ、厳顔様の温かさが伝わってきて、とても安心しました」

心から送った言葉と笑みに、言われた厳顔は思わず頬を染める。
すぐ自分に何があったのかと、我を取り戻すが、心臓が早く強く鼓動している。

（な、なんじゃこの気持ちは）

これまでの人生で初めての気持ちに、どう例えれば良いかも分からずにいる。

「では、これで失礼します。武官の人の手伝いをするので」
「う、うむ。分かった、行ってこい」

許可を得た一刀は、颯爽と玉座を出て仕事に向かう。
残された厳顔は玉座に座り込み、大きく溜め息を吐く。
昔、今は亡き母親にされた事をしただけなのに、何故こんな気持ちになるのか。
しかもこの気持ちはおそらく。

（これが……恋というものか？）

経験したことの無い気持ちに、自分の心を疑ってしまう。
だが、疑えば疑うほど、嫌な気持ちも大きくなる。

（何故……何故じゃ。何でこんなに嫌な気分になる）

自分の気持ちが分からなくなってきた厳顔は、その日の夜に自室で飲み耽った。
翌日には頭痛になったが、それでも心の内は変わらない。
一刀に会ったら強く鼓動する心臓、上がってくる体温。
恋では無いと否定すると湧き出てくる、とても嫌な気持ち。

（くそっ、くそっ、何なんじゃこれは！）

バンッと卓を叩いても、気持ちは晴れない。
むしろ、虚しさだけがこみ上げてくる。

（わしが……呂迅を……）
「……様」
（本当に、恋を……？）
「厳顔様！」
「おうっ！？」

考え中に呼ばれたので、つい驚いた声を上げてしまう。
誰に呼ばれたのかと振り返ると、そこには一刀がいた。

「な、なんじゃ呂迅よ。急に呼ばれては驚くではないか」
「先ほどから呼んでいましたよ。それより、黄忠というお方がいらっしゃったとの報告が」

聞かされたのは、久々に聞いた友人の名。
久しく会っていない友人の訪問に心躍らせながらも、一刀が近くにいる事も気になる。

「うむ、分かった。そ、それでは客人を通すよう話を通したら、お主は酒を持って来い」
「お酒って……まだ昼間ですよ？」
「いいから！　さっさと行ってくるのじゃ！！」

妙に焦っているような口調に疑問を感じながら、言われたとおりに動く。

部屋に残った厳顔は、上がった体温を下げようとする。
ようやく落ち着いた頃、扉が開いて黄忠が姿を現した。

「久し振りね、桔梗。元気にしていた？」
「当然じゃ。紫苑こそどうじゃ、最近は」
「悪くないわ。仕事も討伐も順調だし、後は良い人が見つかればいいんだけど」

冗談っぽい表情で告げるが、その一言は厳顔には重かった。
友人と会うために蓋をした気持ちが、一気に溢れ出てきてしまう。

「そう……か」

冴えない表情と返事に、黄忠は異変を感じ取った。

「どうかしたの？　悩みがあるなら聞くわよ」
「う、うむ……。実は」
「失礼します、お酒を運んで参りました」

なんとも絶妙なタイミングで、頼んでいた酒が届いた。
当然、それを持ってきたのは一刀である。

「ご苦労様。あなた、初めて見る子ね」
「これは申し遅れました。我が名は呂迅、厳顔様の下で武の修行をさせてもらっています」

酒を卓に置き、礼儀正しく頭を下げる。

「あらあら、これはご丁寧に。私は黄忠、桔梗……厳顔とは昔からの友人なの」

にこにこしながら名前を教えると、では黄忠様とお呼びしますと返される。
その際の笑顔が、黄忠と厳顔の心に深く刻まれる。

（な、なんて笑顔をするのこの子。こんな笑顔、絶対に忘れられないわ）
（むぅ、また暑くなってきた。くそっ、せっかく落ち着いたというのに）

反応こそ違えど、まだ十歳の一刀の笑みは印象的だった。
日頃から戦場に身を置く二人の心を癒し、深く印象付けたのだから。

「では、これで失礼します。お酒が足りなくなったら、いつでも言ってください」

そう言い残した一刀は部屋を出て行った。
すると室内にいる二人は、まったく別々の反応をした。
見惚れたような溜め息を吐く黄忠に対し、やっと出て行ったかと安心する厳顔。

「桔梗、あなた良い子を弟子にしたわね」
「あ、あぁ、じゃが……な、その……」

弟子を褒められたにしては、妙に反応が悪い。
不思議に思いながらじっと観察していると、なんとなく理由が分かった。

「桔梗、あなた恋をしているわね」
「！？」

いきなり図星を突かれたので、これまでに見せたことのない驚きの表情を見せる。
友人の初めて見せる表情に、にこにこと笑みを浮かべて楽しそうにする。

「ひょっとして、まさかとは思うけど、あの呂迅っていう子に？」
「ままま、まさかそんな事はあるまい！？　あやつはまだ十の子供でだな」

必死にごまかそうとしているが、動揺しているのは目に見えて明らかだ。
これは間違いないと踏んで、詳しく話を聞くことにした。

「ねぇ桔梗、ごまかさないで話してちょうだい。友人として、相談に乗りたいの」

優しい表情を見せると、先ほどまで慌てていた桔梗も落ち着く。
椅子に腰を掛けて酒を呷ると、昨日からの自分の心をポツポツと語り始めた。
新しく芽生えた感情、否定するたびに嫌な気分になるこの感情。
それに掻き回され、何も手につかない状態になってしまうと。

「間違いなく恋ね。いいじゃない、それほど年の差がある訳でもないし」
「紫苑、そんなにあっさりと言わんでも……」

両肘を卓に着け、小さくなりながら呟く。
自分で肯定しきれなかった感情を、友人はあっさりと肯定した。
それが悔しいのと同時に、はっきり恋と断言されて恥ずかしくなっ

た。

「まさか今頃になって恋をしようとは……」

「そんな事ないわよ。恋はいくつになっても、どんな立場になっても出来ることよ」

「それはそうじゃが……。正直、どうすれば良いのか分からん」

小声で唸りながら、初々しい反応を見せる厳顔の様子を楽しむ黄忠。

だが黄忠とて、黙っている訳ではない。

先ほどの一刀の笑顔が、どうしても頭からも心からも離れないのだから。

「だったら、私が貰っちゃおうかしら」

「なっ！？」

突然の宣戦布告に顔を上げると、黄忠は笑いながら続けた。

「だって、凄く可愛いじゃない。それに、あなたの弟子なら腕も心も良いのでしょう？」

「じゃ、じゃが、奴はまだ未熟者、それに元服すら迎えておらん！」

「未熟なら鍛えればいいし、元服まで五年でしょ？　それくらい、あっという間よ」

確かにそうなのだが、言われていると何故か心が荒れだす。

取られたくない、呂迅は自分のもの、友人とはいえ譲れない。

初めて黄忠に感じた負の感情、嫉妬によって不安も募っていく。

飲んでいた酒の手助けもあり、それは一気に爆発した。

「嫌じゃあ！　紫苑といえど呂迅は渡さん、奴はわしの婿にするのじゃ！！」

涙目で叫ぶと、しばらく室内が沈黙する。
沈黙を破ったのは、変わらない笑顔を向ける黄忠だった。

「ようやく素直になったわね、桔梗。どう？　まだ気持ちは重い？」
「むっ？　そう言われれば、幾分軽くなったような」
「あなたは自分の心を認めようとしなかっただけ。認めてしまえば、そんなものよ」

策は成ったとばかりに笑みを浮かべ、素直になった厳顔に説いてみせる。
厳顔もやられたという顔をするが、くくくっと笑いながら席に着く。

「やられた、やられたわい紫苑。そうか素直にか、何故気づかなかったのやら」
「初めてのことで焦っていたんでしょうね。でも大丈夫、もう落ち着いたでしょ」

ようやく元に戻った厳顔の様子に、安心して酒を飲む。
中身が無くなったのを見て、厳顔が酒壷を差し出す。
黄忠は黙って杯を出すと、それになみなみと酒が注がれる。
それを手にとって、互いに杯をぶつける。

「桔梗の恋路に乾杯ね」
「改めて言うな」

乾杯を交わすと、同じタイミングで酒を呷る。
空になった杯を卓に置くと、黄忠は大事な事を思い出したかのように告げる。

「そうそう、私が呂迅君を欲しいっていうのは本気だから」
「ぶほっ！」
「これって一目惚れかしら。友人とはいえ、手は抜かないわよ」

正式な宣戦布告を伝えると、喧嘩を売られた厳顔はそれを買った。

「望むところじゃ、奪えるものだったら奪ってみぃ」
「いいわ。その代わり、対等な勝負のために私を将として迎えてくれない？」

現在黄忠は、荊州にて職に就いている。
なので正々堂々と戦うためには、ここに赴く必要がある。
だが、いちいち来るのも大変なので、いっそ転職させて欲しいという訳だ。

「ふむ、よかろう。わしも正々堂々と戦ってやるわ」

相手の希望を飲み、抜け駆けなしの勝負を挑む。
戦ならともかく、女の戦いなら正々堂々とやっても問題はない。

「楽しみにしているわよ。それまで手を出さないでね」
「当然じゃ。どうせまだ五年は時間があるのじゃからな」

こうして黄忠は、益州へと移り住むことになった。
荊州での身の回りを整理し、厳顔の下に来るまで五日と掛からずに。

「ひっ！？」
「どうした一刀」
「いや、今何か身の危険を感じたような」

一緒にいた少女と周囲を見渡すが、他に誰もいない。

「気のせいか……」

「そうか？　ならいいんだけど。それより、早く修行に付き合ってくれ」

「分かったから、待ってよ焔耶」

せわしく一刀の腕を引っ張るのは、少し前に賊に襲われた邑の生き残り。

他の住人も生き残ったが、この少女の両親は助からなかった。

行き場の無くなった少女は、泣いている処を一刀に見つかった。

『母上……父上……くそっ、私に力があれば！』

『君は、家族を守りたかったの？』

『当たり前だ！　私が強ければ、父上と母上は……』

自分の無力が悔しく、悲しい少女は拳を握り締めながら涙を流す。

一刀は、その少女を自分と重ねた。

（僕が力をつけなければ、この子と同じ目に）

無力ゆえの悲しみを味わいたくない。

そんな悲しみを抱えた少女を救いたい。

そう思った一刀は、黙って少女を抱きしめた。

『な、何をする！？』

『僕にはまだ、家族はいる。けど、君のように悲しみたくない。だから、僕は武の道を選んだ』

耳元で紡ぐ言葉に、最初は怒りを感じたが、後の方の意味はなんと

なく分かった。
武の道を選ばなければ、彼は今の自分のようになっているかもしれないのだと。

『君が望むのなら、僕の師匠に頼んであげるよ。君に武を教えてって』
『だ、だが、私にはもう守りたい人は』
『……僕じゃ駄目？』
『なっ！？』

告げられた言葉に驚くが、一刀は構わず話を進める。

『僕は家族を守るため、強くなる。その時、僕は自分を捨てるかもしれない』
『……』
『その時、君には僕の命を守って欲しい。自分を捨てようとする僕の命を、殴ってでも元の道に戻し、お互いに背中を預けられるように』

紡がれていく言葉に、少女は一刀に心を許した。
守りたい人がいないなら、自分を守って欲しい。
家族を守るために戦う自分を、守れるだけの武を身につければいい。
新しく開けてくれた未来に、少女は泣きながら頷いた。

『ぐすっ、うぅ、分かった、お前を守る。ひっ、ひっ、私にも、守れる人がいるって、天国の父上と母上に見せてやるんだ』

こうして少女は厳顔の下に行き、一刀の口添えもあって無事に弟子入りした。
少女は姓が魏、名は延、字は文長と名乗った。

さらに自分に道をくれたお礼にと、焔耶という真名を一刀に預け、一刀も真名を預けた。
以来、暇を見ては二人で手合わせをしている。

「やぁっ、はぁっ！」
「駄目だよ焔耶、力任せになったら隙が大きくなるよ。ほらっ！」

力任せに大降りをする焔耶の隙を突き、攻撃を掻い潜って接近する。
反撃に出ようとする焔耶だが、その前に大外刈りの要領で倒される。

「あうっ！　つぅ……やっぱり強いな、一刀は」
「焔耶だって強いよ。でも、ちょっと使い方を間違えているだけ」
「そうか……なら、詳しく教えてくれ」
「うん。いい？　まずは」

中庭で仲睦まじくしている二人。
その様子を見かけた厳顔と黄忠は思った。
あそこに思わぬ伏兵がいると。

「あらら、敵は桔梗だけじゃなさそうね」
「くっ！　すっかり失念しておったわ。わしには真名を教えんくせに、魏延にだけ教えよって」

悔しく思った厳顔は、二人に駆け寄って自分の真名を預ける。
本命は一刀だけだが、ついでに焔耶にも預けてしまった。
それを皮切りに、黄忠も混じって真名の交換が行われた。
それは別名、恋の三つ巴の戦いの始まりでもあった。
焔耶は全く知らぬ事だが、いつの間にか敵の一人として認識されてしまった。

あなたを想って（後書き）

一刀を中心にあらゆる思惑が絡み合う。
果たして絡み合った糸は、どんな物語を作るのか。

再会　しかしそれは叶わず

一刀が桔梗の弟子になり、早三年が経過した。
日々の研鑽もあり、早くも部隊を任されるまでに成長した。
妹の恋を、呂布として戦場に出すまいと打ち込んできた結果、知らぬ間に一刀の実力は相当な物になっていた。

「ぜぇ、はぁ、ぜぇ、はぁ。もう無理じゃ、勝てる気がせん」
「まさか、あっという間に追い抜かれて、こんなに差が開くなんて」
「ひゅぅ、ひゅぅ。駄目だ、このままじゃ一刀の背中を守れない」

疲れ果てて中庭に倒れている、桔梗、紫苑、焔耶の三人。
原因は目の前で疲れた素振りすら見せていない、一刀にある。
桔梗のスパルタ教育と、焔耶と紫苑との修行。
さらに、人並み外れた自己研鑽をしてきた結果、早くも一刀は桔梗も紫苑も越えてしまった。

「えっと……大丈夫ですか？」
「大丈夫なわけあるか。お主、越えてはならぬ壁でも越えたのではないか？」

越えられない壁は聞いたことがあるが、越えてはいけない壁とは聞いたことが無い。
あるとしたら、どのような壁なのだろう。

「そんな、僕はそこまで行く人外じゃありませんよ」
（十分に人外だと思うのだけれど……）

荊州から移ってきたときは、それほど差は無かった。

寧ろ、自分が教える立場だった。
それが僅か三年でひっくり返るとは、紫苑も予想できなかった。

（うぅ……走り込みの距離を増やして、腕立てとかの回数も増やすか）

あの時の約束を果たそうと修行してきたが、差は縮まる気配を見せない。
それどころか、逆に離されている気がする。
どうにかしないと、このまま置いてけぼりにされる。
それだけは嫌だと、焔耶は目の前に立ち塞がる壁に闘志を燃やした。

「じゃあ、俺はそろそろ警邏の時間なのでこれで」
「ちょっと待て」

立ち去ろうとすると、突如右腕が柔らかい感触に包まれる。
ため息を吐きながら見てみると、そこにはしっかりと右腕にしがみつく桔梗がいた。
それも胸で右腕を挟むようにして。

「桔梗様？　後で誰か寄越しますから、離れてください」
「嫌じゃ。疲れた原因は一刀にあるのじゃから、一刀に連れて行って欲しいのじゃ」
「そうそう。だから責任持ってね」

いつの間にか左腕には紫苑がくっ付いていた。
しかも桔梗と同じような状態で。
両腕に柔らかい感触があるので、一刀は理性を総動員して堪えている。

（落ち着け、心頭滅却すれば火もまた涼……って！）

必死に耐えていると、今度は背中にも同じ感触が走る。
当然、背中に引っ付いたのは焔耶だ。

「か、一刀の背中は私が守るんだからな、桔梗様にも紫苑様にも渡さん」

照れながら変な意地を張り、頬を染めてしっかりと引っ付く。
年の割に成長している胸が押し付けられると、さすがに理性も限界が近くなる。

（だあぁっ！　なんで皆こんなにくっ付くんだよ！　冷静に、冷静に）

煩悩を吹き消すかのよう、頭の中で別の事を考える。
前世の記憶から、覚えている円周率や化学式、歴史の語呂合わせを復唱する。
その間に三人をくっ付けたまま、部屋や執務室に連れて行き、どうにか開放されてほっとする。

「あぁもぅ。女性版三国志って、こんなに誘惑が多いものなのか？」

十三年前の貂蝉との出会いから始まった、この世界での生活。
自身が呂布の兄と分かった時は驚いたものの、実際は甘えん坊でちょっと食いしん坊な可愛い妹。
こんな妹を戦場に出させるものかと、十年も修行してきた。

「恋……元気にしているかなぁ」

空を見上げて、三年も顔を合わせていない妹の姿を思い出す。
ヨタヨタ歩きで玄関に迎えに来て、愛らしい姿を見せてくれた。
家にいる時は、いつもくっ付いて来て笑顔を浮かべていた。
食事の時は、黙々と食べているのに自分を含めて家族が癒された。
そんな生活から放れて三年、少しばかり寂しい気分になった。

「あっ、今の俺ってちょっとホームシック入ってる」

長期出張のサラリーマンって、こんな気分なのかと呟く。

「とはいえ、一人前でもないのに帰る訳にもなぁ」

武こそ三人相手に勝てるようになったが、文の方はまだまだ未熟。
最初は前世の知識を使おうとしたが、考えてみればそれは危険だった。
この世界では思いつくはずの無い制度、政策は魅力がある。
その反面、先を行き過ぎて時代が付いて来ない上、周囲には異質な危険分子と見られる可能性がある。
どんなに良い案を提出しても、それはジワジワと首を絞めていく諸刃の剣。
せめてこの世界における、ある程度の知識を身につけなければ、前世の知識は使えない。
そう判断した上で、今はこの時代の知識を身につけようと足掻いている。

（とにかく少しでも勉強して、そこに前世の記憶から少しずつ盛り込むんだ）

もっと学ばなくてはと、気を引き締めて本を読み始める。
良い本だからと桔梗と紫苑に渡されたのだが、質が良い反面内容が

難しい。

（まだ……先の話になりそうだな）

思うように進まない勉学に四苦八苦していると、突然部屋の扉が開かれた。

「大変だ、一刀。西の方で賊が出たらしいから、すぐに討伐隊を組むと桔梗様が」

「だぁ！　勉強時間ぐらいくれよぉ！！」

焔耶の連絡に文句を言いながらも、壁に立てかけた剣を取って部屋を出る。

紫苑と共に賊退治をして帰ってくると、桔梗が褒美をやると言ってきた。

「褒美……ですか？」

「うむ。わしの下に来て三年、しっかり仕事と修行に励んでおったからの」

しっかりと評価してもらえたのは嬉しいが、褒美と言われても欲しい物は無い。

支給品とはいえ剣は持っているし、拳で戦う為の手甲もある。

休暇はちゃんと取れており、給金もこなした仕事分は貰っている。

褒美は嬉しいが、何を貰えば良いのかが分からない。

「そういう訳じゃ、しばらく里帰りして来い」

告げられた言葉が、しばらく理解出来なかった。

「……へっ？」

ようやく理解しても、こんな気の抜けた返事しか出来ない。
そんな返事に苦笑いをした桔梗は、もう一度口にした。

「じゃから、褒美として里帰りしろと言っておる」

再度聞かされた褒美の内容に、思わず感動してしまった。
久しぶりに家族に会える。
何より、あの愛くるしい恋に再会できるのだから。

「ありがとうございます桔梗様！！」

あまりの嬉しさに、笑顔で土下座してお礼を言う。
弟子の思わぬ喜び具合に、良い仕事をしたと桔梗と紫苑は笑みを浮かべる。

「おっと、帰省中でも鍛錬は忘れるなよ」
「ちょっとの怠けが、後々に響いてきますからね」
「承知しました！　それでは、準備があるので、これで失礼します！！」

元気良く返事をすると、まさに神速の如く速さで部屋を出て行く。

「喜んでくれたみたいね」
「当然じゃろ。あやつほど家族を大事に思う奴は、そうそうおらんからの」

満足そうに微笑んだ二人は、残っている仕事を片付けるため、執務室へと向かった。

この褒美が、とんでもない事態に直面する事になるとも知らずに。
翌日、準備を終えた一刀は桔梗、紫苑、焔耶に見送られて出発した。
焔耶が付いて行くと騒いだものの、留守の間の仕事を笑顔で頼むと、顔を真っ赤にして承知した。
勿論、勢い任せだったので、後で焔耶は後悔していた。

「焔耶には悪いことしたし、何かおみやげでもあげるかな。でもその前に、恋とのご対面だぁ！」

馬を走らせながら、待っている家族に想いをはせる。
恋はどれだけ大きく、可愛くなっているだろう。
まさかとは思うが、自分がいない寂しさから弟か妹が増えていないだろうか。
それはそれで良いなどと考えながら、懐かしの故郷へ向かう。
途中で熊やヒゲとデブとチビの盗賊に遭遇するが、帰郷中の一刀の敵ではなかった。

「てめぇらに、俺と家族の対面を邪魔する権利は無ぇ！」

という叫びと共に、一蹴の下に沈んだ。
そんなこんなで、故郷の邑までもう少しという処まで来た。
もうすぐだと胸を躍らせていると、何か嫌な匂いがした。
鼻にツンとくる焦げ臭さ。
嫌な予感を感じた一刀は、馬を急がせる。
邑を見下ろせる小高い丘に着くと、一刀は目の前が真っ暗になった。

「な……んで……」

遠目からでも分かる、廃れた状態の邑、ボロボロの村人達。
所々に残る火を消そうとしている、女と子供。

あの静かで明るい故郷の面影は、どこにも見えない。

「父さん……母さん……恋！」

しばし呆然となりながらも、家族の身を案じて馬を走らせる。
急いで邑に到着すると、やはり邑は廃れていた。
窓や扉が壊され、火事の形跡からして、恐らく賊に襲われたのだろう。

「こんな事って……そんな」
「呂迅？　呂迅君じゃない！？」

掛けられた声の方を向くと、そこには隣の家に住んでいた女性がいた。

「おばさん！　よかった、無事だったんだね」
「どうにかね。そんなことより、皆に知らせなきゃね」

笑顔を浮かべた女性は、足早に邑の中へと走っていく。
それからしばらくすると、大人や子供、老人までやって来た。
全員着の身着のまま、中には怪我をしている人までいる。

「呂迅、よく、よく帰ってきてくれた」
「お前の事は風の噂で聞いていた。頼む、俺達を助けてくれ」
「ちょっ、ちょっと待って。落ち着いて順番に説明してよ。何があったのか」

どうにかその場を収めると、村長から説明を受けた。
事の始まりは半年前だった。
賊からの襲撃を受け、食料と金品を持って行かれてしまった。

死人も数人出たものの、どうにか復興しようと頑張った。
ところがそこを狙い、前日に再び賊が攻めてきた。
作り直した作物も持っていかれてしまい、数件の家には火も点けられた。
翌年の墾田のために持ち寄った、数少ない金品までも被害にあった。
どうにか追い払おうと抵抗したのだが、死人と負傷者を出すだけに終わった。

「もう、わしらには何も残っておらん」
「復興するたびに襲われたんじゃ、やっていけねぇよ！」
「私の旦那も、あいつらに……」

全員ががっくりと肩を落とし、絶望と憎しみだけがその場に漂っていた。
こんな状況で聞くのはどうかと思いつつも、一刀は家族の事を聞かずにはいられなかった。

「僕の……僕の家族は！　父さん、母さん、恋はどうしたの？」

それを尋ねると、誰もが黙って俯く。
やがて一人の男性が、それに答えてくれた。

「お父さんは最初の襲撃の時、賊に……。お母さんも昨日の襲撃で家と一緒に火事で……」
「そ……んな……。恋、恋はどうしたの！？」
「呂布ちゃんは昨日の襲撃の時、山の方に逃げたらしい。でも、行方が分からなくて」

真実は一刀に重く圧し掛かり、心の奥底に紅蓮を宿らせる。
壊滅した邑。

死んでしまった両親、行方不明の妹。
そして生きる希望を失いつつある邑の人々。

「許さない……」

怒りに染まった一刀の表情は、まるで夜叉のようだった。
燃え始めた紅蓮は爆発し、体内を激しく燃え上がらせる。

「村長……賊がどこにいるか分かる？」
「噂では東に二里ほど行った処にある、廃村じゃが……まさかお主！」
「皆はここにいて。僕が……俺が賊を潰してやる！」

そう叫んだ一刀は、自分が乗ってきた馬に飛び乗って駆け出す。
止める間もなく行ってしまったので、人々はどうするべきか右往左往する。
その中で村長だけは、一刀の奥底に目覚めた炎をある人物と重ねていた。

「なんという……。ふふふ、まるで昔お会いした孫堅殿のようだ」

江東の虎の面影を感じさせた一刀は、まるで疾風のように山道を駆ける。
乗り手の気持ちを感じ取っているかのように、馬も期待に応えた速度を出す。
目の前の岩を飛び越え、他の野生動物の目にも留まらぬ速さで駆け抜ける。
やがて到着したのは、村長に聞いた廃村。
中には所々に人の姿が見え、数頭の馬や何本かの松明も見える。

「ここが奴らの根城で間違い無いな。お前はここにいろよ。ここから先は、俺の戦いだ」

馬を近くの木に繋ぐと、荷物からある物を取り出す。
昨夜、一緒に行けないから代わりにと、焔耶がくれた武器。
刀身は短めで僅かだが反りがあり、柄の端には指くらいなら余裕で通せる穴がある二本の剣。
いつか自分が使いたいと、話したことのある形状を見事に再現していた。
おそらく、鍛冶屋に無理を言って作ってもらったのだろう。
刻まれた銘は、「鮮紅」と「紅蓮」。

「ごめんね、焔耶。この武器の初陣が、俺の勝手な復讐で。でも俺は、父さんと母さん……死んだ人達の敵を討ちたいんだ！」

髪と瞳を紅蓮に輝かせ、一刀は走り出した。
丘を降りて道に沿って一直線に廃村へと向かう。
対する盗賊達は、見張りをしていた数人が一刀の接近に気づいた。

「おい、ありゃあ何だ？」
「ん？　どれどれ……なんだ、唯のガキじゃねぇか」
「武器を持っているが、まさか一人で俺達に挑む気じゃねぇのか？」

誰かの冗談に笑いが起こる。
誰一人として本気とは思えず、本気だとしても子供に負けるとは考えられないのだ。

「よっしゃ、俺が軽く捻ってやる」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら、一人の男が歩きながら一刀に近づ

く。
やがて二人の距離が詰まり、男が一刀に声を掛けようとした時だった。
男の肘から先が無くなり、溢れ出る血に悲鳴を上げる間もなく、首と胴体が斬り離された。

「なっ！？」
「あのガキ、よくも！」

敵を討とうと三人ほどが武器を構えて待ち受ける。
それを視認しながら、あえて一刀は正面から乗り込もうと加速する。
待ち受ける賊は槍を構えたまま、十分に一刀を引きつけて槍を突き出す。
だが槍は刺さることはなかった。
逆に一刀が、敵の動きを紙一重で跳んで避けていた。
上空に跳んだ一刀は、宙返りをしながら逆手に構えた鮮紅と紅蓮で二人の首を斬り裂く。

「ひいっ！？」

首が無くなって倒れる仲間に他の賊は怯え、その隙に一刀に動脈を切られる。

「ぎゃぁぁっ！」
「ひっ、ひいぃぃっ！」

動脈から噴き出る血が一刀を染め上げる。
そんな事を気にせず、修羅と化した一刀は付近にいる賊を次から次に切り捨てる。
返り血を浴びようとも、断末魔の悲鳴を何度聞こうとも、速さも動

きのキレも落ちない。
寧ろ加速しながら敵陣を駆け巡っている。
読んで字の如く、賊を血祭りにあげて自身を真っ赤に染めていく。

「うあぁぁぁっ！！」

悲しみと怒りを吐き出すように声を上げると、賊が一番多い場所へ突撃する。
迎え撃つ相手も決して弱い訳ではないが、一刀にとっては敵ではなかった。
反撃をする間も無く、腹部を斬り裂かれ内臓が飛び出し、肩から腕を斬り落とされる。

「何をやっている！　どけ、俺がやる！！」

中心付近に行くと、賊の頭らしい男が剣を抜いている。
まるで熊のような顔と体つきで、構えもそれなりに様になっている。

（でも、桔梗様や紫苑さん程じゃない！）

「うおぉっ！」

雄叫びと共に振り下ろされた一撃を、左手の鮮紅で受け止める。
同時に腕を引いて相手の力を流しながら、左足を軸に体を横に回転させる。
その勢いを利用して、右手の紅蓮で敵の首を刎ねた。

「か、頭がやられたぁ！」
「逃げろ、逃げろぉ！」

頭がやられた事で、他の賊達は逃げ出す。

だが今の一刀は、誰一人として逃がす気は無い。

「逃がさない……絶対に」

逃げ出した相手を睨みつけ、なおも一刀の戦いは続く。
その日の夕暮れ、一刀を心配した邑の人々が農具を手に賊の根城へ向かっていた。
暗くなってきたために中の様子は見えないが、馬はいるのでまだ戻っていないと判断した。

「村長……」
「うむ、すぐに呂迅を助けに」
「その必要は無いよ」

掛けられた声に丘の下を見ると、そこには悠然と歩く一刀の姿があった。
全身に返り血を浴びている姿にぞっとするが、すぐに怪我は無いか、大丈夫かと尋ねる。

「大丈夫。怪我らしい怪我も無いし、この通り無事だよ」

明らかに作ったような笑みを見せると、振り返って廃村に目をやる。

「賊は全員退治しておいたよ。余所から来ない限り、賊に襲われる心配はないだろうね」
「ほ、本当か？」
「うん。死んだ人の敵は討ったよ」

そう伝えると、来ていた村人は歓声を上げた。
もう何も奪われることは無い、もう一度やり直せる、あの邑を離れ

なくていい。
そんな想いが爆発し、残っている村人に伝えようと駆け足で邑へ戻って行く。
しかし、一刀の表情は晴れなかった。

「どうしたのじゃ呂迅よ。お主も父と母の敵を取ったのであろう？」
「……はい。ですけど、どういう訳か心が晴れないんです。やはり、一方的な復讐だからでしょうか？」

ぎゅっと胸元を掴み、小さく呟く。
それを聞いた村長は顎鬚を触りながら、ポツポツと語りだす。

「呂迅よ。それが人を殺めるという事じゃ。如何に正しい事をしても、相手が外道だとしても、人殺しには変わらない。じゃがそれを背負って生きてこそ、真の武人なのじゃ。わしの古い知り合いもそうじゃったよ」

昔を懐かしむように、桃色の髪をもつ虎を思い出す。

「よいな。それを忘れ、人斬りになった瞬間。お主も殺められる立場になるのじゃよ」

それだけ言うと、村長は邑へと歩き出した。
一人残った一刀は、両手の拳を握り締めて誓った。
今の言葉を決して忘れず、武人としてこの道を進み続けよう。
そして、行方不明の恋を絶対に見つけると。

「恋、待ってろよ。絶対に兄ちゃんが見つけてやるからな」

日が落ちた星空にそう誓った時、ある山中の洞窟の中に一人の少女

がいた。
その少女は、母親に逃がしてもらったものの、道に迷ってしまった恋だった。
両手をこすり合わせ、息を吐きかけて温まろうとする。
しかし温まったのは僅かの間で、すぐにまた寒さが襲ってくる。
少女は寒さと寂しさで、ボロボロと泣き出した。

「ぐすっ、ひっく。お母さん……お母さん……」

母親は炎の中から自分を助けた瞬間、家が崩れて押し潰された。
それでも母親は最後の力を振り絞り、兄の下へ行けと言ってくれた。
最後にごめんねと告げると、母親は恋を叱るような口調で走らせた。
最初はぐずっていた恋も、怒鳴られると山中へ走った。
だが、兄の下へ行けと言われても、場所が分からない。
どこにいるかは聞いたのだが、方向も分からない上によく覚えていない。

「アニィ……恋、どうすればいいの？　寒いよ……寂しいよ……」

泣きながら蹲っていると、突如洞窟内に明かりが差し込む。
驚いた恋が入り口の方を見ると、少し年上のような少女が松明を持っていた。

「お前、どうしたんだ？　何でこんな処にいるんだ」

不思議そうにしながら歩み寄ると、突然少女は恋に抱きつかれた。

「うおわっ！　な、なんだお前は!?」
「ひっ、ひっく。恋、アニィの処に行きたい。お願い、アニィの処、連れて行って！」

「だぁ、落ち着け！　誰だよアニィって！」

訳の分からない事態に少女も混乱する。
するとそこへ、数人の兵士を連れた女性が現れた。
女性の背中には、恋が抱きついている少女と同じ年くらいの少女がいる。
足を怪我しているのか、足首にしっかりと包帯が巻いてある。

「どうしたの華雄。あら、その子は？」
「あぁ、丁原様。いきなり抱きついてきて、アニィの処に連れて行ってと言うんですが」

華雄と呼ばれた少女が答えると、丁原と呼ばれた女性が恋をじっと見る。

「あなた、おうちは？」
「おうち……燃えちゃった。お母さん、アニィの処に行けって」

泣きべそをかきながら、恋は必死に何があったのか説明する。
父親が死んで、家が燃え、母親も火に飲まれ、別れ際に兄の処へ行けと言われたと。

「そう、辛かったのね」

丁原はそっと恋を抱き締める。
ようやく感じた暖かさに、恋も安心して涙が納まりだす。

「それで、おうちがあるのはどこ？」
「分からない。恋、迷子」
「そう……じゃあお兄さんがどこに居るか、知ってる？」

「聞いたことある。でも、覚えてない」

再び泣き出す姿に、背中にいる少女も華雄ももらい泣きする。
兵士達も気の毒に思っていると、丁原はある事を決めた。

「ねぇねぇ、お姉さんの処に来る？　一緒にお兄さん、探してあげる」

「……ホント？」

「本当よ。だから大丈夫、もう泣かないで」

少し強めに抱き締めると、嬉しさと暖かさから恋は泣き出す。
そんな恋を抱きながら、丁原は思った。

（こっちまで演習に来て良かったわ。この子を華雄ちゃんと霞ちゃん同様、ちゃんと育ててみせるわ）

しっかりと抱き抱えられた恋は、幸か不幸か呂布として歩みだそうとしている。
かくして恋は、丁原が官使を勤める南県へと向かうのだった。

再会　しかしそれは叶わず（後書き）

再会どころか、両親と永遠の別れをした一刀。
生き残った恋は図らずも、呂布への道を歩もうとしている。
二人が再会するのは、いったいいつなのだろうか。

今　約束を果たすとき

三年振りの再会は、邑が賊の襲撃を受けていて叶わなかった。
両親を奪われた一刀は賊を退治し、行方不明となった恋を探すと誓った。
復興の始まった邑の片隅で、両親の墓に手を合わせてその事を伝える。

「父さん、母さん。恋は必ず見つけるから、どうか安らかに……」

目を閉じてしばし黙祷を捧げ、一度頭を下げてその場を後にする。
焼け落ちた家の中から、焼け残った数点の物を袋に詰め、それを乗せた馬に跨る。

「もう行くのか？」
「うん。ごめんね、せっかく帰って来たのに」

本音は、すぐにでも恋を探しに行きたい。
しかし今の一刀は、軍で部隊を束ねている身。
主君である桔梗の許し無しに、身勝手な行動はできない。

「気にするな。一晩でもお前と過ごせて、わしらは嬉しかったぞ」

村長の言葉に誰もが頷く。

「呂布ちゃんを見つけたら、邑に帰って来いよ」
「いつまでも待っているわよ。ここはアンタ達の故郷なんだから」

一人一人から贈られる言葉に、しっかりと返事を返す。

やがて全員が一言ずつ告げ終わると、最後に一刀が別れの言葉を告げて巴郡へ出発する。

「それじゃあ皆、またいつか。恋を連れて帰って来るよ！」

道中、恋がいないかと辺りを見回しながら進み、とうとう見つからずに巴郡に戻って来た。
随分と早い帰還なので桔梗達は驚いたが、帰って来た一刀から話を聞くと、そんな考えは吹き飛んだ。

「そうか……故郷が賊に」

とびっきりの褒美だったはずが、予想外の悲劇になってしまった。
教わった武を個人的な復讐に使った事、せっかく貰った武器の初陣を、こんなことで血に染めた事。
一刀は桔梗と紫苑、焔耶の三人に、その事をただひたすら謝った。

「気にするでない。お前は悪くないのじゃからな」
「そうよ。誰だって大切な人を失えば、そうなってしまうわ」
「大丈夫だ、一刀。私達は気にしていないし、怒ってもいない」

三人は歩み寄って、肩に手を添えるか手を握るかして、慰めの言葉を掛ける。
すぐに恋を探しに行けとも言われるが、一刀は自分を許しきれていなかった。
そんな自分への戒めのため、ある提案を桔梗に伝える。

「桔梗様、妹を探しに行くまでもう二年、ここに置いてください。その二年で今一度、自分を鍛え直したいんです」

復讐心だけに駆られた自分の心。
個人的な事のために学んだ武を使った自分自身。
こんな自分に恋を探す資格は無いと思った一刀は、自分を鍛え直すために二年という時間を求めた。

（こ奴……本当に十三歳か）
（一刀君の年齢なら仕方ないと思ったけど、まさか自分で答えに行き着いているなんて）

慰めはしたが、本来なら良いとは言えない事なので、落ち着いたら教えようと思っていた。
しかし、そんな心配は無用だった。
既に答えに行き着いて、そのための時間を必要としている。
周りから見れば大したものだが、実は一刀は前世で十七年、現世で十三年生きている。
つまり、一刀の精神年齢は三十に達している。
それを考えれば、当然の結論なのかもしれない。
しかしそれは、大事な人をすぐに探しに行かないという、間違った選択でもある。

（じゃが、今言ったところで聞くはずもあるまい）

ちらっと焔耶に視線を向けた後、桔梗はこの申し出を容認する。

「よかろう、その二年でお主をもう一度鍛え直してやる。覚悟せい」
「はい」

処遇を決めると、それぞれの仕事に戻る。
まだ休みの予定だった一刀は、焔耶に頼んでいた仕事を引き受け、桔梗と紫苑は執務室で椅子に腰掛ける。

「……いいの？　本当にここに置いておいて」
「焔耶次第じゃろ。ダメなら明日にでも、ぶん殴って破門にしてやるわ」
「そうだったわね。今は、焔耶ちゃんしか一刀君を正しい道に引き戻せないわ」

先ほどのやり取りの事を話しながら、積み上げられた書簡に目を通して印を押す。

「紫苑よ、おせっかいかもしれぬが、妹君を探す手伝いは出来ぬかのぉ」
「出来なくはないでしょうけど、余所の地までは無理よ。でも、益州内での情報は可能な限り集めるわ」

互いに目を合わせて頷くと、紫苑は捜索の手配のために席を外す。
と言っても、さっきも言った通り探せるのは益州内のみ。
それも益州全体の情報までは、さすがに手に入れられない。
やらないよりはマシだが、有益な情報が手に入る可能性は低い。

「はぁ、隠密が上手い者が欲しいのぉ」
「無い物ねだりしても、仕方ないわよ。それじゃあ、早速手を回してくるわね」
「頼む」

自分の陣営に足りない物を自覚しつつ、紫苑に情報収集を頼む。
この後、間諜の補充に関する案件を見つけた桔梗は、有無も言わず許可の印を押した。
一方の一刀はというと、まるで不安を払拭するかのように兵士の調練をしていた。

「はぁぁっ！」

突っ込んできた兵士の一撃を、拳と掌の位置をずらして挟み込む。
白刃取りの変形のようなこの技で、調練用の剣の刀身は折れた。

「なっ！？」
「隙ありぃ！」

驚いた一瞬の隙に、折った刀身を持って腹部に叩きつける。
調練用に刃が潰してあるので、斬れる事は無いが兵士は蹲って咳き込む。

「次！」
「はい、お願いします！」

次々に掛かって来る兵士を、何の苦も無く退けていく。
時には二、三人を一度に相手にするが、無手のまま相手にして軽く投げ飛ばす。
後ろ腰に差している鮮紅と紅蓮を抜く事も無く、あくまで無手で調練を続けていく。
その後姿には、まるで地獄の業火が燃えているように見える。

「一刀……何があったんだ？」

数日前までは見えなかったそれに、焔耶は少なからず不安を覚えた。
調練が終わった後も不安は拭いきれず、その日の夜に一刀の部屋に赴く事にした。
夜になり、寝巻き姿で灯りを手に一刀の部屋の前へ行く。

「一刀、まだ起きているか？」
「焔耶？　僕ならまだ寝てないけど」
「そうか、それじゃあお邪魔する」

扉を開けた向こうには、蝋燭の灯りで勉強をしている一刀がいた。
集められた本や木簡が乱雑に置かれ、内容を無理矢理頭に詰め込んでいる感が見受けられる。
そしてなにより、昼間に見た業火の残り火が、まだ一刀の瞳の中に見える。

「こんな時間にどうしたの？　まさか怖い夢でも見て、眠れなくなったとか」
「そんな訳あるか！　私は一刀を心配してだなぁ！！　……あっ」

冗談交じりの売り言葉に、つい買い言葉で応えてしまった。
本音も含んで。

「僕が心配？　ははっ、大丈夫だよ。体調は悪く無いし、そろそろ寝るところだったし」

本人は何でもないように振舞っているのだろうが、焔耶にはなんとなく分かった。
今の一刀は大丈夫じゃないと。
だが、どうすれば良いのかが分からない。
口で言ったところで、上手く言い逃れるだろうし、勘では説得力が無い。
考えあぐねて導き出した結論は。

「……焔耶」
「なんだ」

「どうして、何の脈絡も無しにくっ付くの？」

向けていた背中に引っ付く事だった。
いつものように抱きつくのではなく、触れるようにくっ付いている。

「悪いか」
「悪いとは言わないけど、せめて前触れがあってほしいね」

今までは、先に桔梗と紫苑がくっ付いて来ることが前触れだった。
ところが今回、そのような前触れは一切無し。
なので、少なからず不信感を抱いてしまった。

「理由は分からんが、こうしなくてはいけない気がしたんだ」
「そう……。なら、僕を心配している理由は分かっているの？」
「なんとなく」

なんとなくか、と思いつつ、分からないよりはマシと尋ねてみる。

「僕のどこが心配なの？」
「……今日の一刀は、数日前と違うんだ。何があったかは分かっている。でも、どこかおかしいと思ったんだ」

ボソボソと小声で話し始めた焔耶だが、くっ付かれているので声は耳に届く。
調練中に垣間見て、今も残っている業火の事。
それを見ていて不安に感じ、心配していたのだと。

「なるほど、やけに抽象的だね」

確かに抽象的だが、焔耶にとっては真面目な話。

故に、冷ややかな反応にカッとなる。

「抽象的で悪いか！　そもそも、今の返事だっておかしいじゃないか。前の一刀なら……一刀なら……」

一刀の背中に添えている手を握り締め、怒り気味の表情で大声を上げた。

「心配かけてゴメンと言いながら、温かい笑顔を見せてくれたじゃないか！」

怒ったせいなのか、言っていて恥ずかしくなったのか、焔耶の顔は真っ赤だった。

対する一刀は、じっと俯いたまま一言も発しない。

しばらく沈黙が続くと、耐えかねた焔耶が口を開こうとする。

「おい一刀、何か言ったら」

だが、それを言いきる前に焔耶は口を閉ざした。

握り締めていた拳から、一刀が震えているのが分かったからだ。

その事に気づいて顔を覗くと、一刀は歯を食い縛って悔しそうな表情をしていた。

「分かっている、分かっているんだ、そんなこと！　悔しいんだ、あんな事しか出来なかった自分が！！」

突然叫んだかと思ったら、右手を握り締めて壁を殴りつける。

室内に響く打撃音に焔耶は体が縛られた気分になる。

「敵を討ったからって、父さんと母さんが生き返る訳じゃない！

恋が帰って来る訳じゃないのに！！」

両拳で何度も壁を殴り続け、瞳の中で燻っていた業火が再び燃え上がる。

瞳の中から飛び出し、背中を、拳を燃え上がらせてなお燃え続ける。

やがて業火が全身を包み込んだ瞬間、ようやく焔耶は正気に戻った。

「はっ！　や、やめろ、一刀！！」

「あの時の僕は、復讐にしか囚われていなかった。守るための武を、人殺しのためだけに使った。僕は……俺は自分を許さない！」

一人称が変わると同時に、業火は黒みを帯びていく。

その様子に寒気を感じた焔耶は、後ろから両腕を拘束して、必至に一刀を止めようとする。

「落ち着け一刀。これ以上は駄目だ！　これ以上は」

どうにか拘束こそしているが、力は一刀の方が上。

しかも拘束を解こうと暴れているので、押さえていられるのも時間の問題だ。

これ以上は無理だと判断した焔耶は、強硬手段に出た。

「こんの……馬鹿！」

自ら拘束を解くと、前に回りこんで平手を一刀の頬に叩き込む。

叩（はた）かれた一刀は、頬を押さえながら呆然とする。

一方の焔耶は息を切らせながら、胸倉に掴み掛かって説教を始める。

「いい加減にしろ！　確かに敵を殺したって、死んだ奴は帰って来ない。だけどな、お前がそうやって自虐的になっても同じなんだよ

！！」

説教を聞く一刀は、ゆっくりと視線を焔耶に向ける。
その表情には怒りと共に、悲しみが含まれている。

「でもなぁ、まだ妹が生きているかもしれないんだろ？　だったらそいつを見つけて、親の分も守ってやれよ！！」

それを聞いた一刀は、はっと目を見開いた。

「まだ居るんだろ、お前が守りたい奴は。たった一人だけど、いるんだろうが！」
「……いる」
「だったら、二年も鍛えなおしている暇なんてないだろうが。すぐに探しに行くぞ！」

グイッと顔を近づかせ、探しに行くよう訴える焔耶に一刀を包んでいた業火は消えた。
先ほどとは打って変わって、穏やかな表情で笑顔を見せる。

「そうだよね。今の恋には、僕しかいないんだ。僕が探さなくちゃ、誰が探すっていうんだ」

元に戻った表情と一人称に、焔耶もほっとする。
だが同時に、顔を近づけすぎた事に気づいて、真っ赤になって慌てて手を放した。
胸倉を掴まれていた一刀は、急に手を放されたので、勢いよくしりもちをつく。

「あたた……急に放さないでよ」

「わ、悪い」

ばつの悪い口調をしているが、そっぽを向いている顔は赤一色。
大きく鼓動する胸元を押さえて、必死に落ち着こうとしている。

「でも、お陰で目が覚めたよ」
「当然だ！　私は……そういう約束でここに来たんだからな」

初めて会った時に交わした約束。
家族を守るために力を振るい、道を踏み外しそうになった自分を連れ戻してほしい。
そういう約束で焔耶は、桔梗の下に入る決意をした。
自分が一刀を守り、道を間違えそうになる一刀を連れ戻すのだと。

「そうだったね。ありがとう、約束を守ってくれて」
「や、約束を守るのは当然だ。それで、探しに行くのか？」
「うん。僕は桔梗様と紫苑さんにはあぁ言ったけど、覚悟が足りなかった」

パッパッと服に付いた汚れを払い、立ち上がる。
その瞳には、もう業火の残り火も無い。

「許せない自分しか見てなくて、それを克服することしか考えてなかった」
「……今は？」
「もう覚悟した。許せない自分は見つけて、反省した。だから、恋を探しに行く」

代わりにあるのは、強い輝きを見せる光だった。

（ふふっ、それでこそ一刀だよ）

以前の感じを取り戻した様子に、心からほっとする。
ところが安堵した途端、焔耶には試練が待ち構えていた。

「という訳で焔耶、一緒に恋探しに付き合って。またこんな事があってもいいように」
「はっ？　……はあぁぁぁぁぁっ！？」

安心した途端に告げられた発言に、驚きの声を上げる。
その声は杯を交わしていた桔梗と紫苑が、この部屋に様子見に来るほどだった。

「何事じゃ騒がしい」
「あっ、桔梗様。実はですねぇ」
「ちょっと待て、私はまだ行くと言ってないぞ」

焔耶は騒いでいるが、一刀は聞き流しながら事情を説明しだす。
最後には焔耶も諦めたのか、肩を落として俯いていた。
説明を聞いていくと、どうやら思惑通りに進んだかと二人は思った。
二人は帰って来た一刀をどうにか出来るのは、そういう約束をした焔耶しかいないと踏んでいた。
自分達よりも、そういう約束をした焔耶の方が向いていると考えての事だ。

（ふふふ、やはりこうなりおったか。そうでなくては、焔耶を連れてきた意味がない）

いざという時の事は考えていたが、無事に思惑通りになったので、内心ほっとしている。

「ほぅ、探す決意をしおったか」
「はい。それでまことに勝手ながら、どうか許可を頂きたく」
丁寧に頭を下げる姿を見つめ、紫苑と目を合わせる。
目線で何を言いたいのか理解した紫苑は、何も言わずに頷く。
それを確認した桔梗も無言で頷き、一刀に返事をする。

「よかろう。じゃが、今の仕事の引き継ぎだけはして行くのじゃぞ」
「はい！　それと、焔耶の事なんですが」
「おぉ、構わんよ。お主が必要として、奴を引き入れたのじゃろ。
どこへでも連れて行け」

主にこう言われると、もう焔耶に逃げ道は無い。
まだ未熟者なのにと呟いていると、紫苑から声が掛かる。

「いいわねぇ、焔耶ちゃん。一刀君と二人旅よ」
「へっ？」

二人旅と聞いて、ようやく事態が飲み込めた。
旅の道連れだと思っていたが、考えてみれば二人旅という事実に。
続いて桔梗も、歩み寄って耳元で囁く。

「羨ましいのぉ、焔耶。何なら旅先で一刀との子でも」
「ここ、子ぉっ！？」

年上二名の発言を聞いた焔耶は、頭から煙を出して倒れてしまった。
何故倒れたのか分からず、焦っている一刀の後ろで、原因の二人は
楽しそうに笑っていた。
それから二日が過ぎ、仕事の引き継ぎを終えた一刀と焔耶は、桔梗

と紫苑に挨拶に来た。

「これまでお世話になりました」
「うむ、お主らもよくやった。師として、暖かく見送ろう」
「これは私と桔梗からの餞別よ。受け取ってもらえる？」

紫苑が差し出したのは、巨大な金棒のような武器と衣服。
武器は鈍砕骨という、焔耶のために準備させた武器。
衣服は一刀の旅立ちのためにと、二人で意匠した服だった。
当初は一刀にも武器をと思ったが、焔耶に鮮紅と紅蓮を貰ったそうなので、衣服にしたのだ。

「こんな立派な武器を……ありがたく頂戴します」
「僕もありがたく頂戴します。早速、着てみますね」

一旦部屋を出た一刀は自室で服に袖を通す。
その服は、図らずも数年後に恋が着ている服に似ていた。
上着は腹部を隠せる位置まで伸ばしており、下は長ズボンに仕立ててある。
短パンでは無いので、ソックスのような物は穿いて無いが、他は全部同じだった。
最後に真っ白なスカーフのような布を首に巻くと、全てを着終えた。

「お待たせ、ピッタリですよ」

戻ってきた一刀に目をやると、三人は思わずため息を吐いた。
肩から見える刺青のような痣も、まるで衣服の装飾のように見える。
なんとも頼もしく、強そうな姿に見とれてしまう。

「あら……ここまで似合うなんて」

「うむ、もうちょっと早く渡すんだったかの」
「おぉっ……さすがは一刀だ」

そんな最後の団欒も終わりを告げ、とうとう二人は旅立つ時が来た。
桔梗と紫苑を筆頭に、部下だった兵士達が見送りに来ている。

「気をつけてね」
「何かあったら、いつでも訪ねて来い。いつでも歓迎するぞ」
「はい！　それじゃあ、行ってきます！！」

別れの言葉を告げ、馬に跨って旅立つ二人。
後ろからは兵士達の声が聞こえる。

「呂迅様、いつかまた修行をつけてくださいね！」
「お気をつけて！」
「魏延殿、どうかお幸せに！」

最後の余計な一言に焔耶がコケそうになるが、二人の恋を探す旅は始まった。
遠い時間と道のりの先にある、兄妹の再会を求めて。

今　約束を果たすとき（後書き）

かくして始まった、一刀と焔耶の恋探し。
彼らの旅先に待っているのは、果たして何なのだろうか。

仕事　探してます

一刀と焔耶が旅に出てから、早三ヶ月が過ぎた。
少し静かになった城内の環境にも慣れ、桔梗と紫苑は木簡を処理していた。
しかし筆は止まっており、いなくなった二人の話に没頭していた。

「あ奴ら、今頃はどこにおるかのぉ」
「東に向かうって言っていたから、荊州か揚州をうろついているんじゃないかしら」

手元のお茶を取り、一口だけ啜ってため息を吐く。
なんだかんだ言っても、やっぱり少し寂しかったりする。
最近は一刀分が足りないと言いだし、交代で一刀の部屋に寝泊りしている。
そこで何をしているかは、一切不明だが。

「無事でいるとよいがのぉ」
「そうね……」

師の二人が心配している、ちょうどその頃。
捜索対象の恋は、偶然出会った丁原の下で呂布として修行をしていた。

「……ふっ」

右から襲い掛かる兵士を力任せに薙ぎ払い、左後方の兵士の攻撃を避けて一撃を叩き込む。
さらに掛かってくる他の兵士達の攻撃も、まるでそよ風でも受けて

いるように受け止め、弾き返す。

「凄いわね、恋ちゃんって」

「ホンマや。会った時は、頭の弱い泣き虫かと思うたけど、二ヶ月であんな強うなるなんて」

「私と霞が敵わないんだ。新兵じゃ相手にもなるまい」

少し離れた処で様子を見守る、丁原、華雄、張遼。

目の前では、新兵が恋に飛び掛っては薙ぎ払われ、飛び掛っては蹴散らされている。

訓練用とはいえ、身の丈以上の槍を振るっているのに、まるで呼吸も乱れていない。

「そんで丁原おかん、恋の兄貴って見つかったんか？」

「いいえ。やっぱり今の状況じゃ、仕入れられる情報にも限度があるわ」

山の中で出会った恋を引き取り、身寄りの無い張遼と華雄同様に義母子となった。

だが恋は、引き取られたばかりの頃は一刀の事ばかり口にして、部屋に引きこもっていた。

勿論、丁原も手を回そうとはしたが、彼女は并州に刺史として移ってきたばかり。

身の回りの整理や、前任からの引き継ぎが忙しく、人探しをするのには無理があった。

幸い恋の方は、張遼と華雄のお陰で引きこもりを脱し、武人としての道を歩みだした。

強くなって有名になれば、きっと一刀が会いに来てくれると信じて。

（アニィは恋より強い。もっと、もっと強くならなくちゃ会えない）

「次、お願いします！」
「……ん」

こうして各所から身を案じられている一刀だが、当の本人はというと。

「焔耶、蛇が捌き終わったよ。そっちは？」
「おぅ。ちょうど鼠が焼けてきた処だ」

旅のお供の焔耶と共に、とある山中で逞しくサバイバル生活をしていた。
元々路銀もたくさんある訳でも無いので、街や邑にいる時を除いて、食糧は全て現地調達で賄っている。
現地調達と言っても、そのほとんどは狩りか釣りなのだが。

「それにしても、焔耶も慣れたよね。最初はなんて物を食べさせるんだって、言っていたけど」
「当たり前だろ！　熊や猪、魚ならともかく、いきなり蜘蛛やミミズは無いだろう！！」
「仕方ないじゃんか。他に食べられそうな物が無かったんだから。それに、ちゃんと火は通したよ？」

そういう問題では無いと叫びながら、焔耶は焼きたての鼠にかぶりつく。
傍らでは、捌きたての蛇が一刀の手により炙られている。

「そう言うなって。明日には街に着くし、普通の食事が出来るぞ。ついでに、路銀も少し集めないとね」

炙った蛇の上に、磨り潰した木の実を振り掛けながら、翌日からの

事を話す。
手持ちの路銀も少なくなり、宿に泊まれるかどうかも怪しい。
翌日の食費を払ったら、どれだけ余るだろうか。

「また住み込みの仕事、探さなくちゃね」
「住み込みだと給金が安いんだが、背に腹は変えられないもんな」

住み込みの場合、住む場所を提供している分、どうしても給金は安くなってしまう。
城のような国が管理する職場はともかく、一般の店ではそれが当たり前だ。
これまでの経験から、一刀と焔耶もそれはしっかりと分かっている。
治水工事の土嚢や石運びに始まり、宿での雑用仕事、料理店での調理と接客。
この三ヶ月で、色々な労働を経験してきた。

「次の街にあるといいな。住み込み可の仕事」
「無かったら、野宿しながらの仕事だね。さっ、この蛇を食べたら鍛錬でもしようか」
「おう」

焼きたての蛇をより分け、あっという間に胃の中へ入れていく。
こうして食事を済ませると、常に欠かさない鍛錬を始める。
移動も兼ねて馬と共に山中を走り抜け、馬の休憩中に手合わせや筋力強化。
場合によっては、行く手を遮る岩を破壊して進む事もある。
そうして、二人にとっては当たり前になった一日を過ごし、とうとう次の街へと辿り着いた。

「やっと着いたか。なかなか活気のありそうな街だな」

馬の手綱を引きながら街に近づき、荷物検査を受けた後に街へ入る。
あっちこっちで商人が客を呼ぶ声が響き渡り、一刀や焔耶に宿を勧める人もいる。
路銀が心もとないと言うと、渋々退いてくれたが。

「一刀。これだけ活気があると、住み込みの仕事は難しいかもな」
「そうだね。住み込み雇いは、活気はそれほどでも無いけど、人は雇いたいっていう苦肉の策だからね」

一般の店が難しいとなると、他に住み込みが出来そうなのは、貴族の家か城くらいだ。
しかし、その二つの選択肢は当たり外れが激しい。
善人ならともかく、悪人の場合は二度と旅に出られないかもしれない。
旅立ち前に、桔梗と紫苑から教わった教訓だ。

「仕方ない、街を一周して無かったら、野宿しながらどこかの店で雇ってもらおう」
「分かった。ん？　なぁ一刀、あいつ何しているんだ？」

疑問を問い掛けた焔耶の視線の先には、本屋の前でウロウロしている、緑色の髪に眼鏡の少女がいた。
入ろうとはしているのだが、何か問題があるのか、困った顔で右往左往している。

「ねぇ君、どうかしたの？」

不思議に思った一刀が問い掛けると、少女は顔を向ける。
背は一刀より低く、確実に焔耶以上の立派な胸をしているが、大体

同い年くらいに見える。
しばし胸に目を奪われる一刀だが、背中を焔耶に抓られて正気に戻った。

「あぁ、いぃえぇ、ちょっと、そのぉ……」

やけにゆったりした口調で、チラチラと本屋に視線を向ける。

「何か欲しい本でもあるの？」
「それとも、本を買う金が無いのか？」
「違いますぅ。本を買いたいんですけどぉ、お母様に本屋に入らないよう、言いつけられていましてぇ」

悲しそうな表情で答える少女に、二人は激しく疑問を覚えた。
何故、本屋に入るのがいけないのだろうかと。
問題を起こして、出入り禁止でも言いつけられたのか。
それとも、代々続く武官の家柄で、本など読んでいる暇があれば修行しろと言われているのか。

「どうしてそんな事を言われているんだ？」
「そ、それはそのぉ……」

理由を尋ねると、少女は恥ずかしそうな表情になる。
頬を真っ赤にして俯き、あっちこっちに視線を向けながら、両手の人差し指をトントンとぶつけ合う。
これはよほどの理由があるのだろうと察した一刀は、手綱を焔耶に預けて少女に歩み寄る。

「ねぇ、もし良ければ僕が代わりに買ってきてあげようか？」

笑顔を見せながら優しい口調で尋ねると、少女の顔は別の意味で真っ赤になる。
勿論、一刀に自覚は無い上に、真っ赤になった理由すら察していない。

「でで、ではお願いします。これが本を買うお金で、こっちが欲しい本を記した物です」

わたわたとしながら、本の題名が書かれている木簡とお金を渡す。

「うん、ありがとう。じゃあこれ、僕が持ち逃げしないように預かっていて」

金だけ奪って逃げない証として、後ろ腰に差していた鮮紅と紅蓮を手渡す。
少女はぼんやりした表情で受け取ると、店内に入る一刀を目で追う。
目には熱を帯びており、表情もあからさまに緩んでいる。

「あのぉ、あの方はなんというお名前なんですかぁ？」

ポヤポヤという擬音を発していそうな雰囲気で、少女は焔耶に尋ねる。
その様子にため息を吐きながら、後で本人に聞けと答える。

（まったく……。一刀の微笑みと声を見聞きした女は、どいつもこいつもあぁなる。あいつの笑顔と声で落ちない女はいないのか？）

どうやら行く先々で同じことがあり、色々と苦労しているようだ。
そうこうしているうちに、一刀が本を数冊抱えて店から出てきた。

「はい、これ。頼まれた本とお釣りね」
「ありがとうございますぅ。お礼に、何か出来ることはありませんかぁ？」
満足そうに本を抱えて、お礼は出来ないかと尋ねてくる。
ならばと、恋の事を尋ねてみるが、残念ながら知らないと言う。
一向に手がかりが入手出来ないので、がっくりと肩を落とす。
落ち込ませてしまったと思った少女は、別に出来る事は無いかと聞いてきた。

「別か……。そうだ、路銀を集めるために住み込みの仕事を探しているんだ」
「住み込みの……ですか？」
「あぁ。恥ずかしいことだが、宿から仕事に通えるほど余裕が無いんだ」
気まずそうに焔耶が言うと、少女はにこやかな笑みを浮かべる。

「分かりましたぁ。では、うちで働きませんか？」
「へっ？」
うちでという事は、この子の家は何か商いをやっているのだろうか。
少女の話では、お手伝いの人が数人辞めてしまったらしいので、代わりを探していたらしい。

「こう見えても私、陸一族の長ですから。お手伝いさんなら、簡単に雇えますよぅ」
「本当に？　じゃあお願い、僕達を雇って！」
「いいですよぉ。でも一応、お父様には話を通しておきますねぇ」

朱に染まった頬を押さえながら、のほほんとした雰囲気を発する。
恋とはまた違った癒されオーラに、つい一刀は恋にしたように抱きつきたくなる。
自分の年齢と、相手が見知らぬ人だと自分に言い聞かせ、どうにか自重することができた。

「そういえば、自己紹介がまだだったね。僕は呂迅、字は烈堂」
「姓は魏、名は延、字は文長だ」
「私は陸遜です。字は伯言と申しますぅ。それじゃあ、私の家に案内しますねぇ」

そう言って、預けていた手綱を受け取った一刀の腕に、ピッタリとくっ付く。
突然のことに戸惑う一刀に構わず、グイグイ腕を引っ張って行く。

「ちょっ、そんなにくっ付かなくても」
「お気になさらずぅ。それともぉ、嫌でも気になっちゃいますかぁ」

年の割になんとも艶かしい表情で、一刀の顔を覗き見る。
くっ付いている腕になお密着させて、自慢の胸を押し付けてくる。
これだけの攻勢に、一刀は理性を総動員して必死に耐える。

（た、助けてくれ、焔耶）

理性を保つので精一杯な一刀は、唯一の希望である焔耶に助けを求める。
ところが。

「おい、陸遜！　私の一刀にそんなにくっ付くな！！」

見ていて腹が立った焔耶は、一刀の心の叫びに反して反対の腕にくっ付く。
負けじと胸を押し付けて。
これにより、ただでさえ壊れそうな理想が、悲鳴を上げだした。
もしもここが往来でなければ、間違いなく獣になっているだろう。

（耐えろ、耐えろ、耐えろ！　これは修行だ、精神修行だ。煩悩に負けてたまるかぁ！！）

極限状態の自分と戦う傍らで、陸遜と焔耶が睨み合って火花を散らせている。
周囲の目からすれば、一人の男を巡っての痴話喧嘩勃発寸前という処。
女達は楽しそうに見物して、男達は羨ましがり、老人達は若い者は良いのぅと呟く。

「おい、案内にくっ付く必要は無いだろ」
「いいじゃないですかぁ。それに私は歩くのが遅いので、離れたら速度が落ちちゃいます」

敵意を剥き出しにして攻撃一本やりの焔耶に対し、陸遜は上手く言い回して受け流している。

「だいたい、その喋り方はなんだ。頭弱そうじゃないか」
「いいじゃないですかぁ。それを言ったら魏延さんは、お年の割に白髪交じりですよ？」
「これは地毛だ！」
「でしたら、私の喋り方も地ですよぅ」

口では陸遜の方が明らかに上だ。

どうにか言い返そうとするが、急に歩みが止まる。
勢いそのままに転びそうになる焔耶だが、どうにか踏みとどまった。

「着きましたよぉ。ここが私の家ですぅ」

着いた家は、何気に大きな家だった。
家の前で掃除をしている女性がお帰りなさいと言ったので、ここが家なのは間違いない。
一族と言っていたので、貴族か豪族かと思っていたが、これで予想は確実になった。

「君の家って、貴族？　それとも豪族？」
「んふふ。こう見えても、呉郡の四姓と呼ばれる有力豪族なんですよ」

それを聞いた一刀は、前世の記憶から該当する事を思い出した。
どこかで聞いた名前かと思ったら、陸遜は呉で軍師をやっていた人物だと。
そんな人物が、こんな天然丸出しなのんびり少女だとは。

（いくらパラレルワールドと言っても、似ても似つかないぞ）

改めて自分の境遇を実感している間に、馬は預けられて客間に通される。
しばし焔耶と一緒に待っていると、侍女の人がやって来た。

「どうぞこちらへ、陸遜様がお待ちです」

侍女の人に案内され、二人は陸遜の下へ向かう。
到着した部屋には、にこにこと笑顔を浮かべる陸遜がいた。

案内を終えた侍女が部屋を出ると、早速本題を話し始める。

「まずはぁ、お二人を雇うことは承認されましたぁ。引退した父も、賛成してくれましたし」

「そう、よかった。これで路銀を集められる」

ほっと安堵した二人だが、まだ話は全て終わっていない。

給金についての説明や、屋敷内での仕事の内容。

寝泊りする部屋などの説明を受ける。

「呂迅さんのお部屋は私の隣。魏延さんのお部屋は、私の向かいですから」

「いいの？　来たばっかの俺達を、そんな近くに住ませて」

「大丈夫ですよぉ。お二人が悪い人でないのは、既に承知のことですからぁ」

のほほんとしている割に、しっかりと二人の事は見ていたようだ。

そうでなくては、新参に隣と向かいの部屋を借さないだろう。

「それに、私の付き人としても雇いますから、外出のときは付き合ってくださいねぇ」

「分かった。話はこれで終わり？」

必要な事項は話したので、もう話は終わりかと思った。

だが、まだ話は終わっていなかった。

「いぃえぇ。最後に、私の個人的な我侭を聞いてくれますか？」

どんな我侭だろうかと首を傾げる。

焔耶はここに来るまでのやり取りから、まさか婚約をしろとでも言

うのかと警戒する。
しかし、心配は杞憂に終わった。

「もし宜しければぁ、私と一緒に勉強をしてくれませんかぁ？」
「……はっ？」

あまりに普通な我侭なので、警戒していた焔耶は呆気に取られた。

「一緒に勉強？　それくらいならいいよ。仕事があるし、夜でいいかな？」
「勿論ですぅ。魏延さんも一緒に如何ですか？」
「えっ？　あっ、あぁ、構わないぞ」

別段断る理由も無いので、焔耶は勉強が苦手という事も忘れて承知する。
後で気づいて、頭を抱えることになるのだが。

「それでは、明日からお願いしますねぇ。今日は旅でお疲れでしょうから、休んでください」

にこにこと最後まで笑みを絶やさず、話を終えた陸遜。
二人が部屋を出ると、如何にも楽しそうに鼻歌を歌う。
そこへ彼女の父親が現れた。

「穏よ、良いのか？　彼らを勉強に誘って」
「はい、お父様」
「拒絶されるやもしれぬぞ？」

拒絶という言葉に、陸遜は押し黙ってしまう。

「…・・それは怖いです。でも、だからって立ち止まりたくないんです」

「穏……」

強い眼差しを見せる娘に、父親の心配は薄れていく。

窓の向こうを見る陸遜は、一刀に買ってもらった本を抱えて呟く。

「呂迅さんはきっと、私を受け入れてくれる。初めて会ったばかりですけど、そう思うんです」

本を抱える腕に力が入る。

表情には作りでもなんでもない、笑みが浮かんでおり、それを見た父親も安心した。

「そうか、あの子が受け入れてくれると良いな」

「はい！」

元気良く返事をした陸遜。

彼女の持つ厄介な問題は、翌日の夜の勉強で明かされる。

ほんの僅かな不安を抱えた夜を過ごし、とうとう翌日は訪れた。

仕事　探してます（後書き）

陸遜の屋敷で働くことになった一刀と焔耶。
だが陸遜は、何か不安を抱えていた。
果たして夜の勉強会で、何が起こるのだろうか。

これが私の真実

生き別れの恋を探して、早三ヶ月。
路銀が尽きそうになった一刀と焔耶は、偶然出会った陸遜の家で仕事を貰った。
早速、翌日から二人は仕事に駆り出される。

「おい、新入り。そこにある薪を全部割っておけ」
「終わったら纏めて、さっき教えた場所に置いておけよ」
『はい』

指導者の指示に従い、薪割りに取り組む。
切られた木を焔耶が取り、一刀は準備されていた斧を手にする。

「それじゃあ焔耶、置く方お願いね」
「任せろ」

焔耶が薪を置き、それを一刀が斧で割る。
まるで音楽のリズムでも取っているように、テンポ良く薪を割っていく。
あまりの手際の良さに、隣で薪割りしている人が思わず注目している。
ある程度の薪を割り終えると、二人で割った分を纏めて縛り上げる。
そしてまたテンポ良く薪を割り、割った分を纏めて縛っておく。
これを数度繰り返すと、あっという間に薪割りが終わった。

「やるなぁ、あの新入り共」
「こりゃ、こっちも負けられねぇな」

まだ作業中の人が見詰める中、今度は二人共大量の薪を一辺に運び出した。
屋敷内で一番力持ちの人でも四束が限界だが、焔耶は八束、一刀は十束を担いでいる。

「すげぇ……」
「なんか、自信なくすなぁ」

自分達より年下の子が、自分達より手際が良くて力もある。
ようやく作業に慣れてきた、入って日の浅い面々は、深い溜め息を吐いて作業を再開した。
その後も二人は、与えられた作業を次々にこなしていく。
買出しに付き添った焔耶は、いつもは二人掛かりで運ぶ壷を肩に乗せ、楽々とばかりに運んでいく。

「ねぇ、重くないの？」
「別に。もう一個ぐらいなら持てるぞ」

倉庫の屋根の修理を手伝う一刀は、手馴れたように修理箇所を直し、他の人より多くの修理をした。
しかも、長く勤めるベテラン職人さえ唸らす出来栄えで。

「やけに手馴れているなぁ、坊主」
「さんざんやってましたから」

一通りの仕事を終え、二人は軽い休憩を与えられた。
渇いた咽を水で潤しながら、桔梗の下で働いていた時の事を思い出す。

「力仕事は鍛えていたからともかく、他も色々やっていたもんな」

「というか、やらざるをえなかったよね」

二人がまだ桔梗の下にいた頃。

桔梗の使う豪天砲という武器により、修行の度にあっちこっちに被害が出た。

本人曰く、まだ反動を抑えられないらしいのだが、被害の修理は全て一刀と焔耶が行なう。

壊した本人に直させるべきなのだが、地位ゆえの仕事があり、そんな暇は無いと一喝された。

なので、仕方なく修理の経験を何度も重ねた結果、二人のスキルはそこらの職人顔負けまでになった。

「今思えば、桔梗様が一度でも修理をした事があったか？」

「……無いね、一度も」

思い起こせば、仕事があると言っていたくせに、桔梗は酒を飲んでいた事もあった。

一応仕事はしていたのだが、片手に筆を、もう一方の手には酒壷を持っていた。

「今更ながら、面倒だから私達に押し付けていただけなんじゃ……」

「言わないで！　なんか負けた気分になるから」

負けた気分もなにも、押し付けられていた時点で既に負けている。

一刀は薄々気づいていたが、どうやら焔耶は気付いていなかったようだ。

「ともかく、仕事に戻ろうか。せっかく雇ってくれたんだから、しっかり働かなきゃ」

「おう！」

短い休憩を終えて、意気揚々と仕事に戻る姿に、侍女長はうんうんと頷いている。
するとそこへ、のほほんオーラを纏った陸遜がやって来た。

「こんにちは。どうですか、呂迅さんと魏延さんは」
「これは陸遜様、おはようございます。彼らでしたら、よく働いていますよ」

そう言って向けた視線の先では、身の丈以上の材木を運ぶ二人の姿があった。

「そうですかぁ。短い間ですけど、よろしくお願いしますねぇ」
「承知しました」

侍女長が頭を下げると、陸遜は背中を向けて歩き出した。
表情には笑みが溢れ、二人の働きっぷりに満足している。

「ふふふ、さっきから良い評判ばかり。雇って正解でしたねぇ」

ここに来るまでに、色々な場所で評判を聞いてみた。
どこもすこぶる評判は良く、悪く言う人は一人もいない。
一部の仕事場からは、ここでの仕事に問題有りという意見はあったが。

「問題があるのは調理場ですかぁ。調理場の人の報告では、試しに調理させたそうですねぇ」

その際の報告は、以下の通りである。

刃物の扱いは上手く、火加減も問題無し。
だが味付けは全く駄目。
本人達曰く、野宿生活では味付けなんてした事が無いとのこと。
以前に居た場所でも、料理だけは教わっていないらしい。

この報告と味見をした料理長の意見を聞いて、陸遜は二人を調理場の仕事から外すように伝えた。

「取り敢えず、代わりに力仕事や修理をしてもらいましょうか」

回転の速い頭で容赦なく仕事を取り決め、その旨を伝えに行く。
そして一日が過ぎていくが、二人の評判は変わらず上々だった。
どこからも是非、短期ではなくずっと働いていて欲しいと言っている。
だが生き別れた恋の事を説明すると、すごすごと引き上げて行った。

「さすがの職人さん達も、妹愛には勝てませんねぇ」
「いやいや、陸遜さん。妹愛じゃなくて、家族愛って言ってよ」
「そんなことは無いぞ、充分に妹愛で通せるぞ」

冗談交じりの陸遜と焔耶の発言に、一刀は部屋の隅でいじけながら床に「の」の字を書きだした
その姿に慌てて二人が謝罪し、どうにか鬱にならずに済んだ。

「そういえば、今夜から陸遜さんと勉強会があったよね」
「あぁ、そうだったな。勉強は苦手なんだが……」

がっくりと肩を落として、溜め息を吐く焔耶。
一刀は笑っているが、陸遜は何やら不安げな表情をしていた。
初めて会った時のように、そわそわして右往左往している。

「どうかしたの？」
「い、いえ、別に。そ、それじゃあ先に部屋で準備していますねぇ」
少々歯切れが悪い様子で、陸遜は自室へと走っていく。
途中で転んでしまうのはお約束だ。

「どうしたんだ？」
「さぁ……」

言動の全てを不思議に思う一刀と焔耶だが、それが解消されるのは勉強会にあるとは知らない。
そうしている間に時間は過ぎ、とうとう夜が訪れた。
筆と木簡を手に、陸遜の部屋を訪ねる。

「失礼するよ」
「いっらしゃぁい」

部屋に入ると、蝋燭を明かりに本を準備している陸遜がいた。
積み重ねられている本は、軍略や政務に関するものばかりだった。

「うげっ、勉強ってこれか！　私はどうもこういうのは……」
「文句言わないの。それより、何でこんな本を持っているの？」
「実は来月から、ある方にお仕えする事になっていまして、そのためのお勉強なんですぅ」

楽しそうに話しながら、次々と本を積み重ねていく。
部屋の中を見渡すと、床が抜けるんじゃないかと思うほど、本棚に本が詰められている。
しかもどれも難しそうな内容ばかり。

桔梗の下で勉強していた一刀でさえ、辛うじて理解できる内容だ。
事実、焔耶は本を開いた時点で頭から煙を噴いて、魂が口から抜けかけている。

「あららぁ。魏延さん、煙噴いちゃっていますよ」
「おぉい！　しっかりしろ、帰って来い、戻ってくるんだ焔耶！」
「はっ！　今、河原の向こうで死んだ両親が手を振っていたぞ！！」

どうやら焔耶は、渡ってはいけない河原を渡りかけたようだ。
なにはともあれ、復活したのだから勉強を開始する。
サラサラと筆を運ぶ陸遜、所々止まりながらも筆は動く一刀、そして全く進まない焔耶。

「だから焔耶、そこはそうじゃないって」
「むむむ……。全く訳が分からん」

頭を抱えて唸っている姿は、以前よりよく見られた姿だ。
だが、陸遜の姿はこれまでに見たことの無い様子だった。

「あの……陸遜さん？」
「はぁい、なんですかぁ？」

目をキラキラと輝かせ、頬を朱に染めて体をくねらせている。
気持ち鼻息も荒い気がする。
というより、発情しているようにも見える。

「はぁはぁ、一刀さぁん、体が熱いですぅ」

今にも飛び掛りそうな様子で、妖艶な笑みを向けてくる。
一刀の本能が、この状況を拙いか本能に身を任せるべきか迷ってい

る。

「ちょっ、どうしたのさ。何か様子がおかしいよ？」
「っ！？」

おかしいという言葉を聞いた瞬間、陸遜の表情は悲しみに包まれる。
目の輝きも消え失せ、体が小さく震えている。
まるで何かを恐れているように。

「ごめんなさい、ごめんなさい。もうあんな風になりませんから、嫌わないで」

頭を抱えて小さくなり、椅子の上で謝りながら震え続ける。

「おい、急にどうしたんだよ！」

突然の変調に、オーバーヒートしていた焔耶も復活して詰め寄る。
だが、陸遜の様子は逆に悪化する。
椅子の上にいたのが、部屋の隅にまで逃げてしまい、膝を抱えて丸まってしまった。

「なぁ、誰か呼んだ方がいいんじゃないか？」

さすがにお手上げの焔耶が一刀に尋ねる。
しかし一刀には、これと同じような状況に覚えがあった。
幼い頃に大事にしていた物を壊し、泣きじゃくって謝ってくる恋の姿。
それとよく似ている気がした。
だから、どうすれば良いのかが感覚的に分かる。
小さくなっている陸遜に歩み寄り、そっと抱き締めて耳元で呟く。

「大丈夫、嫌わないから。だから落ち着いて、ちゃんと話して」

優しい口調で言葉を掛け、背中を軽く叩いてやると、陸遜の震えが納まった。

泣きじゃくった表情で顔を上げると、そこには優しく微笑む一刀がいた。

「ひっく、うぅ……」

ぐずりながら涙を拭い、大人しく椅子に座る。

ポロポロと泣きながら告げられた内容は、初めて本を読んだ時の話だった。

読み書きを学び終え、初めて書庫に入って本を読んだ。

ところがその本は、父親がうっかりしまい忘れた艶本。

それも描写が生々しいと評判の一冊で、初回生産分以外は、絶版になっている作品を。

「それ以来、性に目覚めた私は、本を読んだら欲情するようになってしまいまして……」

震えるような声で説明を終えたが、一刀と焔耶は何と言って良いか分からない。

ともかく、何か声を掛けなくてはと一刀が口を開く。

「……なんて言うか、大変だったね」

「ぐすっ、お陰で家に招いた友人にも尽く嫌われて、周りからも奇怪な目で見られて」

確かにそれは子供には堪えるだろう。

幸い被害は未然に防がれているが、周囲からは奇異の目で見られている。
それによって友人がいなくなり、寂しい思いをしているそうだ。

「ですけど、呂迅さんとお会いした時、この人なら私を受け入れてくれると感じました」

理由も根拠も無いが、直感的にそう感じた。
だからわざわざ、この勉強会に招いて自分の姿を見せた。

「そうなのか。それで一刀、お前自身はどうなんだ?」

あえて自分の性癖を見せた理由を聞くと、その最たる原因の一刀に尋ねる。
陸遜も涙目で見つめる中、問われた一刀は即答した。

「どうって、別に気にしないけど? ちょっと自重してもらいたくは思うけど、嫌うほどじゃないと思うよ」

返って来た言葉を聞くと、陸遜の目から悲しみの涙が止まった。
代わりに嬉し涙が溢れ出し、ありがとうと連呼しながら一刀に抱きつく。

「ほら、もう泣かないで。せっかく友達になったんだから、笑って笑って」

涙を拭いとった後、陸遜の両頬を摘まんでクイッと軽く引っ張る。
半分泣きの入っていた表情が、まるで笑っているように見えた。
釣られて焔耶も笑みを浮かべ、一刀も笑った表情を見せる。

「やっと私にも本当の友達が出来ました。ですから、私の真名をあなたに預けます」
「いいの？」
一刀の問い掛けに、陸遜は黙って頷く。
そして三人は、それぞれの真名を相手に預ける。
陸遜の真名は、穏やかという字を書いて穏（のん）というらしい。

「君の真名は穏っていうのか。よろしくね、穏」
「一刀さんと焔耶さんですかぁ。こちらこそ、よろしくお願いします」
こうして穏の性癖による、騒動は終わりを告げた。
翌日の勉強会で、再び発動してしまったが。

「かぁずとさぁぁぁん！」
ル○ンが○子を呼ぶように一刀の名を叫び、穏が発情状態で抱きついて来た。
反論する間も無く、一刀は穏の胸の谷間に顔を埋められてしまった。

「うぶっ、うぅっ！？」
「お、おい穏！　お前一刀になんてことするんだ！！」
当然のように焔耶が一刀を引き離して抱き寄せる。
すると今度は、焔耶の胸の谷間に顔を埋めてしまう。
そして再び穏が奪い、それを焔耶が奪い返す。
これを数回続けているうちに、段々と一刀の理性は悲鳴を上げていく。
焔耶と穏の胸にそれぞれ挟まれるどころか、やがて両者の胸に挟ま

れてしまったからだ。
柔らかい四つの感触に、とうとう一刀の理性は限界を越えた。

「いい加減に……しろぉ！」

ブチ切れた一刀は二人を突き飛ばし、寝台へ放り込む。
突然の変貌に二人は呆気に取られているが、一刀はスカーフを外して椅子に放り投げている。
その目つきは、まるで後に小覇王と呼ばれる江東の虎の娘のようだった。

「か、一刀？」
「あははぁ。どうしたんですかぁ、そんな怖い目なんかしちゃって」

何事も無いように発言する穏だが、内心は嫌な予感で冷や汗を流したかった。

「二人とも、覚悟は出来ているよね」

獲物を見つけた肉食獣のように目を輝かせると、一刀は二人に飛び掛った。
その後、何が起きたかは不明である。
なお、偶然部屋の前を通りかかり、部屋から洩れる声を聞いた侍女の証言で。

「陸遜様が大人になられました」

との話があり、翌日までには屋敷中に伝わっていた。
それにより、太陽が黄色く見える一刀が仕事中、他の使用人達にからかわれた。

更に穏の両親から、娘の事をよろしく頼むと言われたらしい。
理由を理解した一刀は、前世のある記憶を交えて呟いた。

「どこの家政婦が見たんだ」

この冗談交じりの発言を、理解できる人物はこの世界にいない。
なお、この日の焔耶と穏は腰痛により、一日中寝所で横になっていたそうだ。

「つぅ……。こんなに腰にくるとは。でも……昨日の一刀は凄かったな」
「はうぅ、腰が痛いですぅ。でも……ふふふぅ、穏は幸せですよぉ」

緩みきった表情で笑う二人は、事実を知らぬ人に気味悪がられた。
こうして一刀と焔耶は、穏も交えて、色々な意味で新たな一歩を踏み出した。

これが私の真実（後書き）

色々とあった陸家の夜。
心と体の繋がりを経験した一刀は、どんな成長をするのか。

別れと出会い　意外と出来た氣

色々な事が起きた陸家での仕事も、早三週間と四日が経った。
翌日、穏は前々から決まっていた、ある人物に仕えるために家を離れる。
それに伴うように、一刀と焔耶も旅立ちを決めた。

「もう行っちゃうんですかぁ？」
「おかげさまで路銀は溜まったし、そろそろ動くつもりだったんだ」
「そうそう。それに、早く一刀の妹を探す必要もあるしな」

互いの旅立ち前夜とあって、この日の勉強会は無い。
あったらあったで、翌朝一刀は干物になっているだろう。

「寂しくなりますぅ」

友達どころか、階段を二段も三段もすっ飛ばし、心と体で分かり合った三人。
数日前に婿入りを示唆されたが、一刀はこれを断った。
穏の事は嫌いではないし、自分もなんらかの形で責任は取るつもりでいる。
だが今はその時では無い。
穏にはある人物の下での新しい生活が待っているし、一刀自身もいつ恋を見つけられるか分からない。
例えそれが一生の別れという形であっても。
そんな先の見えない時期に婚約をしても、互いのためにならないというのが、一刀の言い分だ。

『なので、すみませんがお断りします』

丁寧に頭を下げる一刀と隣で、付いて来た焔耶がほっとする。
一方の穏の両親は仕方無さそうな表情をして、潔く諦める事にした。

『そうですか、残念ですわ』
『うむ。穏、そういう事だ。すまないな』
『いいんですよぉ、一刀さんの言い分も最もですし』

本人はそう言っているが、ちょっと残念そうにしている。
しかし穏とて切れ者、何も考えていない訳ではない。

『ですけど、これだけはいいですか？　穏は側室でもかまいませんからぁ』
『はぁっ！？』

万が一、誰かに嫁の座を奪われた時の保険を掛けた。
何らかの形で責任は取ると言っていた手前、一刀に反論の余地は無い。
寧ろ、それ以外の責任の取り方は無いとも言える。
さすがにこれには承知せざるをえなかった、数日前のやり取りだった。

（この後、穏は孫堅に仕えるのか。もし歴史通りなら、何年かしたら反董卓連合で恋と戦うのか）

前世の記憶から今後の事を思い出す。
だがここで、一刀はある事を思い出した。

（あれ？　待てよ……）

一刀の記憶の中から、反董卓連合の戦いが引っ張り出される。
劉備や曹操達が連合に集結し、それに立ち向かう董卓軍。
その董卓軍の武将の中には。

（そうだ！　もしも歴史通りに進むなら、恋は呂布として、洛陽の董卓の下にいるんだ）

実際はその前に、丁原に仕えているのだが。
おまけに董卓はまだ洛陽にはおらず、涼州か天水辺りにいる。
転生して十数年も経っているため、一刀はその事をすっかり忘れていた。

「焔耶、次の目的地は洛陽にしよう」
「はぁっ？　急に何言ってるんだよ！？」

突然の洛陽行きに、驚きを隠せない焔耶。
東周りに大陸を一周しながら探す予定だったのが、何故に急に方向転換するのだろうか。
渋る焔耶を、首都だから色んな地域の情報が手に入る、俺の勘がそう告げているなど言って説き伏せる。
勘かよ、というツッコミはあったが、あえてスルーして洛陽行きを決定する。

「なんだか今回は、珍しく強引だな」
「あらぁ、そんな事はないじゃないですか。初めての時もでしたけど、昨夜だって……」
「あぁ、そうだったな」

頬を染めて昨夜の情事を思い出す二人の姿に、一刀は嫌な予感を感じた。

今夜も搾り取られたら、確実に明日の出発に響く。
そう判断した一刀は、二人が妄想をしている間に、こっそりと部屋を脱出した。

「うぅ、思い出したらなんだか体が疼いてきましたぁ」
「私もだ。ここは一つ一刀に……って、いない！」

ここでようやく、二人は一刀がいない事に気付いた。
その後二人で行方を捜したのだが、残念ながら一刀は見つからず、泣く泣く我慢して眠りについた。
ちなみに一刀がどこにいたのかというと、屋根の上である。
さすがにここまでは捜されず、無事に一刀は翌日に備える事が出来た。
翌朝、少々体のあっちこっちが痛かったが。

「それじゃあ、どうもお世話になりました」
「はぁい、お元気でぇ。またいつか会いましょうね。その時は穏をお嫁さんか側室に……」
「分かってるから。あぁ、侍女長さんも皆も、そんな生暖かい目で見ないでくれぇ！」

晒し者気分の一刀が悶えている姿に、誰もが笑みを浮かべる。
やがて別れの時が訪れ、一刀と焔耶は旅立っていった。
その二刻後、穏も孫堅の下へと出発した。

「ところで一刀、洛陽までどうやって行くんだ？　やっぱり荊州越えの道か？」

出発したはいいが、昨夜はちょっと一騒動あったので、道順までは決めていなかった。

普通に考えれば荊州を通って司隷に行くのだが、当初の予定通り東周りでも行ける。

「それとも、揚州から淮南、豫州を通り抜けるか？」
「いや、荊州越えで行こう。一刻も早く着きたいからね」
「分かった。それじゃあ、こっちだな」

道筋を決めて荊州越えの道へと入る二人。
ところがその日の日暮れ時……。

「迷った」
「あぁ、思いっきりな」

山中で二人は途方に暮れていた。
乗ってきた馬は近くの川で水を飲んで上機嫌なのに、乗り手の二人は気落ちしている。
何故迷ったのかというと、途中の分かれ道に差し掛かった時だった。
近いけど険しい右の山道と、安全だが遠回りになる森林の中の一本道。
ここで地図を持っていた焔耶が、早く洛陽に着けば一刀が喜ぶと考えた。
鍛えているし大丈夫だろうと、右の山道へ進むよう進言した。
その結果が遭難である。

「すまない、一刀。わ、私が、余計な事を言わなければ……」
「もういいって。焔耶だって、気を遣ってくれたんでしょ。ありがとう」

涙目になりながら平謝りする焔耶に、一刀は頭を撫でながらやんわりと返す。

それでも申し訳なさそうにしながら、焼けた魚をもふもふと食べ始める。

「大丈夫だよ、あの川を下流に下れば山から出られるだろうから」

視線の先には、先ほど馬が水を飲んでいた川がある。
下流に向かえば人里があり、少なくとも下山はできる。
なので、川を見つけられたのは幸運だ。

「今日は日が暮れたからここで野宿だけど、明日は下流に向かうよ」
「……あぁ。分かった」

相変らずのローテンションな様子に、どうするべきかと思案する。
下手な慰めは意味が無い。
ここで要求されているのは、的確かつ上手い慰め。
無い知恵を絞って思案するが、良い方法が思い浮かばない。
取り敢えず、タイミングを見計らって抱き締めてみた。

「なななな、いきなり何するんだぁ！」
「いや、他に良い慰め方が思いつかなくて」
「それで抱き締めるか？　普通！」

あわあわと慌てながらも、振り払おうとも離れようともしない焔耶。
なんだかんだで、この状況を喜んでいたりする。

「……駄目だったか？」

心配そうな表情を見せると、焔耶の顔はあっという間に真っ赤になる。
こうなった焔耶が言い返せるはずがない。

案の定、そんな事はないと返してきた。
勿論、一刀は狙っていたのではなく天然だ。

「駄目……じゃない」
「そう、よかった」

ほっと胸を撫で下ろし、笑みを見せる一刀だが、同時に嫌な予感が襲ってきた。
何かいるのかと、瞬時に周囲を見渡すが野党も野生動物もいない。
気のせいかと思った瞬間、一刀の体は地面に押し倒された。
押し倒したのは、獲物を狙う肉食動物の目をした焔耶。

（あぁ、そういえばこんな近くにいたね。肉食系女子が）
「かぁずぅとぉ。昨夜の逃走の件は、まだ解決していないぞ」
「そうくるか」

どこでスイッチが入ったかは不明だが、完全に焔耶は暴走状態だった。
下手に抵抗しない方が良いと悟った一刀は、流れるままに身を任せて焔耶に美味しく頂かれた。
最終的に一刀が返り討ちにしたが。

「……自分で返り討ちにしといてなんだけどさ、大丈夫？」
「ど、どうにか……」

予定通り下流へ進み、下山を目指す二人。
焔耶は馬に揺られながら、何度も腰を擦っている。

「それで、下山した後はどうするんだ？」
「誰かに聞いて場所を確認して、今後の動きを再検討だね。場合に

よっては、進路変更も考えなきゃ」

そう言っている間に、段々と傾斜が緩くなって来た。
どうやら思ったより、頂上の方には登っていなかったようだ。
もうしばらく移動すると、山中を出て街道のような場所に出た。
少し先には橋もあるようなので、ちゃんとした道なのだろう。

「よし、この道沿いに移動して街か邑、人を探そうか」
「おぅ」

こうして移動を開始したのだが、中々人里は見つからず。
夜になってようやく、旅人と出会えたのだった。

「そうかい、山道で迷って脱出したはいいが、場所が分からなくなったと」
「えぇ、大変でしたよ」

焚き火を囲んで、これまでの旅の出来事を話し合う。
この旅人は何でも、妻の友人との浮気がバレ、自分を戒めてこいと妻に言われて旅に出たのだという。
住んでいた邑で、武を教えていた近所の子供達に、いつか帰ってくると約束して。

「そちらも色々あるんですねぇ」
「まぁな。君も妹を探しているんだろう？　その子の名は何と言うんだ」
「呂布奉先です。聞いた事はありますか？」

名前を聞いた男は腕を組んで考えるが、すまないと言って首を振った。

どうやらこの人も、恋の事は聞いたことがないらしい。

「気にしないでください、すぐに見つかるとは思っていませんから」
「君はまだ子供だというのに、強いな。俺なんか旅に出ないと去勢すると脅されて、うっ、うぅ……」

さめざめと泣き出す男に、一刀は軽く同情した。
浮気はともかく、去勢すると言われれば従う他無い。
隣では焔耶が一刀に、自分はそんな事を言わないと言っている。
言われても困るのだが。

「おじさん、元気出しなよ。それよりもさ、武を教えていたって事は、おじさん強いの？」
「おぅよ！　これでも昔は、陳留で小隊を預かっていた事もあったんだぞ！」

先ほどの弱々しい雰囲気から一転、肉体美を自慢するように上着を脱いでポーズを取る。
確かに逞しい体つきだが、わざわざ脱ぐ必要はどこにも無い。
張り切った様子で拳を突き出す姿に、焔耶が暑苦しいと漏らす。
一刀も口には出さないが、心の中で同意した。

「そしてこれが自慢の……氣弾だぁ！」

突如、男の体を何かが覆った。
そしてその状態で拳を突き出すと、何かが飛び出て近くにあった岩の端を削り取った。

「おぉ……すげぇ」
「どうだ、これが俺の実力よ！」

「そんな実力があんのに、何で辞めちゃったんだよ。怪我？　病気？」

ありきたりな焔耶の質問に、男は自信満々に答えた。

「嫁のためだ！　戦場で死んで、可愛い嫁を未亡人になどしたくないからな！！」

「……なのに浮気したんだ」

一拍置いての一刀の一言に、男は上半身裸のまま膝を抱えて愚図りだした。

その姿は焔耶が寒気を覚えるほど、気色悪かったりする。

「うっ、うぅ、ちょっとした出来心だったんだ」

「いや、だからって浮気は駄目でしょ」

「分かっているが、物事は理屈じゃないんだよ」

遠い目をして故郷を懐かしむのはいいが、いい加減に上着を着てもらいたい。

焔耶が男の様子に不安を感じ、一刀の背中に隠れようとしている。

どうにか雰囲気を変えたい一刀は、先ほどの氣弾の事を聞くことにした。

「えっと、おじさん。さっき岩を削ったのってどんな技？」

すると男はよくぞ聞いてくれたとばかりに笑みを見せ、立ち上がってまたポーズを決める。

テンションの上下が激しい男である。

「よく聞いた坊主。これは氣といって、誰の体にでも流れている無

限の可能性だ！」

格好をつけるように親指を立てて歯を見せているが、正直暑苦しい。
夏でもないのに、水浴びがしたくなるほどに。
さっきまで隠れていた焔耶が、暑いと伝えるように手で自分を扇いでいる。

「誰にでもということは……」
「うむ！　お前達も練習すれば使えるぞ！！」

にかっと笑って見せる男の歯が、既に夜中だというのに光る。
この男の歯が何でできているのか、少々気になる一刀だった。

「良ければ教えてくれませんか？　無手で戦う時、役立ちそうですし」

突然の申し出に、男は真剣な目で一刀をじっと見る。
ふむふむと頷きながらパシパシと体に軽く触れ、肉付きや筋肉の具合を確かめる。
それから腕を組んでしばらく考えると。

「ふむ、良かろう。だが、一朝一夕では身に着かんぞ」
「そんなこと、百も承知です！」
「その心意気や良し！　早速やるぞ、まずは体に流れる氣を感じるんだ」

こうして新たな武の修行が始まったのだが、それは僅か数分で終わりを告げる。
ある程度の基本を教わった後、実際にやってみたら出来てしまったのだ。

「……！」

「おぉ、なんかやってみたら出来た！」

氣を放出している姿に、焔耶は素直に尊敬の眼差しを送るが、教えた男は呆気に取られていた。

自身が何年も掛けて手にした力を、目の前の子供が瞬時に会得したのだから。

そんな姿を見ていると、なんだか申し訳ない気持ちになった一刀は、取り敢えず謝っておいた。

「えっと……ごめんなさい。氣、使えちゃいました」

気まずそうに謝ると、男はまだだと叫ぶ。

「次は比較的自分が落ち着ける体勢になり、氣を自身に留めるんだ」

「落着ける体勢……こうかな」

肩を落として力を抜いた体勢になると、氣の放出が止まって一刀の体に留まる。

これでは自分の威厳が、と考えた男は一気に段階を飛ばす事にした。

氣の細かいコントロールをすっ飛ばして、氣弾を教えたのである。

当然、すぐに出来るはずがなかったのだが、参考にもう一度見せると。

「なるほど、こうして……こうですね！」

振り抜いた拳から氣弾が飛び出し、岩を粉砕してみせた。

「なぁっ！？」

まさかもう一度見ただけで出来るとは、誰も思わなかった。
放った本人も驚いており、感触を忘れないようにと氣弾を連発している。
後ろの焔耶は凄い凄いと言っているが、当の指導者は真っ白になっていた。

（お、俺の五年の修行って一体……）

男はがっくりと膝を着き、小刻みに震えだした。
何かあったのかと、二人が声を掛けようとすると。

「ちっくしょお！　どうせ俺は凡人だよぉ！！」

そう叫んで荷物を抱え、夜の闇の中へ走って行ってしまった。
訳の分からぬ事態に、一刀も焔耶も顔を見合わせている。
真夜中に、悲運な男の叫びが木霊（こだま）する。

「追うか？　一刀」
「追いたいけど、もう暗くて危ないよ。っていうか、最後まで上半身裸だったね」

こんな状況で追いかけたら、二重遭難の恐れがある。
ならば薄情ではあるが、自身の安全のために動かないのが得策。
走っていった男の安全を祈りつつ、一刀と焔耶は翌日に備えて眠りについた。
それから数日後、男は奇跡的にも無事に故郷の邑へ帰っていた。

「戻ったぞぉ！」

勢いよく出入り口を開けると、内職をしている妻がいた。

「あらあなた、頭は冷えたかしら？」

「そんなことより、楽進達はどこだ！」

何故か慌てた様子で弟子を探す姿に、妻は首を傾げる。

そこへ都合よく、探していた三人組がやってきた。

「あんれぇ、おっちゃん。もう帰って来たんか」

「まだ帰って来ないと思ってたのぉ」

「お帰りなさい。ご無事でなによりです」

三人がそれぞれ挨拶をすると、男は三人に駆け寄る。

荒々しく息を切らすと、大声で宣言した。

「俺は絶対にお前達を強くしてやる！　あの少年に勝てるくらいになぁ！！」

あの少年が誰か分からないが、おそらく何らかの形で負けたのだろう。

そうでなくては、こんな事を言う理由が見当たらない。

騒ぐ男の傍で、妻と三人組はそう確信していた。

一刀の知らぬところで、勝手にライバルが増えようとしていた。

別れと出会い　意外と出来た氣（後書き）

今回はちょっと笑い多めにしてみました。
新たに氣を手にした一刀は、さらなる拳の力を手にした。
呂布の兄として、至高の道を進む一刀の歩みはまだ止まらない

我が名は

ようやく恋に繋がりそうな手がかりを思い出し、洛陽を目指す一刀。
ところがそれから数年経っても、未だに再会は叶わずにいた。
そんな一刀と焔耶が、何をしているかというと。

「はあぁぁっ！」
「どぅりゃぁぁっ！」

燃え盛る街の中で、黄色い布を巻いた盗賊達、俗に言う黄巾党と戦っていた。
彼らはあの後、無事に洛陽に着いたものの、まだ董卓はいなかった。
いずれ来る時を待とうと客将をしていたが、董卓が天水にいると聞いて天水へ。
だが肝心の恋は丁原の下にいたので、いくら情報収集をしても、会う事は無かった。
それからしばらくして、元の旅生活に戻った。
涼州内を一周して、長安、漢中へと渡っている最中、遂に恋の噂を聞きつけた。
つい先日、呂布という武人が黄巾党三万人を、たった一人で倒したという噂だ。
それを聞いた一刀は、呂布としての道を歩んでしまったのかと悔やんだ。
しかし同時に、たった一人の家族の恋が生きていると知り、喜んだ。
以降二人は、各地で黄巾党を倒しながら、噂の出所を探し続けている。

「焔耶、こっちは片付いたよ」
「こっちもだ。ったく、手こずらせやがって」

死屍累々という言葉がピッタリな、二人のいる場所。
周囲には黄巾党の輩が何万人と倒れており、それを一刀と焔耶が撃退したのだ。
道中に襲ってくる盗賊や野生動物との戦いを重ね、鍛錬と研鑽を積んだ二人の武。
焔耶は一人前の武将クラス、一刀はそこらの武将が全く相手にならない領域にいた。
当の本人達も知らぬ間に。

「それで、何か情報は？」
「それがさっぱり。東の方で聞いてっていう、前と同じ情報ばかり」
「こっちもだ。ここより東っていうと、官渡ぐらいか？」

二人の現在地は虎牢関よりやや北にある、小さな集落。
脅えていた住民達は、退治したという話を聞いて両手を挙げて喜んだ。
お礼に一晩泊めてもらい、二人は翌朝に官渡を目指して旅立って行った。

「さて、そろそろ会えるといいな」
「会ってみせるさ。たとえ何年かかろうが、探すって決めたんだから」

ところがそんな二人の耳に飛び込んできたのは、黄巾党が壊滅したという話だった。
ある街で食事中に話を聞いた一刀は、これでまた振り出しだと呟く。

「残念だったな。どうする？　これから」
「うん。せっかくだし、陳留に行こうか。あそこは黄巾党を倒した

曹操って人が治めているから、何か情報があるかも。その後は許昌を経由して、もう一度洛陽に向かおう」

とにかく何か手がかりが欲しい一刀は、一晩休んで陳留へと向かう事にした。

この一晩の休みが無ければ、再会できたかもしれないことを、一刀も恋も知らない。

その恋はというと、何進の名代として曹操の下に赴いた後、宿で仲間と休息を取っていた。

「なんや、恋はもう寝てもうたんか？」

酒を片手に部屋に入って来た、サラシに袴姿をした張遼。

室内では恋が気持ち良さそうに寝息をたて、その様子を一人の少女が見ていた。

「霞殿、恋殿に何か用ですか？」

「大した事やない。明日の早朝には、ここを発ついうだけや」

「承知したのです。ところで、恋殿の兄上の情報は何かあったのですか？」

少女の問い掛けに、張遼は渋い表情を見せる。

自分達を拾ってくれた丁原が病に倒れ、新しい主として董卓に仕えることになった。

今では真名を許しあう仲で、一刀の捜索にも力を貸してくれている。

「アカンわ。大した収穫は無いわ」

今日仕入れた情報は、赤い髪の少年が黄巾党の残党を倒したという話。

その赤い髪の少年が本人とは分からず、どうも決め手に欠けている。

「その程度の情報でも、恋殿は探しに行きそうですぞ」
「わぁっとるわい！　そやから、決定的な証拠が見つかるまで、何も伝えんようにしとるんや」

人一倍家族を大切にしている恋は、以前も一刀と思わしき情報を聞いて飛び出した。
結局間違いだったのだが、その時の恋の悲しみの表情は忘れられない。
家族として集め、育てていた犬や猫に囲まれて、啜り泣きながら眠る姿も。
以降、決定的な証拠が無い限り、恋には情報を伝えない事にした。

「ともかく、帰ったら月達が何か情報手に入れてへんか、聞いてみようや」
「それにしても呂迅という男、恋殿を放ってどこにいるのです！」
「まぁ落ち着きや。向こうかて、方々探し回っとるやろ」

壁に寄りかかって、手にしていた酒を呷る。
ふぅっと息を小さく長く吐いて、スヤスヤと眠る恋に目を向ける。

（あんの泣き虫が、ホンマ強うなったなぁ。今じゃ三万人を手玉に取る、天下の飛将軍や）

見た目からは想像も出来ない、圧倒的な武力。
教えていたはずの張遼と華雄を、いつの間にか追い越し、置き去りにして行った。
今の張遼でも、速さ以外では追いつける気がしない。

（なぁ恋のアンちゃん、早う恋を見つけたってや。恋はアンタの事、生きているって信じて待っとるで）

星空を見上げながら、張遼は心の中で兄妹の再会を願った。
翌日の早朝、一行は役目を終えて洛陽へと帰って行った。
それと入れ替わるかのように、昼頃に一刀と焔耶は陳留に到着した。

「ふぅ。やっと着いたな、一刀」
「参ったよね。まさか集落の人に教わった道が、土砂崩れで塞がっているなんて」
「お陰で遠回りになっちまったな。あぁ、腹が減った」

溜め息を吐きながら、焔耶は空腹の腹を擦る。
その様子に笑みを零した一刀は、宿を取った後で昼食を取る事にした。
幸い以前の稼ぎで路銀に余裕があるので、お金には困っていない。
しばらくはここを拠点に、情報収集をするつもりだ。

「どれくらいここにいるんだ？」
「路銀を考えれば、五日ぐらいかな。その間に情報があればいいけど」
「なぁに、すぐに見つかるって。元気出せよ！」

そう言って、一刀の背中をバンバンと叩く。
少々乱暴だが、焔耶なりの励まし方なのは分かっている。
なので、文句は言わずただ笑みを返した。
そんな二人の後姿を、とある三人が見かけていた。

「ん？　なぁ、秋蘭、季衣。あそこにいるのは、昨夜の名代とかではないか？」

赤いチャイナドレスに、黒髪を伸ばした女性が一刀と焔耶の背中を指差す。
尋ねられた二人は、人ごみの中からその姿を発見した。

「あっ、本当だ。まだ陳留にいたんですね」
「いや、あれは別人だよ。よく見ろ姉者、奴は男だ」

桃色の髪を纏めた少女に続き、水色の髪の知的な女性が事実を伝える。
それを聞いた二人が再度見詰めると、確かに体格や服装が男の物だった。
よく見れば髪の色もやや濃く、一緒にいる人物も見たことが無い。

「おぉ、本当だ。さすが秋蘭、よく見ているな」
「ほえぇ。それにしてもあの人、昨日の人とよく似ていますよね」
「うむ、まるで兄妹のようだな」

そんな事を話しながら、三人は一刀達とは別方向に進んで行った。
それから四日が経ったものの、残念ながら恋に関するめぼしい情報は無かった。
この日は思いきって、兵士に尋ねてみることにした。

「大丈夫か、一刀。前みたいな事にならないよな？」

焔耶が心配しているのは、以前に別の街の兵士に尋ねて怪しまれたからだ。
その時は説明して開放されたが、今度もそうとは限らない。
だが、一般に出回っていない情報を持っている可能性もある。
それに前日、何やら慌しく大勢の兵士がどこかへ出陣して行った。

今なら残された兵士は、仕事に追われて細かい事を気にしないかもしれない。

「とにかく当たってみよう。駄目なら駄目で、前みたいに説明しよう」

意を決した一刀は、近くにいた巡回中の兵に尋ねてみた。
すると一刀達が到着した日の早朝、恋とその仲間が洛陽へ帰ったと聞いた。
ようやく決定的な情報を手にし、大きくガッツポーズをする一刀。
ところが。

「そういえば、洛陽じゃ暴政が行なわれているんだろう？」
「あぁ、董卓って奴が帝を操って、好き勝手やっているらしいな。それを止めるため、曹操様も出陣したんだろう？」

兵士の話を聞いた一刀に、ある歴史が思い浮かんだ。
洛陽での董卓の暴政、曹操の出陣、それはつまり、反董卓連合の集結を意味していた。
それも出発したのが昨日だから、おそらく戦はもう始まっているかもしれない。

「いけない……行こう、焔耶！　間に合わなくなる！！」
「おっ、おい！　行くってどこにだよ！？」

突然走り出した一刀を追いかける焔耶。
荷物を纏め、預けていた馬に跨って陳留を飛び出す。
向かう先は唯一つ、連合軍と董卓軍が最初に激突する場所、？水関。
一方その頃、軍議という名の腹の探りあいをようやく終えた。
軍議が終わった時は既に日暮れとなっていたので、反董卓連合は翌

日から本格的に動き出した。

「おぉっ、ほっほっほっ！　皆さぁん、気高く、雄雄しく前進ですわよ」

連合軍の総大将になり、上機嫌に命令を出す袁紹。
だがその命令は、あまりにも指示としてはお粗末だった。
見た目さえ良ければ良いと判断し、各諸侯は言われた通りの配置で、各々の判断で動いている。

劉備軍

「はぁ。どうしよっか、朱里ちゃん」

困った表情で隣に居る軍師に尋ねる、桃色の髪の少女、劉備。

「そうですね。正直、私達の軍勢で？水関を攻略するには、普通の攻城戦をしては無理です」

正直劉備軍は、今回集まった中で最も勢力が小さい。
それなのに前曲を任されたのだから、たまらない。
とはいえ、劉備が総大将に袁紹を推挙した上での命令なので、逆らえるはずもなかった。

「ここはやはり、華雄さんを挑発し、関から引っ張り出すしかないかと」

「引っ張り出しさえすれば、我々と孫策殿の共闘でどうにかなると？」

「はい。関とは守ってこそ強固ですが、一度攻勢に出て崩れれば、

立て直しは難しいです。なので、少なくとも華雄さんは討ち取りたいですね」

どうにか策をもって立ち向かおうとするが、やはり不安はある。万一この策が不発に終わった場合、自分達に打つ手はなくなるのだから。

曹操軍

「馬鹿もここに極められり、ね。大事な初戦で、小勢力を前曲に当てるなんて」

憂鬱そうな溜め息を吐きながら、小柄な金髪の少女、曹操が呟いた。黄巾党を壊滅させて功績を得た彼女は、さらに名を広めるために連合に参加した。

「全くです。ですが劉備軍が敗走すれば、次は我々が前曲に入るかと」

「そうね。その事を考えれば、劉備達には少しは頑張ってもらわないとね」

場合によっては恩を売って関羽を取り込もうと、密かに画策していたりする。

孫策軍

「雪蓮、どうやら劉備達は華雄を挑発するらしい」

「あらそう。だったら、私も一枚噛もうかしら。母さんとの事で挑

発すれば、猪だから出て来るでしょ」

楽しそうにしている、桃色の髪の女性、孫策がどう挑発しようかと思案する。
彼女にはいずれ成し遂げる孫呉復活のため、この戦いで名を上げる必要がある。

「ところで穏はどう？　呂布の名前を聞いた時、動揺していたみたいだけど」
「うむ。なんでも呂布の生き別れの兄と、面識があるらしい」
「生き別れの兄？」
「そうだ。だから、そいつが董卓軍にいないか心配だったらしい」

その件については既に調べ、呂迅という人物はいない事を確認した。
穏に伝えると、安心が半分、行方の心配が半分という感じだった。

「そう……。でも、だからって手加減は出来ないわよ」
「分かっているさ。穏には、呂布の生死は覚悟しておけと言っておいた。渋々だったが、承知してくれたよ」

納得は出来なかったようだが、と最後に付け加えた。
当の穏は、空を見上げて一刀の行方を案じていた。

（一刀さん、穏は呂布さんと敵になってしまいまいた。私は、どうしたらいいんでしょう？）

深い溜め息は、渓谷のそよ風に紛れて消えた。

それから数刻後、とうとう連合軍は？水関に辿り着いた。
？水関を守るのは、猛将華雄と神速の張遼。

二人は数人の兵と共に、連合軍をその目に捉えていた。

「うひょお、おるおる。袁家に曹操に公孫賛、西涼の馬一族もおるんか」

「それに孫家もだ。袁術の客将になったと聞いていたが、忌々しい」

過去の恨みを籠め、孫家の旗を睨む華雄。

すぐに落ち着けと宥めて、籠城戦の準備に入る。

しばらくの間睨み合いが続くかと思いきや、連合側は華雄を挑発してきた。

それを聞いた華雄が出陣しそうになったので、慌てて押さえる。

「放せぇ！　奴らに我が武を見せ付けてくれる！！」

「やめぃや、それが向こうの目的や。ここで動いたら、確実にうちらはやられるで」

騒ぐ華雄をどうにか宥めようとするが、その思いは次の挑発で砕け散った。

以前に華雄が煮え湯を飲まされた孫堅の娘、孫策による挑発が行なわれたのだ。

これを聞いた華雄の頭は大爆発し、張遼の拘束を力ずくで外し、出陣だと叫んで行ってしまった。

「あんのアホ！　しゃない、撤退準備や！　ウチは華雄を連れ戻すさかい、お前らは虎牢関への撤退準備しときぃ！！」

近くにいた兵に指示を与え、華雄隊追うために、馬へと飛び乗った。

対する連合側、劉備軍と孫策軍は、華雄が飛び出して来たことで、勝機を見出した。

「あらら、本当に出てきたわ。猪なのは、相変らずなのね」

思い通りの展開に、少々つまらなそうな表情をする孫策。
一方の劉備側は、思い通りの展開を見逃さず、すかさず攻勢に出て迎え討つ。
華雄には関羽が当たり、張飛と趙雲が兵を率いて敵兵に当たる。

「くっ、貴様が関羽か。なるほど、噂にたぐわぬ美髪だな！」
「ほぅ、お主が知っているのは美髪だけか？　ならば、我が実力を思い知らせてくれる！」

武人として一対一の勝負を続ける二人だが、流れは関羽に傾いている。
周囲の兵士達の戦いが、劉備軍の流れとなって関羽を優勢に導いている。

「攻めろ、攻めろ！　今ここで攻め切れなければ、我らはあの関を抜けんぞ！！」

趙雲の号令で、一気に劉備軍が攻め立てる。
前線に張飛と趙雲という、二人の実力者がいるのが大きい。
仮にここで張遼が参戦しても、この二人の相手は難しい。

「ちぃ、予想通りかい。こら華雄を拾ったら、すぐに撤退や」

城門から出た途端、目の前に広がる状況に張遼はそれしか浮かばなかった。
そして問題の華雄を探すと、既に危機的状況に陥っていた。
完全に関羽に押され、防戦一方の姿。
救うのさえ無理かと思った、その瞬間だった。

高い崖の上から、何かが降ってきて関羽と華雄の間に落ちて小爆発した。

「なっ！？」

「くっ！」

突然の事に関羽は退き、華雄は勢いに負けてしりもちを着く。

この出来事に、敵味方関係なく崖の上に視線が向けられる。

するとそこには、陽の光を背に受けた一人の人物がいた。

「……誰？　あいつ」

誰もが注目する中、その人物は躊躇無く崖を飛び降りた。

「はぁっ！？」

誰もが無謀な行為かと思った。

しかし飛び降りた人物は、まるで宙を舞うかのように崖を下っている。

足場から足場へ飛び移り、物凄い勢いで戦場へと降り立つ。

そしてその勢いそのままに、近くにいた劉備軍の兵士の顔面を殴り飛ばした。

「ぐおっ！」

「こ、こいつ！」

すぐさま近くにいた兵が剣を振り下ろすが、そこに既に人はいない。

気づいた時には、左方向から右肘を叩き込まれた。

「がほっ！」

吹き飛んだ兵士が二、三人を巻き添えにする。
突然の事態に呆然とする兵士にも、降り立った人物は容赦しない。
距離を詰め、低い体勢から足払いをし、態勢が崩れたところに裏拳を顔面に。
さらに、正気に戻って襲ってくる兵士の一人の腕を取り、全身に氣を纏って力任せに振り回す。

「うおぉぉっ！」

振り回した勢いで周囲の兵士は倒され、腕を取られた兵も投げ飛ばされる。
落下地点にいた兵士を数人巻き添えにし、立ち上がろうとしたところに膝蹴りが命中する。

「くっ、囲め！　一人で当たらず、全方向から囲め！！」

趙雲の指示で全方向から兵士が飛び込んでくる。
だが、正面にいた兵士を足場に跳び上がり、他の兵に回し蹴りを当てる。
倒れた仲間に構わず突っ込む兵士は、組まれると同時に背負い投げをされる。

「こんの……うにゃ！？」

投げられた兵士により、参戦しようとしていた張飛が巻き込まれる。
自分より体の大きい兵士をどかすと、目の前で趙雲が槍を取られた体勢から投げられていた。

「ぬおっ！」

どうにか体勢を立て直して着地するが、既に投げた本人はいない。

「ど、どこに？」

「星、向こうなのだ！　愛紗のところなのだ！！」

張飛の声に振り向くと、華雄と対峙していた関羽が謎の人物と戦っていた。

振り下ろされた刃を、両腕の手甲を組んでで受け止める。

同時にすかさず、がら空きとなっている腹部を蹴る。

「ごふっ！」

蹴りの威力と痛みで倒れこむ関羽に構わず、謎の人物は華雄に駆け寄る。

しりもちを着いた体勢のまま、抱き抱えて？水関の城門へ走る。

抱えられた華雄も、呆気に取られて何も言い返さない。

一部始終を見ていた張遼は、華雄を抱えている人物をその目に捉え、驚きを隠せなかった。

（あの髪にあの服……まさか恋か？　そやけど、あいつ武器は持っとらんやん）

この先の虎牢関を守っているはずの、恋の姿によく似た人物。

その人物は城門前の張遼の下に辿り着くと、抱えていた華雄を下ろす。

すると、恋とは明らかな違いが見えた。

（こいつ……男か？）

（服や体格からみたら、男に違いあらへん。そやけど何で恋に……

まさか！？）

ある事実が頭に浮かんだ。
もしそれが本当なら、この男が捜し求めていた人物になる。

「くっ。貴様、何者だ！」

張飛と趙雲に支えられ、起き上がった関羽が叫ぶ。
その叫びに男は立ち上がり、怒りを込めながら拳を強く握り締める。
そして、振り向いて高々と宣言した。

「呂迅！　姓は呂、名は迅、字は烈堂！　天下の飛将軍、呂布の兄だ！！」

今ここに、至高の武人が乱世に名乗りを上げた。

我が名は（後書き）

遂に戦場に降り立った一刀。
今ここに、至高の武人が乱世に出現した。

激突　劉備軍

突然現れ、兵を蹴散らし将さえも軽くあしらった男。
男は呂迅と名乗り、自らを呂布の兄と言った。
その姿を間近で見た張遼と華雄は、思わず見とれてしまっていた。

（こいつが、恋の兄）
（恋に残された、最後の家族）

風に揺れるスカーフがバタバタと音を出す中、一刀は劉備軍に睨みを利かせる。
そのまま視線を外すことなく、後ろに居る霞と華雄に告げる。

「一部始終は見ていたよ。泗水関から出てきたって事は、君達は恋の仲間だろ？」
「えっ、あっ、あぁ、そや。ウチらは恋の仲間や」
「そうか。なら、なおさら君達を守らなくちゃな。妹の仲間を救うのも、兄の務めだ」

そう言って、自分を睨んでいる関羽達への睨みを強くして、殺気を強めに発する。
すると、関羽達の背筋に寒気が走った。
戦闘の手を止めていた兵士達も、一刀の発する殺気に逃げ腰になる。

「な、なんという殺気か」
「ふむ。呂布の兄というのも、あながち間違いではなさそうだな」

体で感じる殺気に、頬に冷や汗が流れる。
しかし、仮にも先陣を務める身としては引く訳にはいかない。

関羽は頭を振って恐怖を振り払い、号令を掛ける。

「何をしている！　たかが一人増えただけ、今の内に攻め込むのだ！！」

『お、おぉぉぉぉっ！』

号令に従い、劉備軍の兵士が再び動き始める。

一方の董卓軍の兵士は、張遼の部隊の兵の呼びかけで、次々に退却を始めている。

残るは城門前にいる一刀と張遼、華雄だけとなった。

ここで関の中に逃げられてはたまらないと、劉備軍の兵士の動きは速い。

「くっ、まだだ。今度こそ……」

今度は負けないとばかりに華雄が飛び出そうとするが、一刀の腕が行く手を遮る。

「何をする。私は」

「その前に後ろを見るんだ、自分の勝手な行動の結末を」

そう言われて、華雄ははっと振り向いた。

関の中に逃げ込めた隊の兵数はすっかり減り、生きている者もかなり傷ついている。

華雄とて将として生きる身、自分の勝手な行動によるものだとは理解できる。

「悔しいかい？　だったらその汚名を、この場で返上しようよ」

「何？」

「ここを俺達だけで押さえるよ。その間に君は、兵士を引き連れて

虎牢関に退がるんだ。出る前に、関には火を放ってね」

自分と華雄で殿を務めるかのように言うと、張遼には撤退の指揮を頼む。

関に火を放つのは、連合の足止めと補給線としての機能を失わせるためだろう。

普通に考えれば二人での殿など無謀だ。

しかし一刀の強さを目の当たりにすると、何故か無謀とは思えなくなる。

華雄も自身の責任を取るため、熱くなりすぎた頭を冷静にして力強く頷く。

「承知した。だが、関に火を放てば我らは逃げ道が無いぞ」

「大丈夫、ちゃんと考えてあるよ」

それだけ言葉を交わせば十分だった。

迫り来る劉備軍に、たった二人でぶつかりに行く。

「行くよ、華雄さん」

「あぁっ！　今度はさっきのようにはならん！」

同時に駆け出すと、一刀は先頭の兵士を殴り飛ばし、続いて足払いをして転ばせる。

前の者が転んだため、後方の者達も将棋倒しのように倒れていく。

同じく華雄も先頭に突撃し、こちらも将棋倒しに兵士を転ばせて侵攻を止める。

「おぉ、二人ともやるやん。よっしゃ、そこのお前、他の奴を連れて虎牢関に撤退せぇ」

「えっ！？　張遼様は」

「ウチは華雄を止められへんかった、責任を取ってくる！　撤退前に関を燃やすの、忘れるんやないで！！」

自分も責任を取ってくると言い残し、張遼も駆け出していく。
取り残された兵士は返事をして、撤退の指示と城門の閉鎖、関への放火を伝える。

「どぉうりゃあっ！」

颯爽と現れるや否や、左翼に当たって劉備軍の侵攻を食い止めた。
方法は一刀と華雄と同じ、足場狙いの将棋倒しだ。

「おいおい、いいのかい？」
「華雄を止められへんかった責任は、ウチの責任や。それより、ウチが加わっても脱出は大丈夫か？」

張遼に訪ねられると、兵士を蹴り飛ばしながら一刀は考える。
しばらく思案して、出した結論を口にする。

「うん……まっ、大丈夫だろう。逃げる時、君達が暴れなければね」

それを聞くと、張遼はにんまりと笑みを浮かべる。

「ほんなら、思いっきしやれるなぁ！」

迫り来る兵士を、飛龍偃月刀（ひりゅうえんげつとう）の一振りで薙ぎ払う。
こうなれば、後は二つ名の神速の見せ所だった。
大勢いる敵の中に飛び込み、素早さで翻弄しながら確実に斬り捨てていく。
その速さと攻撃の正確性は、まさしく神速に相応しいものだ。

「さすがは霞だな、私も負けられん！」

対する華雄も金剛爆斧（こんごうばくふ）を振り回し、力任せに劉備軍の兵士を蹴散らす。

猛将の二つ名に恥じない勢いは、数で勝っている劉備軍を一方的に押していた。

「さすが恋の仲間だけあるね。俺も負けていられないな！」

遅れを取るまいと、一刀は体に氣を巡らせて兵士に掴みかかる。

突き出された槍を跳んで避け、兵士の頭を左手で掴み、腕だけで横に放り投げる。

数人の悲鳴を耳にしながら、正面の兵士の一撃を右手で弾き、左肘を咽に当てる。

咽を押さえながら倒れる兵士の後ろから、再び関羽が姿を現した。

「今度は不覚など取らん。はあぁぁっ！」

接近してくる関羽は、青龍偃月刀（せいりゅうえんげつとう）を振り上げる。

一刀の立ち位置が攻撃範囲に入った瞬間、勢いよく刃は振り下ろされた。

当たれば体を引き裂かんばかりの一撃だが、一刀はそれを斜めにした手甲で受ける。

斜めにした事で、刃は振り下ろされた勢いそのまま、力を受け流される。

「まだまだぁ！」

関羽はすかさず、斜め上方向へ青龍偃月刀を振り抜く。

一刀はこれを、咄嗟に左手の手甲で受け止める。
そしてがら空きの胴体に右拳を繰り出すが、これは後ろに下がって回避される。

「同じ手を二度は喰わん」
「それはどうかな？　今の俺の目的は、君を止めることだよ」

ふっと笑みを浮かべたのを見て、既に城門が閉じられているのに気付いた。

「し、しまった！」

逃げ込まれないように攻め入ったのに、上手く足止めをされてしまった。
しかも関羽は、その事に気が向いて一瞬の隙を生む。

「隙あり！」

一瞬の隙を突いた一刀は、渾身の突きを関羽に叩き込む。
反応が遅れた関羽はもろに拳を受け、勢いに負けて背中から倒れる。
このまま押さえ込んで、トドメを刺そうと後ろ腰に差してある紅蓮に手を伸ばす。
しかしそこへ、同じ劉備軍の将が割って入ってくる。

「愛紗！」

張飛が丈八蛇矛（じょうはちだぼう）の矛先を突き出し、勢いよく迫ってくる。
気配でそれを確認した一刀は紅蓮を抜き、下から上へ円を描くように、逆手持ちで振り抜く。
円の動きで力を無力化された一撃は、一刀の頭上を通り過ぎようと

する。
ここで一刀は、右手を頭上にある矛の柄の部分に伸ばして掴む。
そして鮮紅を支点、柄を掴んだ右手を力点とし、梃子の原理で張飛を投げ飛ばす。
しかも張飛が前方に進んでいた勢いも活きて、遠くの方に飛んでいった。

「にゃにゃにゃあぁっ!?」

猫のような叫び声と共に飛んで行った張飛は、自軍の兵を巻き込んで地面に落下した。

「鈴々！　くそっ、全員で掛かれ！　周囲から押さえ込め!!」

起き上がった関羽が距離を取り、周囲にいた兵士達が押さえ込もうと迫ってくる。
実力で勝てずとも、物量で押し切ればと考えての行動だが、一刀の前では無意味だった。

「ふっ、はぁっ！」

前方から突き出された槍を叩き落とし、足場にして跳び上がる。
さらに今度は、足場にした槍を持っていた兵士の肩を足場に跳ぶ。
二段ジャンプで突進を避わされた兵士達は、互いにぶつかり頭を打って気絶する。
さらに右方向から襲い掛かった兵士は、剣での一撃を白刃取りされる。
そして力ずくで引っ張られ、反対側から迫っていた兵士の方へ振り飛ばされた。
よろめきながらも、突き出されたままの剣が味方に当たり、自身に

も仲間の構えていた槍が刺さる。

「ぎゃあぁぁっ！」

「この野郎！」

味方の仇を討とうと襲い掛かるが、一刀は攻撃を避けて別の兵士を殴り飛ばす。

その際の勢いを利用して、先に仕掛けた兵士に蹴りを浴びせる。

さらに槍での攻撃を受け止め、逆に利用して別の兵士の攻撃を弾き返す。

弾き返した後に槍から手を放し、槍の持ち主の兵士に肘打ちを打ち込む。

次に後方からの剣の突きを軽く避けて、左脇腹の横で兵の腕を掴んで引っ張り、目の前にいる兵士に突き刺す。

「ぎゃぁぁっ！」

「ひっ！？　ぼふっ！」

味方の悲鳴に怯んだ隙に、後方の敵の顔面に左肘を叩き込む。

「まだまだ集団戦に慣れていないね。これだけ大勢で一人に掛かってきたら、同士討ちだって起きるよ！」

襲い掛かってくる兵士を次から次に投げ飛ばし、同士撃ちにさせ、打撃を叩き込む。

離れた場所で戦闘を見ている将達も、一刀の戦いに目を奪われていた。

（なんと無駄の無い。一対集団において、有効かつ効率的な戦闘方法だな）

（そんな馬鹿な。何故これだけの数で向かって、一撃すら入らんのだ）

冷静に分析する趙雲に対し、関羽は頭に血が昇り始めている。
戦い方ではなく、多数の兵士が敗れているという結果しか見えていない。
そこに、今度は打って変わって冷静になった華雄が、勝負を仕掛けて来た。

「関羽、勝負をつけるぞ！」
「くっ、華雄か。いいだろう、再びお前を地にひれ伏させてやる！」

関羽と華雄の戦闘が再開された頃、関の内部では撤退が進んでいた。
残っているのは、関に火を着ける為に残った者ばかり。
やがてその者達が役目を終えて撤退すると、関の内部には煙が立ち込め始める。

「後は時間との勝負か。将軍様、呂布様の兄上。御武運を」

一方その頃、虎牢関の方でも動きがあった。
関の裏手を守っている兵士が、近づいて来る馬を二頭見かけた。
しかもよく見ると、一頭は荷物だけで誰も乗っていない空馬。
明らかに怪しい。

「止まれ、そこの馬！」

兵士の呼びかけに、馬に跨っていた人物は馬を止めて言い放つ。

「我が名は魏延。ここに呂布殿はお出でか？」
「呂布様ならここにおられるが、何の用だ」

「なら伝えろ。呂布の兄と懇意にしている者が来たと」

それを聞いた兵士は驚いた。

恋が兄を探しているというのは、董卓軍内部では有名な話しだからだ。

「その話、本当だろうな」

「本当に決まっているだろう。なんなら、これを証として呂布に見せろ！」

焔耶は一刀の荷物から、何かの包みを取り出して兵士に渡す。

兵士が受け取った包みを開けると、中には割れた陶器が入っていた。

実はこれ、幼い頃に恋が割った一刀の大切な陶器。

底に一刀と真名が書かれているので、恋ならば本物だと分かる。

事情を知らない兵士は首を傾げながら、包みを持って関の中へ走っていく。

しばらく待っていると、大きな足音が近づいてきた。

何事かと関の中を覗くと、一刀とよく似た格好の少女、恋が走って来た。

「お前が……アニィの知り合い？」

右手に包みを持って現れた恋は、瞳を潤ませながら焔耶に詰め寄る。

「どこ？　アニィはどこ！」

「待て待て、落ち着け。安心しろ、一刀は泗水関でお前の仲間を助けている」

それを聞くやいなや、恋は回れ右をして馬小屋へ向かおうとする。

明らかに泗水関へ行くつもりだ。

「おいおい、大丈夫だって。あいつはちゃんと来るから、待ってろって」

駆け出そうとする恋のスカーフを掴み、どうにか引き止めようとする。
それでも恋は止まろうとせず、焔耶を引っ張りながら進み始める。

「放して、アニィの所に行く」
「駄目だ！　ここで待っていろって、一刀が言っていたぞ！」

それを聞いた途端、恋の進行は止まる。
振り向いて焔耶をじっと見つめ、真剣な表情で尋ねた。

「本当に？」
「あぁ、本当だ！」

すかさず本当だと答えると、両者はじっと睨み合う。
やがて恋が先に睨むのをやめると、こくりと頷いた。
どうやら分かってくれたみたいだと、焔耶はほっと胸を撫で下ろした。

「いつ来る？」
「泗水関の様子次第だ。手助けの必要が無ければ、すぐに行くって言っていたぞ」
「……分かった」

少し残念そうにしながらも承知した姿に、自分の役目は果たせたと溜め息を吐く。
泗水関の近くで、先に虎牢関に行って恋に自分の無事を伝えてくれ

と言われた時は、どうなる事かと思った。
だが、無事に終わって安心した。
後は一刀が無事に虎牢関に来れば、万事解決だ。

（一刀……そっちはどうなっているんだ？）

焔耶が心配している一刀の方はというと、劉備軍を完全に押していた。
兵士は次々に戦闘不能に追い込まれ、各将も一刀達に手を焼いている。
冷静さを取り戻した華雄は、逆に頭に血が昇っている関羽をやや押している。
張遼も趙雲と互角に渡り合い、一刀は張飛を軽々投げ飛ばしていた。

「うにゃあぁぁぁっ！！」

もう何度も投げられた張飛は、その度に兵士を巻き添えにして地面を転がる。
しかもまるで、計ったように横を抜こうとしている一団目掛けて。
起き上がろうとしている間に、別の侵攻部隊が一刀の氣弾によって吹き飛ぶ。

「くっそぉ、まだ戦えるのだぁ！」
「そうは言っても、君じゃ俺には勝てないよ」

突き出された矛を紙一重で避わし、軽く足払いをして張飛の体を宙に浮かせる。
そこへ組んだ両手を振り下ろし、地面に叩きつける。

「ぎゃほっ！」

叩きつけられて悲鳴を上げた張飛は、霞む目で振り下ろされそうな刃に気づく。
咄嗟に自ら転がって避け、紅蓮は地面にぶつかった。

「鈴々！」
「余所見しとる場合とちゃうで！」

ホンの一瞬だが趙雲の気が逸れた瞬間、張遼の神速の刃が迫る。
趙雲もどうにか避け、致命傷は免れたものの、右腕に傷を負って出血していた。

「くっ、不覚」
「このまま一気に決めたるでぇ！」
「そうはさせん！」

神速の刃でもってトドメをさそうとする張遼の攻撃を、技を持って弾き、守り続ける。
しかし、攻撃を受け続ける龍牙（りゅうが）を支える腕が悲鳴を上げた。
突如走った痛みに動きが遅れた趙雲の龍牙を弾くと、張遼の蹴りが腹部を直撃する。

「ぐっ、うぅ……」
「星、大丈夫か！」

蹲る趙雲の下に、関羽が駆け寄る。
相手をしていた華雄は張遼の隣に立ち、揃って互いの相手を睨みつける。
するとそこへ、轟音と共に張飛が飛んできた。
着地することなく、受身を取れずに地面を転がり、関羽と趙雲の下

でようやく止まる。

「鈴々！？」

「どうやら詰んだようだね」

悠然と姿を現した一刀が合流し、場の流れは殿のはずの三人のものとなった。

兵士は怯えて誰一人動けず、三人の将も敵わない。

このまま敗北するかと思われたが。

「……訂正する。詰みきれなかったみたいだ。ここらが潮時だな」

一刀の見つめる先では、孫策軍と公孫賛軍が劉備軍の残存戦力と共に迫っていた。

「そやけど、せめてこいつらにトドメを」

「やるべき事は果たした。俺達の目的は、撤退の時間稼ぎ。変に欲張ったら駄目だよ」

確かにこの場でトドメを刺せない事はない。

だが、トドメを刺している間に、敵の大群に飲まれれば一溜まりも無い。

しかも相手は連合軍、一軍の三人の将がいなくなった程度では止まらない。

反対に董卓軍は、一人の将も無駄に出来ない。

目先の利益のために、先の戦いを不利にするなどもっての他だ。

「ちっ。わかったわ、確かにここは引くべきやな」

「だがどうするつもりなんだ？　泗水関は火の海だぞ」

華雄の言うとおり、泗水関には一刀の指示で火が放たれた。
黒煙がもうもうと上がり、炎の勢いの凄まじさを示している。
おまけに逃げ腰になっているとはいえ、周りには劉備軍の兵士もいる。

「どうするかって？　こうするんだよ！」

一刀は全身に氣を纏うと、それを右手だけに集めて兵士に向ける。
左手は右手首に添え、しっかりと握る。

「伏せるんだ！」
『へっ？　どわぁっ！』

いきなり伏せろと言われ、訳が分からなかった華雄と張遼。
だが、一刀の攻撃が始まると咄嗟にしゃがみ込んだ。
開始された攻撃は、右手に溜めた氣を氣弾にしての放出だった。
しかも、まるでマシンガンのように細かい氣弾を、広範囲に連続で。

「ぎゃぁっ！」
「ぐはっ！」

同じく咄嗟にしゃがんだ関羽、趙雲、張飛は無事だったが、兵士達は無事ではない。
細かい氣弾は兵士の体を貫き、後ろにいた兵士にも襲い掛かった。
一発や二発ならともかく、何十発もの氣弾に体を貫かれてはたまらない。

「下手に動かさなければ、大怪我にはならないよ。それじゃあ、退却！」

そう言うと、一刀はいきなり張遼と華雄を脇に抱えた。
そしてそのまま倒れた兵士の中を駆け抜け、降りて来た崖を駆け上り始めた。
正確には足場から足場へ飛び移り、その姿が駆け上るように見えているのだが。

「んなアホなぁぁっ！」
「わ、私は風になったぁぁっ！」

抱えられた側も驚きながら、一刀はあっという間に崖を上った。
途中で弓兵からの矢も飛んできたが、届くことなく地面に落下している。
何はともあれ撤退した一刀達は、そのまま虎牢関へと走り出す。
劉備軍への多大な被害、炎に包まれた泗水関を残して。
かくして、連合軍は足止めを余儀なくされ、焼け落ちた泗水関を補給線にする事も出来なかった。

激突　劉備軍（後書き）

劉備軍との戦いに勝利すると同時に、関を完全に放棄した一刀達。
戦いの場は、再会の場ともなる虎牢関へと移る。

再会

呂迅という名の嵐が通り過ぎた後の泗水関は、事後処理に翻弄されていた。
被害を受けた劉備軍の兵の治療、燃え落ちた泗水関内部の片付け。
片付けた後の、補給線についての対応。
ただでさえ泗水関の炎上で足止めを喰ったのに、余計に時間が掛かっている。

「全く！　なんて事をするんですか、あの方は。泗水関を燃やしてしまうなんて」

総大将の袁紹が、腕を組みながら文句を言う。
現在連合は燃え後に天幕を作り、そこで軍議を行なっている。

「おまけに劉備さん！　せっかく前曲に置いて差し上げたのに、あの体たらくは何ですの」
「うぅ……すみません」

何と言われようとも、劉備からは謝罪の言葉しか出て来ない。
予定通り華雄を引っ張り出したのに、その後は散々だったからだ。
幸い体を撃ち抜かれた兵は、思ったほど大怪我ではなかった。
貫いた氣弾が小さい事もあり、頭か心臓に当たらなかった者は生き延びたのだ。
将の三人も、張飛以外はどうにか戦える。

「とにかく、劉備さんの軍はここに残って補給線を守ってください」
「……承知しました」

正直、劉備軍の誰もこんな事態は予想していなかった。
あの諸葛亮孔明さえも。
予定では名を挙げる活躍をして、劉備の理想への第一歩とするつもりだった。
それが一つの想定外で、早くも打ち砕かれてしまった。

「それにしてもあの男、呂迅といったかしら。あいつは何者なの？」

曹操の発言に、各諸侯がざわめく。
聞いた事も無い名前、劉備軍を蹴散らした武力、そしてなにより呂布の兄。
現時点で持っている情報が少なすぎる。

「この様子じゃ、誰もあいつの事は知らないみたいだな」

溜め息を吐きながら、公孫賛が結論を告げる。
その中でどうにか悟られないよう、孫策が必死に心を落ち着かせる。

（落ち着くのよ、雪蓮。今ここで、穏の事を知られる訳にはいかないわ）

何度も同じ事を自分に言い聞かせ、必死に知らぬ存ぜぬを通そうとする。
万一知られたら、呂迅への人質に利用されかねない。
他の者ならしないだろうが、袁家の二人なら確実にする。
せめて総大将が袁紹以外で、自分が袁術の客将でなければと、歯がゆい気持ちになる。

「とにかく！　泗水関は劉備さんに任せて、私達は次の虎牢関へ」
「軍議中失礼します！　至急劉備様にお伝えしたい件が！」

袁紹が締め括ろうとした途端、劉備軍の兵士が駆け込んできた。
まるで幽霊でも見たかのように、真っ青な表情で。

「ちょっとあなた」
「すみません、袁紹さん。それで、何があったんですか？」

一応の謝罪を入れると、何があったのかを尋ねる。
そこで兵士に聞かされたのは。

「治療を終えた兵士の大半が、突然手足を折っています！」
「えっ、えぇぇぇっ！？」

劉備が悲鳴を上げていたその頃、一刀は華雄と張遼と共に虎牢関へ走っていた。
さすがに距離があるので、馬無しでは少々キツイ。
特に一刀は氣を大量に消費したので、だいぶ疲れているように見える。

「大丈夫か、アンちゃん」
「ちょっとキツイかな。さすがに氣を使い過ぎた」

何かを誤魔化すように苦笑いを見せていると、華雄がその何かに気付いた。

「それだけじゃないだろう？　さっきから、右手を隠しているようだな」

鋭い華雄の指摘に、背中に隠していた右手を左手で包む。
余計怪しいと踏んだ二人は、右腕を取って無理矢理右手を引っ張り

出す。

「うわっ、ちょっ、痛っ！」

右手に痛みが走って、つい痛いと口に出てしまった。
その隙に引っ張り出された右手は、まるで火傷したかのように真っ赤になっていた。

「ちょっ、どないしたんやこの手!?」
「一体どうしたんだ。何をしたら、こんな風になるんだ！」

二人から問い詰められ、一刀は苦々しい表情をする。
しかし、知られてしまった以上はと、観念して説明を始める。

「これの原因は……最後に使った、あの氣弾のせいだよ」

それを聞くと、張遼も華雄もやるせない気分になった。
自分達を連れて逃げるために使った、あの技のせいでそんな事になったのかと。
二人の沈み気味の表情を見ると、一刀は慌てて弁解する。

「そんなに落ち込まないでよ。あの技は元々使うつもりだったんだしさ」

必死に説得をし、どうにか二人共納得してくれた。
だが、そのために余計な時間を消費し、三人は虎牢関まで走ることにした。

「そんで、ありゃあどんな技なん?」
「あの氣弾かい？　あれは攻撃というより、毒に近い性質の技だよ」

「ど、毒だと!?」

毒という言葉に、張遼と華雄が驚く。
どうやって氣に毒を含ませるのか、全く予想が出来ないからだ。
しかし、一刀の言う毒とは、二人が考えている毒とは少し意味が違う。

「毒と言っても、攻撃に毒性は無いよ。あの攻撃は受けた時より、後々の方が効くって事」
「後々だと？　どういう事だ」

まるで訳が分からない二人に、一刀が攻撃の効果を説明し始める。
そしてその効果は、既に劉備軍の兵士に出ていた。

「ぎゃぁぁっ！　お、俺の腕があぁぁっ!!」
「なんで、なんで急に脚が折れるんだよぉっ!?」

騒ぎを聞きつけた諸侯達の目の前には、阿鼻叫喚の状況が広がっていた。
事後処理をしていた兵士の手足は、荷物を運ぼうとしただけで折れ、立って歩こうとしただけでも折れている。

「な、なに……これ」

惨状を目の当たりにした劉備は、目の前が真っ暗になった。
報告では氣弾を浴びた兵士は、それほど大怪我ではなかった。
体が貫かれているものの、氣弾が小さいために致命傷には程遠い。
なので、治療を終えたら無理をしない程度に、事後処理を手伝う事になった。
ところが、立とうとしただけで脚に強烈な痛みが走り、中には脚が

折れた者もいた。
荷物を運ぼうとして、物を持ち上げた瞬間に腕の骨が折れる者もいる。

「はわわぁ！　いったい何が起きているんですかぁ！？」

訳の分からぬ事態に混乱している連合軍。
いったい、劉備軍の兵士に何が起きたのか。
それを一刀は張遼と華雄に教えていた。

「あの攻撃はね、貫通に特化しているんだ。人の体どころか、筋肉も骨も貫けるほどにね」
「ほ、骨もやてぇ！？」

もしもその話が本当なら、体を撃ち抜かれた兵士の骨には、氣弾で穴が空いている事になる。
そんな骨の状態で立ったり物を持ったりすれば、強度の落ちた骨はすぐに折れてしまう。
同様に筋肉も、穴が空いて裂けた状態になれば、立つ事さえも困難になる。
つまり、体を貫いた傷は大した事がなくとも、骨や筋肉が穴だらけになっているのだ。

「え、えげつない攻撃だな」

顔を真っ青にした華雄が、味方に付いてくれて助かったと呟く。
もしそんな攻撃を受ければ、少なくとも二ヶ月は動けない。
同じような状況を張遼も考え、血の気が引いた気がした。

「それって、動かそうと手足を持って持ち上げるだけで、ポキッと

いきそうやな」

確かにそれはありそうだ。
怪我人だからと持ち上げると、穴の空いた骨に負担が掛かる。
そうなれば、間違いなくその骨は折れるだろう。
つまり、あの攻撃は受けたら最後、動かす事すら困難な技という訳だ。

「後々に効くとは、そういう意味か」
「確かに効くなぁ。動こうとしても、動かそうとしても。余計に怪我が酷くなるって、どんだけ鬼畜やねん」

鬼畜は少々言い過ぎかもしれないが、第三者からすればそう思うのだろう。
何故なら、攻撃を受けた後の最善の処置が、決して動かさない事だからである。
動かしたら最後、どうなるかなんて分からない。

「ただあの攻撃、高密度の氣を手に集中するから、凄く熱があるんだよ」

要するに一刀の右手の火傷は、攻撃の際に高密度の氣を集めたから。
右腕分の氣を集めたのではなく、全身に纏った氣を集約させたのだから、当然と言えば当然だ。

「ほんならあの技、そう何度も使えんのか？」
「まぁね。使う度に手を火傷していられないし」

効果は大きいが、反動も決して小さくはない。
それが一刀の氣弾による技なのだ。

広範囲に連続で撃つのは、氣を出来るだけ早く消費するという理由もある。
そうでなくては、今くらいの火傷では済まない。

「なるほど。まさに諸刃の剣だな」

華雄の言う通り、この攻撃は諸刃の剣。
それでも有効性は高いので、ほどほどで使う事にしている。
下手に使いすぎると、焔耶に泣かれて説教をされるからである。

「ともかく、虎牢関へ急ごう。やっと、やっと恋に会えるんだ」

ようやくの再会に胸を躍らせながら、走る速度が上がる。
ちょうどその頃、泗水関ではようやく劉備軍の騒ぎが落ち着き、氣の扱いに長けている楽進と黄蓋が呼ばれていた。

「それで凪、あの技の詳細は分かったの？」
「はっ。負傷した兵の情報を元に、黄蓋殿と話し合った結果、あれは貫通を目的としているという結論に至りました」

二人が辿り着いたのは、一刀が張遼と華雄に説明したのと同じ結論だった。
主な目的は高密度の氣で骨や肉を貫通し、攻撃直後よりその後に効果を発する。
それだけの密度の氣を集めるため、全身に纏った氣を右手の一点に集中させた。
その反面、高密度の氣で火傷に似た症状になってしまうという欠点までも。

「ほ、骨を貫いていたんですかぁ！？」

「うむ。貫通した傷を調べてみたら、傷の間にあった骨も見事に貫いておったわい」
「おそらく、溢れ出るほど集約した氣を掌の点穴という、氣の集約点から撃ち出す事で、何人もの骨と肉を貫ける速さと威力を出しているのかと」

説明を聞いた諸侯達はざわめき始める。
二人の説明が本当なら、その遅効性は恐ろしいものだ。
被害も実際に出ており、絶大的な効果を及ぼしている。

「祭、あなたは出来る？　そんな攻撃」
「出来る訳なかろう。わしの氣は肉体を強化するだけで、撃つ事はできん」

孫策の質問に、黄蓋が頭を掻きながら答える。

「なら凪、あなたはどう？　あなたは氣弾が使えるはずだけど」
「……無理です。私の氣弾はあくまで殴打を目的としているので、今から貫通に切り替えると、どれだけ時間が掛かるか」

申し訳無さそうに答える楽進に、曹操も難しい表情を見せる。
楽進の氣弾が槌での殴打なら、一刀の氣弾は凄まじく強度の高い針。
あまりに性質が違いすぎて、さすがの曹操も納得せざるを得ない。

「なぁ、その話はそこまでにして、これからの事を話さないか？」

静かになった軍議会場に、西涼代表の馬超が話を切り出す。
それに乗るように、公孫賛が口を開く。

「そうだな。桃香達の軍を残すにしても、あんなに被害が出たら心

許ないよな」

当初の予定では劉備軍だけを残すつもりだったが、後になって大きな被害が出た。
こんな状態で補給線を任せるのは、誰だって不安になる。
だからと言って、別の諸侯の軍に残る理由は無い。
どこもかしこも名を挙げに来たのに、被害も無く留まっている訳にはいかないのだ。
再び沈黙が場を支配するかと思われたが、そこで孫策が口を開いた。

「なら、私の処の部下の隊を置いてあげましょうか？　それくらい良いわよね、袁術ちゃん」

自分の部下の隊を泗水関に残すと言い、一応は主の袁術に許可を求める。

「ふむ、どうするかの七乃」
「そうですねぇ。まぁ、御一人分の隊でしたら問題無いでしょうね」
「十分よ。ちょっと体調の思わしく無い子がいてね、これ以上行軍に参加させたくないの」

憂鬱そうな表情と口調で話しているが、孫策は心の中で小さくガッツポーズをした。
こうやって理由を付けておけば、堂々と穏の部隊を戦線から離脱させられる。
後は体調の件から、兵士の指揮を劉備軍の将に任せればいい。
そうすれば、一人で考える時間もたっぷり与えられる。

「まぁ、美羽さんが良いと言うのなら構いませんわ。では孫策さん、お願いしますわね」

「分かったわ。劉備ちゃん、後でちょっと相談しましょうね」
「えっ、あっ、はっ、はい……」

自軍の兵士の惨状に、これまで呆けていた劉備が慌てて返事をする。
目にも背中にも生気が無く、重石が圧し掛かっているように見える。
もっとも、あんな阿鼻叫喚な状況を見れば無理も無いが。
関節でも無い箇所が、あらゆる方向に折れ曲がり、場合によっては骨が飛び出していた。
戦場に慣れていない者が見れば、間違いなく失神するほどの惨状。
それが自軍の兵に起きているのだから、気持ちは分からなくは無い。

「とにかく、一端解散にしましょう。そろそろ日も落ちますし、お腹も空いてきましたわ」

空気を読まない袁紹の発言に、青筋を立てながらも諸侯達は自陣に帰っていった。

孫策軍

「という訳だから、穏はここに残っていなさい。彼とは戦いたくないでしょ」
「はい。ありがとうございます」

孫策の心遣いに、穏はほっとした表情で礼を言う。
敵対という関係に変わりはないが、戦場で会う事は無くなったので、安心したのだろう。

「雪蓮には珍しく、見事な采配だったな」
「ちょっと、それどういう意味よ」

「言った通りの意味だが？」

含み笑いを見せる周喩に、頬を膨らませて文句を言う孫策。
そんな二人のいつも通りのやり取りは、穏の心の内を鎮めてくれた。

（……一刀さん、もう呂布さんとは再会出来ましたか？　私とも、いつかは）

曹操軍

「欲しいわね、あの男の武力」

帰ってくるなり、いつもの癖を発揮した発現をする曹操。
一緒に軍議に参加していた秋蘭は溜め息を吐き、荀？は慌てふためく。

「か、華琳様!?　いくら武力に優れているとはいえ、男が欲しいなど」

「桂花、あなたの男嫌いは分かるけど、公私混同は止めなさい。あの男は使える、そういう公の目で見なさい」

曹操が注意を促すが、どうしても納得できない荀？は、ブツブツと愚痴る。
これは後でおしおきだと考えつつ、曹操はこの後のことが楽しみでならなかった。
今回の戦で名を挙げるだけでなく、使える人材は可能な限り手に入れる。
今のところ欲しいのは、神速の張遼、飛将軍呂布、そして呂迅と名乗った男。

（ふふふ、見てなさい。全員、私の前に屈服させてあげるわ）

荀？へのおしおきと、欲しい人材の確保に胸を躍らせる曹操だった。

劉備軍

劉備の陣営は完全に沈黙していた。

兵士のほとんどが負傷で倒れ、張飛までも戦闘不能になった。

おまけに戦線からも外され、当初の目論見は全て砕け散った。

「すみません、桃香様。我々が不甲斐無いばかりに」

「そ、そんな事はないよ。皆、頑張ったし……」

掛けるべき慰めの言葉も出てこず、再び場が沈黙する。

いかに頑張っても、結果は残せず結果を求めることも出来なくなった。

これでは何のために、連合に参加したのか分からない。

「とにかく、今は休みましょう。もうすぐ、孫策さんの処の方々が手助けに来てくれますし」

鳳統がどうにか場を締めると、動けるものは処理の指揮に向かう。

足取りは重く、まるで敗走している落ち武者のようだった。

こうして連合がさらに足止めを喰っている間に、泗水関から撤退した兵士は虎牢関に到着していた。

「なんですとぉ！　足止めのために関を燃やしたのですかぁ！？」

報告を聞いた小柄な少女、陳宮が両手を挙げて驚く。
守りの要の一つを、形勢が不利になったからといって、燃やすとは考えなかった。

「誰の指示なのです！　華雄ですか、霞ですか！？」
「はっ、呂布様の兄上、呂迅という者の指示です。張遼様からもその通りにするよう、指示を受けたので火を放ちました」

指示を聞いた兵士が正直に報告すると、どこからか足音が聞こえてきた。
その足音の主は当然。

「アニィ、どこ！」

殺気を全開にした恋だった。
陳宮が驚くより先に兵士に掴み掛かり、一刀の事を聞き出そうとする。

「れ、恋殿、落ち着いてくだされ！」
「こんの馬鹿、自分のとこの兵を殺す気か！」

止めようとした陳宮の前に割り込み、焔耶が恋を抑える。
見知らぬ人物の登場に周囲は驚くが、構わず焔耶は恋の腕を取って兵から手を放させる。

「げほっ、はぁっ、はぁっ。あ、兄上様は張遼様、華雄様と連合の足止めを」

開放された兵士が事を伝えていると、別の兵士が駆け込んでくる。

「報告！　張遼様と華雄様を発見、赤い髪の男とこちらに向かっています」
「っ！　アニィ！！」

報告を聞いた恋は、焔耶の拘束さえ力ずくで外して走り出す。
近くにいた馬に飛び乗ると、城門を開けさせて飛び出して行った。
同じように焔耶も馬に飛び乗り、急いで恋を追いかける。
二人が関と飛び出した頃、一刀達はようやく虎牢関に到着しようとしていた。

「ひぃ、ひぃ、やっぱ馬が無いとキツイわ」
「同感だ。まさか、走るとこれほど距離があったとはな」
「全くだね。ん？　関から誰か出てきたみたいだな」

一刀が関から出てきた馬に気づき、じっと目を凝らす。
段々と近づいてくる馬に乗っているのは、懐かしい赤毛の少女。
その姿を目に納めると、一刀も駆け出した。
置き去りにされた二人は、まさかと思い共に駆け出す。
一方はその足で持って走り、もう一方は馬に鞭を入れて走らせる。
やがて二人の距離は近づいていき、互いに待ち望んだ瞬間へと導いた。

「恋！」

一刀の叫びに同調するように、恋は馬から跳んで一刀に飛びつく。

「アニィ！」

飛び込んできた恋をしっかりと受け止め、存在を実感する。

何年もの時を越えた再会を堪能するように。

「アニ、アニィ」

しっかりと一刀を抱きしめながら、顔を涙でグチャグチャにする。
それに応えるように、一刀もしっかりと抱き返す。
そして一番最初に言おうと決めていた、この言葉を伝えた。

「ただいま、恋」

旅立ちの日に交わした、帰って来てただいまと言う約束。
忘れていなかった約束を果たすと、恋は涙交じりの声で返してきた。

「おがえり、おがえりなざい」

ようやく再会した兄妹の姿を、涙混じりに眺める焔耶。
恋が乗って来た馬を捕まえ、同じように涙ぐむ華雄と張遼。
こうして離れ離れの二人は再会した。
望んだ形でなくとも、互いの存在をしっかりと確かめ合いながら。

再会（後書き）

ようやく再会した二人。
だが状況は変わらず、連合は虎牢関へと進もうとしている。
果たして連合の戦は、どう動くのだろうか。

再会の虎牢関

長年の時を越え、遂に再会した兄妹。
腕に引っ付いて放れない恋を連れ添い、一同は虎牢関に入る。
すると泗水関にいた兵士が出てきて、次々に呂迅にお礼の言葉を告げる。
特に華雄隊の兵は、華雄を助けてくれてありがとうと、誰もが言っている。
恥ずかしくなった華雄に、ぶっ飛ばされそうになったが。

「ははは。賑やかな人だね、華雄さんって」
「賑やかっちゅうか、単に猪なだけやけどな」

そんな他愛ない雑談の最中に、豪快な足音と声が聞こえて来た。
音のする方を向くと、陳宮が物凄い勢いで走って来た。

「恋殿！　そのような輩に誑かされてはなりませぬ。喰らえ、必殺ちんきゅ」
「アニィを傷つけるの、許さない」

技名を言い切ることなく、蹴りを繰り出そうとした陳宮は恋に投げ飛ばされた。

「れんどのぉぉぉぉっ！？」

訳も分からず投げ飛ばされた陳宮は、運良く繁みに落ちて助かった。
恋は悪気も無く一刀の腕に再度縋り付き、満足そうに笑みを浮かべる。
そんな恋に、一刀はしっかりと注意をしておく。

「こら、理由も無く人を投げ飛ばしたら駄目だろ」
「ごめんなさい。でも、アニィを蹴ろうとしたから」

しゅんと落ち込む恋は、まるで雨の日に見つけた捨犬のようで。
これに逆らえぬ者は誰もいない。
例えそれが実の兄であっても。

「ごはっ！　ひ、久々に見たぜ。さすがは恋、破壊力抜群だ」

がっくりと膝を着く一刀に、同感だと兵士と張遼も頷く。
当の本人は分かっていないのか、不思議そうに首を傾げている。

「ほな、遊びはここまでや。アンタ達、ちょいと話聞いてくれるか？」

真剣な表情をした張遼が、一刀と焔耶に問い掛ける。
仮にも押しかけた形になったので、二人に異論は無い。
例えどんな理不尽な要求を、突きつけられても。
ところが、場所を移して自己紹介をした後に聞かされたのは、これまでの自分達の事だった。

「そうか、君達が道に迷っていた恋を」
「正確には丁原様がお救いになったのだ」
「そんで丁原おかんの事情で、今は月……董卓に仕えとるんや」

まるで苦労話でもするように、背もたれに寄りかかって話す張遼と華雄。
なんでも会ったばかりの頃の恋は、今とは比較にならないほど泣き虫だったという。

「あぁ、俺の時もそうだったよ。修行に行く日の朝なんて、まるで駄々っ子だったよ」
「そやろそやろ。そやけど、なんや逆らえない空気を醸し出してて、怒るに怒れないんよ」

苦労話が一転、思い出話に浸る一刀と張遼。
そんな取り留めのなさそうな話を止めようと、華雄が両手を叩いて口を挟む。

「思い出話はそこまでだ。それよりも、お前達は聞いているか？月様の噂を」

腕を組んだ華雄が切り出したのは、連合が組まれた最たる原因の董卓について。
普通ならば嫌悪するが、一刀と焔耶は噂だけで事を判断しないよう、しっかりと桔梗と紫苑に教え込まれた。
なので、噂は聞いたが実態は知らないと答えた。

「それで、実際にはどうなんだ？」
「噂は全部嘘っぱちや。月はなんも悪いことはしてへん」
「全ては十常侍とその配下が、裏から実権を握りたいが故の策略だ」

詳しく話を聞くと、十常侍を取り仕切る張譲の策略により、董卓が人柱に選ばれた。
汚点を全て押し付けられ、止める間も無く大陸に噂が広がってしまった。

「十常侍の方はどうにかしたんやけど、そこに連合やろ？　どうにもアカンわ」

「それに劉協様は救出し、長安に逃げて頂いたが……。劉弁陛下は亡くなられてしまった」

政権争いから戦にと、大忙しなこの頃を思い出し、張遼と華雄は大きく溜め息を吐く。

同じ仕事をしていたはずの恋は、何故二人が憂鬱そうなのか、分かっていないように首を傾げる。

「マジか。私達が旅をしている間に、そんな争いが」

「……旅していると、どうしても世間に疎くなっちゃうな」

改めて、世の情勢を知らなかったんだなと実感しながら、揃って頭を抱える。

「まぁ、その辺はえぇとして。あんたらはどうするん？　ウチらに協力するんか、それとも出て行くんか」

現実問題、そこが一番の問題となっている。

身内がいて、一度は助けた以上は協力するか。

それとも面倒な争いに巻き込まれぬよう、さっさと出て行くか。

だが、既に答えは決まっている。

「俺は可能な限りの協力をするよ。連合は俺が、君達の仲間だと思っているだろうし。それに」

隣にいる恋の肩に手を回し、自分の方にしっかりと抱き寄せる。

「もう、恋と離れたくはないからね」

正直な気持ちと微笑みを見せると、嬉しくなった恋は小動物のよう

に擦り寄る。
そんなやり取りを見ていると、この二人の仲を引き裂きたくないと、誰もが思った。
焔耶も一刀と同様に協力の意志を示すと、現状についての説明が行なわれた。
洛陽には董卓と賈駆が残り、十常侍で処分していないのは、ホンの数人だけ。
主な武将と軍師は、現在ここ虎牢関に集まっているとの事。

「なるほどなぁ。あれ？　でも、軍師ってどいつなんだ？」

ふと思った事を焔耶が口にすると、場が静寂に包まれた。
現在、虎牢関にいる軍師は陳宮ただ一人。
しかし、その陳宮は先ほど恋に投げ飛ばされたままだ。
その事をすっかり忘れていた張遼と華雄は、慌てて兵士に指示を出そうとする。
ところが指示を出す前に、扉が勢いよく開いて陳宮が現れた。
息を切らせながら、服に木の枝や木の葉をくっ付けて。

「こらぁ！　ねねを置いて行くどころか、忘れるとはどういう了見ですかぁ！」

両手を勢いよく掲げて怒鳴る陳宮に、皆が申し訳無さそうな顔をする。
今の今まで、存在を忘れていたのだから。

「す、すまんかった。つい」
「そのな、決して影が薄いという訳ではなく、純粋に忘れて」
「そっち方が性質悪いのですぅ！」

再度両手を勢いよく挙げる陳宮の姿は、まるで威嚇体勢の蟷螂（かまきり）のようだ。
ここにいる武人にとっては、威嚇にも何にもならないが。
ともかく陳宮を落ち着かせて一刀と焔耶を紹介すると、ようやく全員での話し合いが始まった。

「ともかく、状況は最悪ってことか」
「そやなぁ。せめてどっかの誰かさんが、敵の挑発に乗らんかったらなぁ」

はぐらかしているように聞こえるが、視線は華雄に向けられる。
それを察してか、心なし華雄が小さくなった。

「過ぎた事はもういいだろう。それより、ここでも籠城戦するのか？」

どうもこういった事が苦手な焔耶が、面倒そうに話を元に戻す。
確かに現状で一番の戦法は、籠城戦で相手の疲弊を待つこと。
持久戦に持ち込めば、連携に不安があり、遠征で食糧にも限りがある連合にも勝てる。
加えて虎牢関ほどの関ならば、それまでの時間を稼ぐ事も可能。

「今はそれしかないか……。洛陽の方はどうなっているの？」
「向こうは詠がおるから、大丈夫やろ。十常侍の一派は押さえとるし、心配あらへんよ」

洛陽にいる賈駆の得意分野は、情報の統制や処理、収集にある。
一度態勢を取ってしまえば、いかなる者も隠れての反抗は出来ない。
十常侍の残党も賈駆の情報網からは逃げられず、既に全員捕まっている。

「それじゃあ、当面の問題は連合だけか……」

問題は一つだけとなったが、その一つがあまりにも大きすぎる。
連合に参加しているのは、名門袁家の袁紹と袁術。
馬術に長ける西涼の馬騰の名代、馬超と馬岱。
白馬長子として名高い幽州の公孫賛。
そして後世にその名を残した、劉備、曹操、孫策。
加えて配下には関羽や夏侯姉妹、趙雲という、後の有名な武将までいる。

「まともに当たろうとすれば、間違いなく負けるのです。ここは関に籠るのが一番なのです！」

最善と言えば、確かにそれが最善の一手だろう。
予定通り籠城戦で連合を疲弊させ、内部分裂を引き起こさせる。
数では圧倒的に劣るものの、虎牢関の地形と防御力ならば十分に可能だ。

「でも、籠りっぱなしってのもなぁ。一回くらい奇襲かけないか？」
「……ちょっとだけ当たりたい」

焔耶に続いて恋も攻勢の意志を示す。
二人とも泗水関での戦闘に参加していないせいか、戦いたくて体が疼いている。

「ふむ……。当たるとすれば、相手が籠城だと思い込んでいる、出会い頭を狙うしかないのです！」

奇襲のタイミングとしては、陳宮の提示したタイミングは間違って

いない。
寧ろ、奇襲で当たるとしたらそこしかない。
後はどこの陣営が、前曲に立ってくるかだ。

「劉備軍は無いやろ。てか、さっきアンちゃんにボッコボコにされたさかい、行軍に加われんやないか？」
「私としては孫策軍に来てもらいたいものだ。あの時の借りを、すぐにでも返したいのでな」

華雄の意見はともかく、張遼の意見は間違っていない。
既に総大将からの命令で、泗水関に残る事が決まっている。
そこに穏の部隊が混じっているとは、一刀も焔耶も知らずに。

「厄介なのは曹操軍かな？　後は……どこか気になる陣営はある？」

その一刀の意見に、全員が腕を組んで考え込む。
黄巾党を壊滅させた曹操軍は確かに厄介だが、他の陣営はどうだろうか。
戦闘には参加しないであろう、劉備軍は自動的に除外される。

「やはり孫策軍が」
「それは華雄が戦いたいだけやろ。まぁ、厄介そうなんは分かるけど」

孫策といえば、江東の虎で有名な孫堅の娘。
武人としての噂は名高いだけに、華雄の思惑とは関係なく注意は必要だろう。
この辺りを除けば、後の陣営はそれほど驚異でもない。
城攻めには向いていない西涼軍と、基本に忠実だが配下に名のある将がいない公孫賛軍。

驚異となるには少々物足りない。

「他にはいなそうじゃないか？」

小さく呟いた焔耶の一言に、全員でうんうんと頷く。

「……猿は？」

「恋、猿じゃないよ。袁でしょ？　字が似ているから、間違えないようにね」

「……ん」

長い間が少し気になるが、素直に頷く姿が可愛くて、つい一刀は頭を撫でてしまう。

すると恋も気持ちが良いのか、満足そうに笑いながら一刀に擦り寄る。

「くぉらぁっ！　如何に恋殿の兄上でも、気安く恋殿に触るなです！！　ちんきゅう」

再び陳宮が蹴りを浴びせようとすると、後は先ほどの繰り返しだった。

跳び掛る陳宮を恋が受け止め、開けっ放しの窓の向こうへ放り投げた。

今回は繁みには落ちなかったが、馬用に準備して放置された藁の上に突っ込んだ。

「れぇんどのぉぉぉぉっ！？」

エコーを残しながら、窓の向こうに消えた陳宮に、張遼と華雄は手を合わせて無事を祈った。

「ちんきゅ、アニィを蹴ろうとした。だから恋、アニィを守った」
「そうかそうか、ありがとう恋。お兄ちゃんは嬉しいぞ」
ちゃんと理由を言ったお陰で、さっきのように怒られる事は無かった。
寧ろよくやったと褒められ、よりいっそう撫でられている。
というより、自分を守ってくれた事へのお礼のようだ。

「うむうむ、美しきかな兄妹愛」
「そんな事より、さっきの奴はいいのか？」
「平気やろ。さっきもピンピンしとったし」

張遼にそう言われ、先ほどのやり取りも思い出す。
繁みに投げ込まれたとはいえ、平気な顔をして戻って来ていた。

「……それもそうだな」

納得した焔耶は窓から視線を外した。

「ほな、今日はここまでにしとこうか」
「そうだね。後は夜襲に警戒しながら、しっかりと睡眠を取ろうか」

既に夜も遅いので、翌日に影響しないようにここで軍議を切り上げる。
各自が部屋に戻り、華雄は警戒のために城壁へと向かう。
後へ部屋で体を休めるのだが、一刀は少し困っていた。
なぜなら用意された部屋の前に来ても、一向に恋が離れようとしないからだ。

「恋？　早く自分の部屋に行きなさい」

部屋に行くように言うが、ふるふると首を振って否定する。
そして、何事かと焔耶と張遼が見ている前で。

「アニィと一緒に寝る」

と、爆弾発言をかましてくれた。
お陰で張遼は壁に頭をぶつけ、焔耶は扉を開けようとした手に力が入り、取っ手を握りつぶしてしまった。

「れ、恋？いくら兄妹でもそれはアカンわ」
「そうだぞ羨ましい！　私だって一緒に寝たいんだぞ！！」
「つか、アンタもかい！」

至極当然の張遼の発言に対し、欲望爆発な焔耶の発言に素早くツッコミが入る。
どういう事か理解出来ない恋は、不思議そうな顔で首を傾げる。
そして何かを考え込んだかと思えば。

「みんなで一緒に寝る」

名案を思いついたように手を叩くと、恋は原爆を投下してくれた。

『はぁぁぁっ！？』

三人揃って驚きの声を上げている間に、力ずくで恋に部屋へと引き摺り込まれる。
正気に戻ったのは、全員が一刀の部屋の寝台に乗った時だった。
一刀を中心に恋が体に腕を回してしがみ付き、焔耶はいつの間にか

右腕をしっかりと抱いていた。
張遼はくっ付いていなかったが、ポカンとして壁際に座していた。

「……なんでこうなったんだ？」
「深く考えるな、一刀。深く考えたら負けだぞ」

疑問符を浮かべる一刀に焔耶が告げ、目を閉じて眠り始める。
言いだしっぺの恋は、とっくに幸せそうな顔をして眠っている。

「アカン、もう気にせん。ウチも寝る」

そう言って張遼も諦めた表情をしながらも、ちゃっかりと一刀の左腕を抱いて横になる。

「ちょっ、何で張遼さんまで！？」
「えぇやんもう。自分の部屋行くの面倒になったわ。ちゅう訳で、お休みやアンちゃん」

そうではなくて、何故左腕を抱いて寝るのかを聞きたかった。
訳が分からぬまま、就寝の時を迎えた室内。
その中で唯一人、一刀だけは必死に理性と戦いながら眠った。
とても安らかとは言えない、苦悶の表情で。

再会の虎牢関（後書き）

再会と同時にドタバタする兄妹。
次なる戦いは、如何なる戦いとなるのだろうか。

激突寸前　虎牢関

一夜が明け、泗水関から連合軍が出発した。
負傷者の多い劉備軍と、その補佐と諸事情から穏の隊を残して。
先頭を進むのは、どういう訳か総大将のはずの袁紹。

「おっほっほっほ。ふがいない皆様に、総大将たる私の手腕をお見せしますわ」

いつものように高笑いをしながら、無駄に豪華な鎧を纏う兵を率いて行軍する。
何故、総大将の軍が先頭にいるのか、それは今朝の軍議の時だった。
どこの軍が前曲を務めるか話していたのだが、どこも乗り気ではなかった。
相手が籠城戦をすると分かっていても、前日の劉備軍の被害を見れば当然だった。
万が一、連合の数を減らすために奇襲を仕掛けてきたら。
それが頭に過ぎって、劉備軍の惨状を思い出してしまう。
しかも今度は呂布までいる。
もしもあの男と二人で奇襲されたら、無事で済まないのはすぐに分かる。
なので、どこも適当に理由を付けて前曲を拒否する。

「もう、皆さんいい加減になさい！　これではいつまで経っても、出発できませんわ」

怒って怒鳴り散らす袁紹だが、ここで曹操が動いた。

「なら麗羽、あなたが先頭に立てばいいじゃない」

「私がですか？」
「えぇ。誰もやりたがらない前曲で、総大将のあなたが活躍する。どうかしら？」

そう言われて状況を思い浮かべた袁紹は、高笑いをして自分が先頭に立つと宣言する。
普通ならば、最悪の一手だという事に気づくこともなく。
周囲で一部始終を見聞きした諸侯達は、心の中で曹操に拍手を送った。
いざとなれば、自分の部下に袁紹だけを守るよう、言いつける心構えをしながら。

「ホント、馬鹿も使いようね」
「ですが、よろしいので？　総大将の軍が倒れれば士気にも影響が」

行軍の最中、曹操は軍師の荀？と言葉を交わす。
確かに荀？の言う通り、総大将の軍に被害が出れば士気は下がる。
それどころか、総大将が最前線に出ること事態、問題がある。
普通の状態ならば。

「この際、士気はどうでもいいわ。最終的に総大将の麗羽が助かればね」
「しかし、それでは」
「今必要なのは、劉備軍のような被害を出さないようにすることよ。見て御覧なさい、兵の表情を」

曹操に言われて兵の顔を見ると、誰も彼も一安心した表情をしている。
先の劉備軍の被害は、既に連合内に広まっており、兵士達はそれに脅えていた。

特に前曲に出た袁紹軍の兵士の顔など、戦う前から真っ青になっている。
籠城戦とはいえ、万一奇襲か何かをされたら。
そんな考えが頭を過ぎるたびに、劉備軍の凄惨な状況を思い出してしまう。

「誰だって怖いものよ、あれを見ればね。余計な被害は極力出さず、兵を安心させる事が優先よ」

言われてみればそうだ。
他陣営の兵士達も、前曲を免れてほっとしている。
一刀が左右にそびえる崖を下って現れた事も忘れて。

「まぁ、あの崖を下りられるのは、あの男だけだろうけど」
「その気になれば、春蘭も出来ると思いますが」
「……否定しないわ」

様々な思惑の中、行軍は進んで行く。
その一方で泗水関に残された劉備達と穏の部隊は、どうにか泗水関を補給線として機能させていた。

「朱里ちゃん、やっぱり人手が足りない？」
「はい、少しだけ」

いかに穏の部隊が残ったとはいえ、やはり少々人手が不足している。
かといって、これ以上どこかの部隊を置いていって貰う訳にもいかない。
連合は董卓を討つために集まったのであるため、どこも馴れ合いをするつもりはない。
劉備と友人の公孫賛は残ろうとも思った。

しかし部下がいる手前、友人の為だけに軍を残すわけにはいかない。
それでも一部の兵を回してもらったため、補給線としてどうにか機能しているのだ。

「それにしても、あの男はいったい……」
「呂布の兄と言っていたではないか」
「それくらい分かっている！」

趙雲の言い方に、関羽は怒りを露にして怒鳴る。
付近にいた兵も思わず驚くほどに。

「何故、あれほどの武人の名が世に轟いていないのだ。本当に呂布の兄ならば、有名にならないはずがないだろう！」

自分と張飛をあしらい、数千の軍勢に甚大な被害を与えるほどの武人。
それだけの力を持ち、天下の飛将軍呂布の兄である人物など、これまで聞いた事が無い。
実力はともかくとして、呂布の兄という点は疑わしい。
だからと言って、とても無視できる存在ではない。

「まったくもって、謎の人物ですね」
「あわわ。どうしよう朱里ちゃん」

泣き顔の鳳統に対し、諸葛亮は腕を組んで冷静に考える。
考えた先に思い出してしまった、先ほどの兵の惨状。
あまりの凄惨さに、思わず吐き気をもよおしてしまう。

「うぷっ。ずびばぜん、ちょっと外へ」

口元を押さえて、フラフラと外へ出て行く諸葛亮。
同じく思い出した凰統も、後を追って出て行く。

「まったく、思い出しただけで嘔吐とは情けない」
「ごめん愛紗ちゃん。私も限界」

言った傍から、主であり義姉の劉備が外へ飛び出す。
どうやら頑張って我慢はしたが、とうに限界を通り越そうとしていたようだ。
心意気は買うが、君主として最後まで我慢して貰いたかった。

「桃香様……」

がっくりと肩を落として溜め息を吐く。
いくら性格的な問題があるとはいえ、君主がこの程度で嘔吐とは情けなく思う。

「桃香お姉ちゃんは、もっとしっかりするべきなのだ」
「うむ。鈴々の言う通りだな」

包帯だらけの張飛の言い分に、趙雲も同意する。
本当の事なので関羽も反論できず、ただ溜め息を吐いた。
そんな劉備軍の支援をしながらも、体調不良という名目で残った穏は天幕で横になっていた。

「一刀さん……はぁ」

敵の立場で同じ戦場に現れた想い人。
会う事は叶わなかったが、寧ろそれでよかった。
心の整理も何もせずに会っていたら、どうなっていただろうか。

おそらく、再会の嬉しさと、敵になった悲しみで壊れそうになるだろう。
実際にそうなるかは分からないが、穏自身はそう思っている。

「どうするべきなんでしょうかねぇ、私は」

一刀のためだけに連合を、ひいては孫策の下を離れる事はできない。
かといって、敵対したい訳でもない。
現状ではこうして、補給線の守りとして最前線に出ないのが、考えられる最良の一手。

「とにかく、今は結果を待ちましょうかぁ。雪蓮様が上手く引き入れてくれれば、万々歳なんですけど」

前線を外れた者にできるのは、ただ待つことだけ。
穏としては、孫策が味方に引き入れてくれればと思うが、そう都合良く行くわけがない。
軍師としての性(さが)か、ついつい最悪の事態が頭に浮かんでしまう。
それを振り払うように頭を振ると、両手を組んで可能な限り良い結果になるように祈った。
一方その頃、当の一刀達はというと。

「……大丈夫か？」
「なんとか」

色々あって寝不足な一刀を、事情を知らない華雄が心配している。
原因の三名は反省の意味を籠めて、籠城戦の準備を率先してやっている。
なので、一刀と華雄は城壁の上で見張りをしている。
なお、昨日の軍議中に投げ飛ばされた陳宮は、翌朝には平気な顔を

して現れ、現在は全体の指揮を執っている。

「しっかりしてくれよ。お前がいるだけで、連合にとっては驚異なんだからな」

「それは分かっているよ。だから華雄も、泗水関みたいに暴走しないでね」

「ぐっ……分かっている」

痛いところを突かれ、素直に了解の返事をする。

前回の失敗が、骨身に染みて分かっているようだ。

するとそこへ、準備を終えた恋がやって来た。

「アニィ、準備終わった。構って」

そう言って座っている一刀の膝の上に座る。

まるで幼い娘が、父親の膝の上に座る感覚で。

「ちょっ、待っ、構ってと言われても」

突然の事に慌てる一刀の顔を、膝に座った状態から不思議そうに見上げる。

そして何を思ったのか、向き合うように座ってしっかりと抱きついた。

「構って」

上目遣いで恋にこう言われて、萌えない者は皆無だった。

言われた一刀は精神的にとてつもないダメージを受けると、構いますと言って抱き返した。

他人の振りをしようとした華雄でさえ、恋の精神攻撃に思わず見と

れてしまう。

「恋、なんて恐ろしい子なんや」

「それ、使いどころが微妙に違う気がするんだが？」

恋同様に準備を終えた張遼と焔耶も戻って来たが、目の前は混沌としていた。

甘え全開で縋り付く恋を、兄馬鹿全開の一刀が受け止め、それを見て華雄が呆けていた。

一部始終を見ていた二人にさえ、どこか近づき難い空気がそこにあった。

するとそこへ、小さな台風が昨夜に続いて三度目のアタックを仕掛けて来た。

「くおぅらぁぁぁ！　ねねに仕事をさせておきながら、恋殿と抱き合っているなど許しませんぞ。必殺、ちんきゅう」

しかし歴史は繰り返された。

さも当たり前のように。

「ちんきゅ、邪魔」

蹴り足を恋に掴まれて、その辺に生えていた木の中へと放り込まれた。

「恋ど、ぶぎゃぁぁっ！？」

バキバキと音を立てながら、陳宮の体は木の中へと消えた。

おそらく、どこかの枝に引っ掛かっているのだろう。

いつまで経っても、落ちてくる気配が無い。

「助けに行くか？」
「そやな、今回はさすがに戦前やからな」
戦を前に軍師に抜けられてはと、急いで二人が助けに行く。
兄を守ったと言って褒められている恋と、妹には盲目的な一刀を残して。
華雄は正気に戻す意味を兼ね、力ずくで連れて行ったが。
救出した陳宮は目を回していたが、特に異常は見受けられなかった。
見た目の割に、意外と丈夫な体をしている。

「こいつ、武の心得は？」
「あらへんよ、素質はちぃっとだけありそうやけどな」

張遼が陳宮を背中におぶさり、焔耶が華雄を引き摺っていく。
まだ正気に戻っていない華雄だったが、引き摺られて尻が熱くなり、ようやく意識が帰ってきた。

「熱っ、痛っ、尻が、尻があぁぁぁっ！」

目が覚めると同時に尻を押さえて痛がる姿に、思わず吹き出す張遼と焔耶。
よく見れば、引き摺ったせいで尻の辺りが破れていた。
それに気付いた華雄が二人を追いかけるのだが、尻を丸出しにしている処を多くの兵に見られてしまった。

「なるほど、それで華雄はあんな事に」

追いかけっこが終わった後に、城壁で合流して連合の到着を待つ。
その中で、大勢の兵に尻を見られて落ち込んでいる華雄は、隅っこ

で小さくなっている。
猛将という二つ名に反する、さめざめとした空気を纏いながら。
ちなみに服はちゃんと着替えてきた。

「もう、嫁に行けない。ふふふ、そもそもこんな私に嫁の宛など、始めからないよな、ふふふふふ」
「……ちょっと壊れてない？」
「大丈夫やろ。華雄のこっちゃ、戦が始まればすぐに元通りになるで」

そう言われても、あの様子では無理じゃないかと思う。
ところがどっこい。

「連合が接近してきます！」
「よし、先陣はどこだ？　孫策か？　孫策以外は認めん！」

落ち込んでいたのが嘘のように、張り切りだした。

「な、言ったやろ」
「……マジで？」

ここまで単純でいいのかと思いつつも、戦が始まるとなれば些細な問題。
すぐに城壁から、連合の様子を確認する。
前曲はどこなのか見てみると、全員開いた口が塞がらなかった。

「猿……」
「だから恋、あれは猿じゃなくて袁。分かる？」
「……ん？」

分かろうとしたようだが、分からなかったようだ。
疑問符を付けられてもなと、さすがに一刀も苦笑いを浮かべる。

「ともかく、先頭が袁紹なら都合がいいのです。予定通り、一当たりできる相手なのです！」

いつの間にか目を覚ましていた陳宮が、作戦の指示を出し始めた。
先の戦闘で勢いが低下している連合に仕掛け、さらに戦意を奪おうという策。
当たるのは僅かの間、銅鑼が鳴ったらどんな状況でも戻ること。
一刀は恋の希望で一緒の部隊となり、焔耶は華雄の押さえ役で出陣するなど、あっという間に話が進む。

「おそらく、手柄が欲しいのか誰かに持ち上げられたのか、総大将が先陣なのです。これは一回きりの先手を取れる好機。逃す訳にはいかないのです！」

なんだかんだ言っても、さすがは軍師。
状況をしっかりと理解しながら、的確な指示を出していく。

「陳宮様、出陣準備が整いました」
「よし、出陣なのです！」

出陣前の全部隊を前に、陳宮が号令を掛ける。
左翼に張遼、右翼に華雄と焔耶、正面には一刀と恋が配備される。
正面から突撃を掛ける予定の一刀と恋が並ぶ姿に、兵士は頼もしさを感じる。
この二人がいれば、なんでもできる気がする。
そんな勇気が全部隊に広がっていく。

「よっしゃぁっ、行くでぇ！」

飛龍偃月刀(ひりゅうえんげつとう)を掲げ、張遼は部隊の先頭に立つ。

「皆の者、気合を入れて行くぞ！」

「あまり熱くなりすぎるなよ。押さえ役の私が大変だからな」

同様に華雄も金剛爆斧(こんごうばくふ)を構えて、自身の部隊の先頭に向かう。

押さえ役を命じられた焔耶は、憂鬱そうに鈍砕骨(どんさいこつ)を肩に乗せる。

「……潰す」

「さて、もう一泡吹かせてこようか」

初めて兄妹での共闘をする一刀と恋。

恋の方天画戟(ほうてんがげき)と、一刀の紅蓮と鮮紅が日を浴びて輝く。

出陣の合図と共に城門は開かれ、戦闘は開始された。

「全軍、出陣！」

激突寸前　虎牢関（後書き）

遂に激突する董卓軍と連合軍。
最初で最後の先手のチャンスを、董卓軍は活かせるだろうか。

ビクビクと脅えながら、しきりに周囲を見渡して進む袁紹軍の兵士達。
近づいていく虎牢関の城門が開かないだろうか、また崖の上に誰かいないか。
慎重すぎるほど警戒して歩を進めている。
そんな事とは露知らず、袁紹は高笑いをしている。

「おっほっほっほっほっ、ちゃっちゃと虎牢関を落としますわよ」

無茶言うなと周囲の誰もが思った、その時だった。
銅鑼の音と共に城門が開き、董卓軍が飛び出してきた。
城門が開いた瞬間に袁紹軍の兵士の顔が青ざめ、最後尾の方は早くも逃げ出している。
先頭を歩いていた兵は既に諦め、壊れたように半笑いを浮かべている。

「あらあら、董卓軍は籠城という言葉を知らないのでしょうかね？」

そういう袁紹は空気という言葉を知らない。
味方が阿鼻叫喚寸前だというのに、逃げる気も負ける気も持っていない。
傍に控える文醜と顔良の二枚看板以外は。

「ととと、斗詩ぃ！」
「落ち着いて文ちゃん、とにかく麗羽様だけでも守ろう！」

連合側が大混乱を起こす一方、一回きりの先手のチャンスに動いた

董卓軍側は。

「いいね、俺が言った事を忘れるなよ」
『応っ！』
「ん……」

何かを確認すると、真紅の呂旗を掲げる軍勢が袁紹軍に突撃する。
同様に右翼に華雄と焔耶の隊、左翼に張遼の隊が激突した。

「どうりゃぁぁっ！」

怒涛一閃の如く、神速の刃が人波をぶち破る。
始めから逃げ腰の袁紹軍の兵士を、容赦なく叩きのめす。

「はっはっはっ！　なんや、歯ごたえ無いなぁ。これなら呂迅の指示通りの作戦、思ったより大変やないかもな！」

近くにいた兵士を蹴飛ばしながら、目の前にいる三人の太ももを斬って転ばせる。
そのまま踏みつけて前へ進み、背を向けている兵にも容赦なく斬りかかる。
右翼の華雄と焔耶達は、速さではなく勢いと力で押し進む。

「ふん……ぬりゃあぁぁっ！！」

低い体勢から力任せに鈍砕骨を振り抜き、周囲に居る敵兵の足を払う。
払うといっても、鈍砕骨の名の通り、足を刈られた敵兵の足の骨はただではすまない。
普通に折れているのはマシな方、中には見事に粉砕骨折している者

もいる。

「やるではないか、私も負けておれんな！」

そう言って金剛爆斧を振り上げる姿に、慌てて焔耶が止めに入る。

「おい、一刀が言った事を忘れたのか！」

「おっと、そうだった。しかしだな」

「しかしもかかしもない。実際有効な手段なんだから、使わない手はないだろう」

しっかりと言い聞かせると、焔耶は背後に迫っていた矢を紙一重で避ける。

後方を確認してすかさず走り出し、矢を放った敵兵達の腕を鈍砕骨でへし折った。

「くっ、仕方がない。前の事もあるし、従っておくか」

珍しく自分から折れた華雄は、取り敢えずその辺にいた敵兵の脇腹を斬りつけ、顔面を殴っておく。

よしっ、と呟いて次の標的に向けて走り出した。

そして最強の兄妹は。

「……邪魔」

台風のような勢いで敵陣を駆け抜ける恋。

近くにいてしまったが最後、逃れられる者はいない。

全く相手にもされず、一蹴されて地面に転がる。

「無駄無駄無駄ぁ！」

こちらは竜巻のように、敵兵を薙ぎ払いながら進む一刀。
ヤケクソで剣を振り下ろしても、あっさり避けられて足場に利用される。
敵兵を踏み台にして跳び上がった一刀は、紅蓮で突き出された槍を弾いて顔面を蹴飛ばす。
後方から飛んできた矢を鮮紅で叩き落とし、着地と同時に矢が飛んできた方向に通常の氣弾を放って吹っ飛ばす。

「うわぁぁっ。あ、あいつが出たぞ！」
「逃げろ、逃げろぉ！」

味方がやられているにも関わらず、一刀の姿を見るや逃げ出す輩もいる。
そんな奴は気にせず、ただ目の前にいる敵兵だけを的確に倒していく。

「恋、話には聞いたけど本当に強くなったんだな」
「……アニィほどじゃない」

フルフルと首を振り、兄妹で背中合わせになって敵を見据える。
どいつもこいつも逃げ腰になるか、逃げ出すかで向かって行く気迫も気配も見えない。
泗水関での戦闘の印象が、あまりにも強すぎたせいだ。
だが、一刀と恋には知った事では無い。

「いくよ、恋！」
「ん！」

同時に駆け出して目の前の相手の脚を傷つけ、体勢が倒れる瞬間に

首を掴んで後ろに放り投げる。
背中合わせの状態から互いに投げたので、投げ飛ばした相手同士が空中でぶつかる。
それから何度も同じ事を繰り返し、やがて人が積み重ねられた山が完成した。

「恋、言いつけは守っているか？」
「大丈夫。ちゃんとやってる」

山を築き上げた二人は合流し、すぐに敵本陣目指して駆け抜ける。
姿を見ただけで逃げ出す者が多いので、案外楽に進めている。
基本的に自分勝手な袁紹に仕えてはいるが、それほど忠誠心は高くない。
だからすぐに逃げ出すことができる。
大して忠誠心を持っていない主より、自分の命を守るために。
しかし、決して逃げ出す者ばかりではない。

「ここから先は通しません！」
「アタイらが相手になるぜ！」

立ち塞がるのは袁家の二枚看板の文醜と顔良。
恋は文醜の斬撃を受け止め、一刀は顔良の一撃を屈んで避ける。

「お前、弱い」

受け止めた斬山刀（ざんざんとう）を押し返し、反撃に移る。
力負けして構え直す隙に接近、方天画戟を突き出し、振り下ろし、薙ぎ払う。
弱いと言われた事に反論したい文醜だが、攻撃の速さと重さに捌くので精一杯になる。

「くっ、こいつ強すぎ」

一方の顔良も焦っていた。
どんなに金光鉄槌（きんこうてっつい）を振り抜こうが、振り下ろそうが、その全てを避けられている。

「このっ、このぉ！」
「ほらほら、力が入りすぎ。もっと肩の力を抜かないとね！」
「きゃっ！」

地面に振り下ろした金光鉄槌を避け、足場代わりに着地して握っている手を蹴飛ばす。
痛さに手を放したところへ、紅蓮を真上に放り投げて空いた右の掌打を胸元に叩き込まれる。
しりもちを付いている間に紅蓮を逆手にキャッチし、屈んだ体勢になって周囲の敵兵を一閃する。
太ももや膝を斬られた兵は地面に倒れ、誰一人として起き上がれなくなった。

「くっ、まだ負けていませ」
「いや、少なくとも君達はこれで負けだよ」

どうにか起き上がった顔良が最後まで言い切る前に、鮮紅を真上に投げて下顎を左の手刀で叩く。
この一撃で激しく脳を揺さぶられた顔良は、そのまま倒れて動けなくなった。
落ちてきた紅蓮を逆手に受け止めると、恋の方を向いて状況を確認する。

「そっちも終わったみたいだね」

無傷の恋の足下には、罅が入った斬山刀が地面に突き刺さっていた。
その傍らには仰向けで文醜が倒れており、出血している右肩を押さえていた。

「次は……猿」

「だから袁……いや、もういいや」

三度目で遂に教えるのを諦めた一刀は、苦笑いをして額に手を当てる。
一回大きく溜め息を吐きながら、背後からこっそりと近づく敵兵に向けて、足元の矢を素早く拾って投げつける。
矢が左肩に刺さった敵兵は傷を抑えて蹲った。

「さて、時間までもう少しある。恋、もう一暴れしようか」

「ん、頑張る」

「よし、行くぞ！」

こくりと頷く恋と共に再度突撃を仕掛ける。
後には二人が切り開いた道を進む、董卓軍の兵士が続く。
両翼からも焔耶達が先頭に立って道を開き、続々と袁紹軍の中へと入り込んでいく。
混乱する袁紹軍は逃げ惑うばかりで、応戦する姿勢すら見せない。
それを後方から見詰める曹操は部下に命令を出す。

「これ以上は無理ね。春蘭、秋蘭、凪。麗羽を助けてきなさい。あわよくば、呂布とあの男は捕縛しなさい」

『はっ！』

命令を受けた三人が駆けて行く姿を見送りながら、曹操は一人楽しそうだった。
なんとしても呂布とあの男を手にしたいがために。
同様に孫策も動きを見せた。

「祭、思春、すぐに前の方に行って。それと、できれば穏の事を彼に」
『御意』

返事をした二人の後姿を眺めながら、孫策は嫌な予感を覚えた。
普段から勘が鋭いだけに、嫌な予感がするのは不安でならない。
できればこの予感だけは、当たって欲しくないと願う孫策だった。

「何を逃げていますの！　あんな無頼な輩から逃げるなど、それでも私の部下なんですの？」

好き勝手言っている袁紹の言葉にも耳を傾けず、周りの兵士は次から次に逃げていく。
その姿にもう一度怒鳴ろうとした時、前方で轟音と共に土煙が巻き上がった。

「な、なんですの？」

驚いて正面を向くと、痛みで蹲る兵の中に二人の人物が立っていた。
一方は紅蓮の炎の如く修羅と化した飛将軍、呂布。
もう一方は鮮紅の如く煌く氣を纏った武人、呂迅。
二人の兄妹を前に、兵士達は金縛りにあったように動けないでいる。

「……見つけた」
「彼女が袁紹か。その首、もらったぁ！」

土煙の中を突き抜けて袁紹の姿を視認すると、すかさず一刀は通常の氣弾を放つ。
このままいけば、額を直撃するはずだった。
横から別の氣弾が飛んで来なければ。

「はぁっ！」

気合いの籠った声と同時に飛んできた別の氣弾が、一刀の氣弾とぶつかって相殺する。
氣弾が飛んできた方向を見ると、構えを取る銀髪の少女と、剣を構える黒髪の女性がいた。
もう一人、水色の髪の女性もいたが、そちらは警戒しながら袁紹の方へ走っていく。
曹操の命令通り、総大将を守るために。

「我が名は曹操軍が将の一人、夏侯惇。呂布よ、貴様の相手はこの私だ」
「同じく楽進。同じ氣の使い手として、そこの男に勝負を申し込む！」

強い気迫を見せながら構える夏侯惇と楽進に、一刀と恋は武人として心惹かれた。
逃げ腰の兵ばかり相手にしていたので、こうして挑む姿勢を見せられては乗らない手はない。
矛先を袁紹から夏侯惇に向ける恋。
紅蓮と鮮紅を後ろ腰に収め、素手での構えを取る一刀。

「その勝負、買った」
「ならば、何故武器を収めるのですか？」

「安心しろ、馬鹿にしている訳じゃない。対等な条件で戦いたいのと、俺は素手でも強いからだ！」

先手を仕掛けたのは一刀だった。
素早く駆け出して接近し、楽進の右拳を左手で軽く弾き、今度は自分が右拳を繰り出す。
咄嗟に閻王（えんおう）で受け止めたが、ぶつかった拳の衝撃で左腕が痺れる。
痺れと痛みに歯を食い縛って耐え、迎撃とばかりに再度右拳を突き出す。

（へぇっ）

それを後ろに下がって避け、距離を取って対峙する。

「やるねぇ、退くどころか逆に反撃する。実力はまだまだだけど、その意気や良し！」
「くっ！」

少しは手応えのありそうな相手の出現に、一刀は氣を纏って戦いに挑む。
それに応えるかのように楽進も全身に氣を纏い、応戦する構えを取る。
一方の恋と夏侯惇は。

「でえぇぇい！」
「……悪くない」

気合い一閃とばかりに放たれた夏侯惇の斬撃を、受け止めて逆に弾き返す。

「今度は恋の番」

隙が出来た胴体に方天画戟を数度突き出す。

「くっ」

素早く重い攻撃に七星餓狼（しちせいがろう）から金属音が響き渡り、今にも壊れそうな悲鳴を上げる。

どうにか反撃しようと距離を取ろうとするが、一方的に攻める恋がすぐさま詰め寄る。

離れるのは一瞬だが、攻撃されるのはしばらく続く。

「お前……弱い」

「なんっ……ぐうっ！」

つまらなそうな表情で今日一番の一撃を繰り出すと、夏侯惇の体は吹っ飛んで地面を転がる。

息を切らせながら立ち上がろうとすると、隣に何かが転がって来た。

そちらに目をやると、傷だらけで息が上がっている楽進が倒れていた。

「凪！」

慌てて体を起こしてやるが、既に楽進には起き上がろうとする気力も無い。

「しゅ……ん蘭さ……申し……訳。かなわ……な」

「いい、喋るな！」

とりあえず意識はあるが、その姿は正にボロボロだった。

曹操軍でも五本の指に入る強さを持っている楽進が、こんな僅かの間に負けた。
それはつまり、一刀の圧倒的勝利を示していた。

「なかなか良かったよ。どんなに攻撃されても引かず、最後の一撃まで戦う意思を見せた。その子はきっと強くなる」

いつの間にか歩み寄っていた一刀に敵意を向け、七星餓狼を切っ先を向ける。
だが対峙して間もなく、夏侯惇は感じ取った。
睨み合っているだけにも関わらず、目の前の相手は相当の腕前だと。
一流の武人なら感じ取れる空気が、自分と相手との差を示していた。
どうにかしようと考えるが、背後にも恋が現れ、完全に挟まれてしまった。
もはやここまでかと思った瞬間、虎牢関から銅鑼の音が鳴り響いた。

「ここまでか。恋、引くぞ」
「ん」

撤退の銅鑼の音を聞いた一刀と恋は、それ以上は何もせずに引き上げた。
最後まで警戒心を張っていた夏侯惇は、二人の背中が見えなくなるとほっと息を吐いた。

「はぁっ、はぁっ。この私が気後れするなど。くそっ！」

悔しそうに地面を殴る夏侯惇の心の中に、次は負けないという強い想いが宿った。
その一方で別の意味で悔しがる姿もあった。

「間に合わんかったか。こりゃ策殿に叱られるやもしれぬのぉ」
「……祭様が勘で行く方向を言わなければ」
「分かっとるわい！　わしが全部悪かった！！」

自分の非を認める黄蓋に、深い溜め息を吐く甘寧。
二人はこの後、自陣に戻って報告をすると。
悪い予感が当たったわという、孫策の呟きを耳にした。
その一方で虎牢関では、予定通り全員が帰ってきていた。

「皆、言いつけ通りにちゃんと戻ってきたね」

当然と言ってのける張遼。
もう少し暴れたかったと言っている華雄に、焔耶はやめてくれと呟く。
よほど抑えるのが大変だったのだろう。

「ともかく、無事に帰ってきたのなら、この後は徹底して籠城しますぞ！」

陳宮がそう締めくくった時だった。
洛陽からの早馬がやってきたのは。

「大変です将軍方、一大事です！」

早馬に乗ってきた兵士が、血相を変えて走ってくる。
一大事という言葉に誰もが反応し、表情を引き締める。
いったい、何が起きたというのか。

呂兄妹幕進（後書き）

見事奇襲は成功した。
しかしそこに飛び込んできた一報。
それが戦況をどう変えてしまうのだろうか。

両軍の制限時間

作戦成功と喜ぶ虎牢関に飛び込んできた、洛陽からの使者。
一大事が起きたと言っているが、いったい何が起きたのだろうか。

「董卓様の下に長安から書が届き、劉協様を助けたければ全将軍と軍師を洛陽に撤退させよと！」

伝えられた内容に、兵士達の間に動揺が走る。
軍師である陳宮でさえも、信じられないような顔をしている。

「ちょい待ち、どういうこっちゃ！」
「どうやら劉協様を長安に送る際につけた護衛の中に、十常侍の残党が紛れ込んでいたようです」

つまり劉協は十常侍の手の内にあるという事だ。
いかに賈駆の情報網でも、展開する前に動かれた為に気付かなかった。
そして残党共は劉協を死なせたくなければ、恋、張遼、華雄、陳宮を洛陽に撤退させるよう要求してきた。
全軍を撤退させないのは、仲間を見殺しにさせると同時に、虎牢関で兵の数を減らす狙いがあるのだろう。

「私達に撤退しろだと？　兵士は見殺しにしろというのか！」

如何に強固な虎牢関であろうと、兵だけで連合を止められる可能性は低い。
痛い打撃は与えたが、この先は徹底した籠城戦。
守るというと簡単そうに聞こえるが、実際はそうではない。

常に後手の状態で、敵の攻撃を受け止めなければならないのだから。
そこに軍師や将軍の力が加わって、始めて連合ほどの相手でも押さえる事が可能となる。
しかしその軍師や将軍がいなくなるという事は、プロとアマチュアのガチンコ勝負で、プロが先手を打つようなものだ。

「うぬぬぬ。あの馬鹿共め、この土壇場でやってくれたのです！」
「……月、悲しむ」

洛陽に移ってから、何かと劉弁と劉協には良くしてもらった。
聡明で優しい心を持つ兄、劉弁に洛陽でのしきたりや儀礼の席での振る舞い方を教わった。
常に笑顔を絶やさぬ妹、劉協には城の中を案内してもらい、気楽に声を掛けてもらっていた。
そんな仲の良かった劉弁が死に、今度は劉協にも危機が迫っている。
どうするべきかと全員が悩んでいる時だった。
焔耶がある事に気付いた。

「ちょっと待ってくれ。今の内容だと、私と一刀の事は向こうに知られていないんだよな？」
『……あっ』

言われてみればそうだ。
洛陽に戻るように言われたのは、恋と張遼、華雄に陳宮の四人。
一刀と焔耶は途中乱入した為に知らないのか、名前を挙げられていない。

「ならば都合がいい。お前達がここの指揮を」
「それは無理だと思うのです」

ここを二人に任せようという華雄の意見に、横から陳宮が割り込んで否定する。

「なんでや？　他に適任はおらんやろ」

「確かにそうですが、時間が経てば呂迅殿と魏延殿の存在もバレるのです」

「なら……どうする？」

存在がバレる事無く、連合を止める事は難しい。

だができる事が一つだけある。

「呂迅殿と魏延殿には、長安へ行って劉協様を助けてもらうのです。それまで持ちこたえれば、勝機はありますぞ！」

陳宮の提案した策に誰もが驚いた。

確かに見知らぬ一刀と焔耶ならば、旅人を装って長安に入る事も可能。

後は上手く劉協を救出し、それまでの間を持ちこたえれば、まだ勝機はある。

一番の勝機である今を逃すのは痛いが、方法はこれしかない。

「最悪、洛陽で押し止められればいいのですが、虎牢関でも可能な限り粘るのです！」

『はっ！』

「ねね達は向こうの要求通り、すぐに洛陽に戻るのです」

「ちっ、言いなりになるのは癪だが、陛下の命のためならば仕方ない」

舌打ちを打つ華雄同様、張遼も恋もできれば戻りたくない。

しかしそうもいかないので、悔しそうに洛陽に戻る準備を始める。

一方の一刀と焔耶は、たった二人で救出作戦を決行するとあって、少し緊張気味だった。
虎牢関で少しでも長く時間を稼ぐため、兵は一人たりとて割けない現状。
先の戦闘で一刀の策が成功していれば、相当の時間を稼げるはずだ。

「アニィ……」

出発の準備をしていると、寂しそうな恋が歩み寄ってくる。
せっかく再会したのに、また離れ離れになるのかと不安な表情で。

「大丈夫、きっとまた戻ってくる。今度は劉協陛下も一緒にね。そして、恋を助けに行く」

頭を撫でながらとびっきりの笑顔を見せると、渋々ながら恋は頷いた。
そしてしばしの別れを惜しむように、しっかりと抱擁すると、すぐさま行動に移る。

「えぇか、お前等しっかりきばりや！」
「後は任せたぞ」
「アニィ、負けないで」
「陛下の事、頼んだのですぞ！」

馬に跨った四人は悔しそうに洛陽へ引き上げる。
それを関の外で見張っていた、十常侍の遣いがその場を離れると、一刀達も動き出す。

「よし、今のうちだ」
「それじゃあ、気をつけてね。これ、即席だけどいくつか策を書い

てあるから」

出発する前に一本の巻き物を手渡すと、一刀と焔耶は自身の馬に跨って出発した。
それを見送る兵士達は、ここから先は自分達が踏ん張る番だと気合いを入れる。
各隊の隊長を中心に、籠城戦のための準備に動き出した。
一方その頃、連合側では。

「死者が……いない？」
「はっ。袁紹軍の被害を調べたところ、負傷者は大勢いるのですが、死者は一人とていません」

被害を調べさせた荀？からの報告に、首を傾げる曹操。
あれだけ激しい戦闘だったのに、死者が一人もいないのは不自然。
それ以前に、死者のいない戦場というもの自体がありえない。
考えられるのは一つ。

「意図的に殺さなかった、とでもいうの？」

怪訝な表情での呟きに、周囲にいる将もざわめく。
戦場で意図的に敵を殺さない理由が分からないからだ。
普通は一人でも多く殺して、動ける者を減らそうとする。
それが当然という考えゆえに。

「そんなはずはないですよ、華琳様。単に奴らが詰めを誤っただけで」
「その程度の武で将になるはずがないでしょう。これはきっと、何かあるわ」

腕を組んで考え込むが、まるで理由が理解できない。
しばらく全員で考えていると、外から兵士の声が聞こえた。

「おい、もうちょっと人数回してくれ。負傷兵の手当てが間に合わないんだ」
「そう言われても、攻城戦の準備もあるし。そもそも余所の軍じゃないか」

そんな他愛も無い会話だが、これが解決の糸口になった。
曹操に荀?、夏侯淵が今の会話をヒントに、何故死者がいないのかを理解した。

「そうよ、そうじゃない！　死人は捨て置けるけど、怪我人には誰かしら付くわ」
「そうなれば怪我をしている訳でもないのに、戦闘に参加できない者が多数出るわ」
「殺せば一人減らすだけですが、負傷なら怪我人とそれを救助する者、二名が戦場から削れます」

荀?の叫びに続いて曹操と夏侯淵が補足する。
戦場で一番効率よく敵の数を減らす方法は、殺す事ではなく負傷させること。
死人は捨て置けるが、怪我人はまだ生きている。
当然それを助けるため、誰かしら怪我人の下にいることになる。
特に今回の戦では、連合の方が圧倒的に数では勝っている。
それを一人一人殺していては埒があかないが、怪我をさせて、無傷の兵にその世話をさせたら戦う人数は減る。

「くっ！　やられたわ。そうよ、考えてみれば、泗水関でも同じような手を使ったんじゃない！」

泗水関では劉備軍に怪我人を大勢出して、その世話と補給線のために穏の部隊が戦列を離れた。
加えて公孫賛も兵を回したので、結果として一軍と二隊が戦線離脱した。
補給線の確保と怪我人の世話という名目で気付かなかったが、相手は同じ事を既に実行していた。

「呂迅という男の出現と、劉備軍の有様が隠れ蓑になっていたのね」
「なるほど、やるわね。虎牢関にいる軍師、確か陳宮だったかしら。興味が出てきたわ」

本当は一刀の策なのだが、曹操は誤って陳宮の策と判断した。
最も、普通はこういった事は普通、軍師が考えるものなので仕方ない。
一方の孫策軍でも同じような話が出ていたが、こちらは陳宮の策とは思っていない。

「穏に聞いていた話どおりなら、呂迅とやらの参戦は完全な想定外だ」

泗水関で別れる前に聞き出した情報を下に考えると、一刀の参戦は突発的なもの。
計画した訳でもない、完全な想定外と判断した。

「現れた際の状況、泗水関での戦い。間違いなく、そうだと判断できる」
「それじゃあ、さっきの戦闘は泗水関での戦いの流れを、そのまま利用していたってこと？」
「そういう事になるな」

孫策と周瑜が言葉を交わし、周囲に控える面々も内容を理解する。

「厄介ですね。動ける兵がいるのに、動かす事ができないとは」

「あうぅ……まさか、戦場で敵の数を減らす手段に、こんな方法があったなんて」

この場にいる孫策軍で、最年少コンビの周泰と呂蒙も話に加わる。

軍師見習いとして参加している呂蒙は、予想外の策とその効果に驚いている。

だがそれだけではない。

「甘いぞ、亜莎。この策には、もう一つの狙い目がある。何だと思う？」

もう一つの狙い目は何かと聞かれても、はっきり言って答えようがない。

策そのものの有効性さえ読みきれなかったのに、さらに先にある目的を問われても困る。

居眠りの最中、突然問題を解くように言われた生徒のように頭の中が慌てている。

そんな状態で答えが出るはずも無く、あっけなく降参した。

「うぅ、すみません。分からないです」

半分泣きそうになりながら、白旗を揚げる。

まだまだだなと呟き、少しずつヒントを与える。

「亜莎、お前は兵糧の量をどうやって決める？」

「兵糧の量ですか？　えっと、出陣する軍の人数と、掛かるであろ

う日程、それと」
「それと？」
「どれだけ被害が出るかを考慮して決めます」
まだ足りない部分もあるが、概ね間違ってはいない。
「まぁ、そんな処だな。なら亜莎、もしも被害が予想より出なかったらどうなる？」
「えぇっと、計算より多く兵糧を消費するので、予想より早く兵糧を消費し……あぁっ！？」
ここでようやく、もう一つの狙いに気付くことができた。
問答を聞いていた孫策や黄蓋達も。
「その通りだ。怪我人はいるが死者がいない、という事はそういう事に繋がる」
「死人は食事を摂りませんけど、怪我人は食事を摂りますものね」
「そうなると、どこも兵糧の減りが予想以上に早くなります」
普通は籠城している側に仕掛けるはずの、兵糧攻め。
ところが逆に、攻城している自分達が兵糧攻めを受けている。
そうなると、早めに補給をどうにかしたい。
「だからといって、補給線の泗水関には怪我人だらけの劉備軍がいる」
「補給したくとも、思うように進まないでしょうね」
「人を割けばどうにかなるじゃろうが、これ以上割いたら戦線の維持が難しいぞ」
溜め息を吐く周瑜に、腕を組んだ孫策と頭を掻く黄蓋が続く。

穏から話を聞いていなければ、泗水関の戦いから罠に掛かっていたと錯覚する今回の策。
どこかの軍を大勢負傷させ、泗水関は自ら焼却。
そうすることで、負傷者のいる軍を泗水関に釘付けにした。
同時に別の軍から補給線の維持と救護の人員を出させ、戦線に出られる人員の数を減らす。
負傷兵の有様と乱入者に意識が向いているうちに、今度は別の軍に負傷者を出させる。
その世話に人員が削られて、なおかつ死人がいないので兵糧は予想より早く消費される。
補給線は怪我人だらけなので上手く機能しきれず、消費の早さは止まらない。
そこで更に人員を泗水関の補給線維持に回せば、なお戦線に出られる人員が減る。
そうして戦線での人員が減っていけば、董卓軍との数の差はどんどん無くなっていく。
結果的に、負の連鎖反応が止まらないという事だ。

「なんと一癖も二癖もある策だ。搦め手にもほどがあるぞ」

虎牢関での奇襲は読んでいたが、ここまで深くは読めなかった。
策を喰らって始めて気付いた、癖のあるこの策。
数を減らすのではなく、戦線に出させず、さらに兵糧攻めをする戦い方など聞いたことが無い。

「亜莎、この策の事はよく覚えておけ。滅多な事では聞く事もできんからな」
「は、はひっ！　しっかり覚えておきます！！」

師からの指示に背筋を伸ばして答える。

そして今の説明を反復するため、ちょっと危ない人のようにブツブツ呟きだした。

「しかし、どうします？　このままでは悪戯に戦力と兵糧を消耗するだけです」

どうすると聞かれても、術中に嵌った以上、早く決着をつける必要がある。

兵糧と戦力が尽きるのが先か、洛陽を落とすのが先か。

董卓軍と連合、その両方が時間との勝負になった。

片や人質救出と、その間の兵士だけの虎牢関の籠城戦。

片や兵糧と戦力が消費する前に決着をつけるため。

果たして時間を制して、戦況を有利に持っていくのは、どちらだろうか。

両軍の制限時間（後書き）

どちらも早さを求められる制限時間。
果たして救出して合流するのが先か、はたまた虎牢関を落とすのが先か。
戦いの泥沼は深さを増していく。

長安潜入

勝利を確信した途端に発生した、十常侍の残党による反抗。
人質となった劉協を救うべく、存在を知られていない一刀と焔耶が長安に向かう。
その長安では、十常侍の残党が劉協を人質に取った事で、ほぼ主導権を握っていた。
抵抗をしようとした者は殺されるか、劉協が閉じ込められている地下牢に放り込まれた。
見張りも十常侍の息が掛かっており、反撃に出る隙が無い。

「まったく董卓も悪運が強いですな」
「だが、劉協が我らの手中にあれば、まだ軌道修正はできる」
「ひとまずは董卓が惨めに敗北するのを、のんびりと待ちましょう」

酒に酔って下劣な笑い声を上げながら、酒盛りは続いていく。
そんな笑い声さえ聞こえない地下牢の一つに、生気を失いつつある劉協がいた。

「兄上……もう私は、いえ、この国自体が駄目です」

優しく頼りになる兄の劉弁は、既にこの世にいない。
目の前で断末魔の雄叫びを上げ、血まみれになる兄の姿が、何度も頭の中に蘇る。
血が噴き出したあの瞬間は、思い出すだけでも気を失いそうになる。
まるで井戸を掘り当てた時のように、血が噴き出して部屋を、兄を真っ赤に染める。
今にも閉じられそうな目を向けて、後は頼むと言い残して逝った、兄の体の冷たさが両手に残っている。

「ごめんね、月ちゃん、皆。巻き込んじゃって、助けて……あげられなくて」

蹲って嘆き、謝るのは迷惑を掛けた董卓とその仲間。
歳が近く、良い友人になれたというのに、醜い権力争いに巻き込んでしまった。

「もう駄目です、兄上。間もなく私も、そちらに行くと思います」

このまま生きていても、いいように利用されるのは分かっている。
ならば、ここで命を絶つのも一つの手段。
しかし手元に刃物は無く、首を吊るせそうな梁は高い所にあって届かない。
残された自害の方法はただ一つ。

「ぐっ……」

舌を出して歯で挟み、力を籠めて舌を噛み切ろうとする。
だが、いざやるとなると恐怖心が溢れ出て来た。
目の前での兄の死が頭の中で何度も繰り返され、手に残っている兄の体の冷たさが、体全体へと伝わってくる。

「いや……怖い」

決意は恐怖心へと変わり、自害を思い留まらせる。
頭を抱えて恐怖に身を震わせるが、助ける者はここにはいない。
向かいや隣の牢に囚われている女官や兵も、手助けできずに歯がゆい気持ちだった。

「助けて……誰か」

劉協が救いを求める一言を発した頃、一刀達は馬を飛ばした甲斐あって、早くも長安に到着していた。

「ふぅ、さすがに飛ばしすぎたな。少し疲れたぞ」

「気持ちは分かるけど、時間は待ってくれないよ。早く陛下を助けなきゃ」

馬を適当な処に預けて、二人はどうやって城内に侵入しようかと思案する。

救出が最優先である以上、最初から強行突破は避けたい。

かといって、城の周りは高い塀に囲まれていて、簡単に越えられそうにない。

出入り口を警備している兵は二、三人だが、身を隠せる障害物が無い。

見つかって仲間を呼ばれれば、劉協の命に関わるかもしれない。

「ここは定番だが、出入りしている荷車に乗り込むか？」

確かに定番と言えば定番だが、荷物を調べられれば一発でアウト。

強行突破を避けたい以上、見つかる可能性は可能な限り低くしたい。

「焔耶の案も有りだけど、他に方法は無いかな？　できるだけバレなさそうな潜入手段」

腕を組んで考えるが、全く良い方法が浮かばない。

時間もない以上、やはり荷車に潜もうかと思った時だった。

警邏をしている兵を見つけた一刀が、妙案を思いついた。

「そうだ。ほとんど気付かれない、もっと定番の方法があるじゃないか」

そう言うと、警邏をしていた兵を二人ほど路地裏に連れ込み、あっという間に気絶させた。
ご丁寧に兵を縛り上げると、いそいそと鎧を脱がせ始める。

「お、おい一刀……」

強行突破を否定した手前、まさか力技に出るとは焔耶も思わなかった。
見事な素早さで兵を気絶させた事に、逆に戸惑いを覚える。

「さっ、この鎧を着るんだ焔耶。これなら気付かれずに、城内に侵入できるよ」
「そりゃまぁ、そうかもしれないけどさ……」

どこか納得しきれない気はするが、他に方法は無い。
取り敢えず鎧を着込むと、二人はあたかも警邏から戻ったように城門へ向かう。
警備をしている兵に近づくたびに、心臓が大きく鼓動する。
バレないかと心配しながら歩を進め、敬礼をしながら横を通り抜けた。

「ふぅ、上手くいったね。このまま、陛下を捜索しよう」

小声での呟きに焔耶が無言で頷くと、二手に別れて捜索を始めた。
直に聞いて怪しまれるのを避けるため、主に兵士や女官の会話を立ち聞きする。
他愛も無い世間話を何度も聞きながら、遂に劉協が地下牢にいると

いう話を聞けた。
情報を手にした一刀は、運よく近くにいた焔耶と合流。
すぐさま地下牢への潜入を開始した。

「ご苦労様です」
「お疲れ様」

行き交う兵士に怪しまれぬよう、何気なく挨拶をしながら地下牢を探す。
やがてそれらしき階段を見つけ、足音を立てぬようにゆっくりと降りて行く。
しばらく降りていくと、地下牢の入り口があった。
松明を近くに見張りの兵が三人いるだけで、他には誰もいない。

「どうする、力技でいくか？」
「いや、ここからじゃ距離があり過ぎる。三人倒すより先に、仲間を呼ばれるよ」

身を隠している位置から、見張りの位置まではそれなりに距離がある。
距離を詰めて倒すより先に、援軍を呼ばれる可能性が高い。

「大丈夫、策はあるよ。ちょっと耳を貸してくれる？」

不適に微笑む一刀が作戦を伝えると、焔耶は目を閉じた。
一刀は右腕に氣を集め、撃ち出すタイミングを計っている。

「三、四、五、六」

ゆっくりとカウントダウンが進み、行動の刻（とき）が近づく。

チャンスは一瞬、ほんの十数秒の間だけ。

「九、十！」
「いけぇ！」

カウントが十に達すると同時に、氣弾が放たれて松明を吹き飛ばす。
吹き飛んだ事で火は消え、あっという間にそこは真っ暗になる。
急に真っ暗になったことで、見張りの兵は何も見えずに混乱する。
そこへ、先ほどまで目を閉じて、暗闇に目を慣れさせていた焔耶が飛び掛る。
悲鳴を上げる間もなく鈍砕骨で顔を殴られた兵達は、その場に倒れて痙攣する。

「どうだ、焔耶」
「成功だ。全員ぶっ飛ばしてやったぜ」

今の戦闘で、何故焔耶だけが敵兵を目視出来たのか。
それは暗調応という目の仕組みにある。
人の目は、明るい処から急に暗い処に入ると、十五秒ほど何も見えなくなる。
それを防ぐには、明るい場所で十秒目を閉じておくこと。
そうすることで暗闇でも目が見え、敵兵を襲撃する事が可能になる。

「ここに劉協陛下が……」

兵が落とした鍵で扉を開けると、中には牢屋がずらっと並んでいた。

「陛下、陛下はおられませんか」
「我々は味方です、陛下の救出に来ました」

外に聞こえぬよう、やや声を抑えて並んでいる牢屋に問い掛ける。
すると一番手前の牢屋にいた兵士が、声を掛けてきた。

「君達、本当に味方なのか？」
「はい。俺達は董卓軍の関係者です」
「董卓様の？　ならばこの場は信用しよう。陛下は一番奥の牢にいる」

兵が指差した方向を向くと、この場を焔耶に任せて一刀が救出に向かう。
しばらく走って一番奥に到着すると、牢の中に蹲っている煌びやかな服の子がいた。
あからさまに権威を見せ付けるような服だけに、牢の中では目立っている。

「失礼、あなたが劉協陛下ですか？」
「……なんじゃ、お主は」

暗い牢の中では誰が来たのか分からず、蹲ったまま返事をする。
半分死んだような目を見ると、救わなくてはという気持ちが強くなる。

「董卓軍の関係者です。陛下をお救いに参りました」

そう言って鍵を壊して出入り口を蹴破り、中に入って跪く。

「お主、董卓の知り合いなのか！？」

顔を上げて近寄ると、その目に飛び込んでくるのは赤髪。
暗くて分かりづらいが、褐色の肌に肩から僅かに見える刺青のよう

な痣。
その見た目から思い描くのは、動物達を家族と言っていた飛将軍の姿。

「恋？　恋殿が来てくれたのかぁ！」
「うわっ！？」

顔見知りが助けに来てくれた事に喜び、思わず抱きついてしまう。
しかし抱きつくと同時に、少し違和感を覚えた。
固い胸板に筋肉質な腕、恋とは違う声。
不思議に感じてじっと顔を見詰めると、似てはいるが少し違う。

「お主、何者じゃ？」

やや固まったような表情で改めて尋ねる。

「えっと、恋の兄の呂迅と申します。色々あって、俺が助けに来ました」

困った表情で返事をすると、しばらくの間、劉協の頭がフリーズする。
再起動して処理する内容は、自分が今やった事について。
抱きついたのは誰だ、恋に聞いた事のある生き別れの兄。
何故、その人物がここにいるのか。
おそらく無事に再会した後、自分の状況を聞いて助けに来てくれたのだろう。
自分は誰というか、何に抱きついている。
相手は恋の兄、つまりは男。
イコール、自分は今、恋の兄という男に抱きついている。

「……どわぁぁっ！　す、すまぬ、気付かなかったとはいえ、つい」
「いやいや、普通それって俺の台詞ですよね？」

慌てふためく劉協の様子に、取り敢えず無事なのは分かった。
隣や向かいの牢の中にいる兵や女官が笑いを堪え、自分達が救出されるのを待つ。
気まずい空気の中、劉協の口添えで次々と味方側の兵と女官が解放される。
鍵は全て壊し、ほとんど力技による救出だ。

「一刀、こっちはあらかた救出したぞ」

無事に全員を解放したタイミングで、焔耶が合流する。
向こうも味方側の人間を解放し、今は脱出の機会を待っているそうだ。

「脱出と言われても、地下牢に抜け道などないぞ」

普通はそうだろう。
地下牢に抜け道などあったら、捕虜の脱獄が日常茶飯事になってしまう。

「何か手はあるのか？」
「無いよ。脱出の時は力技で強行突破の予定だったから」
『……はぁっ！？』

まさかの返答に誰もが驚きを隠せなかった。
行きは紛いなりにも隠密っぽくしていたのに、帰りは武人丸出しの強行突破。
まるで、雨の日は行きが濡れなければ、帰りは家で着替えられるか

ら濡れて良いという考えのようだ。

「本気で行っておるのか。相手は数百以上おるんじゃぞ」
「それに、奴らの威光に逆らえずにいる兵も大勢いる」
「無理よ、この人数で強行突破なんて。他の手を考えましょうよ」

こちらの手勢はせいぜい数十人。
とてもじゃないが、反抗してどうにかできるとは思えない。

「何言っているのさ。相手の中には、十常侍に脅されている人が大勢いるんだろう？」
「まぁ、それはそうだが……」
「だったら、敵の頭を討ち取って、陛下が逆臣を討ったと宣言すれば人数の差はひっくり返せるよ」

言われてみればその通りだと、全員が気付いた。
所詮脅されて従っているのならば、その脅された原因を取り除けばいい。
こんな簡単なことに、何故気付かなかったのだろうか。

「よし、俺が道案内をしよう。城の内部は把握している」
「十常侍の残党で指揮を執っているのは三人だ。他は全部、部下の兵士だけだぞ」

光明が見えたと分かると、各々が持っている情報を持ち寄る。
それを踏まえた上で、一同は行動を起こす。

「戦闘は俺と焔耶が引き受けます。他の皆さんは、陛下を守ってあげてください」
「たった二人で大丈夫なのか？　俺達も加勢するぞ」

先頭ではなく、戦闘そのものを引き受けた一刀達に、兵の一人が心配そうに尋ねる。
だがそれも、自分が飛将軍呂布の兄だと告げると、どよめきへと変わる。

「さてと、それじゃあ俺達の腕前を見せてあげようか」
「おぅ！　やってやるぜ！！」

勢いよく飛び出した二人を先頭に、劉協達も一団となって後を追う。
牢を出てすぐ、見張りの交代に現れた二人の兵士が目の前にいた。
槍を構えて声を出すより早く、勢いをつけた一刀が横を通り過ぎる。
擦れ違いざまに紅蓮と鮮紅を居合いのように抜き、兵士両名の首を刎ねながら。

「な、貴様ら何もっ！？」

階段を上がりきった場所を通りかかった兵士が声を上げる前に、声に反応した焔耶が顔面を裏拳で殴る。

「おぉぉっ！」

怯んだ隙に鈍砕骨で頭をぶん殴り、頭蓋骨を粉砕する。
顔中から血を流して倒れる兵を捨て置き、一行は先へと進む。
途中で邪魔をする兵士は一刀と焔耶が次から次へと薙ぎ払う。
力でもって、文字通り敵をぶっ飛ばす焔耶。
速さと技量でもって、悲鳴を上げる間も痛みを感じさせる暇もなく、胴体と首を切り離す一刀。
狭い廊下という事もあって、二人の後ろにいる兵士達は出番が無い。

「すげぇ。あの男、本当に呂布様の兄上のようだ」
「俺ら、出る幕無いっすね」

血の海を劉協に見せないように、周りを固めながら進む一団。
それでも時より、僅かに生まれる隙間から死体を直視してしまう。
思わず吐きそうになる衝動を必死に堪えながら、一刀の背中を見詰める。
すると先ほど飛びついた際に感じた、心地よい温かさと安らぎを体が思い出す。
嘘のように吐き気は収まり、息切れも軽くなった気がした。

（何故じゃ？　あの男を見ると凄く安心する）

目の前で敵兵を血祭りに上げる姿は、はっきり言って耐え難いものがある。
返り血を浴びて赤一色に染まっていく姿も、戦場を知らない彼女には恐怖しか感じない。
その恐怖さえも、戦闘無しでの移動中の背中を見れば、どこかに吹き飛んでしまう。
呂布の兄という名目など抜きに、とても頼もしく感じる。

（こんな男もおったのか）

自分がこれまでに見てきた男は、金か権力を欲し、その後は自身の保身にしか興味がなかった。
嫌な事は徹底的に避けるくせに、好機と見れば相手を陥れに走る。
普段では見せない足取りの速さと、頭の回転を発揮して。
唯一まともなのは、家族である兄と父だけかと思っていた。
そこに現れた一刀という存在は、劉協を新しい世界へと導いく切っ掛けとなった。

（朕はまだまだ、世の中を知らんな）

温室育ちによる自分の世界の狭さを実感しながら、劉協は見知らぬ世界へと足を踏み入れようとしていた。

長安潜入（後書き）

無事に劉協を救出し、反撃に出る。
連合が虎牢関を破るまでに、間に合うのだろうか。

拷問　尋問　容赦無し

無事に劉協を救出し、十常侍の残党の下へ走る一刀達。
途中で邪魔をする者は容赦なく斬り捨て、戦意を見せぬ者は後で邪魔されないよう、脚を負傷させておく。
戦力に乏しい文官と女官はあっさり見逃し、あくまで兵士だけを蹴散らしていく。

「奴らのいる部屋はもうすぐです」
「了解。焔耶、突入と同時に電光石火で決めるぞ」
「よっしゃっ、そういう事なら任せておけ！」

得意分野での作戦とあって、侵入時よりイキイキとしている。
こういう時の焔耶は、扉を蹴破って問答無用で相手に飛び掛る。
そのまま相手を一方的にタコ殴りにする様子が、嫌でも思い浮かんでしまう。
実際、作戦でもないのに盗賊退治でそれをやって、何度か桔梗に怒られた姿を見た事がある。

「心は熱く、でも頭は冷静にね」
「応っ！」

返事は良いが、絶対に分かっていないと悟った一刀だった。

（まぁいいか、今回はそういう作戦なんだし）

そんな事を考えながら、目の前に飛んできた矢を下から上に紅蓮で叩く。
その間に鮮紅を納め、空中で回転している矢を掴んで狙撃手に向か

って投げる。
投じられた矢は狙撃手の左腕に突き刺さり、持っていた弓を落とした。

「そこの角を曲がった二番目の部屋です！」

先導をしている兵士の声に頷き、指示された角を曲がる。
部屋の警護を勤める兵士を四人ほど視認し、お互いに武器を構える。
一方、室内で暢気にしている十常侍も、今頃になって外の騒ぎに気がついた。
何事かと扉を開けた瞬間、目の前にいた兵士を切り裂いた刃が向かってくる。

「ひいぃぃっ！？」

驚いて背中から転がり、無様に床にへたり込む。
目の前には体を斬られて苦しむ兵士と、血を滴らせる刃を持った一刀の姿。
それを視認した次の瞬間、頭に痛みを感じると同時に視界は真っ暗になった。
鈍砕骨の一撃で頭蓋骨を叩き割られたとも分からずに。

「な、何ごっ！？」

室内にいた一人が立ち上がろうとした瞬間、首と胴体が永遠の別れを告げて離れた。
首を斬り落とした鮮紅が壁に刺さり、刀身を吹き出る血液が真っ赤に染まる。

「あ、あわ、あわわわわ……」

最後の一人は目の前で起きた惨状に、腰を抜かしてしりもちをつく。
その男の下に鮮紅を壁から抜いた一刀が、血まみれの鈍砕骨を構えた焔耶が。
さらに武器を構えた十数人の兵士が周囲を囲む。

「さぁて、お前には洗いざらい吐いてもらおうか」
「貴様、朕を捕らえてどうするつもりだったのじゃ。朕を捕らえた処で、できる事などたかが知れておるぞ」

兵士の間を割って現れた劉協を見た途端、男の表情が青ざめていく。
とても抵抗しそうには見えないが、念のために一、二歩移動して劉協の右斜め前に立つ。
皇帝の身に、万一の事があってはならないのだから。

「ひいぃ……」

恐怖のあまりに何も話さず、カチカチと歯を鳴らすだけの男に刃を向ける。
首に近づけただけにも関わらず、顔を青白くして失禁している。
この程度の輩に不覚を取ったのかと、舌打ちをする劉協の表情が苦々しくなる。

「時間も無いから手っ取り早く聞き出そう。目的は何だ、何をしようとした」

足早に問い掛けるが、男は答えようとしない。
答えはしないと首を横に何度も振って、口を割る様子を見せない。
このままでは悪戯に時間を過ごしてしまう。

「言わないなら仕方ない。誰か、釘数本と金槌、それと縄も持ってきて」

虎牢関や洛陽の事もあり、早く用事を済ませたい一刀は兵士に指示して道具を持ってこさせる。
この状況でそれらの道具でやる事は、もう誰もが察していた。

「お待たせしました！　それと、蝋燭に火を点けてきました」
「へえ、気がきくね。それじゃあ、パッパッと拷問して尋問しますか」

そう言うと兵士に男を後ろ手に縛らせ、靴を脱がせて裸足にさせる。
放せと暴れる男を数人がかりで押さえつけ、右足の甲に釘を立てる。
顔からでる水分を全て出しながら、男は嫌だ、止めろと騒ぐ。
そんな騒音は気にせず、躊躇無く金槌を釘に振り下ろした。

「ぎゃぁぁぁっ！！」

釘が刺さった瞬間に、城内は醜い悲鳴に包まれた。
何事かとやってきた兵は、一緒に脱出した兵や文官が説得。
十常侍側の兵は焔耶が問答無用に殴り飛ばし、窓の外へと落下した。
他にも数人いた十常侍側の兵士も、仲間になった兵士と協力して退ける。

「ほら、もう一丁」
「ひぎぃぃぃぃっ！！」
「おい、そろそろ傷口に蝋燭垂らせ」

一刀の指示に、蝋燭を持ってきた兵士が蝋燭を傷の上に構える。
騒いで抵抗する男の言葉を無視し、熱で溶けた蝋を傷口に一滴落と

す。

「あぁぁぁぁっ！！？」

傷口に熱い蝋を垂らされ、声が裏返るほどの悲鳴を上げる。
脂汗を滲み出しながら苦しむ男に、中腰の一刀が睨みつけて問い掛ける。

「さぁ吐け、何をしようとしていたんだ？」

「そ、それは……」

この期に及んでまだ口を閉ざす姿に、握っている金槌を振り上げる。
男の背筋に寒気が走った瞬間、頭上に構えた金槌を釘に向かって全力で振り下ろした。
的確に釘を叩いた一撃で、釘の先端は足を貫通して足の裏側に姿を現した。

「ひぎゃあぁぁぁっ！！」

痛みにのた打ち回ろうにも、屈強な兵士に押さえつけられて身動きが取れない。
できるのは悲鳴を上げ、運動不足で無駄に肥えた図体で抵抗することだけ。
拷問されていると分かっていても、その姿は醜く見える。

「ほらほら、いーえ、いーえ、いーえ」

手拍子でもしているようなリズムで言えと言いながら、コンコンと釘を叩く。
しかも上からではなく、前後左右から軽く叩くので、釘が動いて肉

を横に抉る。
釘の角度が変わるたびに悲鳴が上がり、床に滴る出血も多くなる。
周囲で見守る面々の目には、一刀の背中に黒い羽が見えたという。

「呂迅よ、それでは口が利けぬぞ。一旦やめぃ」
「おっと、そうですね。じゃあ、止めておきます」

劉協に指示されて金槌を降ろすと、煩かった悲鳴がようやく収まる。
体中から汗を滲ませながら、息を切らす男の首筋に刃を向ける。

「楽になりたかったら吐け、何をしようとしていたんだ」

楽になるというのがどういう意味かは不明だが、男は一刻も早く解放されたかった。
味方もいない状況でこれ以上黙っていても無意味と判断して、全てを話し出した。
繋がりのある貴族の下に、劉協に似た髪と目、体格をした少女がいる。
その子を劉協の替え玉として、自分達の手で皇帝を作り上げる。
そして替え玉を自分達が良い様に操り、陰から大陸を支配するがために。
ただ、顔の作りが違うので、たまたま長安にいた腕の良い医者に顔を変えさせようとしていた。
そのために劉協を牢に監禁し、医者も承諾するまで別室で監禁している事を。

「偽物をそっくりにするため、どうしても本物は必要だったんだ」
「貴様……偽りの皇帝を作り出すとは何様のつもりじゃ！　その首、即刻」
「待った。その前に、お前達が監禁している医者はどこにいる？」

激昂する劉協を宥め、医者の居場所を聞くと男は、部屋の隅にある扉を指差す。
兵士の一人がその扉を開けると、縛られて猿轡をされた赤い髪の男が転がっていた。
急いで拘束を解くと、兵士に肩を借りてフラフラと出てきた。

「すまない、助かった。二日も飲まず食わずで監禁されていたんだ」

体力も限界が近いのか、やけに顔色が悪い。
すぐに手の空いている文官が水を取りに走って行った。

「俺の名は華佗。流れの医者をやっているんだ」
「俺は呂迅、本当に人の顔を変えられるのか？」

遠い未来から転生した一刀は、こんな時代に整形手術のような技術があるとは信じられない。

「五斗米道の秘儀を使えば可能だと答えたら、連れて来られてな。怪我か何かで顔を治したいならともかく、都合の良い皇帝を作るのに協力するのは嫌だと返事をしたらこのザマさ」

文官が持ってきた水を呷り、大きく息を吐く。
とりあえずは大丈夫そうなので、標的は再び十常侍の男に戻る。

「大した外道だな、お前らは」
「己の私利私欲のため、偽りの王を作るとは言語道断じゃ！」
「う、うるさい！　お前が我々の言う事を……ぎゃぁぁぁっ！！」

醜い反論を聞かされる前に、もう一方の足の甲にも釘を打ちつける。

反論は許さないと睨む一刀は、容赦なく傷口に溶けた蝋を垂らしていく。
傷の上から熱い蝋を垂らされているので、相手はたまったものではない。

「これで両足は封じた。逃げようにも逃げられないだろう？」

男の両足の甲は釘が貫いた傷と、そこに垂らされた蝋によって火傷している。
これでは歩くどころか、足さえ無事に治るかすら分からない。

「華佗、この傷は治せる？」

何やら意味ありげに尋ねながらウィンクをすると、華佗は了解したとばかりに微笑む。

「そうだな……。うん、こりゃ無理だ。すぐにでも足首から先を切断しないと」

切断と聞いた瞬間、青白かった顔色は真っ白になっていく。
そしてそのまま男は気を失ってしまった。
それを確認すると、作戦成功とばかりに一刀と華佗は不敵な笑みを浮かべて親指を立てた。
散々いい様にやってきたのだから、これぐらいは仕返ししても良いだろうと、即興で男を騙したのだ。

「実際の処はどうなの？」
「すぐに蝋と釘を取り除いて治療すれば、歩くのには問題無いだろう」

医者として見過ごせないのか、手持ちの道具で蝋と釘を取り除きだす。
下の皮膚は火傷をしており、傷を相まってグチャグチャになっている。
こういうものに慣れていない文官達は吐き気を催し、一刀は素早く劉協の目を隠す。

「隠さんでもよいぞ。既に兄の死を目の当たりにしたんじゃ、これくらい」
「だとしても、これは見ちゃ駄目だ。酷すぎるから」

自分でやっておいてなんだか、これは見せる訳にはいかない。
というよりも、これ以上人の傷つく姿を見せるつもりはなかった。
まだ幼い劉協には、これ以上は重すぎると感じて。

「応急処置はした。しばらくは保つだろうが、少しでも早く本格的な治療が必要だ」

傷口を包帯で隠れたのを確認すると、目隠しを外してすみませんと謝罪を入れる。

「構わん。それよりも、そやつは治療が終わり次第、すぐに牢に入れぃ。まだまだ聞き出す事はあるからのぉ」
「自害するかもよ？」
「それは無いじゃろう。この程度の男に、自害するほどの覚悟も度胸もあるはずなかろう」

本当に自害するつもりなら、とっくの昔にやっているはず。
それをしないという事は、所詮その程度だったという訳だ。

「それじゃあ、後の事は任せてもよろしいでしょうか。我々はすぐにでも、董卓の下へ」
「待て、それは朕がなんとかしよう。良ければ連れて行ってくれ」
確かに劉協に説得をさせるのも、有効な一手だ。
だが、それはできない相談だった。
「無理です。ここまでに双方共に、多くの被害を出しています。それを皇帝の仲裁だからと言って、納得できましょうか」
噂では董卓が劉協を陥れようとしていた事になっている。
その噂に乗っ取って集まった連合にすれば、いかに劉協の仲裁とてこう返してくる。
劉協様は董卓に騙されていると。
騙されていると証明することはできないが、反対に騙されていないと証明する事もできない。
「そうなれば戦場は混乱し、余計な被害や争いが勃発する可能性があります。どうかここは、苦しいでしょうが我慢してください」
丁寧に説明をして頭を下げると、さすがに劉協も反論する事ができない。
余計な争いは避けたいし、民の命を守りたいとも思う。
聡明な彼女は時には耐える事も皇帝の役目だと、自らの心の内で結論を出した。
「うむ、分かった。その代わり、ちゃんと助けてくるんじゃぞ」
『御意！』
大きな声で返事をすると、すぐさま一刀と焔耶は部屋を飛び出して

いく。
その後ろ姿を見送りながら、劉協は何かを考える。
どうかしたのかと文官が尋ねると。

「い、いやな、呂迅のような男は見たことが無い故な、つい」

頬を染めて照れる姿に、その場にいる誰も惚れたなと察した。
考えてみれば劉協の周囲にいてまともだったのは、父親や兄くらい。
他は金と権力に群がる、ろくでなしや外道。
それもだいぶ歳を食った者ばかり。
身内以外の若い男、それも一刀のようなタイプに会うのは始めてだった。
しかも出会いで抱きついたせいで、多少の意識はあったのだろう。
かくして、図らずも劉協は初恋を絶賛経験中である。

（あの男ならば劉協様を任せられるのでは？）
（飛将軍の兄とあらば、そうそう悪い話ではないな）
（しかもあの強さなら、高い地位を与えて頭の堅い連中を黙らす事もできるわね）

後ろの方で比較的地位の高い者達が、密かに二人をくっ付けようと画策しているとも知らず。
こうして長安の方の用は片付いたが、虎牢関の方はそろそろ限界だった。
将軍が抜けて抵抗が弱った隙を突いて、連合は交代で一日中、昼夜を問わず攻撃を続けた。
どうにか堪えていた董卓軍も、さすがに限界となった。

「副隊長、これ以上は無理です！」
「分かった。呂迅様より受け取った策通りなら、これまでの動きで

充分だ。すぐに撤退するぞ」
『御意！』

虎牢関の指揮を執っていた副隊長の指示に従い、兵士達が駆け足で撤退を始める。
最後に泗水関と同様、補給線としての役割を断つためにあっちこっちから火を放つ。
炎に包まれる前に全員が脱出するが、未だに連合軍は内部に入れない。
その理由は、城門に準備したある物のお陰だった。

「何をしているのよ！　早く城門を開けなさい！！」
「そ、それが、向こう側に何か大きくて重い物があるのか、開かないんです」
「だったら壊していいわ、早くなさい。関を全焼させられる前に！」

城門の向こうから見える煙に、指示を出す荀？にも焦りが生じる。
いったい城門の向こう側に何があるのかというと、それは内部を調査した呉の周泰が知っていた。

「大量の土嚢ですって？」
「土嚢って、治水の時に使う土を詰めた麻袋の事よね」

報告を聞いた孫策と周瑜が、報告の内容に表情を変える。

「はい！　城門の向こう側に大量の土嚢を積んで、障害にしているんです。できれば取り除きたかったのですが、あの量は無理です」

それはもう、山のように積んでありましたと告げる周泰。
説明のために地面に書かれた簡潔な図には、足場も確保してある土

嚢の山が書かれている。
これに上っては一つ積み、また一つ積みを繰り返したらしい。

「やるな、まさかこんな方法で足止めをするとは」
「放つ矢には限度があるけど、土は足下にたくさんあるもんね」

下手に物資を消耗するより、その場にある物を利用するのは悪くない。
しかも土なら労力さえあれば、いくらでも使い放題。
その分、連合への抵抗は弱くなるが、元より将軍が抜けた董卓軍には関係無かった。
それぞれが死ぬ気で反撃し、死ぬ気で土嚢を積み続けた。

「ですが、何故将軍が一人もいなかったのでしょうか？」
「ふむ、何か想定外の出来事が起きたとしか考えられんな」
「相手の事情なんか気にするのはよしましょう。それより、そろそろ城門が破れるわよ」

孫策に言われて正面を見ると、ちょうど曹操軍が城門を破った瞬間だった。
城門を破った事で歓喜に包まれるかと思いきや、それは悲鳴に変わった。
力ずくで城門を壊した途端に、向こう側にある土嚢の山が崩れて来たのだ。
それも何故か都合よく連合側に。

「きゃぁぁぁっ！」

荀？の悲鳴と同時に崩れ落ちてきた土嚢に、城門を破った兵士が次々と飲み込まれる。

実は土嚢はただ積んでいたのではなく、城門に寄り掛かるように積まれていたのだ。
それが城門という支えを失い、連合側へと雪崩れ込んできたのである。
これは一刀の書いた策にも、最重要事項として明記されていた。
お陰で足止めどころか、相当の被害を与える事に成功した。
あまりの出来事に誰もが呆気に取られる中、一人だけ炎を燃やす人物がいた。

「やってくれるじゃない。この策も陳宮とやらが考えたのかしら。ふふふっ、いっそう興味が湧いたわ」

自軍に被害を出された事を恨みつつ、未だに陳宮への勘違いをしている曹操。
救助の指揮は部下の夏侯淵に任せ、炎に包まれた虎牢関を見詰める。
まるでその炎を自らの中に溜め、後にしっぺ返しを与えようとしているかのように。
戦いの舞台は、いよいよ洛陽へと移ろうとしている。

拷問　尋問　容赦無し（後書き）

長安の用事を済ませ急行する一刀と焔耶。
虎牢関も既に撤退し、戦場は洛陽へと移る。

洛陽の決戦

長安で劉協の一件が片付き、一刀と焔耶は洛陽へと馬を走らせる。
虎牢関が落ちていなかったとしても、現状を知らせる必要があるからだ。
城への抜け道は、出発する前に護衛を担当していた兵士が教えてくれた。
後は連合とどちらが先に着くかが勝負となる。
その連合はというと、城門突破の後に別の被害を受けていた。

「ずぅえったいに許しませせんわよぉ！」
「そうなのじゃ！　董卓などという田舎者など、ギッタギタのケチョンケチョンにしてやるのじゃ！」

怒り狂う袁家の二人を中曲に置いて、燃え落ちた虎牢関を見捨てて前進していた。
その袁家の二人だが、何故か泥まみれになっていた。
理由は城門を壊し、土嚢の雪崩の後に起きた後の事だった。
あの後、曹操軍が怪我人を救出している間に袁家の軍が虎牢関へと入り込んだ。
何か残ってないかと奥に進んでいると、突然足場が崩れ落ちる。
後ろから付いてきた兵士達の足場も崩れ、一同は深めの落とし穴の中へと落下したのだった。
しかも底の方は泥になっている上に蛙や爬虫類、その辺で見つけた虫が手当たり次第に放り込まれていた。

『ぎゃぁぁぁぁぁっ！！？』

落ちた瞬間とその後の袁姉妹の悲鳴は、虎牢関を飛び出て洛陽や泗

水関にも届きそうな勢いだった。

「まさか土嚢用の土を集めると同時に、巨大な落とし穴を作っていたとはな」

「穴の対面を古い縄で渡して、その上に土を被せていたのね。そりゃあ、あの二人の軍じゃ落ちるわね」

大した被害を受けていないと言われて前曲に置かれた孫策軍。

その代表格の孫策と周瑜が、先ほどの落とし穴について話し合っている。

「しばらくは縄が耐えているが、やがて重さに耐えられなくなって切れ、穴の中に落ちる……か」

「一個ずつ小出しにすれば警戒するけど、まさかあんな大きいの一つを仕掛けるなんて、思ったより大胆ね」

「おまけにすぐに落とさず、それなりに人が乗ってから落ちるように仕掛けていた。嫌がらせ付きでな」

落ちた相手を小ばかにするような、底に仕掛けられていた蛙や爬虫類達。

しかしその光景を見て、笑いそうにならなかった者はいなかった。

味方のはずの袁家の軍内部にも、惨状を見て笑いそうになる者がいるくらいだ。

「そのせいで怒りを買っちゃって、碌に休まず行軍なのよね」

「よくいう。我々は城門を突破した時点で、かなり休んでいただろう。少なくとも体力面では我々が一番回復している」

周囲を見渡せば、すっかり体力を回復した兵士が力強く行軍している。

「それで、洛陽の方はどうなの？」
「報告によれば、定石通り籠城戦の構えをしているそうだ。民の避難を優先して行なっているらしい」
「そう。よかったわ、董卓が噂通りの暴君でなくて」

民の避難を優先させているということは、それだけ人命を尊重しているということ。
噂が嘘なのは知っているが、こうして実際にやってもらうと安心できる。
これで余計な心配をせず、思いっきり戦えるのだから。

「断っておくが、お前は前に出るなよ」
「えぇっ！　やぁだぁ、私も戦いたぁい」

子供のように駄々をこねるのはいつもの事なので、周瑜は黙って聞き流した。
一方洛陽の方はというと。

「長安からの連絡はまだ入らないの？」
「はっ、今しばらくかかるものかと」

兵士から連絡が無いと聞いて、苛立ちを見せる賈駆。
向こうから何の要求もないため、戦の準備と民の避難はやっているが、ここでまた無茶を言われたら敵わない。
とにかく連絡がない以上、取れるべき行動は全て取っても構わないと判断した。

「詠ちゃん、劉協様は大丈夫かな？」

傍にいる豪華な服装の少女が問い掛ける。
彼女こそ悪人と噂される董卓だが、その外見は大人しく儚げな雰囲気がある。
争い嫌いな性格からして、とても暴君だとは思えない。

「きっと大丈夫よ。恋のお兄さんが助けに行ってくれたみたいだし、腕前が確かなのは報告でも分かるわ」

先に帰ってきた張遼や恋、華雄に陳宮の報告から、一刀の腕前の良さは判断できる。
見ず知らずの人物には頼りたくないが、今は信じるしかない。

「はっきり言って見知らずの奴に頼るのは癪だけど、私達にできることは報告を待つことだけよ」

真剣な眼差しで窓の外をじっと眺める。
人影どころか猫の子一匹も見えない荒野に現れるのは、連合が先か連絡員が先か。
将軍達が戻って来ていたので、籠城戦に備えての準備は滞りない。
董卓の意向で民の避難も完了した。
後はどちらが先にしろ、待つことしかできない。

「……アニィ」

見張り用の城壁の上に体育座りで座り込んで、長安の方向をじっと見詰める恋。
彼女の頭から連合という存在は消え去り、兄の帰還を待っている。
紹介したい家族達は、与えられた家の中に非難して出ないように言いつけてある。
いないのは兄とその仲間の二人だけ。

「アニィが来るまでは、絶対に負けない」

一刀が帰ってくるまで、この場所は絶対に守り通す。
その決意を持って足下に置いてある武器を手に取る。

「……来る」

恋の睨みつける方向からは、土煙を上げて迫り来る連合軍。
やはり虎牢関と長安では、距離の差が出てしまったようだ。
おまけに袁家の二人の暴走のせいで、大した休み時間をとっていなかったのも理由だろう。

「呂布様、連合軍が接近中です。急ぎ応戦体勢を取れと、賈駆様より通達です！」

「……ん」

連合の接近を告げに来た兵士に頷き、すぐさま自分の持ち場へと駆け出す。
兄を待つ場を守るために。

「各自持ち場について！　虎牢関から来た者は民が残っていないか、最終確認を！！」

『了解！』

賈駆の指示を受けて走り出す兵達。
虎牢関の戦いの情報を元に、一日中攻められても休めるよう、対策は用意してある。
後は泗水関のように華雄を暴走させなければ、普通に籠城戦ができるはずだ。

よほどの想定外がなければ。
それは普通に攻城戦をする予定の連合も同じだった。

「野戦なら、泗水関のようなことはないわよね？」
「当たり前だ。念のために探らせたが、人影一つないそうだ」

障害物も隠れる場所もない、まっさらな荒野。
これまでの二つの関では、何かしら起きていただけについ警戒してしまう。

「ここまで追い込んで、しかも野戦では罠も伏兵も仕掛け難い。気になるのは分かるが、気にし過ぎはいかんですぞ」

呉の宿将たる黄蓋の言葉だけに、説得力はあるが何故か不安は消えない。

「何か嫌な予感がするのよねぇ。こう、背中にピリピリっとした感じがあって」

勘の鋭い彼女の嫌な予感という一言は、付き合いの長い周瑜と黄蓋に僅かだが不安を感じさせた。
こういう予感は外れてほしいだけに、なまじ勘が鋭いのも考えものだ。

「おいおい、戦の寸前で不吉な事を言わないでくれ」
「分かってるわよ。でも何も言わないで何かが起きるより、言った方がまだ気が楽でしょ」
「それはそうじゃろうが……」

気が楽になるだけで、不安には変わりない。

何もないと報告を受けたばかりだが、つい周囲をキョロキョロと見渡してしまう。
前方には固く閉ざされた城門、右と左はほとんど何も無い荒野。
そして後ろには自軍の、そのさらに後方には余所の兵士が大勢。
仮に後ろからこられたとしても、余所が被害を受けるなら問題ないかと割り切り、話を再開する。

「後ろから来る可能性は？」
「低いな。虎牢関に着いた時点で伏兵も無く、ここで後方を突くのは無理だ。まぁ、単体で動いているなら可能性はあるが」

単体で動くという言葉に、全員揃って泗水関の戦いを思い出す。
突如一人で現れて戦場を混乱させ、颯爽と去っていった一刀のことを。

「……念のために後方に隠密放っとく？」
「念のために……な。あくまで偵察としてな」

不安要素があれば、万全を尽くしたくなるが軍師という人間。
かといってあまり人数は割けないので、偵察用の隠密を後方にいる軍勢に紛れ込ませる。
何かあればすぐに報告するよう言いつけて、最後尾の曹操軍とその前にいる袁紹、袁術軍へと放つ。

「これでいいだろ、雪蓮」
「ひとまずはね。さぁて、お馬鹿さん達からお小言が来る前に、そろそろ動きますか」

視線を洛陽へと移し、攻城戦へと動き出す。
兵士達を先導して最前線に立ち、号令と銅鑼の音と共に戦闘が開始

された。

「連合が動いたわ。総員、迎撃態勢を！　奴らを中に入れるんじゃないわよ！！」

『了解！』

かくして始まった戦いはまさしく総力戦だった。

数の利を活かして戦う連合と、それを迎えうつ董卓軍。

大きな策も無い力と力のぶつかり合いをしながら、軍師は僅かな隙も見逃すまいと戦況を眺める。

ここまで来たら、ほんの少しの隙やミスも許されない。

「矢はあまり撃ちすぎないで。門の所にいる敵兵には、城壁から岩とかを落として迎撃。間違っても武器は落とさないで！」

場の流れを読みながら、隙を与えないように慎重に指示を出していく。

ここを落とされれば逃げる場所は無いのだから。

「くっ、やっぱり数の利は向こうにあるわね。恋のお兄さんがだいぶ削ってくれたみたいだけど、まだ多すぎる」

籠城という戦法のお陰で、綱渡り的な戦況に陥っている董卓軍。

このまま持久戦を維持するための細い糸を踏み外せば、そのままあっという間に崩れてしまう。

それだけはなんとしても避けなくてはならない。

「報告。先陣が孫策軍と知った華雄様が、出陣すると言って暴れています」

「あぁ、もぉ、予想通りの行動してくれて。意地でも抑えなさい！

出て行かれたら間違いなく負けるわ！！」

返事をしながら必死の形相で持ち場に戻る兵士だが、その後彼を見た者はいない。

というのは冗談で、暴れる華雄を押さえようとして軽傷を受けた。

そんな大忙しの城内に、一報が飛び込んで来た。

「報告！　長安より呂迅殿と魏延殿が帰還、陛下を救出し十常侍の残党を片付けて来たと！」

待ち焦がれた報告に城内が活気付く。

あっちこっちで雄叫びが上がり、士気が一気に膨れ上がった。

「わかったわ、これでもう好き勝手に戦えるわね。全軍、もう脅しも何もないから、思う存分戦うわよ！」

『御意！』

何もきにせず思い切りやれると分かると、反抗は勢いを増した。

運んで来た大き目の岩に恨みを籠めるかのように落とし、城門にくっ付いていた敵兵の頭を兜越しに割る。

一時退こうとすれば、矢を放って後方にいる部隊を潰す。

前に出れば落石、後ろに下がれば矢の雨とあって、孫策軍の兵士達は思うように動きを取れない。

「くっ、上手いな。前線の動きがとれなくなった」

「別を押し上げる？」

「いや、それよりも」

指示を出そうとした瞬間、動きを封じられていた前線部隊に何かが降り注いだ。

悲鳴と共にあっちこっちで血飛沫が湧き、バタバタと兵士が倒れていく。
何事かと城壁の上を見ると、そこには右手を左手で支えた少年が立っていた。
前の二つの席で甚大な被害を与えた張本人、呂迅こと一刀の姿が。

「で、出たぞ、あいつが出たぞぉ！」

城壁の上に現れた人物を発見すると、戦場が混乱に包まれる。
先ほど降り注いだ技が劉備軍を壊滅させた、あの技という事もあってこれまでで最も混乱している。

「くっ、これは本格的に一時撤退すべきだな。前線の兵を下げろ、例の氣弾を受けたものはすぐに治療に回せ」
「御意！」

素早い指示で控えていた兵達が怪我人を連れて戻ってくる。
氣弾を受けた負傷者には三人が付き、頭と脚と背中を支えて運んで来た。
三箇所で支えていたお陰で、穴の開いた骨が折れ、筋肉が断ち切れることはなかった。

「奴らが退いて行くわ。撃ちかた止め、矢は限りがあるんだから無駄撃ちしないでよ！」

相手の様子を見てすぐさま指示を出すと、賈駆が一刀に歩み寄ってじっくりと見定める。
恋と同じ赤髪に軽く日焼けした肌、露出した肩から見える刺青のような痣。
そして何より、恋や霞、華雄以上の圧倒的な存在感。

いつも強気な彼女も気後れしてしまう。

「あなたが……恋のお兄さん？」

「……あぁ。俺の名は呂迅、君は？」

「僕は賈駆、董卓軍の軍師よ。経緯はともあれ、助けてもらった事には感謝するわ」

一応の礼は言ったが、彼女には分かっていた。

彼は董卓軍を救いにきたのではなく、恋を助けに来たのだと。

自分達は恋の仲間だから守ってもらえただけで、決して彼自身が仲間になったのではないと。

「それにしても、よく城内に入って来られたわね」

「陛下に秘密の抜け穴を教えてもらって、そこから入って来た。連合にバレないようにするには、それしかないからな」

一時退却した連合を見据え、ぎゅっと拳を握り締める。

孫策軍の他に公孫賛軍と西涼軍を前曲に押し出し、完全に数で押してくるつもりのようだ。

「どうやら、やられる前にやる。という手に出たようだな」

「袁家の馬鹿の考えそうな一手ね」

とはいえ、さすがに数で勝る連合に数で押されたら苦しい。

いかに流れが有利でも、こちらは一つの軍で連戦をしている分、兵士達の疲労が溜まっている。

前曲を交代しながら戦っている連合とは、体力と物量で負けている。

虎牢関でも結局数に押し切られた以上、やはり物量の差は大きい。

「ともかく防戦しなきゃ。できれば、アンタにも手伝ってもらいた

いんだけど？」

半ば願うような申し出に、一刀はしばし考え込む。
そして考えがまとまったのか、連合全体をじっと眺める。

「なぁ、俺達が勝ったら世論はどうなるんだろうな？」
「はぁ？　いきなり何を」
「正直に答えてくれ、俺達が勝ったら余所の民達は、世論はどうなるだろう？」

真剣な表情で再度問いかけられ、賈駆は難しい表情をする。
情報に強い彼女には、勝った先にあるのは何かを予測するのは容易（たやす）い。
暴君という噂が広がっている大陸に自分達の勝利が伝わり、余所の民が暴動を起こす。
その暴動がやがてここまで辿り着き、武人でも兵でもなく、民との戦いが始まる未来。
守るべき民に反抗されて、あの優しい王が耐えられるはずがない。
真実を知る者も少なく、それが伝わることなく大陸が混乱に陥る。

「……しばらくの時を経て、また戦いと混乱に陥るわ」
「やっぱりそう思うか。そこでだ、よければ俺の策に乗ってくれないか？」
「あんたの……策？」
「上手くいけば、その未来を回避して。なおかつ、董卓の命も助かるかもしれない」

告げられた内容に賈駆の目が見開く。
そんな都合の良い一手があるのかと、疑惑の眼差しを向けて。

「……聞かせてよ。そんな都合の良すぎる一手を」
「いいよ。その代わり、最後に必要なのは君の覚悟だ」
意を決して頷く賈駆は、静かにその策に耳を傾けた。

洛陽の決戦（後書き）

戦いの収束に向けて、最後の一手を告げる一刀。
賈駆の覚悟が必要な策は、どのような一手なのか。

洛陽脱出作戦

一時撤退して体勢を立て直し、数に任せて再度の攻撃を仕掛けようとしている連合軍。
その攻撃に備えつつ、董卓軍の主だった顔が中庭に集まった。

「私が董卓です。この度は色々とお世話になりました」

初めて見た董卓の姿からは、とても悪いものを感じなかった。
感じ取れる氣も清らかで、人としてよく出来ている事は感じ取れる。
逆にあまりに清らか過ぎて、少し世界を知らないのではとも取れるが。

「お初にお目にかかります。呂布の兄で姓は呂、名は迅、字は烈堂と申します」
「私は姓を魏、名を延、字を文長と申します」

二人揃って片膝を着いて名を告げて頭を下げる。
一応の礼儀は教わっていたが、相手は世間で何と言われようがかなり高い地位にいる。
この挨拶と振る舞いでいいだろうかと、つい心配になる。

「呂迅さんに魏延さんですね。陛下や泗水関、虎牢関での事はお礼申し上げます」
「ありがたく頂戴します。では早速ですが、私の考えた策をお聞きになって頂けるでしょうか」
「……いいでしょう。ですが、採用するかはこちらで判断します」

懸命な判断だ。

何も聞かずに良し悪しを言うよりは、ずっとマシだ。

「ではお話します。その策とは」

今にも戦いが再開しようとする寸前で、一刀の説明は終わった。
誰もがその内容に驚きを隠せず、一様に賈駆へと視線を向ける。
本人はどこか難しそうな表情で腕を組み、歯を食い縛る。
確かにこの計画が成功すれば自分達は助かる上に、余計な被害は防ぐ事ができる。
だが、最初に言われた通り相当な覚悟が必要だ。

「アンタ、本気でそないなこと言っとるんか」
「これしかないんだ。皆が助かって、尚且つ離れ離れにならない方法は」
「しかし、その為に詠が！」

言い返そうとする華雄を制止して、一刀をじっと睨みつける。

「確かに使えるわ。月も助かるし、皆が離れ離れになることもない。でも、何でアンタはそこまでしてくれるの？　恋がいるから、ってだけじゃここまでできないわよ」

如何に身内がいるからと言っても、ここまで協力する理由が分からない。
普通は指示に従うとか、身内のためだけに戦うとか程度のはず。
それなのに一刀のやっている事は、董卓軍そのものに協力していると言っても過言ではない。
その理由を知るまではと、賈駆は警戒心を露にする。

「……家族でいてくれたから」

「えっ？」
「恋から聞いたよ。俺が戻って来るまで、ここにいる皆が恋の家族でいてくれたって。恋の家族という事は、俺の家族という事だ。…家族を助けるのに、小難しい理屈はいらないよ。大切な存在を守る、それだけだ！」

ぐっと身を乗り出して言い放つと、誰もがその真剣な眼差しに魅入られる。
理屈や理由抜きに、自分の代わりに家族でいてくれた家族を助ける。
それだけの理由で泗水関の戦いに乱入し、劉備軍を壊滅させた。
虎牢関では恋と組んで連合に被害を与えた。
そして劉協を救い出してくれて、今も生き残るための可能性を示した。
本当の家族だったとしても、ここまでの事ができるだろうか。
いや、できるだろうかではなく、ここにいる。
本当の家族に会うためにここまで来て、新しい家族とも言える人物達を助けてくれる男が。

「……分かった。乗るわ」
「詠ちゃん！？」

しばしの間を置いて伝えた容認の言葉に、董卓が驚きの表情を浮かべる。
長年の親友に余計な負担を感じさせたく無いと言うと、賈駆はそれに首を振って答えた。

「月、こんなの負担にならないわよ。僕は月を王にするって決めた時に決意したんだから。泥沼だろうが通り抜けて、汚水を啜ってでも生き延びてみせるってね！」

一刀に負けじと見せる強い決意の籠った目を察し、拳を握り締めた董卓が頷いた。

「分かった。その代わり、今度は私も一緒に泥沼を歩いて、汚水を啜るから。だから、一緒に生き延びよう？」

「当然よ！　皆もいいわね！！」

『応っ！』

賈駆の決意を否定するものは一人もいない。

やってやると気合いを入れる華雄と張遼。

家族のためと張り切る恋。

頑張りますぞと叫ぶ陳宮。

そしてその様子に笑みを浮かべながら、黙って見守る董卓。

焔耶も上手くいったなと親指を立てている。

「そうと決まったら即行動よ。霞とねねは全軍に通告。連合を適当にあしらいながら、少人数ずつで脱出すること。華雄、地下牢に捉えている十常侍の残党が一人残っているから連れて来て。恋、月用に侍女服をお願い！」

方針が決まれば、そこからは軍師の手腕の見せ所だった。

冷静にしっかりと通達できる二人に通告を、当て嵌まらない二人には別の仕事を割り当てる。

「俺達は華雄さんが連れてくる奴用に、適当に服を見繕っておくよ」

「お願い。それじゃあ皆、役目を終えたら全員で玉座に集合！　連絡兵には小まめに状況を伝えるよう、しっかり言っておくように！！」

最後の指示を出し終えると、各々が自らの役目を果たしに走り出す。

全てはここにいる全員が、無事に生き残って共に生きるために。
それからしばらくして、戦況は連合有利へと傾いていった。
再度の攻撃に最初は激しい抵抗を受けたが、それが段々と弱まっていく。

「さすがに限界みたいね。物量で力押しはあまり好かないけど、間違っている訳でもないのよねぇ」

自分が前線に出られない事が唯一の心残りの孫策に対し、周喩は口元に手を当てて考え込んでいる。
何故、劣勢になりつつあるこの状況で、あの男が姿を現さないのかと。
まさかとは思うが、内部で何かあったのだろうかと思案する。

「雪蓮、城門突破と共に雪崩れ込むわよ。どうやら内部で何かが起きているようだ」
「……分かったわ。全軍、反撃が弱まっている今が勝機！　一気に押し切れ！！」

孫策の指示に兵士達が声を挙げ、城門を破らんと押しかける。
やがて固く閉ざされていた城門は壊れ、内部に兵が雪崩れ込む。
それに合わせる様に連合全体が前進を開始、一気に洛陽へと入った。
そこで見たのは、城門が壊れると同時に一目散に退散する董卓軍と、人っ子一人いない静かな町並みだった。

「……どういう事だ？　無抵抗にもほどがあるだろ」
「つぅか、民は全員逃げたのか？　誰もいないじゃないか」

孫策と共に前曲に出ていた公孫賛と馬超が、あまりに無抵抗と静けさに辺りを見渡す。

その横を我関せずと孫策達が駆け抜け、中曲にいた袁姉妹もこれに続く。
被害の関係上、後曲にいた曹操も城門を越えて城へと馬を走らせる。

「なるほど、本当に民は避難しているみたいね」
「いかがなさいますか？」
「城に向かうわよ。ともかく董卓を討った、という形で名は挙げたいからね」

せめてそれくらいをしなければ、ここまで来た意味が無い。
早速向かおうとすると、前にいる余所の兵士達が城を見ながら騒いでいた。

「おい、あれ燃えてるんじゃねぇか？」

この発言に城の方を見ると、確かにまだ薄っすらとだが煙が上がっている。
兵士達に釣られてこれを見た各諸侯は、急いで馬を走らせた。
大した戦果も上げてないまま、城に火を放っての自害などさせないと我先に城へ押し寄せる。

「なんとしても戦果の一つは手にしないと。急いで探しなさい！」
「城内にいるとだけ思わないで。自害すると見せかけて、どこかへ逃げているかもしれぬ。怪しい者は全て捕らえよ！」

各自で指示を出しながら、諸侯達は一様に同じ場所を目指して走り出す。
もしも本当に自害するのならば、自分はあの場所を選ぶと踏んで。
考え無しにただ付いて行く袁姉妹を最後尾に、一同は競うようにその場所、玉座へと走る。

ようやくそれらしい扉を見つけたと思ったら、内部から金属音と叫び声が聞こえてくる。

「今だ、とどめを刺せ！」
「えぇ！　董卓覚悟！！」
「や、やめろっ！　やめてくれえぇぇっ！！」

誰が董卓を仕留めようとしているのかと、一同が扉をぶち破って玉座に雪崩れ込む。
そこで見たのは、一刀に羽交い絞めにされている立派な服装の男の胸に、刃を突きたてる賈駆の姿だった。

「あっ……あっ……」
「っ！　はあぁぁっ！！」

思ったより深く刺さらず、絶命に至らないと分かると刃を引き抜く。
素早く一刀が腕を除け、剥き出しになった喉笛に刃を振り下ろす。
動脈が切れたのか血が勢い良く吹き出し、押さえている一刀と斬り捨てた賈駆に降りかかる。
男は断末魔の雄叫びを上げて、そのまま失血死してしまった。

「はぁっ……はぁっ……」

返り血で真っ赤に染まった刃を床に落とし、ガクリと膝を着く。
すぐに一刀が歩み寄って、眼鏡に付着した返り血を拭ってやる。

「これで満足かい？」
「えぇ、悪かったわね。こんな事に付き合わせて」

ユラリと立ち上がる賈駆を支え、現状を理解できない連合の面々の

方を向く。
足下に倒れている男の後ろ襟を掴んで持ち上げ、連合の面々の足下へと放り投げた。
事切れて人形のように叩きつけられた死体に、一瞬寒気が背筋を走る。

「董卓は彼の軍師、賈駆が討った。けど、誰が討ったかは好きにしていいよ」
「ちょっと待ちなさい！　その前に、この状況の説明をして欲しいのですけど！！」

さっさと去ろうとする二人に、ふんぞり返った袁紹が前に出て尋ねてくる。
態度はともかく、質問の内容は誰もが知りたかった。
何故、部下であるはずの賈駆が主である董卓を殺めたのか。
主殺しと分かっていても、実行に移した理由が。

「そんなのこいつが悪いからよ！　こいつは僕を軍師にしたくて、僕の親友を人質当然に侍女として雇ったのよ！！」

床に転がっている董卓に仕立てた男を指差し、打ち合わせ通りに喋る。
あるはずのない恨みを籠めた目つきは、まさに迫真の演技だ。

「なったらなったで、こいつの言う通りに動かないとあの子の命は無いって脅されて……。あんたらに分かる！？　僕達は故郷で静かに暮らしていたかったのに！！」

血が出るんじゃないかと思うほど、爪が肉に食い込む握り拳。
怒りを露にした表情と返り血が、復讐心を強く強調する。

「あんた達には一応感謝しておくわ。お陰でやっと、こいつを血祭りに上げる機会ができたんだから」

冷笑するかのような表情を浮かべ、このために連合を利用してやったのだと言うように見下す。

「大変だったわよ。こそこそと将軍達を味方に付けて、ここまで戦況を縺れさせたり、上手く騙して民を逃がして、わざと城に出火させてこいつを混乱させて隙を作ったりと。まぁ結局、この人にも協力してもらっちゃたしね」

「気にするな。妹が随分世話になったんだ、出来る限りの恩返しはするさ」

改めて一刀の存在を指摘されると、全員の視線が一刀に集中する。賈駆の復讐心を象徴するかのような、業火の如く赤い髪と強烈な存在感。

この者に妹の呂布の持つ飛将軍と同じような二つ名を与えるとすれば、剛将軍と呼ぶだろう。

戦場以外でこうもしっかりと見ると、戦場とは違った印象さえ覚える。

「……もういいだろう。董卓の首はくれてやる、俺達は賈駆とその親友の子を送らせてもらうよ」

一刀がそう言って部屋の隅に目をやると、恋と陳宮に守られた侍女服を来た董卓がいた。

涙目で小さく震えている辺り、董卓もなかなかの演技派だ。

目の前の光景に捉われていたせいで、ようやく恋達に気付いた連合の面々を放っておいて、一刀と賈駆は董卓の下へ向かおうとする。

「ま、待ちなさい！」
「なんだ？　やるっていうなら相手になるぞ」
制止を呼びかける袁紹を睨みつけ、数歩前に出て全身に氣を纏う。
紅蓮と鮮紅を抜いて、後ろにいる面々を守るように構えを取る。
陳宮が賈駆の腕を引いて恋の後ろに隠れると、恋も殺気を丸出しにする。
「や、やってやろうじゃあり」
震えながらも剣を取ろうとする袁紹に、一刀は鮮紅に氣を纏わせて振り抜く。
言い切る前の何かが横を通りぬけ、後ろにある開けっ放しの扉を切断した。
「……へ？」
轟音を立てて床に倒れた扉の一部に目を見開き、再度一刀へと視線を戻す。
「その扉みたいになっても後悔しないなら、いくらでも相手をしてやる」
纏う氣の量を増やして構える一刀に、思わず誰もが後ずさる。
中には武器を構える者もいるが、一歩が踏み出せないでいる。
そこへどこからか声が聞こえた。
「一刀！　脱出の準備ができたぞ！！」
「分かった。それじゃあ戦うつもりだった人には悪いけど、ここは

撤退させてもらうよ！」

玉座の裏の隠し扉から焔耶が顔を出して準備完了を告げる。
それを聞いた一刀は、懐から取り出した何かを投げつけた。
球体のようなそれは曹操に付いて来た夏侯惇、馬超に孫策へと向かう。

「こんなものぉ！」

避けるまでも無いと三人が揃って斬り捨てると、中から大量の粉が出て彼女達を襲った。

「な、なんだこれは！？」
「ゲッホッ、ゲホッ！　目が、目があぁぁっ！？」
「舌が、口の中が、喉が焼けるぅ！」

斬り捨てた三人がまず粉の被害に合い、続いて周囲にも被害が広がっていく。
中に詰められていたのはどうやら香辛料らしく、目や喉、肌が焼けるように熱い。
特に辛い物が苦手な曹操や、幼い袁術が一番被害を受けていた。
喉や目を押さえ、声にならない悲鳴を上げて床をのた打ち回る。
この隙に一刀達は秘密の抜け道から玉座を脱出、途中で天井に氣弾を当てて崩壊させ道を塞ぐ。

「これで追って来られないだろ。さぁ、早く行こう」

蝋燭の灯りだけが頼りの抜け道を走って突破した先は、城壁のすぐ傍だった。
そこには先に脱出した張遼と華雄が、馬車を準備して待っていた。

馬は一刀と焔耶が乗ってきた二頭、荷車は連合が入ってくる前に城内から運んでおいた物だ。
荷車には恋の家族の動物達が全て乗って、ご主人様の帰還に尻尾を振っている。

「ちょっと待ってろ。すぐに抜け道を開ける！　一刀、それと呂布と華雄も手伝ってくれ」

先頭にいた焔耶が城壁に隠されている二つの鍵穴に鍵を指して回すと、その二箇所に取っ手が現れた。
それを一刀と華雄、恋と共に力一杯手前に引き、重たい城壁の隠し扉を開ける。

「うおっ！？　こんな仕掛けがあったんか」
「さぁっ、早くここから外に」

荷車を通れるギリギリの大きさの抜け穴から外に出すと、すぐさま取っ手の細工を元に戻す。
そして今度は外側の細工に同じ事をして、取っ手を握って扉を閉める。
最後に外側の取っ手の細工も隠せば、もう大丈夫だ。
城壁の外側から押さない限り、この扉は開く事は無い。
最も、城壁に細工した扉なので、よほどの力持ちが数人がかりでないと開けるのは無理だが。

「いいよ、出して！」
「よっしゃっ！　出発や！！」

一刀と焔耶が最後に乗り込むと、馬に鞭を入れて馬車を走らせる。
煙が消えかかっている城を見送りながら、一行はどうにか洛陽を脱

出した。

「ふぅ、なんとかなったか」

どうにか脱出できた事に皆が息を吐く。

動物達は恋に群がり、似たような匂いのする一刀にも懐いて群がる。

「ともかく、これで一段落ね。思ったより疲れたわ」

「でも詠ちゃん、凄く上手な演技だったよ」

作戦通り偽の董卓を殺し、偽の過去を連合の面々に暴露して、賈駆の密かな反乱に見せる事ができた。

表向きは悪政をしていたという事なので、あれで十分だろう。

主殺しの汚名は着せてしまったが、本物の心優しい董卓が生きているならそれでいいらしい。

董卓も名を捨てる事にはなったものの、本人は了承している。

それとなく将軍も味方だと言っておいたので、いなくても不審には思わないだろう。

全ての真相を読みきらない限りは。

「それで、この後は予定通りに？」

「あぁ、長安に行って陛下に会う。そして事の全てを伝えたら、頼んでみよう。俺達が平和に暮らせる国の建国を。名前は……うん、蜀にしようか」

洛陽脱出作戦（後書き）

無事に洛陽を脱出した一行。
向かう先は長安、目指す目標は蜀の建国。
そのために一行は一路、長安へと向かう。

暴走謁見

無事に洛陽を脱出した一刀達。
洛陽で起きた事の報せは、前の二つの関にも伝わった。
特に泗水関にいた穏は、この報告にほっと胸を撫で下ろした。
味方にはならなかったが、まだ敵になるとも決まっていない。
何より生きているという報告が、どんな内容よりも安心感を抱かせてくれた。

（一刀さん。いつかまた、会えると信じていますよ。できれば、戦場以外で）

孫策からの書をしっかりと抱えて、穏は青空に再会の時が戦場でないことを祈った。
同時に事後処理に奔走しているであろう、孫策達は大丈夫かと心配する。
そんな穏に対して、劉備陣営は深く落ち込んでいた。
結局、何もできずに引き上げるのかと意気消沈している。

「申し訳ありません、桃香様」
「そんな、皆が悪い訳じゃないよ。今回はちょっと、いや少し……すごく運が悪かっただけだよ」

ばつが悪そうに下を向いて大きく溜め息を吐く。
慰めようにも言葉が見つからず、運が悪かったとしか言いようが無い。

「ともかく、引き上げる準備をしましょう。これ以上はここにいても無駄です」

「そうだね。でも、怪我人の皆をどうやって運ぼうか？」
『……はぁ』

もはや溜め息しか出るものが無い劉備軍が帰れるのは、もう少し先になりそうだ。
一方の洛陽では、各軍が引き上げの準備をしていた。
大した戦果も無く、陣営によってはただ被害を出しただけの今回の戦。
経営で言えば完全な赤字状態だった。

曹操軍

「ここまで来て、収穫無しとはね」
「申し訳ありません、我々が至らないばかりに」
「別にあなた達のせいじゃないわ。あの呂迅とかいう男の出現、あれが想定外だったのよ」

深々と頭を下げる夏侯淵にフォローを入れる。
想定外というよりも、あれは予想事態ができない出来事。
予想できる人物がいたとしたら、その人物は未来予知が可能な占い師くらいだろう。

「ところで桂花の怪我の具合はどう？」

虎牢関で土嚢の雪崩に巻き込まれた荀？は、左腕を折っている。
指揮には影響がないと言い張り、洛陽まで付いて来たのだ。

「今は天幕で体を休めつつ、指示を出しております。あの様子なら、そう問題はないかと」
「そう、分かったわ。でも無理だけはさせないよう、言っておいて

くれるかしら？」
「承知しました」

指示を受け、頭を下げてその場を離れる夏侯淵。
兵士の指示は他の部下にも任せておいたので、曹操は自分用の天幕で一息つく。
そして改めて、今回の戦の内容を振り返る。
噂にそぐわぬ実力を見せた武人、飛将軍の兄を名乗った人物の武力、そして連合を翻弄させた策の数々。
そのどれもが曹操の魂を振るわせた。
自らの行き着く先のためには、それらを見せつけた面々がどうしても欲しい。

「欲しいわ。張遼に呂布、呂迅、それに陳宮。必ず手に入れてみせるわ」

一人勘違いが混じっているものの、他の三名の評価は概ね間違っていない。
元より欲していた武人二人に、突然現れた呂迅という凄腕の男。
人材を欲してやまない曹操は、なんとしても目を付けた人物を引き入れるため、早くも色々と画策を始めた。

孫策軍

「穏への報告もしたし、早めに合流して引き上げましょ」
「そうだな。怪我人の治療もあるが、ここに長居しても何にもないからな」

さっさと帰り支度を整えている孫策軍、その中心人物達が集まって会合をしている。

そんな中で呂蒙が挙手をして質問する。

「ところで呂迅さん……でしたっけ？　その方の行き先はどこなのでしょうか？」

「そんなもの、分かるわけがなかろう。賈駆とその友人とやらを送ると言ったそうじゃが、故郷が分からん」

憂鬱そうに溜め息を吐いて腕を組む黄蓋の意見に、同感ですと甘寧が答える。

後を追うにしても行き先が分からず、逃げたと思われる隠し通路も途中で崩壊していた。

しかも秘密の抜け道を使ったのか、どこから外に出たかも分からない。

これで追跡しろというのが無理な話だ。

「知ったところでどうするんだ。だが、情報が入り次第調査はするようにしてくれ。いいな、思春、明命」

『御意』

「さっ、話はここまでにしましょ。さっきから煩い虫が耳元を飛んでてね、早くここを離れたいのよ」

鬱陶しそうに耳の辺りを手で扇いで呟いた言葉に、全員が頷いて解散する。

今のは彼女達の間の隠語で、袁術の監視があるからもう何も喋るなという意味だった。

（この状況を打破するためにも、彼の力があるといいわね。……穏もいるし、見つけたら誘う方向も考えましょう）

かくして連合は解散され、各々の領地へと戻って行った。

ちょうどその頃、一刀達の方はというと長安にて劉協に謁見している最中だった。
無事に長安へ到着した後に見知った兵士から上へ上へと伝わり、あっという間に謁見が叶った。
救出作戦で起きた騒動も沈静化し、機能が復活していた事が大きかった。

「以上が、洛陽における戦闘で我々が取った行動の一部始終です」

借りていた抜け道のための鍵を返却し、全員で膝を着いて頭を下げる。
頭を上げていい許可を得ると、顔を上げて洛陽での事を全て伝えた。
表向きに董卓を死亡させるために十常侍の残党を利用した事、本物の董卓は生きている事を。

「なるほど、よく分かった。それでは、董卓は記録上では死亡している事にしておこう」
「ありがとうございます、陛下」

これで表面上は董卓が死亡した事は成立した。
周囲にいる兵士や文官は共に救出作戦をしていた時に見た顔なので、おそらく口を割ることはない。

「ところで、お主達はこれからどうするのじゃ？」
「それなんですけど……。国を造りたいと思います」
「国じゃと？」
「はい。我が師のいる益州で「漢」に属する国、「蜀」を立ち上げたいと思います」

告げられた内容に文官や兵がざわめく。

てっきりここに残ってくれるのかと思っていたようだ。
劉協自身もまさかの展開に、驚きを隠せないでいる。

「なんと……」
「勿論「漢」に属するのですから、定期報告等はちゃんと行ないます」

要するに味方になる代わりに、自分達に必要な国を立ち上げさせてもらいたいという事だ。
前世の記憶から、益州辺りの国名が蜀だった事は覚えている。
陣営の違いと時期が随分と早い分、せめて国名は同じにしておきたいと考えた。
なにせこっちに転生して早十数年。
記憶も曖昧になっているので、いつ頃に蜀を立ち上げるかなど詳しく覚えていない。
だったら時期に拘らず、さっさと立ち上げてしまえと思い、行動に出たのだ。

（どうせ俺っていう、本当ならいないはずの人間がいるんだ。劉備が立ち上げなくてもなんとかなるだろ）

しかも国クラスが相手になれば、自分達に目を付けたであろう、各地の諸侯達も易々と手を付けられない。
下手に劉協に頼るだけでなく、保険の意味も含めて蜀を立ち上げておきたいのだ。

「ふむ……。難しいことを要求するの」
「それは百も承知です。ですが、必要なんです。家族を守るためにも、陛下に降りかかるご負担を減らすためにも」

家族という点に一刀同様に控えている恋達が、負担を減らすためという点に劉協が反応を見せる。

「なるほど、確かにここに置いて朕が庇っては各所が煩そうじゃな」
「どうか、ご理解願えればと」

深々と頭を下げる一同に、劉協はしばし考え込む。
ここから近い益州なら敵に囲まれる恐れも少ないし、師がいるという事は地理的知識もあると考えられる。
ならば確認すべき事はそれほど多くない。

「して、王はどうするのじゃ？」
「それなりの人物になってもらう予定です。表向きは」
「ほぅ？　して、実際はどうなのじゃ？」

面白そうな顔をして尋ねると、一刀は侍女服のままの董卓に目を向けて伝えた。

「董卓さんを王付きの侍女として扱いつつ、裏で蜀の舵取りをしてもらいたく思います」

この事は移動中の馬車で伝え、本人にも了承を得ている。
王として表舞台には立たず、これまでに培った知識等を生かして影から蜀を支える。
勿論、立場は侍女なので相応の仕事もしてもらうが、家事は得意だと言っているので問題はない。
考えてみれば、家事上手な王というのも珍しいが。

「ふむ……確かにそれなら内政等は大丈夫じゃろうが。問題は表向きの王じゃな」

「それなんですよねぇ。私の師は太守ならともかく、王として振る舞えるかと聞かれると……」

酒好きなのは目を瞑るとしても、師の二人は王としては微妙なところだ。

太守を務める桔梗は振る舞いや礼儀、内政にも精通はしているが、基本的に豪快で細かい事を嫌う。

以前も仕事で細かい誤字脱字を指摘したら、大勢の前でうるさいと逆ギレして酒に付き合わされた。

あげく、翌朝まで精気を抜かれてしまってその日は仕事にならなかった。

もう一方の紫苑は桔梗に比べれば大人しく、なかなか強かな性格をしている。

だが問題は別にあった。

それは異常なまでの雷嫌いと、人目を気にせず誘惑する所にあった。

雷が轟く日は一日中、なんと言われても部屋から出ずに枕を抱えて掛け布団の中に籠る。

人目を気にせず一刀を誘惑して寝所に連れて行く姿も、周囲から呂迅依存症だと言われるぐらい。

とてもじゃないが、表向きだとしても王には推挙できない。

「だからって、僕達の陣営からも出せないわよ？」

それは言われるまでも無い。

死んだ事になっているので、裏の王にしかなれない董卓は最初から除外。

続いて候補に上がるのは賈駆だが、彼女には主殺しの汚名がある以上は不可能。

最も、彼女も董卓と共に王付きの侍女になって姿を隠し、陰から蜀を支えてもらう予定だが。

「こうして見ると、やっぱりいないもんだね」

残っているのは兄がいればそれで良しという、政治などは全く分からない恋。

一刀に蹴りを食らわそうとしては、恋にどこかに放り投げられて擦り傷の増えた陳宮。

突撃指令しか出さなそうな華雄。

戦闘以外での面倒事には関わりたくないという張遼。

「……もう一人くらい、まともそうな人材はおらんのか？」

「恥ずかしながら、いません」

即答したものの、本当の事なので誰も反論できなかった。

後ろから一刀の服を指で摘まんで、何か言いたげに引っ張っている恋を除けば。

「どうしたんだ、恋？」

「アニィが王様やればいい」

『……はぁぁぁっ！？』

しばしの沈黙の後に響いた驚きの声は中庭にまで響き、見回りをしていた兵士達を驚かせた。

「ちょっ、何を言い出すんだよ恋！」

「……駄目？」

首を傾げながらウルウルした瞳で見上げられて、耐えられる人はいるだろうか。

否、唯一人としていない。

せいぜい一刀が兄の威厳で辛うじて持ちこたえたくらいだ。
陳宮はがっくりと膝を着き、鼻血を垂らしながらメロメロ状態に陥っていた。
董卓と張遼、賈駆は頬を染めて視線を外し、自分にそんな趣味は無いと激しく葛藤する。
華雄に焔耶は床に頭を打ちつけて、どうにか堪える。
そして劉協他、護衛の兵や付き添いの文官は耐性が無いために見惚れてしまった。

「……さ、さすがは恋。ここで最上級の甘えを出すとは」
「アニィ？」
「決めた、朕は決めたぞぉ！」

何を決めたのかは分からないが、全員の視線が劉協に集中する。
未だに床にぐったりと倒れて鼻血を流す陳宮を除いて。

「表向きの王に呂迅を採用する。皇帝としての勅命じゃあ！」
「はあぁっ！？」

こんなところで皇帝だけに使える最終兵器、勅命を使ってきた。

「陛下、それは職権乱用ですよ！」
「構わぬ、使える権利は使ってこそ意味がある。これ、権力者の特権じゃ！」
「ひでぇ！？」

もはや皇帝の前だとか、そういうのを抜きにしてのやり取りだった。
どこか黒いオーラを放って独裁者的な発言を繰り返す劉協に、周りはただご立派になってと涙を流している。
誰一人として、この暴走は止める気はなさそうだ。

「嫌ならもう一つ選択肢をやる。大将軍の地位に就いて、朕の婿となれ！」
「はぁっ！？」
もう一つの選択肢と聞いて安心したのも束の間、突然の婿入り話に誰もが驚いた。
「皇帝の婿となれば、誰も手出しはできん。そうじゃろ？」
「いや、それは確かにそうですけど……」
「安心せい、董卓らはお主の直属の部下にすればよかろう。おっと、董卓と賈駆は侍女じゃったな」
別にそういう問題ではなく、何故に婿入りなのかを聞きたいのだ。
確かに大将軍の地位に就いた皇帝の婿とその直属の部下なら手出しは出来ないが、だとしても突拍子すぎる。
「おそれながら申し上げます。よろしいでしょうか？」
ここで意外にも焔耶が発言を求めた。
誰もが問題の修正を願い、視線を焔耶に集める。
ところが発言を許された焔耶が口を開いて告げたのは。
「一刀には私か、穏という者が嫁入りする予定なので、陛下といえども婿入りはできません」
それを聞いて一刀は思いっきり転んで顔を打ち、痛そうに鼻を押さえた。
「なんじゃとぉ！　何者じゃ、その者は」

「私と一刀が旅先で出会った人物です。同い年で眼鏡を掛けて、少しぼんやりしていて。それと……胸が、これくらいで」

手で大体の大きさを示すと、一刀は再び転んで今度は額を打ち付けた。

何度も転ぶ兄の姿に首を傾げつつ、恋はアニィのお嫁さんは恋の家族と呟く。

「そうだ！　今日から私の事を、お姉さんかお姉ちゃんと呼んでいいぞ」

「……魏延お姉ちゃん」

ニコリと笑って姉と呼ぶと、その可愛らしさに陳宮が血を吐いて倒れた。

「待て、待てって！　気が早いだろ、俺はまだ誰も嫁にする気は」

「はっ！　胸で思い出したが、桔梗様や紫苑様も一刀の嫁になりたいと言っていたんだった」

「いや、そこで思い出すのは失礼じゃない？　確かに特徴的だったけどさ！　って、師匠と紫苑さんも!?」

巨乳な点は否定しない一刀に、張遼は面白そうな表情を浮かべた。

この時、華雄と賈駆は彼女に先端が尖った黒い尾が生えているのが見えた。

「特徴的ってどんくらいなん？」

ニヤニヤ笑いながら問い掛けると、焔耶は最後に見た時の大きさを手で示す。

その大きさは、ただでさえ胸囲のある焔耶と穏をも凌ぐものだった。

それを聞いた劉協は、椅子から立ち上がっていきなり服を脱ごうとしだした。

「そんなに呂迅は胸の大きな女子が好きか。だが安心せい、朕とてこのような緩めの服だから分かり難いが、これでもなかなかの」

腰元の帯のような物を取ろうとした時点で、さすがにそれはと女官達が止めに入る。

抵抗する劉協だが、あらかた服は脱いでしまったので、胸の大きさは既に目に見えて明らかだった。

恵まれない体格の割にはボリュームがあり、少なくとも夏侯姉妹と同等の大きさはある。

あくまで少なくともなので、下手をすればそれ以上かもしれない。

サラシなどで固定していないので、抵抗するたびに揺れる胸が存在感を主張している。

「なぁアンちゃん、ほなウチもイケル口やろ？　ほれほれ、なかなかのもんやろ」

「なっ！　張遼、貴様も一刀の嫁の座を狙っているのか？　これ以上敵を増やしてたまるかぁ！！」

「だあぁっ、やめろ焔耶。陛下の前で殺傷事は。張遼さんも、冗談はほどほどにして。華雄さん達も見ていないで手伝って！」

鈍骨砕を持って殴りかかろうとする焔耶を押さえ、張遼に誘惑される一刀の姿に華雄も賈駆も唖然とする。

本当にこれは陛下への謁見なのかと再確認しながら、ふと隣に視線を向けた。

クスクスと笑う董卓の笑顔と、お姉ちゃんがいっぱいと呟いて表情を緩める恋を見て、ようやく現実に引き戻される。

「はぁっ、とてもじゃないけど僕には収められないわ。悪いけど華雄、何か締めの一言お願い」
「な、なに？　う、うむむ……」
いきなり無茶振りをされて迷う華雄だが、どうにかこうなった原因を導き出した。
そして至極真面目な顔で、締めの一言を言い放った。
「なんという巨乳無双！」
数時間後、事態はようやく納まり、一刀が泣く泣く表向きの王を引き受ける方向で話は終わった。

暴走謁見（後書き）

混沌とした謁見は無事？　に終了。
次回から舞台は益州に移ります。

いざ巴郡へ

色々と大変な目にはあったが、どうにか蜀建国の許可は得た。
今はそのために必要な手続きを終え、劉協の書いた書を持って益州へ移動している。
既に劉協の指示で使者が先に向かっているそうなので、そうそう大事にはならないと思われる。
あくまで、建国の事についてはだが。

「帰ったら、あっぅ。多分、桔梗様も紫苑様も、ひぃん。宴の……準備をおぉっ！　し、しているんじゃないか？」
「あるね、あの二人なら。酒を溢れるほど用意してさ」

移動中の馬車の中で話す一刀と焔耶の頭の中に、樽いっぱいの酒を準備している二人の姿が思い浮かぶ。

「そ、それはそうと一刀ぉ。こいつら、なんとかしてくれよぉ」

涙目で訴えてくる焔耶は現在、一刀の肩の上に乗っかっている。
というのも、恋の家族の犬達が近寄ってくるからだ。
焔耶は昔から犬に懐かれやすいのだが、本人は何故か犬嫌いという役に立たないスキルがある。
しかも持って生まれた敏感肌のせいで、懐かれた犬に舐められては反応してしまい、余計に犬嫌いになってしまった。
今も逃げてはいるが、中型犬の張々に脚を舐められて反応している。
耳元で艶っぽい声が聞こえるため、一刀の理性も揺らぎかけている。

「恋、なんとかできない？」
「……セキト、お願い」

恋が抱えているコーギーのセキトに頼むと、一声ワンと吠える。
すると焔耶や一刀に纏わり付いていた犬達が離れ、恋の傍に集まっていった。

「た、助かったぁ」

ほっとした焔耶は慎重に一刀の肩から折り、できるだけ犬達から離れて座る。

「焔耶、あんた犬嫌いでよく武人なんてやっているわね」
「いいだろ別に！　誰にだって苦手な物の一つや二つはあるぞ！！」

呆れた表情を浮かべる詠に焔耶が反論する。
正式に仲間になるに辺り、真名を交換した一刀達。
董卓は月、賈駆は詠、張遼は霞、陳宮は音々音、そして華雄が菖蒲（あやめ）というらしい。
だが、華雄は幼い頃から生涯を共にする者にしか、真名を呼ばれたくないと決めているらしい。
なので、信頼の証に教えはするが呼ぶのは止めてほしいと言ってきた。
そういう理由なら構わないと、一刀と焔耶も承知して菖蒲ではなく華雄と呼んでいる。

「それには同感だな。私も待つのは苦手だ」
「あんたの場合は苦手じゃなくて、待つとか我慢とかする気がないんでしょうが！」
「へうぅ……詠ちゃん落ち着いて」

いつも通りのやり取りに、馬車を操る霞からも笑い声が聞こえる。

すると、ふと何かに気付いたのか、一刀に問い掛けて来た。

「なぁ、一刀。ウチ、今気が付いたんやけど、なんで恋とは真名の文字数が違うん？」

言われてみればと、誰もが気になった。

今までは戦闘だの謁見だので忙しかったので気にしなかったが、確かに気になると言えば気になる。

普通、兄弟姉妹は同じ文字数なのに、どうして文字数が違うのかと。

「あぁ、俺達が生まれた邑の昔からの風習だよ」

「風習ですか？　良ければ教えてください」

「いいよ。まず俺の真名の形は本来、「一刀」じゃなくて「刃（やいば）」なんだ」

本当の真名の形と告げられ、誰もが首を傾げる。

その様子を察した一刀は、懇切丁寧に説明を始める。

自分の邑では付ける文字の形を崩し、別の二文字か三文字にして真名を付ける風習があると。

一刀も本当の形の「刃」を「一」と「刀」に分けて、今の一刀となった。

つまりは二文字の「一刀」という真名は、一文字の「刃」という意味合いで扱っているという訳だ。

「なによ、その変な風習は」

「前に長老に聞いたら、その方が真名を付ける幅が広がるからだろうって、笑って言っていたよ」

ちなみにその長老の真名は白羽（はくう）。

「白」と「羽」を組み合わせて「習（しゅう）」という一文字で扱っている。

長老の話が本当なのか冗談なのかは不明だが、詠は頭が痛くなってきた。
そんな理由で文字の形を崩し、意味合いが一文字なら二文字でもいいのかと。

「一説では本当の意味を隠す隠れ蓑、っていう説もあるけどどうなのかな？」

口に手を当てて考える一刀に、額を押さえた詠は知らないわよと呟く。
そこへ今度はねねが口を挟んでくる。

「でしたら、恋殿はどうなのです。一文字のままなのですよ」
「恋みたいな真名は例外だよ。文字の中に「心」が入っている文字は崩しちゃいけないんだ」
「？　……なんで？」

当の本人が首を傾げて尋ねると、これも一刀が答えを返す。

「心が入った文字を崩すのは、その子の心が悪くなるって、俺達の邑では言われているからだよ」
「なるほど、心を崩すのは悪の道に進むように思えるものね。その点は納得できるわ」

つまりは「想」や「思」のような文字も、崩す対象からは外れる事になる。
変り種では「愛」という文字も、一応「心」という形が含まれているので除外するそうな。

「勿論、親の意向で崩さなかったりする場合もあるよ。でも俺達の

家は邑でもそれなりの家系だったからね、昔からの風習に従ったんだと思うよ」

説明を終えると全員で感心したように頷く。
最初の文字崩しの理由はもう分からないが、心が入った文字を崩さないのはよく分かる。
そのせいだろうか、恋がここまで純粋な心を持っているのは。

「はっはっはっ、どうりで恋がそんな性格しとる訳や」
「崩れるどころか、昔とまったく変わらんからな」
「そうだろ、そうだろ。これぱっかりは邑の風習に感謝だな」

付き合いの長い一刀と霞、華雄が言うと妙に説得力がある。
これぱっかりは長く付き合わなければ分からない。

「……」
「ん？　どうかした、焔耶」
「えっ？　い、いや別に」
「そうか？　何かあったら早めに言えよ」

分かったと返して、焔耶は再び同じ事を考え出した。
今の話が本当で、一刀の真名の本当の姿が「刃」ならばあの時の様子も納得できると。
自分達が旅に出るきっかけとなった、一刀と恋の故郷襲撃事件。
盗賊は一刀が壊滅させたが、帰って来た一刀の様子は明らかに変だった。
今までに見ていた一本の刀としての武はどこにもなく、まるで研ぎ澄まされた刃そのものだった。
触れるものを切り裂くような目つき、誰も近づけない雰囲気。
もしも一刀の真名が崩された本当の意味が、そこにあったとしたら。

普段は何かのために振るう武を持つ一本の刀。
だが、何かの条件を満たす事で隠されていた刃が姿を現す。
勿論、刃としての姿が本当の一刀だとは思えない。
だとすると、何故両親は刃という字を崩して真名を与えたのか。
一刀と恋の両親が亡くなってしまった以上、誰もそれを知る者はいない。

「なぁ、一刀」
「何？」
「……いや、なんでもない」

焔耶の言動を理解できない一刀は、首を傾げながら近寄って来た犬を抱かかえた。

（今はいい。今は、普段の一刀がここにいるんだからな）

あれ以来、一刀が刃のようになったことはない。
それなら今は気にしなくていいと判断して、ゆっくりと目を閉じた。
この日は道中にあった洞窟で野宿をする事になり、一行は体を休める。
見張りの一刀は火の番をしながら、辺りを警戒する。
すると何かの気配を感じるが、すぐに警戒を解いて洞窟から出る。

「……出て来いよ、貂蝉」

林の中に呼びかけると、自分をこの世界に転生させた張本人、貂蝉がターザンのように木の中から姿を現した。

「ご主人様あぁぁっ！　お久さあぁぁぁっ！！」
「どぉうりゃぁぁっ！！」

枝で車輪をして勢いをつけて飛び込んできた貂蝉の腹部に、身を屈めてカウンターの要領で拳を叩き込む。
しかも氣を籠めた渾身の右ストレートを。

「ごぶあぁっ！」

さすがの筋肉の鎧もこれに耐えられず、大地にひれ伏した。

「余計な挨拶はいい。それより、まだ掛かりそうなのか？」
「い、いいえ、今回の戦の成果で充分になったわ。さすがご主人様ね。それとこのパンチもさすがね」

起き上がって筋肉な体で腹を押さえて女座りする姿は、正直目の毒以外の何物でも無い。
だが一刀はもう慣れていたので、呆れるだけで何も言わなかった。

「ということは、俺という存在は外史に固定されたんだな？」
「えぇ、お陰でこの外史の未来に待ち受ける歪みは修正できたわ」

貂蝉が現れた理由は、一刀という存在が外史に固定されたからだ。
そもそも一刀が転生した最大の理由は、来るべきはずだった外史に行けなくなった事で発生した、歪みを修正するため。
そのために最も必要なのは、一刀という存在が外史に固定される事だった。
固定されるために必要なのは、長い時間と知名度。
十数年に渡る長い時間と、これまで触れ合って来た人々や戦いで挙げた知名度。
これらが合わさり、ようやく一刀という存在は外史に固定された。
貂蝉は一刀が転生した夢の中でこれを説明、定期的に状態を伝えに

来ている。
同時に何かしらの術で、固定されていない分を補ってくれていた。
「もうご主人様は本当の意味で自由よ。お疲れ様」
「そうか、よかった。これでお前との付き合いも終わった訳だ」
正直言うと、存在が固定された事よりそっちの方が嬉しかったりする。
毎回会うたびにあんな登場をしては、拳か蹴りを浴びせるのも飽きたからだ。
「そうなのよねぇ、これが最後ともなると寂しいわ。別の仕事もしなくちゃいけないんですもの」
「なら早く帰れよ、俺の事はもういいんだろう？」
「いいえ、実はまだ伝える事があるの」
まさか何か面倒な事が起きたのかと思ったが、そういう訳でもなかった。
なんでも、一刀を外史に固定するのを邪魔した道士が二人いたそうだ。
しかしこの二人は外史の管理者によって捕縛され拘束、管理者の長より罰を受けた。
それは全ての術と記憶を失い、外史に転生する事だった。
しかも何の因果か、この外史に転生したそうな。
「……マジで？」
「大マジよ。確か二人とも、ご主人様より一つか二つ年下だったかしら。あぁ、大丈夫よ。記憶も術もないから狙われる事はないわ。今はどこにいるのかしら」

そういう問題かとツッコミたいが、狙われないならいいかと納得する。

「じゃあ、何で伝えてくれたんだ？」

「そりゃあ、少しでも長くご主人様とお話したいからよぉ。まだまだお別れはしたくないもの」

「そうかそうか。だが俺は断る！　さっさとぉ……帰れ！」

立ち上がった貂蝉の下顎に氣を全開にした右アッパーを叩き込む。

殴られた貂蝉は「ぶるあぁっ！　バイバ〇キーン！！」という言葉を残して光に包まれて消えた。

おそらくは仲間がいつまでも帰ってこないので、引き取りに来たのだろう。

「まったく、あの外見と性癖がなければ世話焼きのいい奴なのに」

この世界に慣れていない時は、色々と教えてもらった。

この世界では三国志では有名な武人が、全員女性になっている事。

姓と名、字の他に真名という物が存在すること。

さらには一種の想像でできた世界なので、本当にあった後漢とは婚姻に関する考えが違うこと等。

道理で師匠のはずの桔梗が、平気で弟子の自分を狙う訳だ。

そんな事をブツブツと文句を言いながら洞窟の中に戻って座ると、近くに寝ていた恋が目を開けた。

「……アニィ？」

「あっ、ごめん。起こしちゃった？」

「うぅん。……おやすみ」

首を振ったかと思いきや、すぐにまた眠ってしまった。

しかも一刀の膝の上に頭を乗せて。

「はぁっ……おやすみ、恋」

優しく頭を撫でながら番を続ける一刀の表情は、だいぶ穏やかになっていた。

翌日の夕刻、一行は巴郡に到着した。

必要な手順を踏んでしばし待つと、城門が開かれた。

そこで待っていたのは。

「よく戻ったぞ馬鹿弟子！」

「ぬおぉぉっ！」

奇襲のラリアットを喰らわそうと、勢いよく飛び込んできた桔梗だった。

一刀は咄嗟にマトリックスのように仰け反って回避する。

回避した先にいた恋も回避すると、後ろにいたねねにそのまま突っ込んだ。

「のわあぁぁっ、邪魔じゃあっ！？」

「ぶむろっ！？」

ぶつかった二人はそのまま転がり、桔梗は上手く起き上がったが、ねねは地面にひれ伏した。

「あらあら、桔梗ったら。そんなにはしゃいじゃって」

友人の様子をニコニコと笑いながら、紫苑も姿を現した。

目の前では桔梗が一刀を抱き締め、クルクルと回っている。

「は、放してください師匠。周りの目が」
「細かいことは気にするな！　それにわしらはお前の部下になるんじゃ、師弟関係は解消じゃ！！」
年甲斐もなく喜ぶ姿に、思わず焔耶にも笑みが零れる。
他の面々の目はというと、恋と気絶中のねねは向けていないが胸元に向けられていた。
謁見の際に焔耶に聞いた以上に育った胸と、自分の胸を比較してため息を吐く。
「へぅ……大きい」
「化け物めっ！」
「垂れろ！」
単にがっかりする月はともかく、言いがかりをつける詠と華雄は言っていて悲しくなった。
自信のあった霞も、勝ち目がないと呟いて膝を着いている。
「桔梗様、それ以上回っては一刀の目が回ってしまいます」
「おぉ、それもそうじゃな。悪い悪い」
「そうよ桔梗、この先は今夜にでも……」
含み笑いを浮かべる紫苑に、一刀は背筋に寒気を感じた。
「そ、それよりも、陛下からの書を渡したいんですけど……」
なんとか話を変えようと、懐から書を取り出す。
すると二人もそうだったと正気に戻り、玉座へと通された。
そこでこれまでの出来事をおおまかに説明し、その旨を認めた書を手渡す。

「うむ、確かに受け取った」
「今日から一刀さんが私達の主ですね。よろしくお願いします」
「そんな、敬語なんてやめてくださいよ」

年上に敬語を使われてはと言うが、立場が上になる以上は仕方がない。
そこはどうにか、慣れるしかない。

「これも時代かのぉ、若い者が台頭に出るとは」
「そうねぇ、私達のような者の時代もそろそろ終りね」

年齢を感じるように溜め息を吐く二人だが、ここでお約束のように一刀の天然誑しが発動する。

「そんな、二人ともまだまだ若いですよ。旅立つ前より、ずっと綺麗になっていますし」

こんな事を言われて嬉しくない女性がいるだろうか。
否、いない。
しかも一刀はお世辞を上手く言えるタイプではない。
イコール、今のは本音。
そこから導き出される答えは、目の前の光景にあった。
久々の天然誑しトークを浴びて、撃沈している二名の女性。
真っ赤になった頬に両手を当てて照れる紫苑と、右手で赤面を隠す桔梗。
どちらもその気になれば、頭から湯気が出そうだ。

「あの、どうかしましたか？」
『なんでもない！』

なんでもあるだろうと、一刀の後ろに控える面々は思った。
武だけではなく、こっちも一流なのかと心の中で一刀に叫ぶ。
しかも天然で。

「あんた、夜道の背後には気をつけなさいよ」
「はっ？」

詠の忠告も、一刀には全く訳が分からなかった。
かくして蜀建国のため、一同は動き始めることになった。
唯一人、詠だけはこの面子で大丈夫なのかと不安を覚えているが。

いざ巴郡へ（後書き）

師の二人との再会。
本当の意味での自由。
次に一刀の下に集まるのはなんだろうか。

新しい環境　そして仲間

久々の桔梗と紫苑との再会を果たした一刀。
その日の夜は嵐のような、というより嵐そのものの宴が待っていた。
あっちこっちで笑い声や乾杯、時には奇声も鳴り響いた。
宴の翌朝に桔梗と紫苑の肌が艶々になっているのは、あえて気にしない事にした。
目の下に隈を作っている一刀が、哀れ過ぎたために。

「いやぁ、今日は調子がいいのぉ」
「本当ね。なんだか十歳は若返ったみたい」

その分、一刀が十歳年を取ったようだとは、誰も突っ込めなかった。
寧ろ、そんな勇気がある人がいたら会ってみたい。
そんな再会から数日が経ち、一刀達は新しい拠点となる成都へと移動した。
元からそこにいた武官や文官達に協力してもらい引越し作業を済ますと、そこからが大変になる。
益州内にいる貴族や豪族、属国となるので陛下も交えての会合や宴。
内政の調整や国境付近の警備に関する調整等、建国に必要な仕事が終わったのは半月後だった。
それでも予め陛下が手を回していてくれたお陰で、予定よりも早く建国ができた。

「はぁっ、疲れたぁ」

執務室の机に体を預ける一刀の周りには、ようやく片付いた書簡の山が重なっている。
ほとんどが建国に関する物なので、目を通さないわけにはいかなか

った。
そこへ侍女服の月と詠がお茶を手にやって来た。

「お疲れ様です。お茶をどうぞ」
「月が淹れたんだから、ちゃんと味わいなさいよ」

二人も影ながら仕事をしなくてはならないのに、合間を縫ってはこうして侍女の仕事をこなしている。
詠はまだ慣れていないのか作業が遅かったり、たまに失敗をしたりする。
ところが月は、元王だったのに異様に家事が上手だった。
手馴れているとは聞いたが、掃除洗濯料理も完璧にこなしている。

「はぁ……美味い」

そこらの侍女が入れるより何倍も美味いお茶を堪能するのが、今では密かな楽しみになっている。
そんな穏やかな一時は、二人の老しょ……お姉様方によって破られた。

「かぁずとぉ！　今日は建国祝いの宴じゃあ！！」
「邪魔者抜きで内々での宴ですので、是非参加してください」

扉を開けて参上した桔梗と紫苑に、おもわずポカンとしてしまう。
いつまでも返事が返ってこないので、二人は秘密兵器を使った。
対一刀専用最終兵器、飛将軍の恋を。

「アニィ、お祝いしよ」

セキトを胸に抱えて笑顔で言われ、堕ちない兄はいない。

一瞬で正気に戻った一刀は勿論と宣言し、月と詠と共に宴会へと連れて行かれた。
翌朝の朝議の席で、ニコニコ笑顔の桔梗と紫苑、気まずい表情の焔耶の肌はやけに艶々としていた。
対称に一刀は、どこか痩せたように少し干からび気味だった。

「その……すまない、一刀」

桔梗様の誘惑に負けてつい、と呟く焔耶に一刀は気にするなと手を振る。

「そ、そういえば陛下が、人材を送ってくれるって言っていたわね」

なんとか場の雰囲気を変えようと詠が口にしたのは、会合を終えた劉協が帰る前に言っていた事。
国を作れたのはいいが、詠が表に出られないのは困るだろうと、将来有望な文官を一人くれるそうだ。
本当はもっと出世してもいいのだが、才能を妬まれてなかなか正当な評価をしてもらえない人物。
その人物に活躍の場を与えたいという事もあり、一刀達の下に送るそうな。
しかもその人物の友人で、同じく上に妬まれているため、正当に評価されていない武官も一緒に。

「うむ。陛下の書かれた評価を読んだが、贔屓目に見てもかなりのものじゃ」
「武官の人も腕が立つらしいわよ。たった一人で黄巾党二十人相手に圧勝したとか」

差し出された評価を記した書を読めば、確かにその人物達の実力は

相当なものだ。
文官の方は独特な考えを持っているものの、基礎はしっかりしているので仕事にソツが無い。
詠の領域には至っていないが、ねねよりは頭がキレそうだ。
武官の方も武器は使わず素手で戦う珍しいタイプだが、成果を見れば実力は大抵分かる。
少なくとも華雄と同等の武力はありそうだ。

「ほぉ、こら面白い奴がくるなぁ」
「うむ。一度手合わせしてみたいものだ。これが本当ならな」
「そうなのです、まだ分からないのですよ！　実際の実力を知るまで、ねねは認めないのですよぉ！！」

この評価が本当ならば、自分の立場が弱くなると察したねねは両手を挙げて吠える。
確かに実際に見てみなくては正当な評価は下せないが、かといって劉協が嘘をつくとは考えられない。
ともかく、実際に会ってみなくては。
そこへ兵士がやってきて、来客の到着を告げた。

「失礼します。長安よりこちらに仕官するよう、仰せつかったという二名が到着しました」

報告を聞いた桔梗は二人を通すように伝えると、玉座に一刀を座らせる。
仮にも王になったのだから、一刀以外がここに座るわけにはいかない。
最低限の振る舞いは月に教わったので、おそらく問題はないだろう。

「両名をお連れしました」

敬礼をする兵士の後ろから進み出たのは、白を基調にしている服を着た二人。
一方は気が強そうなツリ目をした青年。
もう一方は考えが読めなさそうな顔をした、眼鏡をかけた青年。
書に書かれていた外見からして、ツリ目が武官、眼鏡が文官だろう。

「お前達が陛下の下より、こちらに仕官する二名に違いないか？」
「はっ。我が名は姓が張、名が栄、字は白士と申します」
「私は姓を周、名が洸、字を白華と申します」

そつなく挨拶をこなす様子から、ちゃんとした教育を受けて来た事は読み取れる。
だが、敵意を向けているチビッ子軍師は、やはり実力を見なければ気がすまないようだ。

「その名は確かに受け取った。ところで、早速ですまないが実力を見せてくれないか？」
「実力を……ですか？」
「あぁ。聞けばお前達は、正当な評価をされていなかったと聞く。なので、一度この目で確かめたいんだ」

決して誰か一人に責を負わせず、それとない理由で実力を見せるよう促す。
勿論、二人はこれに頷いてくれた。
ようやく実力が発揮できるのだと、どこか嬉しそうな表情で。
まずは周洸の軍師としての実力を見るために、ねねと将棋で勝負する事になった。
早速玉座に卓と椅子、将棋が準備されてねねと周洸の勝負が始まった。

「ふっふっふっ、ねねの実力を思い知らせてやるのです！」

素早く陣を形成して攻撃態勢を整えるねね。
それに対して周洸は、ねねの陣形を読んで、相性のいい迎撃用の陣形を形成する。
ところがその課程で一手、おかしな手を打ってきた。
こういったものにあまり詳しくない武官でさえ、それはないだろうという一手を。
唯一人、詠を除いては。

（へぇ、面白い事するじゃない）

これに乗じた一気呵成の攻めを、陣形の相性でどうにか耐え凌ぐ。
やがて息切れし始めたねねは、一端陣形を変えようと攻めを止めた。
すると待っていましたとばかりに、先ほどの不自然な一手を打った駒を動かした。

「なっ！？」
「これは……」

そこでようやく、ねねや一刀達は気づく事ができた。
先ほどの一手は悪手ではなく、この展開を読みきった上での伏兵。
ついさっきまで何の意味もなかった駒が、ここにきて絶好の位置にいる。

「やっぱりね。あいつ、さっきの時点でここまで読んでいたんだわ」

詠が感心する一方で、状況が拙いと察したねねはすぐさま対応に出ようとする。

ところが陣形の相性で思ったよりも戦力を削られており、思うように立て直せない。
なんとか粘ろうと頑張るが、伏兵の奇襲から総崩れを起こして敗北した。

「ぐっ……負けたのです」
「ふぅ、なんとか勝てました」

背もたれに寄り掛かって息を吐く周洸。
彼の戦法はなかなか独特なものだった。
何の意味も無いタイミングで伏兵を準備し、敵の攻撃は陣形の相性で耐え凌ぐ。
伏兵の分、数では劣るものの、陣形の相性で相手も押し切れない。
そこで一端、陣形を変える等、攻撃の手を止めた瞬間に意味のなかった伏兵が機能する。
体勢を変えようと油断している相手を強襲し、あれよあれよという間に数を減らしていく。
相手の動きから相性の良い陣形を組み、耐え切った処で強襲する。
これを成立させるためには、優れた守備的戦略と相手の動きから陣形を読む洞察力が必要だ。

「徹底した防御から、一瞬の隙を狙った奇襲、そして詰めの総攻撃。なるほど、大した策だわ」

軍師には必ず、何かしら得意な戦略がある。
ねねは攻撃的戦略、詠は迎撃的戦略。
それに対して周洸の戦略は、言うなればカウンター。
相手の攻撃に耐え切って、相手の手が緩んだ瞬間に猛攻を仕掛け、一気に叩きのめす。

「こんな戦略はかなりの洞察力がないと、成立しないわ。あんたの腕は確かね」
「いやいや、お褒めいただき光栄です」
「なら周洸は大丈夫だね。次は張栄、君の番だ」

武官の実力を見るということで、場所を中庭に移して一刀が対峙する。
他にも手合わせしたいという者はいたが、張栄の希望で一刀が相手をすることになった。

「陛下より聞いたその腕前、見させてもらいます！」
「いいだろう、こい！」

互いに素手で対峙して、最初に動いたのは張栄。
右に跳ぶと見せかけて左に跳んで、脇腹狙いの左回し蹴りを繰り出す。
一刀はそれを見切り、右腕で防御すると同時に左手で足首を掴んで右足を払う。
倒れそうになった張栄は右手を着け、体を捻って右足での蹴りで左肩を狙う。

「へぇっ」

咄嗟に左手を放して後ろへ下がって回避し、間髪入れずに突っ込む。
体勢を立て直したばかりで屈んだ状態の張栄は、その体勢のまま足払いを掛けにいく。
だが、これも一刀にジャンプで避わされた。
しかしそれを待っていたとばかりに、屈めていた左足で飛び上がるように立った勢いで、上空にいる一刀へ右拳を突き出す。
これは避けられないだろうと思ったが、予想は裏切られた。

突き出した拳を逆に取られ、そこを起点に体を捻りながら一回転した一刀は、張栄の背中に膝蹴りを叩きこんだ。

「どぁっ！　ぐっ！！」

同じタイミングで拳を前方に放られたので、地面に倒れて体を打つ。
上手く着地した一刀が歩み寄ろうとすると、猫のように素早く起き上がって攻撃を仕掛けて来る。

「まだまだぁ！」

今度は蹴りを交えながら、速さを重視した拳の連打、所謂ジャブというやつだ。
そのジャブを囮に巧みな足技で攻めるが、全ての攻撃を捌かれるか避けられてしまう。
たまに拳が当たってはいるが、決定打にならない無視してもいいものばかり。

「くそっ！　入らねぇ！！」
「いやいや、俺じゃなかったら良いのが二、三発は入っている……よ！」

僅かな拳の隙間を縫って、一刀の裏拳が額に当たる。

「っあ！」

額を押さえながら一端退くが、そこから一刀が攻撃に転じた。
まるで中国拳法のような連携した攻撃に、張栄は防戦一方になる。
それでもよく耐えているが、攻撃時のような動きのキレはない。
最後はボディーブローをもろに浴びて、背中から地面に倒れこんだ。

「げほっ、がっ、はぁっ」
「あっちゃぁ、大丈夫か？」
「な、なんとか……」

腹を押さえて起き上がったものの、脚がふらついている。

「ところでちょっと聞くけど、ひょっとして我流？」
「ん？　あぁ、そうだ……です。誰にも教わる機会がなかったもので」

すると一刀や武将達は、やっぱりと納得する。
動きなかなかいいのだが、多少の無駄と粗さが見える。
我流ということならそれも説明がつく。

「だとしても、たいしたもんだよ。明日からは、その粗さを整えるように修行しよう」
「それは、俺の実力を認めたという事ですか？」
「勿論さ。俺達に力を貸してくれるか？」

差し出された手と一刀の顔を交互に見ると、しっかりと手を握って応える。
これから世話になるという返事と共に。

「初めてです、俺の実力を認めてくれた方は。そのお礼に俺……我が真名、左慈をお預けます」
「なら、俺も真名を預けなくちゃな。俺の真名は一刀だ。それと、無理に敬語じゃなくていいよ」
「そ、そうか？　ならそうさせてもらおう。どうも敬語は苦手でな」

互いの真名を預けた二人は、にっと笑って拳を合わせる。
なんともありがちな男の友情だが、そこに周洸が割って入ってきた。

「熱い友情を交わしている最中、すみません。私も真名を預けたいのですが」

そういえばまだ預かっていなかったなと、全員が今になって気づいた。
別に忘れていた訳ではないのだが、教えるタイミングが無かったのだろう。

「私の真名は于吉と申します。あなた方が認めてくださった我が才、存分に発揮しましょう」
「あぁ、よろしく頼む」

新しく蜀に加わった左慈と于吉。
不遇な扱いをされていた職場からこっちに移れと言われた時は、体のいい左遷かと思った。
だが辿り着いた先の王は、自分達の実力を認めてくれた。
長く孤立していた二人にとっては、何よりも嬉しい事だった。

「よぉし、今夜は歓迎の宴じゃ！」
「って、今日もまた飲むんですか！？」
「おっしゃあ、今日も酒盛りやぁ！」

要は酒が飲みたいだけなのだろうが、新しい仲間が出来た以上は歓迎しなくては。
仕方なく許可を出し、準備に向かおうとした時だった。

「そうそう、女性の方々にお伝えしておきます」

于吉が観戦していた女性陣の方を振り向いて、伝えたい事があると言い出す。
なんだろうと思って耳を傾けると。

「私は左慈にしか興味がありませんし、左慈に手を出す人は許しませんから」

眼鏡の位置を直しながら堂々と暴露した性癖に、思わず引いてしまう。
一刀も左慈に哀れみの目を向けて、一歩だけ下がる。

「てめぇ、まだそんな馬鹿な事言ってんのかよ！　俺にそんな趣味はねぇ！！」
「はっはっはっ、まったく照れ屋ですねぇ左慈は」
「何を言ってるんだ、この馬鹿はぁ！」

怒りに任せた右ストレートが于吉の頬を直撃して吹っ飛ばす。
于吉は左慈の愛は痛いですねぇ、と言いながら平気で起き上がってきた。
どうやら、今のやり取りはいつもの事のようだ。

「さて、わしらは準備に行くかのぉ」
「そ、そうね。じゃあ、お酒の方は任せて」

そそくさと逃げ出す桔梗と紫苑に続けと、他の面々も用事を探して動き出す。

「そ、それじゃあ霞、厨房に料理を頼みに行こう」
「そやな、行こ行こ」

「恋も行く。肉まん、たくさん作ってもらう」
「ねねも行くのですぞ！」

「詠ちゃん、そろそろ洗濯物取り込まないと」
「おっと、忘れるところだったわね」

「焔耶、会場の準備しに行こうか」
「おっ、おぅ」

用事を見つけて動き出した一刀達は、言い争いをしている二人を放って準備に走り出した。
後々に合流して始まった歓迎の宴は深夜まで続き、連日の酒を浴びるように飲んだ。
翌朝、桔梗と紫苑、焔耶は表情こそ前日と同じだが、前日以上に艶々した肌で朝議に現れた。
ぐったりとしている一刀と共に。
なお、何故か于吉の顔にはボコボコに殴れており、左慈は于吉から離れた席に座っていた。
何があったのかは不明である。

新しい環境　そして仲間（後書き）

新たに二名の仲間を加えた一刀達。
正式に蜀が立ち上がるまで、もう少しである。

蜀の一時

諸々の手続きや仕事が終わり、ようやく正式に蜀を立ち上げた一刀達。
漢に属する国という事で民の動揺は少なかったが、逆に動揺したのは連合に参加した諸侯達だった。
あの時逃がした男が王となって国が立ち上がった。
しかも呂布や張遼、華雄に陳宮という旧董卓軍の将と軍師を配下に従えて。
これを知った諸侯達の一部はすぐに配下を集めて、緊急の会議を開いた。

劉備陣営

「はわわ。正直、こんな事になるとは」

泗水関より先で何があったかは、孫策の使いが教えてくれた。
だが同時に、共闘という前提が守れなかったので同盟が破棄された。
というより、そっちが本命で報告は武士の情けのようなもの。
どうにか平原に帰って体勢を整えていたが、この一報は衝撃だった。
実は孫策の使いから聞いた、表向きな逃亡理由を真に受けて、探して仲間にできないかと思っていたのだ。

「あわわ。こうなられては、とても仲間になどなってくれましぇん」
「さすがに国の王や重鎮相手に勧誘をするのは、頭の中を疑われよう」

寧ろ、そんな馬鹿がいたら見てみたいと趙雲が呟く。

「はぁ……。いい人達みたいだから、誘えば力を貸してくれると思ったのになぁ」
「残念なのだ」

溜め息を吐いた劉備が手にしているのは、蜀が建国したという瓦版。内容は王となった一刀の演説や、蜀に対する劉協のインタビューが書かれている。

「和を持って民が、人心が繋がり。繋がりを害する者は、強き武で持って制裁する国……ですか」
「一見すれば武で支配しているように思えましゅが、実際は法を犯さなければ自由という事でしゅ」
「あえて厳しく聞こえるように言う事で、悪人に対する牽制にするものかと」

三国志を代表する軍師の諸葛亮と鳳統だけに、表面に脅かされず客観的に解釈する。
それさえ分かれば、他と変わりない国という事が分かる。
その法律も余所と大きく変わっていないため、普通に暮らしている民からすれば気にする事は一つも無い。
気にするのは益州にいる悪人達くらいだ。

「ともかく、今は様子を見ましょう。正直、今の私達に出来る事は少ないですから」

国外の事も気になるが、今は自分達の領地をしっかりと運営する方が先。
早く補充の人員を確保しなくては思いつつ、一同はそれぞれの仕事へと戻って行った。

曹操陣営

「やってくれたわね、あの男」

噂の瓦版を卓の上に置いた曹操の表情は、これ以上無いまでに笑顔だ。

ただし、背中に背負ったオーラはどす黒く、表情と全く一致していないほど禍々しい。

長年の付き合いの夏侯姉妹も、今の曹操のオーラには気後れしてしまう。

「くっくっくっ。どこまで楽しませてくれるというの、この男は」

今までの人生で出会った中で、唯一欲しいと思った男。

その男の下に欲しいと思っていた人物が全員いる。

しかもその面々を中心にした国を作られ、勧誘は不可能になった。

それでも優秀な人材を欲しがる彼女が、一刀達を手に入れる手段は一つ。

「あぁ、欲しい。呂布も張遼も欲しいけど、やっぱり一番欲しいのはこの男だわ」

「か、華琳様！　華琳様の覇道に男は不要です。それに相手は国王ですから、勧誘などは」

「誰も勧誘するなんて言ってないわよ。同じ土俵に立って、その上で勝利してひれ伏させてやるのよ！」

けたたましく椅子を倒しながら宣言する曹操には、カリスマ性に満ちた雰囲気がある。

いかに黒いオーラを背にしていようとも、その黒みでさえ輝きに見える。
これには部下になって日の浅い楽進達、陳留の警備隊や親衛隊の許緒と典韋も惹かれてしまう。

「待っていなさいよ、呂迅。必ずあなたを、私の足下にひれ伏させてやるわ」

心の奥底に紅蓮の炎を燃やす曹操。
彼を手に入れるためにも、必ず魏を建国させると自身に誓った。

孫策陣営

「調査をする前に、彼らの居所が分かったな。しかも国を作っていたとは」

どうしたものかと、中庭でお茶会をしながら軍議を行なう。
進行役の周瑜がこめかみを押さえて悩み、孫策も勘が働かないのか上の空だ。

「あの……私が接触しましょうか？」

一刀と面識がある穏が意見を述べる。
下手に余所者が謁見を申し込むより、顔見知りという利点がある穏の方が接触しやすいのは確か。
だがあくまでそれは最終手段。
予定通りに孫呉を復活させれば、同じ国同士として謁見がしやすくなるはず。
それで駄目だった場合、穏に動いてもらうのが理想的。

「いや、すぐに接触する必要は無い。こちらの事もあるし、今は様子見に徹しよう」

ここで無理に動いて、予定を狂わせるわけにはいかない。
数年がかりでようやく整った独立の機会。
今はそっちの方が重要なので、外に関心を向けてばかりはいられない。
計画を最終段階へ進めるためにも、様子見程度しかできない。

「すまんな、穏。再会はもうしばらくお預け」
「……はぁい」

しゅんと落ち込む穏には申し訳ないが、これが今の孫呉の現実。
まずは自分達が台頭に出ることが肝心。

「さっ、この話はここまでよ。本題に戻りましょう」

やはり国相手という事で、どこも下手に手を出さずにいる。
そんな渦中にある蜀では、ある人物との再会が行なわれていた。
少々覚束ない足取りで杖をつきながら現れた人物、それは恋を拾って育ててくれた丁原。
ずっと病で床に伏せていたのだが、助けてくれたお礼ということで華佗が力を貸してくれた。
蜀建国の旨を伝えた後、怪我人に治療に当たっていた彼に恋や霞、華雄が頼み込んだ。
これを受けた華佗は早速、丁原の下に赴いて治療を開始。
なんとか病を克服し、こうして蜀まで来られるようになった。

「丁原おかん、病気治ったんやなぁ！」

「息災になられてなによりです」
「……良かった」

再会した三人は有無も言わせず駆け寄り、久々に会った育ての親と触れ合う。
その様子を見守りながら、一緒にやってきた華佗に声を掛ける。

「やっ。悪かったな、面倒な事を頼んで」
「気にするな。病に苦しむ者を救うのが、五斗米道の根底だ。ただ」
「……ただ？」

治療に何か問題があったのかと思ったが、そういう訳ではないようだ。
寧ろ、治療そのものは上手くいったと言える。
病は跡形もなく消え去ったのだが、発見が遅かったために後遺症が残ってしまったそうだ。

「後遺症？」
「あぁ。左脚が不自由になったのと、体に大きな負担が掛けられなくなった」
「負担っていうと？」
「普通に歩いたりするのは問題無いが、重い荷物を長時間運んだりは無理だ。戦に出るのはもっての他だな」

要するに心身共にしっかりと休めていれば、今後に問題は無いという事。
今の体では、長時間の物書きですら危険に繋がる可能性がある。

「悪いな、さすがにこればっかりは俺でも」
「いや、華佗は充分やってくれたよ。危ない命を救ってくれたんだ、

誇っていいと思うよ」
「いやいや、まだ誇るほどじゃないぜ。いつか、あの後遺症ですら治せるようにならなきゃな」

ぎゅっと拳を握り締めて目標を立てる華佗の姿は、見ていて頼もしい。
できれば軍医として残って欲しいが、彼は一箇所に居続けるのを好まない。
大陸を回って医学を学びつつ、各地の病人を治す事を生きがいとしている。

「それじゃあ、無理はさせないようにな」
「あぁ、本当にありがとうな」

しっかりと握手を交わすと、華佗は新たな医療の旅へと去って行った。
遠くに行く背中を見送った一刀は、育ててきた子供達に囲まれる丁原の下へ赴く。
挨拶をするからと恋達には一端離れてもらい、軽く会釈をして話し掛ける。

「初めまして、丁原さん。蜀の王、呂迅と申します。此度はご来訪、ありがとうございます」
「いえ、こちらこそ。死を覚悟していた私のため、医者を呼んで治してくれた事に感謝致します」
「恋を育てて貰った恩返しです。長年、ご迷惑をお掛けしました」

まるで親同士の会話のように喋りながら、丁原のために用意させた椅子に座ってもらう。
最初は自分だけが座るのはと拒否されたが、脚の事を指摘して頭を

下げると、ようやく座ってくれた。

「すみませんね、私だけ腰を下ろしてしまって」

「気にしないでくださいよ。霞や華雄、それに恋のためにも御体を大事にしてもらわなくては」

そう言われては、もう何も言い返す事ができない。

子煩悩な処がある丁原は、育ててきた娘達には弱く、たまにやりかけの仕事を放り出した過去もある。

そんな人に拾ってもらえて良かったと思いつつ、改めてお礼の言葉を伝える。

「ありがとうございます、恋の親になっていただいて」

お礼の言葉と共に微笑みの表情を見せると、丁原も安心した表情を見せる。

「よかったです、あなたのような方が恋ちゃんのお兄様で」

「それは嬉しいですね。兄冥利に尽きますよ」

なんともほのぼのした雰囲気に、一刀はちらっと外に目をやる。

雲一つ無い快晴の空の下で、心地よい風が吹いて木の枝が揺れているのが目に入る。

それを見てある事を決めた一刀は、両手を叩いて後ろに控える月と詠を呼ぶ。

一応、丁原には華佗経由で真実を伝えてあるのだが、この場には真実を知らぬ兵が護衛として存在している。

なので、一刀は王、月と詠はその侍女として振る舞う必要があるのだ。

「なんですか、ご主人様」
「せっかく天気もいいし、外で話そうと思ってね。お茶と何か摘まめる物を頼めるかな？」
「分かりました。すぐに準備しますね。行こう、詠ちゃん」

使われる事に納得しきれずに不機嫌そうな表情を浮かべつつも、仕方ないと割り切って準備に向かう。
ここで反論したら、事情を知らぬ兵士に拘束されてしまう。

「そういう訳で、場所を移します。動けますか？　無理なら私が背負いますよ」
「いえ、大丈夫です。歩くのには問題ありませんので」
「ではせめて、立ち上がるお手伝いを」

歩み寄って差し出された手を戸惑いながらも取り、不自由な左脚に力を籠めて立ち上がる。
左右には華雄と恋、後ろには霞が、倒れそうになっても支えられるように備える。
危ない素振りも無く立ち上がり、肘掛に立てかけておいた杖を手に歩き出す。
後ろには引き続き霞が控え、恋が右手を取って引いている。

「恋、私は盲目ではないのだから、手は取らなくともいいのですよ」
「分かってる……。けど、転ばないか心配」

右足に比べて動きが固く、あまり上がらない左脚。
確かに僅かな段差でも、躓いて転んでしまいそうだ。

「そう、ありがとう」

血は繋がっていないとはいえ、娘の気遣いに微笑んで返す。
上機嫌になった恋に手を引かれながら到着した中庭の一角には、既に桔梗と紫苑がいた。
別に話を聞いて待っていた訳ではなく、偶然ここにいたらしい。
ならば二人も交えてお茶会をしおうという事になり、お茶が届くまでしばし雑談を交わす。
しばらくしてお茶を持った月達と、焔耶とねねがやって来た。

「お待たせしました、ご主人様」
「まったく、人前じゃなかったら文句言ってやったのに……」

ぶつぶつと文句を言いながらも、きっちり仕事はこなす詠。
お茶が入ったお盆を卓に置き、順に椅子に座っていく。
焔耶とねねからは、仲間外れにするなとちょっとだけ怒られたが、そこはご愛嬌。
早速、焔耶達を交えてお茶会をしようとすると、菓子が無いので恋が首を傾げた。

「月……お菓子は？」

お茶しかない事に恋が寂しそうな表情を月に向ける。

「へうぅ、ごめんなさい。人数が増えて二人じゃ運べないので、別の人が持って来るかと」
「そういう訳だから、ちょっと我慢してなさい」

しゅんと落ち込む恋の頭を一刀が撫でてやると、お決まりのちんきゅーキックが飛んで来る。
こちらもいつものように、恋に投げ飛ばされて池に着水した。

「れぇんどっ、ぶぼあぁっ！」

水しぶきをあげて浅い池に放り投げられたねねは、額を打ったのか瘤を作って這い出てきた。
ホラー映画にそのまま使えるように、ズルズルと這い蹲って。
もう慣れた事なのか、ポカンとしている丁原以外は驚いていない。
月もどこから出したのか、救急箱から出した薬を瘤に塗っている。

「あの……今のは」
「いつものことです」

にっこりとイノセントスマイルを向けられては、何も言い返す言葉が見つからない。
そう、と呟いて手元のお茶を飲むことにした。
そこへお菓子を盆に乗せた、侍女服の双子がやってきた。

「お姉様、お菓子お持ちしました！」
「呂布様用にたくさん準備しておきました！」

早足にやってきて卓にお菓子を置き、月をお姉様と呼ぶ双子。
それぞれの頭には大と小と書かれた布が、髪を団子に纏めている。

「ありがとう、大ちゃん小ちゃん」
「いえ、お姉様のためならこれくらい！」
「あぁ……お姉様に褒めてもらえたよ」

うっとりとする双子は、片付けの時は呼んで下さいねと言い残して仕事に戻って行った。

「あらあら、彼女達が詠ちゃんの言っていた双子？」

「そうよ、自称月の弟子」

不機嫌そうな顔で菓子を口に放り込む。
先ほどの双子は大喬、小喬という本来なら孫策と周瑜の妻になるはずの人物。
だが、この世界では何故かこんな処で侍女をしている。
これも外史という世界の可能性なのかと、話を聞いた時の一刀は思った。
ちなみに何故、二人が月をお姉様と呼ぶのかというと、原因は月の家事スキルにあった。
最近雇われたばかりのあの二人は、卓越した月の家事スキルに魅了された。
しかも月が二人に仕事を教えるようになり、双子は揃って狂喜乱舞した。
以来、尊敬の意味を込めてお姉様と呼んで、弟子を名乗っているらしい。

「まぁ、実際問題、月が一番仕事上手じゃからのぉ」
「へう、いつの間にか侍女長にもなってましたし」
「これがあの董卓だと言っても、誰も信じないと思うぞ」

焔耶の発言に全員が無言で頷いた。
そこへ今度は、汗を拭きながら左慈がやってきた。

「おぅ、何やってんだ？」
「お茶会だよ。よかったらどう？　喉渇いてそうだし」

差し出されたお茶に唾を飲み、空いている席に腰掛ける。
鍛錬をして汗を流したのか、勢いよく飲み干していく。
だが、左慈を入れても主要メンバーが一人足りない。

この事に気付いた一刀は、向かいに座った左慈に尋ねてみる。

「なぁ、于吉を知らないか？」

「あいつなら鍛錬して汗を掻いた俺に欲情して飛び掛ってきたから、去勢しろ、って怒鳴って股間蹴り上げて放置してきた」

今頃向こうの方で蹲っているだろうと、さらっと酷い事を言ってのける。

周りもあの性癖なら仕方ないかと割り切り、お茶を啜る。

「今思えば、随分と濃い陣営だよな。俺達」

『確かに』

誰も否定することのできない、確固たる事実。

まともな人の方が少なく、ここにいる顔では一刀に霞、左慈に丁原くらい。

後の面々は何かしら一癖はある。

表向き死亡した家事上手の元王に、主殺しの汚名を着たツンデレ軍師。

暴走猪や家族命の赤い子悪魔、それに付き添う不憫少女。

兵器級の胸を持つ、酒好きで色情狂の熟……お姉様方。

犬に好かれる癖に犬嫌いな巨乳敏感肌少女。

そして今もどこかで蹲っているであろう、同性愛軍師。

「なんだか、逆にウチらが浮いている気分や」

「言うな、俺はまともでいい。あいつの魔の手から逃げるためにはな」

「……王がまともじゃなかったら、下が大変だと思うよ」

一刀がこの発言をした時、どこかの王がくしゃみをしていた。

同時に仲間達も、同感だと頷いて見せた。
そんな、一時の平和な時間だった。

蜀の一時（後書き）

大陸に知れ渡った蜀の存在。
各諸侯もそれを知り、大陸に大きな動きが出始める。

桔梗拠点　　書類無間地獄

蜀が正式に建国して幾日が経つが、やはり仕事という物は増えていく物で。
裏側で蜀をまとめる月と詠に協力してもらい、今日も書類仕事に励んでいた。

「月、これってどう書けばいいんだ？」
「えっとですね……」
「ちっ、またこの馬鹿貴族からの謁見か。大した事もしてないのに、長々と自慢話されてたまるもんですか。却下！」

さすがは洛陽で政をしていただけあって、二人の事務的能力は高い。
教わるべき事が多い一刀は、悪戦苦闘しながらも仕事や礼儀作法の練習をこなす。
さらに武人としての鍛錬も毎日欠かさず行い、大変だが充実した毎日を送っている。
むしろ大変なのは月と詠である。
月は無駄に高すぎる家事スキルのせいで侍女長に任命され、一刀の傍を離れている時は大抵、そっちの仕事をしている。
その仕事をしている最中は、詠が一刀の教師役になるので、こちらも色々と忙しかったりする。

「にしても、あんたもやるわね。華雄や恋みたいに武だけかと思ったら、事務も悪くないじゃない」

口を動かしながらも、三人の手を止まらずに書類を進めていく。

こういった事に慣れっこの月と詠はともかく、一刀にこんなスキルがあるのは意外だ。

「まぁね、一応太守だった桔梗さんの下で仕事していたし」

終わった仕事の山は詠ほどではないが、月よりは少しだけ多い。
決して月が遅い訳ではなく、単純に一刀の方が書くスピードが早いだけ。

「それで、事務仕事にも慣れているんですか？」
「というより、慣れざるをえなかったというか……」
「はっ？　どういう事よ」

疑問の声に答えようとした、その時だった。
部屋の扉が開いて桔梗が姿を現した。

「邪魔するぞ。どうじゃ、仕事の方は」

急に現れた元師匠で、現部下の年上女性に一刀はにこやかな笑みで対応する。

「なんとかなっているって感じですね。月と詠のお陰ですよ」

ありがとうと告げながら、二人の頭を撫でてやるとそれぞれが違う反応を見せる。
褒められた事が嬉しい月は素直に喜び、素直じゃない詠は当然よと腕を組みつつ、表情は嬉しそう。
そんな二人と一刀のやり取りを見た桔梗は、ちょっとだけムッとした。
それを察した月は、すかさずフォローを入れる。

「私達だけじゃありませんよ。桔梗さんがご主人様を事務方面でも育ててくれたから、仕事が捗っているんです」

そつのない見事なフォローに、下降気味だった桔梗の気分が上昇する。

ところがそこへ、一刀から無情な言葉が掛けられた。

「月、悪いけど桔梗さんは俺の事務能力を育てていないよ。俺が自分で鍛えたんだ、桔梗さんの怠業のせいで」

少しばかり恨みを籠めた視線を向けると、上昇中だった桔梗の調子が留まり凍りつく。

不思議に思った月と詠でさえ、一目で何か心当たりがあるのかと察するぐらいに。

仮にも一流の武人で、太守を務めていた桔梗がそんな様子を見せる原因は、何にあるのだろうかと。

「いつでしたかねぇ、重要書類以外の仕事を押し付けられたのは」

「そ、それは……」

「しかも一回きりじゃなくて、それ以来ずっと。知っていますよ、自分が仕事したくないから、事務の修行だと言って押し付けたのを」

旅立ち前の生活中、紫苑と飲んでいる時に酔った勢いで喋っているのを、偶然立ち聞きしたのだ。

恨みも籠めて、後日の閨で散々鳴かせて足腰を立たなくしてやった。

これが夜伽における一刀の初勝利だった。

翌日、仇討ちに来た紫苑に敗北を喰らったが。

「いやぁ、お陰で事務能力を上げざるを得なかったですよ。押し付

けられた仕事を、全部こなすために」

くくくっ、と含み笑いをする一刀から冷たいオーラが発せられる。
左右に座る月と詠は寒気を感じ、鳥肌が立った両腕を擦って暖める。

「そ、それは悪かったのぉ」

さりげなく視線を泳がせながら頭を掻く桔梗に、一刀は上の立場の者として命令を下す。

「ところで桔梗さん。給金七割減半年と、ここにある重要書類以外を半分以上片付けるのと、どっちがいいですか？」

これ以上は無い笑顔を向けながら発した無情な内容に、ここにいる三人が驚く。
給金七割減はいわずもがな、重要書類以外とはいえども、ここには大量の仕事がある。
半分とはいえ、おそらくは書類の山三つ分はやらされる。

「ちょっ、何でそうなるのじゃ。わしが何をした！　過去の恨みか？　いかんぞ、表向きとはいえ王がそんな」
「そんな訳ないでしょう？　原因はこの領収書ですよ」

どこから取り出したのか、大量の領収書を机の上に置く。
詠が手に取って確認すると、それは全て桔梗が提出した酒屋の物ばかり。

「これが経費で落ちると、本気で思って提出したんですか？」
「い、いや、それはその……」
「落ちるわけないでしょ！　宴の際の領収書は全部精算してあるか

ら、これ全部私物の酒って事じゃない！？　って、蜀建国前のまで混じってるし！！」

さすがにそれを経費で精算できるはずがない。
怖い笑みを浮かべる一刀に目を合わせられず、苦笑いを浮かべる桔梗に詠も冷たい視線を送る。
心の広い月でさえ、両手に領収書を持って呆気に取られている。

「さっ、どうします？　半年間給金を七割削って精算に当てるか、仕事を手伝って領収書を出さなかった事にするか」

給金を半年間七割削って精算に当てれば、新たに領収書を持って来なければ支払いは余裕でできる。
本当は三割ほどでいいのだが、残り四割は罰則の意味があるのだろう。
だがそちらを選べば、これ以降の生活費が激減する。
それに比べて、仕事をすれば領収書がここに無かった事になるのはありがたい。

「むむむっ……。分かった、仕事を引き受けよう」
「そうですか。じゃあ頼みますね、これとこれ、それと、これとこれに……」

どんどん積み上げられていく書類の山は、三つ程度ではない。
どう見ても、書類の山が十個分もある。

「ちょっ、こんなにあるのか？　おいおい、そっちは重要な物じゃ」
「いえいえ、これも雑務程度の書類ですよ。重要なのは、もうあらかた片付いていますから」

終わった仕事の山を右手でポンポンと叩き、残りはこれだけだと厚さ三センチの紙の束を左手に取る。

「じゃあ、半分頼みますね。月、詠、残りの半分は三人で分けてやろうな」

ニコニコと残りの半分を三等分して、重要書類の方から黙々と片付け出す一刀。

一回深い溜め息をした詠は、担当する仕事の量が減ったからいいかと、手を動かし始める。

取り残された月も、一刀に質問されたのを皮切りに仕事に取り掛かった。

仕事の量に絶望して頭を抱える桔梗だが、半年間給金を七割も減らされるよりはと渋々筆を手にした。

「それと桔梗さん。そっちのは全部明日までのなので、頑張ってくださいね。それと、終わるまでお酒は無しです」

「こっ、この鬼弟子があぁっ！！」

桔梗の叫びは城中に響き渡った。

紫苑拠点　賑やかなのは好きなんです

「私達の周りも、随分と賑やかになりましたわね」

休憩中、お茶に呼ばれて紫苑の部屋にやってきて、会話している最中の事だった。

昔の事を少し話していると、急に紫苑がそんな事を言ってきた。

「えっ？　えぇ、そうですね」
「最初は桔梗と私と一刀さん、それと焔耶ちゃん。そこから一刀さんと焔耶ちゃんが旅立って、帰ってきたらお友達がたくさん来て」
周りが賑やかになるのが嬉しいのか、最近の紫苑はやけに上機嫌。
月が大喬、小喬と共に持ってきたお茶を味わいながら、うふふと笑い続けている。

「ほんと、周りが賑やかなのって楽しいわね」
「ひょっとして紫苑さんって、自分が賑やかに振る舞うより、賑やかな様子を見るのが好きなんですか？」
「そうね。ほら、私って性格が大人しいから、賑やかにするより見ている方が楽しいの」

確かに普段が大人しい事は知っている。
賊の討伐や夜伽の時を除いて。
云わば、普段の紫苑は羊の皮を被った狼なのかもしれない。
近頃は年齢に関する事を口にしようとしたら、無言で笑みを浮かべて矢を放つほど。
普段の優しさを捨て、獲物を狙う狼のように。

「一刀さん？　今何か、失礼な事を考えませんでしたか？」
「いえ、別に」

平静を装っているが、内心は紫苑の鋭さに焦っていた。

「でも、あぁいう賑やかさは苦手ですわね」

ふと横を向いた視線につられて同じ方向を見ると、左慈と于吉がいつものやり取りをしていた。

華雄との調練を終えた左慈に、手拭いを渡す振りをして抱きつこうとした瞬間に鳩尾に拳が入る。
腹を押さえて前のめりになると、そこに跳び上がってのかかと落しが背中を直撃した。
二連撃のコンボを喰らった于吉は、これが左慈の愛の鞭なんですね、と叫んで地面に屈服した。

「まぁ、誰でも苦手だと思いますよ？」
「こればかりは慣れるまで、放っておくしかないわね」
「慣れたら余計に放置するんですけどね」

それもそうだと、二人の間に笑い声が響く。

「ところで一刀さん。実は私、どうしても叶えたい夢が一つあるの」
「へぇ、どんな夢なんですか？」

気楽に聞いてしまったが、これは致命的なミスだった。
不敵な笑みを浮かべた紫苑が語った、叶えたい夢とは。

「子沢山よ。大勢の自分の子供に囲まれて、その子達が成長したら、今度は孫に囲まれて暮らしたいの」
「……随分と賑やかな夢ですね」
「そうでしょ。そして私は子供や孫の中心で、世話をしながら賑やかな様子を一日中眺めているの」

話を聞いて思い浮かべてみると、やけに似合う状況が思い浮かんだ。
見た目が武人というより、母や保母という印象が強いからだろう。
大勢の子供に囲まれていても、違和感どころか妙に馴染んでいる。

（というより、なんという熟年的な夢なぁぁぁっ！！）

視線を泳がせてそんな事を考えると、紫苑から矢が放たれて頬を掠めて壁に突き刺さった。

「一刀さん。今、年齢的な何かを考えませんでしたか？」

「いいえ、何も！」

慌てて否定しつつも、心読まれたと内心焦っていた。

そうですかと弓を引っ込める姿に安心するが、まだ恐怖は終わっていない。

「という訳で一刀さん。いえ、ご主人様。夢の実現のため、協力してくださいね」

「……はっ？」

「取り敢えず目標は、ご主人様似の息子と娘、私似の息子と娘、外見ご主人様で性格私の息子と娘、そして外見私で性格ご主人様の息子と娘を」

途方も無い事を言い出す紫苑に、もはや一刀は言葉もなかった。

しかも呼び方がご主人様に変わった事に、突っ込む気力も勢いも無い。

「あっ、あのさ。それはちょっと無茶じゃない？　性格はともかく外見は」

「さぁ、そのためにも今夜は頑張りましょうね。ここ三日ほどご無沙汰だったので、満足させてくださいね」

「ちょっ、誰か助けて！　恋、焔耶、桔梗さん！　この際、于吉でもいいからぁぁぁっ！！」

この悲鳴に恋の触覚っぽい二本の髪が、電波らしきものを受信した。

「……アニィの危機」
「恋殿？　って、どちらに行かれるのですかぁ！？」

ねねを置き去りして、音速を越えると思えるほど爆走する恋が部屋に乱入したのは、情事が始まる寸での処だった。
紫苑は悪くないと説明するのには手間が掛かったが、どうにか事態は納まった。
何をしようとしていたのかも聞かれたが、そっちは何でもないで押し通した。

「うふふっ。私は諦めませんよ、ご主人様」

この日の夜、一刀の部屋から一晩中艶やかな声が聞こえた。

焔耶拠点　焔耶の好感度上昇作戦Ｐａｒｔ１

夜中、寝所にいる焔耶は危機感を覚えていた。
長年の旅を終えて一刀の妹である恋にも会え、新しく仲間が大勢できた。
さらに桔梗と紫苑との再会も嬉しいが、それが問題だった。
旅の最中はずっと一緒にいたせいか、他の面々と仲良くしている姿を見ていると寂しくなってくる。

「はあぁ、別におかしい事じゃないだろう。寧ろ、今までの私が特別だったんだ」

そう何度も言い聞かせても、頭の中には一刀と楽しそうに過ごす女性達の姿が思い浮かぶ。

一緒に食事をして楽しそうにする恋、不憫な目に遇いつつも、優しく慰められているねね。
手応えのある相手と調練できて、嬉しそうにする霞と華雄。
長年の時間を経て再会し、色々と溜まっていた物を発散して笑顔になる桔梗と紫苑。
これに穏や劉協が加わったらどうなるのか、想像しただけでも寂しさが増す。
勿論、自分にも向いているのは分かっているが、旅をしていた頃に比べて少々物足りない。

「うあぁぁっ！　迷っても仕方ない。ともかく、一刀の気を私にもっと向ければいいんだ！！」

慣れない考え事をしたせいか、少し吹っ飛んだ結論を出す焔耶。
どんな手段で気を向けるつもりなのだろうか。

「まずは定番だが、胃袋から攻めてみるか」

翌日の午前中、調練をしている一刀と霞の耳に爆音が届いた。

「な、なんやぁ！？　敵襲か！？」
「音はあっちの方だ、行ってみよう！」

二人で音のした方へ走って行くと、厨房からもうもうと煙が上がっていた。
急いで駆け寄ると、勝手口の付近に紫苑と恋がいた。

「恋、紫苑さん。何事ですか？」
「あぁ、ご主人様。それが分からないんです」
「……お昼ご飯の準備。しようとしたら、急に爆発した」

これじゃあご飯が作れないと、涙目で訴える恋を抱き締めてあやしてやる。
そうしていると、厨房の中から咳き込む声が聞こえて来た。
賊か何かが侵入して、この騒ぎを起こしたのかと四人が武器を手に構える。
ところがそこから出て来たのは、全身に小麦粉のような物を被ったボロボロの焔耶だった。

「げほっ、ごほっ。はぁ、はぁ、死ぬかと思った」

フラフラと出てきて膝を着き、息を切らせて咳き込む。

「焔耶、何があったんだ？」
「うひゃっ！　かかか、か、一刀!?」

一刀の存在に驚きながら、今の格好をどうしようかとオロオロする。
それを落ち着けて話を聞くと、どうやらこの爆発は焔耶が原因らしい。
何でも料理を作ろうと準備をしている最中、麺打ち用に置いてあった小麦粉の袋を蹴ってしまった。
蹴られた袋から小麦粉が宙に舞うが、後で片付けようと料理に向かった。
見られるのが恥ずかしいので、窓も扉も閉めて密室になった厨房に小麦粉が舞う。
そこに料理をするため、火を付けた途端に爆発したそうな。

（……粉塵爆発かよ）

前世の記憶から、原因は宙に舞う小麦粉にあると判断した一刀。

宙に舞った量が少なかったのでこの程度で済んだが、下手をすれば厨房が無くなっていたかもしれない。
最も、この時代にそんな知識は無いので、誰もが不思議がっているが。

「ともかく、紫苑さんは被害の確認を。恋は買い出しに行った詠を呼んで来て。霞は野次馬の整理」
「分かりましたわ」
「ん……」
「おっしゃっ」

各自が指示に従い動き出し、一刀は申し訳無さそうにする焔耶の肩に手を置く。

「す、すまない、一刀。私が、慣れない事をするから、こんな事に」

旅立ち前に紫苑から仕込んでもらい、料理の腕はそれほど悪くない。
だが大抵何かをしでかすので、料理には細心の注意を払っていた。
それが料理以外の点で起きようとは、さすがに予想できなかった。
というより、この時代で粉塵爆発を予想する方が無理だ。

「気にするなって。それよりも、焔耶が無事で良かった」

尻尾も耳も垂れ下がった子犬のような焔耶に歩み寄り、持っていた手拭いで顔を拭いてやる。
それだけで過剰に反応し、垂れていた耳と尻尾がピンと立った気がする。
持ち前の敏感肌が、顔を拭かれた事で反応している事もあるだろう。

（こ、これはこれで。んんっ、役得だな。あぁっ）

図らずも幸運な一時を手にした焔耶だが、この後桔梗に烈火の如く怒られましたとさ。

恋拠点　　史上最強兄妹の手合わせ

「はぁぁっ！」

掛け声と共に一刀の紅蓮と鮮紅が風を切り、標的に向けて振り抜かれる。

「ふっ！」

恋が攻撃を避わして方天画戟で迎撃すれば、空振った鮮紅を再度振って弾く。

僅かに空いた脇腹目掛けて紅蓮を向け、恋もそれを柄の部分で防御する。

これらの攻防を僅か二、三秒で済ませると、互いに距離を取ったと思わせて再度突っ込む。

恋の突きを跳んで避け、足場代わりに再度跳び上がり、飛び越しざまに宙返りするように剣を振り下ろす。

「くっ！」

紙一重でそれを避け、着地する瞬間を狙って方天画戟を振るう。

だが一刀は、これを読んでいたように着地と同時に真上に跳び、再度攻撃を回避した。

「アニィ……速い」

「いやいや、恋だって十分速いよ。ただちょっと、力の入れ具合が甘いね」

一連の攻防を終えた二人を見れば、まだ余裕のある一刀に比べて、恋は息が上がり始めている。

「これで……決める！」

「受けて立ぁつ！」

構えなおして最後の一撃を繰り出そうとする恋に合わせて、一刀も全く同時に駆け出す。

ほぼ同じ速度で詰め寄り、武器のリーチの差を生かし、恋が先に方天画戟が突き出す。

ところが、突き出した瞬間に一刀の姿は視界から消えた。

そして行方を捜す間もなく、喉元と腹部に刃を当てられた。

「……俺の勝ち、だね」

にっこりと微笑む一刀は、当たる瞬間に屈んで回避し、懐に飛び込んだのだ。

目の前で下に動かれたため、恋は目で追うことができずに見失った。

「本気でやって負けた。やっぱりアニィの方が強い」

「一応、兄としての面目があるからな」

力と単純な速さはほぼ互角。

しかし一刀の方が、本当の意味で戦闘に必要な速さは上。

瞬間的加減速に動きのキレ、氣の練習中に偶然見つけた力の配分コントロール。

そして桔梗や紫苑との修行、旅で培った経験値。

基礎能力は一緒でも、扱い方で一刀の方が勝っている。

「恋、もっと強くなる」
「そしたら俺は、もっと強くなるよ」
「……負けない」

互いに今後の成長を誓って小さく微笑むが、それを見ていた周囲はそうでもない。
見学していた武官達は、難しい顔をして言葉を交わす。

「いい戦いじゃったのは認める」
「そや、ウチらもえぇ勉強になった」
「でも……」

最強兄妹の周りを見渡せば、そこかしこに地面の抉れた跡がある。
中には小規模のクレーターのようなものまで。
これらは全て、一刀と恋の手合わせで付いた痕跡。
刃を潰してあるにも係わらず、ここまで被害が出てしまった。

「これ、誰が整備するんだ？」
「……さぁな」
「于吉にやらせればいいだろ」

後日、こうした事態に対処するべく、園丁†無双という組織が配置された。

拠点フェイズ　桔梗・紫苑・焔耶・恋　編（後書き）

本日は拠点フェイズをお送りしました。
次回は本編に戻ります。

一刀と穏の間で

連合の解散、蜀の建国などで大きく動き始めた大陸。
国を立ち上げたばかりの一刀達にとっては、情報が最大の武器になっている。
情報統制に関しては見事な手腕を持つ詠の協力で、各地の情報がどんどん入ってくる。
それらについて話し合うため、主だった顔が集まっての軍議を開く。

「まずは袁家の馬鹿娘が動きを見せおったか」
「桔梗さん、それってどっちのですか？」

馬鹿娘と言われても、当て嵌まる顔が二つある。

「おぉっと、そうじゃったな。例の総大将をやっとった奴じゃ」

袁紹の方かと分かると、一同は妙に納得してしまう。
最初に動くなら派手好きな彼女だろうと。
これに比べれば、まだ袁術は側近がある程度しっかりしているので、まだマシな方。
だが袁紹の方には、止め役らしい止め役がいない。
一応いるにはいるのだが、相方が主と同じく暴走型なので、止めるに止められないのだ。

「へっくし」
「どうしたぁ、斗詩。風邪か？　今夜暖めてやろうか？」
「もう！　こんな人前でやめてよ、文ちゃん！！」

噂をされた苦労人はともかく、問題は主の方がどう動くかである。

選択肢は公孫賛のいる幽州か、劉備のいる平原か、それとも別に向かうか。

「于吉、お前はどう思う？　一応、中央にはいたんだろう？」

「彼女のことでしたら、よく聞いていましたよ。土産に大きい箱と小さい箱を用意すれば、迷う事無く大きい箱を選ぶそうです」

それだけ分かれば、彼女の狙いはおのずと絞れる。

隣接する国の中で一番大きい領土なのは、北側にある幽州。

彼女の本質が于吉の言った通りなら、間違いなくここに攻め入る。

とはいえ、益州とは距離があるので、すぐにどうこうなるという事は無い。

「一応名家の袁家だし、情報は定期的に仕入れよう。じゃあ次に、もう一人の袁家、袁術だけど……」

袁術に関する報告書を見ると、袁紹とは同じ意味で単純に思える。

報告書を見る限り、どちらも我が儘で思考が分かり易いタイプ。

こういうタイプで気をつけるべきは、たまに起こす気まぐれぐらい。

「分かり易いといえば、分かり易いんだけどね」

「我が儘な方は、引き際というものを知りません。際限なく欲しい物を求めます」

「あぁ、そうだな。中央にいた馬鹿貴族とかに多いな、そういうの」

于吉に続いて左慈も同じ意見を述べると、何故か妙に説得力がある。

というよりも、于吉の性癖のせいで、彼の言葉が胡散臭く感じてしまう。

「問題は周りの人達が、主に対してどう動いているかだな」

「袁紹さんは締める人物がいないので読み易いですが、袁術さんは締めるべき人物がいます。その人物さえいなければ、袁紹さんと同様に読み易いのですが」

困ったものですと言いながら、報告書に目を通していく。
この張勲という人物は、見た目は普通のお姉さんのようだが、随分と切れ者らしい。
袁術の手綱を操れる数少ない人物で、実は彼女が裏から実権を握っているのでは、という噂もあるそうな。

「ほな、その人どうにかしたら、袁術はなんとかなるん？」
「そうもいかないだろう。奴の下には、あの孫策がいる」

過去の因縁からか、華雄の表情が厳しくなる。
昔、孫策の母親と戦って敗北した恨みがあり、それを泗水関で挑発されて誘き出された。

「今度会った時は、必ずやあの首を」
「華雄。君の気持ちは分かるけど、私情に走ればどうなるか、泗水関で学んだはずだ」
「っ……分かっている。すまなかった」

罰の悪そうな表情をしながら、泗水関で私情に走ったために負傷し死んだ、部下の事を思い起こす。
一人の将として、あんな事は二度としたくない。
それをあの時、一刀に教わったからこそ怒りを収められた。

「話を続けよう。ともかく、袁術の動きには気をつけるように。蜀に近いのはあそこだからね」
「とはいえ、まだ戦の準備をしているという報告は無いのですぞ」

「だからって警戒しない訳にはいかないだろう。義姉に乗じて、動きがあるかもしれない。それに張勲って人も、全部を締めている訳じゃないんだ」

締めていると言っても、限度を守っている程度。
限度までなら主の言う事を聞くイエスマンなので、動く可能性は否定できない。
それが限度内なら、の話だが。

「これぱっかりは予想不能ね。その人の判断基準次第だから」
「紫苑に同意じゃ。それにこの孫策、何やらやらかしそうな気配があるしの」

詠の情報網だからこそ見つけられた、孫策達に見られた不穏な動き。
その可能性の中に、反逆という二文字が書かれていた。

「内部がややこしい事になっとるのに加えて、相手の出方も不明か。やりにくわなぁ」
「……誰が来ても、恋が全部倒す」
「ふん。さすがは飛将軍、頼もしいな。俺だってやるぜ、戦になればな」

なんとも頼もしい武将達の発言だが、一刀には一つ気になっている事があった。
それは共に旅をした焔耶も、報告書を見て察している。
孫策陣営の中に刻まれている、ある一人の人物の名前にあった。
旅先で出会い、共に過ごして来た穏の名に。

「一刀……」
「分かっている。難しい問題だよなぁ」

議論を交わす周囲に聞こえぬよう、小声で話す二人。
敵陣に顔見知りがいるのは、大きなアドバンテージであると同時に弱点でもある。
使い方次第で全てが変わる諸刃の剣。
扱いは慎重にしなければ、あっという間に利用されて負けに繋がる。
今や国となっている以上、それだけは避けなければならない。

「……後で詠に相談してみる」
「分かった」
「あら？　どうしたのご主人様、焔耶ちゃん」
「いえ、そろそろ皆を止めないと、次に移れないかなって話を」

上手く機転を利かして危機を回避すると、そのまま自然に次の議題へと移る。
その後も曹操や劉備を始めとする、各地の動きについての報告や対応などを話し合い、終わったのは昼近くだった。

「はぁ、思ったより掛かったなぁ」
「それが当たり前なの！　いい？　私達はまだ建国したばかりで、各地の動きには機敏に」

疲れて凝った肩を回す一刀に、詠が長々と説明を始める。
ようやく軍議が終わったばかりで聞きたくはなく、あっさりと聞き流していく。
だがそれはすぐに詠に気づかれ、欠伸をして油断した一刀の脛にローキックを叩き込む。
勿論、周囲に誰もいないのは確認したので、怒られる心配は無い。

「おぉぉっ……。や、やるな、詠」

「ちゃんと聞いていない、アンタが悪いのよ！」

プリプリと怒りながら、先に執務室へ戻る詠を片足で追いかける。

「ところで、一つ いいかな。ちょっと重要な事があって、相談したいんだ」

緩んでいた表情を引き締めて告げると、詠も表情を変えて向き合う。

ここから詠は、侍女ではなく影の軍師筆頭の顔になる。

執務室に入り席に着くと、報告書の中から穏に関するものを手渡す。

「陸遜……。こいつがどうかしたの？」

「旅の道中で知り合った子だ。俺も焔耶も、随分と世話になった」

「っ！？　知り合いって事ね」

一瞬驚きの表情を見せるが、すぐに軍師の顔つきになって考え事を始める。

可能性を考えては、また別の可能性を。

そしてその先にあるメリット、デメリット。

あらゆる点を考慮した展開を予測し、扱いについて考えていく。

「これ、袁術と孫策の両陣営に関する報告書」

「ありがと。それと、覚えている限りでいいから、この子の性格とか教えて」

こうなった詠には、横から口を挟まない方がいい。

そう月に教わり、主である一刀も言われるがまま、資料や情報を提供する。

「なるほど、という事は……」

ちょっと危ない人のようにブツブツと呟き、思考を巡らせていく。
やがて考えが纏まったのか、うんと大きく頷く。

「だいたい状況は分かったわ。問題は、孫策が陸遜とあんたとの関係を知っているかね」

知っている場合と知らない場合では、また動きが変わる。
さすがに報告書にもその点についての記載はなく、詠の中では不確定要素として扱われる。
正直、不確定要素ほど軍師にとって不安なことはない。

「せめてそれだけでも分かればいいんだけど。どうする？」
「どうするって言われてもなぁ。焔耶は顔を知られているし、俺が動くのは論外だし」
「となれば、無理に動かない方がいいわね。下手に調べてバレる訳にはいかないし、向こうは監視されているみたいだし」

まだ国は不安定な状態なので、余所に弱みの一つも握らせる訳にはいかない。
ならば心苦しくはあるが、ここは動かない事にした。

「現状じゃ仕方ないね。穏には悪いけど、せめてもう少し国が安定してからだ」

そのためにも、あれを片付けなさいと詠が今日の仕事を指差す。
相談をしている間に月と大喬、小喬が運んできてくれた書類の山を。
正直言うと逃げたいところだが、これも蜀の経済を安定させるため。
両手で頬を一発叩いて気合を入れ、書類の山へと立ち向かう。

「さぁ行くか、こんちくしょう！」

筆を手にした一刀が書類相手に奮闘を始めた頃、話題に上がっていた穏は仕事を片付けて休憩していた。
使っていた筆を置き、準備されていたお茶を啜って一息入れる。

「はぁ、やっと終わりました。まったく雪蓮様ったら、無駄に脱走がお上手になって」

どうやら、脱走した孫策の仕事を割り振られていたようだ。
普段の仕事をこなしながら、割り振られた仕事もやったので、だいぶ疲れてしまった。
どうせなら少し寝ていうようかと、自前の胸枕で眠ろうとした時だった。
扉が開いて甘寧と周泰が部屋に入って来た。

「失礼します。雪蓮様のお仕事は終わりましたか？」
「あぁ、明命ちゃん、思春さん。そこにありますから、持って行くならどうぞぉ」
「そうか、ご苦労だった」

積み上げられた書簡を持ち上げようと、二人分に分けた時だった。
周泰の目に一番上の書簡が目に入る。
蜀に関して纏められた、最新の報告書が。

「そういえば穏さん、あの人とは連絡を取っているんですか？」

そう言って目に入った報告書を見せ、誰の事を言っているか尋ねる。
すぐに一刀の事だと察した穏は、寂しそうな表情をして俯く。

「今の状況じゃ取れませんよぉ。それより思春さん、この前蜀に行ってきたんですよね」
「まぁな」

この報告書を纏めたのは甘寧。
つい先日まで蜀に潜入し、様子を探って来たのだ。

「……一刀さんどうなっていましたか？　何年も会っていないので、成長が楽しみなんですけど」
「つまりは外見か？」
「えぇ、内面は連合の時と蜀の報告書で変わっていないのは分かりましたが、外見はよく見られませんでしたから」

じぃっと見詰める穏の表情には、期待と羨ましさが籠められている。

「外見か。外見は……意外といい男だったな」
「思春様！？」

頬を染めて呟いた思いがけない一言に、周泰だけでなく穏も驚きを隠せない。
男とは無縁と思っていた彼女が呟いただけに、外見がとても気になってくる。

「ちょっと待っていろ。今、描いてみせる」

古くて使わなくなった木簡を取り出し、それに筆を走らせて顔を描いていく。
期待の眼差しを浴びながら、記憶を頼りに顔を描いていくのだが。
彼女の絵には一つ問題があった。

「……思春様、絵を描いた経験は？」
「見れば分かるだろう！」

描かれた顔は、とても似顔絵とは言えない一作。
良く言って抽象画、悪く言えば子供の落書きのような、独特過ぎる絵だ。

「悪かったな、絵が下手で」
「いいえぇ、元から思春さんの画力には期待していませんから」
「どういう意味だ、穏」
「そのまんまの意味ですよぉ」

実際その通りなので、何も言い返せなかった。

「羨ましいですぅ！　私も一刀さんに会いたいですよぉ」
「はぁ。ならば、明命に伝言でも書でも、何かしら頼めばいいだろう」
「そ、そうですよ！　今度は私が蜀の調査に行きますから、その時に」

接触しますと言い出す前に、どこからか紙を取り出して書を書き始める穏。
仕事中でも見せた事の無い速さで書を書き上げ、丁寧に封をして差し出す。

「よろしくお願いします！」

あまりの速さに呆気に取られながらも、書を受け取って懐にしまう。
上機嫌になって眠気も吹き飛んだ穏が部屋を出て行くと、残された二人も書類を手に部屋を出る。

「凄いですね、穏様。あんな速さで書き上げるなんて」
「恋は人を変える……か。明命、今度の任務を変わってくれぬか。私ももう一度あの男の顔を見たい」
「だ、駄目です！　私だって気になりますから、見に行きたいんです！　ていうか、いつもの冷静な思春さんはどうしたんですか！？」

ふっ、と微かに笑った甘寧は青空を見上げて行った。
私にも変わる時が訪れたのかもしれないと。
あまりの驚きの出来事の連続に、これを孫策達に伝えるべきかと、周泰は真剣に悩んだ。

「いやな、あの男に懐く呂布を見ていて、少し羨ましくなったのだ」

一刀と恋が兄妹だということは、既に承知のこと。
泗水関で堂々と名乗った上に、虎牢関でも見事なコンビネーションを発揮していた。

「実は幼い頃から兄という存在に憧れていてな、奴……あの方なら我が兄に相応しい男だ」

遠くを見詰める眼差しをする彼女は、今にもどこか別世界に旅立ちそうだ。
それを隣にいる周泰が認めるはずが無い。
必死になって甘寧を引き止める。

「ちょっ、駄目ですよ！　人のお兄さんを自分のものにしたら！！　しかも相手は王ですよ！？」
「人聞きの悪い事を言うな。ちょっとだ、ちょっとだけ借りようと」
「人を貸し借りしないでください！　というか、そんな交渉を呂布

さん相手にするんですか！？」
「呂布なら分かってくれるさ。兄がいるとどういう気持ちになるか、呂布が一番分かっているはずだ」
「だ、誰か来てください！　祭様、冥琳様ぁ！！」

とても手に負えないと判断した周泰は、泣きながら年長者に助けを求めに行った。
話を聞いた二人により、しっかりと説教を受けた甘寧は城で仕事を。蜀の調査には予定通り周泰が向かったのだが。

「はうぅ……お猫様がいっぱいですぅ」

成都に到着し、町を散策中に恋を発見。
調査のために追跡しようとしたが、行き先の空き地には猫の集団がいた。
恋は抱えていた袋から餌を取り出し、集団の中に混じって餌をやったり、世話をしたりしている。
この猫達は恋が飼っている猫の知り合いで、たまにこうして縄張りの空き地に餌を持ってくる。
超が付くほど猫好きの周泰は目の前の光景に耐えられず、思わず隠れていた木から下りて駆け寄る。
突然現れた見知らぬ人にも係わらず、恋は警戒せずに抱いている猫を一匹差し出す。
どうやら自分ではなく、猫目当てで現れたのだと、本能的に察知したようだ。

「……抱いてみる？」
「いいんですか！」
「……ん。あまり強く抱かないなら」

歓喜に沸いた周泰の脳内。
それから二刻ほど、仕事も忘れて二人で猫をモフッていた。
当然の事だが、帰った後でそれぞれ詠や周瑜の前に正座して怒られた。
更に猫との楽しい時間で、うっかり穏の手紙を渡し忘れ、哀れ周泰は本を読んだ穏の餌食となった。
その後、甘寧と周泰がどうなったかというと。

「次は私が行く番だな。まずは呂布を懐柔して、そこから兄になってくれと頼むかな」
「あうぅ……次に呂布様とお猫様達をモフれるのは、いつになるんでしょうか」

二人揃って少々特殊な方向に、呂兄妹に対する憧れを持ってしまっていた。

一刀と穏の間で（後書き）

大きな動きを見せようとする大陸。
その中で、彼らはどう生きていくのか。

珍客参上

袁紹が幽州に攻め入った一報を皮切りに、遂に大陸は戦乱の世に突入した。
数に任せて幽州に攻め込んだ袁紹はこれに勝利。
敗北した公孫賛は旧友の劉備を頼り、平原へ行ったそうだ。
これを皮切りに劉備軍と曹操軍が、それぞれ袁紹軍との戦の準備を開始。
さらに義姉だけ新しい領土を得てズルイという子供思考で、袁術にも動きが見えてきた。

「ですがどこへ攻め込むか、詳細は不明です」
「大方、勢いに任せて言っただけなんじゃねぇの？　攻める場所とか、何にも考えずによ」

軍議進行役の于吉の報告に、腕を組んだ左慈が呆れながら続ける。
確かに彼女の性格なら、深く考えずに欲望だけでそういう事を言い出しそうだ。
結局、攻める先は側近の張勲が決めることになる。

「それで、行き先についてはどうなっておるんじゃ？」
「引き続き調査を依頼し、詳細が分かり次第伝えるように言いつけてあります」
「念のため、私達も戦の準備はしておきましょう。よろしいですね、ご主人様」

紫苑の提案に頷き、次いで軍師二人に指示を出す。

「うん、その方がいいだろうな。于吉とねねで資金と兵糧の準備を

頼めるかい？　仮に袁術と戦わなくとも、この二つは今後のために必要だから」

資金は使わなければ取っておけば良いし、兵糧も保存を第一に作られるので、しばらくは置いておける。

「承知しました。なんとかしてみましょう」

「任せるのですぞ！　恋殿の財布を握っていた手腕、今こそ見せるのですぞ！！」

そんなものを見せてどうするのかと誰もが思うが、旧董卓陣営と一刀は納得気味な表情をする。

天性のフードファイターな恋の胃袋を満足させつつ、動物達の餌代を含めた金の工面をする。

簡単そうで難しい、恋の財政を支えてきた彼女の金銭面での能力は計り知れない。

ひょっとしたらこっち方面に強いかもと、結果次第では財政方面を任せるかなど一刀は思案する。

「頼んだよ。それじゃあ次に、街の経済状況についてだけど……その前に！」

突然大きな声を上げて一刀が立ち上がり、鮮紅を抜いて天井に投げつける。

刀身が天井に突き刺さる音と、何かが天井裏で転がる音が聞こえる。

「誰や！？」

「逃がさん！」

すかさず桔梗と紫苑が武器を取り、音が進む方向に矢を放つ。

逃げ道に矢じりが現れて逃げ道を封じられた侵入者は、方向を変えようとする。
だが、そこにも矢を撃ち込まれて手足を着ける場所を封じられる。
どうにか脱出をと思った瞬間、鋭い刃が天井を切り裂いて足下が抜ける。

「くっ！」

切り抜かれた天井がまず落下し、そこに人影が下り立つ。
見事に着地を決めて現れたのは、孫呉の将が一人甘寧。

「そこまでだ」

着地した甘寧に刃を向けて囲む華雄、左慈、一刀。
出入り口は桔梗と霞、窓には紫苑と恋が張り付いている。
軍師の面々は焔耶の背中に隠れて、様子を見守る。

「貴様、どこの手の者だ？」
「袁術か？　それとも曹操か袁紹か？」

武器を突きつけて詰問しても、何も答えようとしない。
ただじっと一刀だけを見詰めて視線を外さない。

「目的は何だ？　俺の暗殺か、それとも単なる偵察か」
「……これを兄う……呂迅殿に届けに参った」

何か言いなおして取り出した一通の書。
それは前回偵察に来た周泰が、猫に気を取られて渡し忘れた穏からの書。
表面には少し癖のある字で一刀へ、と書かれている。

その癖を穏のものと判断した一刀は、それを受け取って周囲が止める前に広げて読み出す。

「これは……」

書の中に書かれていた文を読む一刀の脇から、何が書いてあるのかと華雄が覗き込む。

だが書かれていたのは、訳の分からない文体だった。

見た事も無い文字の羅列に、見ているだけでも頭が痛くなってくる。

「な、なんだこれは？」

困惑した声に左慈も覗き込むが、同様に訳が分からんと叫ぶ。

しかし、一刀にはそれが容易く読めた。

「なるほどね。良く分かったよ」

「はぁっ！？　そんな意味分かんねぇ文体に、何が書かれているんだよ！」

思わず声を上げる左慈だが、文句を言いたくなるのも当然だ。

訳の分からない文体を読んで、内容を一刀が察したのだから。

「俺が元気にしているか、早く会いたい、焔耶はどうしているかだって」

「……何で読めるんだよ？」

「暗号だよ。俺と焔耶、穏の間で使っていた、暗号を使った文章だからさ」

おそらくは万が一袁術に見られても大丈夫なように、暗号文にしたのだろう。

暗号といっても、一刀が前世の記憶から引っ張り出した、平仮名を使っているだけ。
平仮名ばかりは少々読みづらいが、上手く隙間を空けて少しは読みやすくなっている。
三人が一緒にいた頃、文面での秘密のやり取りは全て平仮名で行なっていた。
他にカタカナや忍者文字、モールス信号も思い出し、今しがた思いついたように説明して三人で使っていた。
ただ、こういった知識を提供するたびに穏の性癖が暴走し、焔耶もそれに便乗したのは言うまでも無い。

「という事は……。お前、穏の知り合いか？」
「あぁ、同じ主に仕えている」

同じ主という発言に、周囲の警戒心が増す。

「……孫策さんだね」
「知っていたか。なら、話は早い。実は」

何かを喋ろうとした瞬間、甘寧は強い殺気を感じて身構える。
視線の先に映ったのは、金剛爆斧を握り締める華雄の姿。
今にも飛び掛りそうな彼女の肩に一刀が手を置き、宥める。

「落ち着いて華雄。この前も言っただろう」
「分かっている。だが、やはりすぐには割り切れん。すまないが、焔耶と代わるぞ」
「その方がいいだろうね。焔耶、華雄と位置を交代だ」

まだ冷静さを保っているうちに、華雄が軍師の護衛に、焔耶が甘寧の警戒に着く。

「悪かったね。華雄は昔、孫策の親の孫堅さんに苦汁を舐めさせられた事があって」
「別に気にはしていない。私も武人だ、気持ちが分からなくもない」
構えを解いた甘寧だが、周囲からの警戒は変わらない。
一刀と焔耶の知り合いがいるとはいえ、敵の客将の部下なのだから。
「話を続けるぞ。実は我が主、孫策様も貴公と穏の関係を知っておられる」
関係というのは、どこまでの事を言っているのか。
知り合いという範囲なのか、嫁に貰ってくれと言われた辺りか、それとも夜の関係までか。
一刀には少々気になるところだが、ここで下手に聞いたら後が怖そうだ。
主に桔梗や紫苑辺りなどが、黒い笑みを浮かべて閨に引きずり込む可能性が高い。
ここは関係については何も言わず、話を続けることにした。
「他に知っている人は？」
「穏が真名を預けた者、全員が知っている」
「なるほど、穏が真名を預けた人なら安心だ」
見た目は頭が緩そうだが、あぁ見えて人を見る目はある。
彼女が信頼して真名を預けた人達なら、口外することはないだろう。
そんな事をすれば、彼女がどれだけ悲しむのか、自分達が蜀を敵に回す事になるのを理解していれば。
「それで、今日は孫策さんから何か言伝とかはあるの？」

「ない。今回はそれを届けに来ただけだ」

正確には前回周泰が渡しそびれたので、代わりに届けてくれと頼まれただけ。

穏から書を受け取った甘寧は影でこっそりと、義兄上に直に会えると妄想し、表情を緩めていた。

そして偵察任務を適当に済ませ、いそいそと届けに来たのだ。

正面から会うのは恥ずかしいからと、天井裏に忍び込んでまで。

「特に言伝は無いか。それはそれで構わないんだけど……」

無いなら無いで構わないが、どうやら独立は自分達の手で実行するようだ。

そうでなくては、今ほど助力を頼めるタイミングはない。

「よし！　じゃあ穏に返事を書くから、少し時間をくれる？」

「分かった。ではその間に、呂布殿と少し話がしたいのだが」

「……恋とお話？」

接点も無しに何の話をするのだろうと周囲が首を傾げる中、甘寧は前回偵察に来た周泰の事を伝える。

あくまで手紙を渡しに来たという事にして、道中で呂布と意気投合したと。

よく思い出せない恋に、一緒に猫をモフった人だと言ったら、思い出して小さく頷いた。

「実はその事で、是非聞いて来てくれと頼まれた事があってな」

主に猫に関する事で。

どういう餌をやっているのか、どうすればあんなに懐かれるのか。

犬とも一緒にいて、争いは起きないのかなど。
中には抽象的で要領を得ない返答もあったが、甘寧にとってそれはどうでもよかった。
今回の目的の一つは恋と接触し、多少なりとも繋がりを作ることで、今後一刀を義兄にできる可能性を高めること。
だからこそ、わざわざ穏だけでなく周泰の用事も引き受けた。

「なるほど、よく分かった。あいつにはしっかり伝えておく」
「ん。今度会うの、楽しみにしてるって、伝えて」
「任せおけ！」

これで恋の株が少しは上がっただろうと、計画の滑り出しが上々なのを確信した甘寧だった。
そこへ書を書き終えた一刀が、微笑みながら書を差し出す。

「お待たせ、甘寧さん。これを頼むよ」

差し出された書を受け取ると同時に、脳内で名前の部分が真名に変換される。
本当の兄のように真名で頼みごとをする様を思い浮かべ、心の中で返事をする。
任せてください、義兄上と。
勿論、まだ口にするつもりは毛頭ない。

「承知した。……ん？　二通あるようだが？」
「もう一つは孫策さん宛だよ。小猿さんにバレないよう、渡してくれるかな？」

ニンマリと笑う一刀の表情に、何かするつもりだなと全員が察した。
後ろでは密かに内容を考えるのに協力した詠が、こっそりと口の端

を上げていた。
小猿とは即ち袁術、つまりは孫策達の反乱に関するものだろう。

「うむ、承知した。では私はこれで……」

それだけ言い残すと、壊れた天井の穴に飛び込んで姿を消した。
一応侵入者なので、普通に正面から帰すつもりもなかったので、これくらいは問題無い。
とはいえ、毎回こうする訳にはいかないので、次回はまともな方法で来てもらいたいものだ。

「さて、天井はどうするかのぉ」
「園丁†無双の方々を呼んでおくわね」

後程、破壊した天井は園丁†無双の面々により、無事に修理された。
その一方で思春はというと。

「ふふふっ、義兄上からの頼まれ事。絶対あんな小猿に、この書は渡さん！」

人通りの無い路地裏で、一人妄想の世界で暴走をしていた。
こうして一刀達が孫策達と交流を持とうとしている頃、大陸の東北側は荒れていた。
袁紹が幽州を落としたのを期に、曹操も行動を開始。
豫州を落として新たな領土を手に入れた。
一方で未だに動かない劉備陣営内部は、少し荒れていた。
性格上てっきり領土の広い方へ先に向かうと読んでいた袁紹が、どういう訳か青州に侵攻している。
これを受けて対策会議をするが、将軍と軍師の間で意見が纏まらない。

「ここで引いてどうする。如何に敵が強大であろうと、尻尾を巻いて逃げ出すなど」
「そ、そう言われても……。敵の数は十万、対するこちらは二万がやっと。とても敵いません」

勝機が低いと読んだ軍師側の意見は、曹操か袁紹に降るか、早めに逃げてどこかで再起を図るか。
対する将軍側は、ここで逃げたら主の目指す未来が遠のくと主張。
確率が低かろうと、勝負に出ようという意見を出している。

「だから言って、桃香様の目指す未来を考えると曹操や袁紹に降るのはな」
「あわわ。だとすると、どこかに逃げ」
「どこに逃げるというのだ。公孫賛殿の領土も、既に無いのだぞ」

どこかを頼りたくとも、頼れる場所が無い。
一応、有るには有るのだが、顔見知りという訳では無い。
同じ劉姓なのと、民に人気のある徳を持っているという理由で、何度か荊州の劉表に誘いを受けた事がある。

「仮に劉表殿の処に行くとしても、間には曹操の領土がある」
「それは分かっています。けど、他に頼りもありませんし」

頼りたくとも、その前には大きな壁が立ち塞がっている。
それを理解しているからこそ、僅かな可能性でも勝機に賭けようと関羽が主張する。
だが軍師としては、それはあまりにも危険過ぎる選択。
せめて時間があれば何かしら仕掛けて、戦を有利に持っていく手段はある。

ところが今回は急な事なので、仕掛けをしている時間は無い。
正直、平行線を辿る軍議の時間すら惜しい。
早く結論を出して、動く準備をする時間が欲しい。

「桃香様、どうかご決断を」

このままでは埒が明かないと判断し、諸葛亮が劉備に決断を迫る。
やはりいざという時は王が決断し、配下を従わせなければ。
少々頼りない王ではあるが、今はそれに頼るしか手はなかった。

「私は……」

ずっと俯いていた顔を上げ、向けられている視線の重さを受け止める。
今から告げる一言で、ここにいる皆の全てが決まるのだから。

「私は、皆と夢を追い続けたい。だから……愛紗ちゃん達には悪いけど、皆で一緒に逃げたい」

それが王としての彼女の決断だった。
確かに逃げ道にある壁は大きいが、他に比べれば夢が潰える可能性はほんの僅かだが低い。
自分の理想に賛同してくれた仲間達のためにも、今は生きる道を選んだのだ。

「……桃香様がそうおっしゃるなら」

さすがの関羽も、王の決断という事で引いてくれた。
そうと決まればすぐに脱出だと、各自が準備へ走り出す。
その中で諸葛亮と鳳統は、文官へ通達しに行く道中でこそこそと喋

っていた。

「ねぇ朱里ちゃん、大丈夫かな？　劉表さんって、あまり評判良くないよ？」

「確かにそうだけど、政治手腕の基礎はしっかりしているよ。ただ、応用力が無いだけだから……」

これから向かう劉表の領地では、ほとんど教科書通りの政で治められている。

教わった事を忠実に守り、それ以上でも以下でも無い無難なやり方。

安定感という意味では安定しているが、その安定力そのものが低い。

故に評判もあまりよくないがため、徳に優れた劉備を欲しているとも言える。

自分に足りない部分を彼女が補ってくれると読んで。

「少なくとも、思い通りに使われて終わりって事は無いと思う」

「あわわ、なんだか余計に忙しくなりそう」

「それは仕方ないよ。劉表さんの処って、資金と人員はたくさんあるけど、人材の質が低いから」

だからこそ、匿ってもらい名を上げる準備をするには好ましい。

上手く民の支持を得れば、再度の独立もそう難しくはない。

後はそのために、如何に劉表の下で活躍するかが勝負になる。

だがその前に、目の前に曹操の領土を越えるという大問題が残っている。

「ともかく、やるしかないよ雛里ちゃん」

「あわわぁ……」

決して楽ではない道のりだが、もう後戻りは出来ない。

生き延びる道を選んだ劉備軍に出来るのは、理想を目指して前に進む事だけ。

珍客参上（後書き）

生き残るために動き始めた劉備軍。
そして孫策に渡すよう頼まれた、書の内容は。

アノ日がやってきた

劉備が劉表を頼るため、平原を脱出しようと準備をしている最中。
二通の書が甘寧の手により、孫策と穏に届けられた。

「一刀さんの手紙。うふふ、会えるまで絶対に捨てられませんねぇ」

書を胸に抱えて小躍りする穏に暖かい視線を送りつつ、孫策宛の書に注目する。

「これは一体、何が書いてあるんだ？」

警戒した目で書を見つめる周瑜が、集まった全員に問い掛ける。
別に書を開けていない訳ではないのだが、純粋に読めないのだ。
何故なら、万が一を考えて暗号を使ったからだ。
孫策の配下でこれを読めるのは、暗号を決めあった仲の穏しかいない。

「という訳で穏、悪いが解読してくれ」
「はいはぁい。えぇっとぉ」

上機嫌な穏は、周瑜ですら読めない暗号文をスラスラと読む。
内容は挨拶から始まり、次に孫策陣営の状態を指摘、そして独立に手を貸すという内容。
連絡には穏に暗号文を書かせること、協力して独立が成功したら、貸し一つだという事もちゃっかりと。

「以上でぇす」
「へぇ、面白い事を言うのね、穏のお友達は」

「ぶぅぶぅ、違いますよぉ。お友達じゃなくて、未来の旦那様ですよぉ」

頬を膨らませ、友達の領域はとっくに抜け出していると、迫力の無い怒りを見せる。

「そうだったわね。ごめん、ごめん」

「冗談はそこまでにしておけ。それより雪蓮、どうするんだ？」

正直言えば、話を受けるか受けないかは微妙な処。

準備はだいたい整ってはいるが、資金や兵力に不安があるのも確か。

何せ相手は単純とはいえ袁家。

資金や兵力なら向こうの方がはるかに上。

しかも今は、義姉の袁紹に負けてはいられないと、どこかに攻め入るために戦の準備をしている。

そんな状態の時に行動を起こせば、準備を整えている袁術側が有利。

だからといって行動を起こさなければ、どこかとの戦で溜めた力を疲弊しかねない。

それを考えれば話に乗るべきだが、あからさまに貸し一つとあると、判断に困ってしまう。

「難しいところね」

「じゃけど、他に手はあるのか？　正直、わしらの方は手詰まりなんじゃろ？」

「えぇ。袁術が戦の準備をしている以上、資金と兵数の差で苦戦は免れません。よしんば勝ったとしても、戦後処理にどれだけ人を回せるか」

未だに準備中の今を突けば、自分達だけでも勝機はまだ有る。

だが相手も準備をしている以上、相当な痛手は覚悟する必要がある。

さらにその後には、呉の復活と戦後処理、他所からの侵略を防がなければならない。
独立は自陣だけでも可能だが、問題はその後にあった。

「独立しても、経営が成り立たねば何にもなりませんからね」
「せめて姉様が、もっとしっかり仕事をしてくれればいいのだけれど」
「ちょっとぉ、それどういう意味よぉ」
「そのまんまの意味だと思うが？　雪蓮」

普通なら言い返したい処だが、心当たりが有り過ぎる孫策は言い返せない。
ただ頬を膨らませて、唸るだけ。
一応自覚はあるのだが、それでも自由人な彼女は毎回仕事から逃げ出している。

「沈黙は肯定と取るぞ」
「うぅ……冥琳のいじわる」
「なんとでも言え。それで、どうするんだ？　話を受けるのか、受けないのか」

改めて問いかけると、孫策はしばし考え込む。
すると何かを思いついたのか、いそいそと一刀からの手紙を胸元にしまう穏に声を掛ける。

「ねぇ穏、彼ってどんな性格なの？」
「ふぇ？　一刀さんの性格ですかぁ？　基本的にとてもお優しい方ですよ。特にご家族には」

基本的という点は気になるが、家族には、という言葉を聞いて孫策

は笑みを零す。

「なら、話を受けましょ？」

「根拠は勘か？」

「それもあるけど、家族には優しいんでしょ？　妻になるかもしれない穏がいるのに、無茶は言わないでしょ。違う？」

勘ではなく、ちゃんと考えて意見を述べる姿に周囲は驚く。

長い付き合いの周瑜は勿論、黄蓋に孫権まで。

「姉様が……まともな意見を」

「何でそこでそんなに驚くのよ！」

普段の生活態度や行動を考えれば、十分驚くに値する。

というよりも、普段の彼女を知っていて驚かない方がおかしい。

傍に控えている甘寧や周泰も、同意見だと頷いている。

「ともかく、提案は受けるんだな？」

「えぇ。私達もできるだけ仲間を失いたくはないし、これを期に蜀とお近づきになれれば、色々と便利でしょ？」

本当に考えていたんだな、と返すと再び孫策がショックを受ける。

しまいには、そうですよ、どうせ私は怠業魔ですよといじけてしまった。

そんな主は特に気にすることなく、話は進んでいく。

返事は穏の暗号ということなので、内容を周瑜が考えて、それを穏が暗号文にする。

「それにしても、これはどういう暗号なのだ？」

期になった孫権が尋ねると、手を動かしながら穏が答える。

「この点と線の数と組み合わせで、言葉を表現しているんです。音でも代用できますよ」

「音でも……できるのか？」

「はぁい。要するに短い音と、長く響く音があればいいので」

ここまでくれば分かるだろうが、今回の暗号文はモールス信号を使ったもの。

点と線、または短い音と長い音。

それらを組み合わせて言葉を表現する。

「音でも代用できるなら、戦で使えるのでは？」

話を聞いた呂蒙が提案をするが、首を振った穏に却下される。

「あぁ、それは難しいですね。いくつかの組み合わせで一文字なので、何度も音を鳴らす必要がありますからぁ」

いちいちそんな事を戦場でやっていたら、指揮系統が混乱しかねない。

ただでさえ兵士の声や戦いの音で煩いというのに、モールス信号で指示など出せるはずが無い。

暗号文には使えるが、戦場で使うには新しすぎた。

「確かに音で使うには難しいな。だが、暗号としては興味深い。穏、よければ後で教えてくれ」

「わ、私もお願いします」

「はいはぁい、いいですぉ」

鼻歌でも歌いそうな雰囲気で書を書き上げると、それに封をして周泰に手渡す。
順番から言えば、次は周泰が蜀に行く番だからだ。
隣に立っていた甘寧は、義兄上に会えないと心の中で呟き、少しがっかりした。

「それじゃあ、頼むぞ明命。くれぐれも、猫に気をとられるなよ？」
「は、はひゃい！」

前に怒られたときの周瑜の迫力を思い出したのか、カミカミになってしまう。
なぜなら、今の彼女はその時の雰囲気を少しだけだが、かもし出しているからだ。
同様に穏も、また届けられなかったらおしおきだと言うように、とっておきの本を取り出す。
さらに義兄上の用を果たせなければ、分かっているだろうなと、甘寧が無言の圧力をぶつける。
こんな状況に、周泰が耐えられるはずがなく。

「す、すぐに行って来まあぁぁすっ！」

勢いよく駆け出して行き、あっという間に姿が見えなくなってしまった。

「さて、それじゃあ改めて、暗号を教えてもらおうか。頼む、穏」
「お任せおぉ。まずはですねぇ」

孫策陣営は孫策陣営で動き出したその頃、当の蜀陣営はというと。

「どわぁぁっ！」

「ぬおっ！」

霞が思いっきり転んで、助けようとした華雄も足を滑らせて転んでいた。

しかも上手い具合に頭をぶつけあい、お互い痛みに悶絶している。

同じ頃、左慈はようやく書き終わった報告書全てに墨をぶちまけ、于吉は秘蔵の八百一本が全部虫食いにあっていた。

さらにねねが、腕に恋がしがみ付いている一刀にキックをしようとして、いつも通り恋に捕まって投げ飛ばされた。

それも蜂の巣がある木の中へ

「ぐおおおぉぉっ！　俺の苦労があぁぁぁっ！！」

「わ、私の宝が……そんな。自作の私×左慈本まで……」

「ぬおぉぉっ！　恋殿ぉ、助けてほしいのですぅ！！」

城に響き渡る三つの悲鳴。

だが、悲鳴はこれだけではない。

各所で兵士や文官、果ては侍女からも悲鳴が上がっている。

それも全部、何かしらの不幸な出来事が原因で。

「これが、詠の不幸の日なのか？」

「ん」

詠の不幸の日、それは極稀に起こる災厄の日の事である。

一刀の侍女であり月の親友、元董卓軍軍師の詠は不幸を溜め込みやすい体質をしている。

それだけならともかく、何の前触れも無く溜め込んだ不幸が湧き出る日がある。

そうなると会うだけで何かしら不幸に会い、喋ればもっと酷い不幸があるそうだ。

これの影響を受けないのは、長年一緒にいる月しか確認されていない。
さすがの恋もこれには影響を受け、昼食用に買い込んだ肉まんを転んで全て駄目にしてしまった。
しかも、翌日が給料日なのでお金はもう無い。
もしも一刀が通りかからなかったら、天下の飛将軍が道端で行き倒れになっていたかもしれない。
空腹が原因で。

「恋の不幸、もう終わった。アニィ、不幸は？」
「いや、今日は詠に会ってないんだよ。俺と会う前に気付いたみたいでさ」

一刀もこの話は既に知っていた。
今朝、仕事をしようとしたら月がやってきて、今日は詠が来ない事を聞いた。
理由は知ってのとおり、詠のアノ日だからだ。
自主的に部屋に籠り、周囲には月ものの日ということにしている。

「半信半疑だったけど、ここまで被害が出るとなぁ」

頭を打った霞と華雄は、既に医務室に搬送済み。
左慈は報告書を一から書き直し、于吉はショックで寝込み、ねねは蜂から逃走中。
他にも色々な部署から報告書が届いている。
政務や警邏、侍女達の仕事に影響が出るほど被害が出ていないのは、不幸中の幸いだろう。

「大喬と小喬は買出し中、商人の積荷の食材が雪崩れて、それに巻き込まれて気絶。紫苑さんは食あたり、桔梗さんは箱詰めの矢を運

ぼうとしたら、急に底が抜けて矢が足に刺さった。軽傷だったのは幸いだな」

おそらくは、詠との接触が少なかったのだろう。
そうでなくては、軽傷で済むはずがない。

「俺は会っていないから除くとして、重鎮で無事なのは焔耶」
「うあぁぁぁぁぁっ！」

噂をすればなんとやら、どこからともなく焔耶の悲鳴が聞こえた。
犬に追いかけられているのか、それとも別の事が起きているのか。
それも含めて気になった一刀は、恋と共に悲鳴の聞こえた方向へ駆け出す。

「どうした焔耶！」

そこで見たのは、焔耶が追いかけられている姿だった。
ただし犬だけではなく、犬と猫混成軍に。

「うおぉぉぉっ！　一刀、助けてくれぇ！！」

必死で助けを求めながら、物凄い速さで廊下を駆け抜けている。
後にはセキトを先頭にした犬軍団と猫軍団が続き、まるで馬軍のように駆け抜けていく。

「……なんで猫にも追いかけられているんだ？」

犬だけならまだ分かるが、何故今日に限って猫もいるのか。
ともかく助けなきゃと思った一刀は、すぐさま恋と共に追跡を開始。
数分後、無事に焔耶を救出した。

「はぁっ、はぁっ。助かったぜ、一刀」
「どういたしまして。それで、なんだって言っているんだ？」
疲れて座り込む焔耶の面倒を一刀が見て、動物達は飼い主の恋が事情聴取をしている。
セキト達犬軍団はいつものように、犬を引き寄せる匂いのせいなのだろうが、猫を惹きつける原因が分からない。
まさか今日の不幸によって、猫にも追いかけられるようになってしまったのだろうか。

「恋、その子達はなんだって？」
「……焔耶お姉ちゃんの首のそれに、本能がくすぐられたって」
「首のそれ？　あぁ、なるほど」
要するに、犬から逃げている焔耶の首に巻いてあるリボンのような物が揺れて、猫の本能を刺激したのだろう。
結果、犬だけでなく猫にまで追われてしまった。

「あらあら、何か大変な事になっているわね」
「香織さん」
そこへ現れたのは病を克服した丁原。
香織というのは、彼女の真名。
義娘達の新たな旅立ちと、妹を長年掛けて探し出し、守るために国まで立ち上げた一刀達に敬意を評して真名を預けてくれたのだ。

「どうしたんですか？　こんな処で」
現在彼女は後遺症の事もあって、第一線を引退。

居住地を成都に移し、部屋で本を読む日々を送っている。
たまに外に出ては、新しい本を探したり、散歩をしたり、ご老人方の話し相手になったりしている。
城内でも本を読むだけではなく、長年の経験を活かして政務のご意見番、城内に勤める者の相談役になってもらった。
やはり最後は経験がものを言うのか、悩める侍女や兵士が彼女の下を訪れた後、すっきりした表情をして出てくる。
ただし負担は掛けられないので、一日三人までという暗黙の了解がある。
世話役として一緒にいる侍女が確認をしている事もあって、それが破られたことは無い。

「いえね、私も詠ちゃんの話を聞いて、どんなものか見に来たの」
「すみません、お止めしたのですが……」

面白そうにしている香織に対し、後ろにいる世話役の侍女はペコペコと頭を下げる。

「あぁ、気にしなくていいよ。でも香織さん、お体がそれなんですから、間違っても詠と会うのはやめてください」

分かっているわよと、軽い調子で返事をして杖を突きながらその場を去る。
向かった方向からして、おそらくは医務室の霞と華雄を見に行くのだろう。
あれで子煩悩なので、負傷した二人を心配しての見舞いと思われる。

「さぁてと、俺はそろそろ仕事に戻るから。恋、その子達をちゃんと帰してきなさい。焔耶は被害報告のまとめを」
「……ん」

「分かった。と言いたいところだけど」

動物達を連れて帰る恋を見送りつつ、どうしたのかと振り向く。
座り込んだままの焔耶は、気まずそうな顔をして呟く。

「安心して……腰が抜けた」

恥ずかしそうに呟く姿は、どこか可愛らしいというか愛らしいというか。
結局、被害報告は無事だった兵士に任せて、焔耶を部屋までおぶって行くことにした。
その道中、肌が擦れた事で漏れる艶やかな声と、背中に押し付けられた胸が一刀を刺激。
ここのところ、誰ともご無沙汰だった一刀の理性が敗北した。
どうせ被害報告は自分の部屋に届けられるだろうし、被害のせいでまともな仕事はできそうにない。
そう言い訳を自分に言い聞かせ、その日は焔耶の部屋に泊まった。
翌朝、焔耶は昨日とは別の意味で腰が抜けて、寝所で唸っていた。
痛む尻を腰を押さえながら。

アノ日がやってきた（後書き）

所構わず発揮される、詠の不幸パワー。
願わくば戦で発揮されないことを祈る、一刀だった。

内通

今日も忙しい政務が終わった夕暮れ時。
判を押し終えた書類を文官に預け、一刀は椅子に寄り掛かる。

「あぁ、今日も疲れた」
「お疲れ様です、ご主人様」

差し出されたお茶を飲み、ほっと一息吐く。

「うん、さすが月だね。美味しいお茶をありがとう」
「へう。ど、どういたしまして」
「こらそこ！　月を誘惑しない！！」

別に誘惑しているつもりもないし、そんな台詞は一言も発していない。
それでも生粋のツン子で月を大事に思う詠には、気に触ったらしい。
性格さえ分かれば、別段気になる事でもないので、一刀はごめんと笑って返した。

「詠ちゃん、今のは誘惑じゃないと思うけど……」
「そうやって油断したら駄目なのよ。だいたい月はね、もうちょっと危機感ってものを」

いつも通りの月と詠のやり取りを見ていた一刀だが、不意に天井裏から何かの気配に気付いた。
以前に会った甘寧のものではない。
机を指で三度叩くと、それを合図にしたように月と詠に緊張が走る。
今の仕草は、三人の間で決めた警戒の合図。

二回なら、月と詠の正体を知らない、城内で働いている人の接近。
三回なら侵入者の気配を感じた合図。

「さぁてと、ちょっとゴミ掃除をしようかな！」

ゆっくりと席を立った一刀は、壁の傍にぶら下げてあった細い紐を引く。
すると天井の中心が抜け、残った天井の部分がすり鉢状になる。
急に足場が崩れた侵入者は、何かに掴まる暇もなく天井を滑り、抜けた場所から室内に落ちる。

「くっ！」

下り立った人物は軽い身のこなしで着地するが、そこに縄を持った一刀が迫る。
侵入者は抵抗する間もなく、一刀によって捕縛された。
その後、月と詠が近くにいた霞と華雄、焔耶を呼んでの尋問が始まった。

「さぁてと、君はどこの間者なんだい？」

捕縛した侵入者を前に尋問を始めようとする一刀だが、周囲はどうしても気になる事がある。
侵入者を捕縛するのは間違っていないし、尋問も間違っていない。
だが、問題は縄での捕縛の仕方にあった。
普通にぐるぐる巻きにしてあるならまだしも、何故に亀甲縛りなのかと。

「なぁ一刀、なんでこの縛り方なん？」
「いや、それはあの……。紫苑さんと桔梗さんに強請られて、新し

い趣向を勉強中でね……」

要するに閨事の新しい世界へ踏み込むため、勉強中だった事をついやってしまったと。

別に相手の侵入者が少女だったから、という訳では無い。

「ついでこんな事しないでくだっ！　うきゅうぅぅ……」

少女は抵抗しようとするが、体に縄が食い込んだのか俯いてしまう。

ちょっときつく縛りすぎたかな、と思いつつ眺めていると、やけに荒い息づかいが聞こえてきた。

よく見れば、表情もなんだか蕩けてきた。

「はあっ、はぁっ。あぁ、なんだか気分が良くなってきたような」

「駄目だ、一刀。こいつこういう趣味みたいだぞ！」

様子の変化に焔耶が叫ぶ。

「くっ、まさかそういう趣味だったとは。これじゃあ、悦ばせていただけじゃないか」

「ち、違います。でも、こんな事は初めてなのに、何故か不思議と心地よさが」

「ちょっと、敵の間者を新しい趣味に目覚めさせてどうするのよ！」

「はうっ、そういえばそうでした。私は間者じゃありません、孫策様にお仕えしている、周泰という者です」

孫策という名前に、騒いでいた一刀達も大人しくなる。

さらに周泰といえば、甘寧から聞いていた恋が猫で意気投合した人の名前。

「じゃあ君は、ひょっとして孫策さんからの書を？」
「は、はぁい、そうですぅ……」

返事をする周泰の目が潤み始めてきた。
脚をモジモジとさせ、滑舌も悪くなっている。
表情も、どこか遠くに旅立ちそうなくらい緩んで、息づかいもどんどん荒くなる。

「いかん、これ以上は色々と拙い！」
「だったら早く解きなさいよ！　解けないなら、縄を切りなさい！！」
「あうあぅ。個人的には、もうしばらくこのままに」

新しい世界への侵入を試みた周泰だったが、それはあえなく失敗した。
彼女の様子に慌てた一刀達が、急いで縄を解いてしまったからだ。

「うぅ……。もうちょっとで、新しい世界が開けると思ったのですが」
「駄目！　そんな世界に行っちゃ駄目！！」

年齢は不明だが、まだ幼さの残る身であっちの世界は厳しすぎる。
せめて身長だけでも、もう少し成長してからでないと。
でなくては、やっていて色々と拙い気がする。

「それじゃあ本題に入るけど、君は孫策さんの部下の周泰さんだね」
「はい！　本日はこの書をお届けに参りました」

懐から取り出したのは、縛られたせいで少し折れた手紙。
中には一刀が送った手紙と同じ、モールス信号での返事が書かれて

いる。
協力感謝する、謹んでお受けしようと。
それと最後の方に穏からのメッセージも。
元気そうで良かった、早く焔耶とも再会して久々に三人で過ごしたいと。

「うん、確かに受け取ったよ。他に何か、聞いてきた事はある？」
「いえ、特には」
「そうか。じゃあ返事を書くから、しばらく部屋から出てくれるかい？」
「でわでわ！　呂布様の所に行ってもよろしいですか！？」

目をキラキラさせながら、恋の所に行きたいと言い出した。
おそらくは前に甘寧から聞いた、猫談義でもするつもりなのだろう。

「いいよ。この時間なら、部屋にいると思うから……霞、華雄、案内してあげて」
「承知した」
「了解や」

指名を受けた二人の案内で、嬉々として恋の所に向かう周泰だった。
一方で、部屋に残った一刀達は、すぐさま返事の内容について話し合う。
協力する事へのお礼は勿論、協力提案側として策を出す必要がある。

「詠、今日までの袁術の情報から、何か良さそうな策はある？」
「勿論よ。いい？　彼女の性格からすれば」

話し合う一刀と詠、書を書く準備をする月。
その中で焔耶が一人、用もなくポツンと立っている。

「あ、あのさ。私はどうすればいい？」
「焔耶は悪いけど、その天井を直してくれる？　あそこの穴に差し込んで、音がするまで持ち上げればいいだけだから」
抜け落ちた天井の一部を指差し、修理をお願いする。
別段技術が必要な訳でもないので、園丁†無双の方々を呼ぶ事も無い。
言われた通り、踏み台に乗って天井の穴に落ちた部分を嵌め込む。
そのまま上へ持ち上げると、ガタッという音がして天井が元に戻った。
「ところで、これどうしたんだ？」
前はこんな仕掛けは無かったはずだと問い掛けると、一刀は詠との話し合いを止めて答える。
「前に甘寧さんが忍び込んだ時、天井壊したでしょ？　あれの修理の時に園丁†無双の人に頼んで、仕掛けてもらったんだよ」
侵入者がいるからとはいえ、毎回毎回天井を壊すわけにはいかない。
そこで簡単な物でいいからと、仕掛けを作るように頼んだのだ。
それが先ほど周泰を捕らえるため、発動した罠だった。
「正常に発動して、何よりだよ」
「ちょっと、そんな事より話はまだ終わっていないんだけど？」
「あぁ、ごめんごめん、続けて。焔耶はそこで待っていて。後で用事を頼むから」
焔耶に指示を出し、すぐに詠との話し合いを再開する。

しばらく話し合うと、提案する策が決まりそれを書にしたためる。
勿論、バレないようにモールス信号での暗号文で。

「月、周泰さんを呼んで来てくれる？　焔耶は護衛をお願い。恋と一緒にね」

内容が終盤に入ったのを見計らって、部屋で待機していた二人に指示を出す。
訳も分からず待たされていた焔耶は、そういう事かと納得して月と部屋を出る。
案内させた霞と華雄が、必ずしもそこにいるとは限らないからだ。

「華雄と霞がいたら、通常勤務に戻っていいって伝えておいて。最近、報告書が遅れ気味だから」
「分かりました」

扉の向こうから月の返事を聞き、頷きながら筆を動かす。
しばらくすると、ほくほく笑顔の周泰が部屋に連れて来られた。

「楽しめたかい？」
「はい！　恋さんとお猫様談義に花を咲かせていました！！」
「なによ恋、真名許したの」
「……ん。明命、いい人」

コクコクと頷いて笑う顔をみれば、どれだけ盛り上がったかは予想がつく。
その上で真名を許したという事は、預けるに値する人物という訳だ。
とは言っても、主な恋の判断基準はセキトが懐くかどうかだが。

「それなら周泰さん、恋から真名を預けられた期待を裏切らないで、

ちゃんと孫策さんに届けてね」

書き上げた書を差し出しながら、注意のつもりで釘を刺しておく。

「お任せを！　それと、失礼ながら一つよろしいでしょうか？」

「何？」

言い忘れた事でもあるのかと思ったが、どうやら違うようだ。

表情が真剣なものではなく、どこか照れ混じりに見える。

「もし、もしよろしければ、私を捕縛した際の縛り方の書をお貸しください！」

頬を赤らめて言い放った内容は、室内に沈黙を呼んだ。

「……何に使うの？」

「それは自分が楽し……じゃなくて、後学のためというか、なんというか……」

どう誤魔化そうが、明らかに自分のためだ。

寸での処で食い止めたかと思ったが、どうやら彼女は新しい世界に入ってしまったようだ。

訳が分からず首を傾げる恋に対し、焔耶は大きく溜め息を吐き、詠は一刀を睨みつける。

色々な意味で窮地に立たされた一刀は、どうしようかと思案する。

「どうか、どうかお願いします！」

はぁはぁと息を切らせながらも、態度は土下座までしている。

そこまで欲しいのか、というかそこまで新世界を味わいたいのだろ

うか。
原因となった一刀は、申し訳なさを込めながら本棚から一冊の本を取り出す。

「はい、これ。大事に扱ってね。それとちゃんと返してね」
「はあぁぁぁん！　ありがとうございます！　このご恩は一生忘れません！！」

本を胸に抱えて小躍りし、満面の笑みを浮かべる。
訳が分からなかった恋も、彼女が喜んでいるなら構わないと微笑む。
一方で詠と焔耶から睨まれている一刀は、後で説教だなと覚悟を決めた。

「その本はお駄賃って事でいいから。だからほら、早く書を孫策さんに」
「分かりました！　では、これにて失礼します！！」

ペコリと頭を下げると、目にも止まらぬ速さで部屋を出て行った。
だが、これで一段落した訳ではない。

「さぁて、ちょっといいかしら？」

詠の口から響くドスの聞いた声に、さすがの一刀も震え上がる。
口では敵わないと分かっているため、無駄なあがきはせずに頷いた。
焔耶は無言で恋を外に連れ出し、直後に響くのは詠の怒鳴り声と一刀の謝罪の弁。
外交問題に発展しなさそうだったからいいものを、相手をあんな趣味に目覚めさせてどうするのかと。

「……焔耶お姉ちゃん、アニィどうしたの？」

「なんでもないぞ、まだ少し仕事が残っているんだ。だから、邪魔しないようにな」
「……ん」

仕事の邪魔をしちゃいけないという教えの賜物か、恋は部屋をチラッと見て言うことを聞く。
仮にここで割り込んでも、説教モードの詠が止まるとは限らないが。
この数日後、孫策達の下に書が届けられた。
書かれていた内容を穏が読み上げると、孫策の口元が艶やかに微笑んだ。

「へぇ、面白そうな策じゃない」

ある程度とはいえ袁術の性格を読み、構築された策。
これには彼女の右腕の周瑜も、関心を示した。

「あぁ、よくできていると思う。向こうは修正箇所があれば申し出てくれとあるが、特に問題は無いだろう。細かな調整は必要だが、大筋はこれでいけると思う」

情報を十分に理解した上で詠が立てただけあって、穴らしい穴は見当たらない。
しいてあげるならば、袁術が気まぐれを起こさないか程度。
前提として、攻め込む先を蜀にしなくては意味が無い。

「そうと決まれば袁術の所に行くぞ、雪蓮」
「えぇ、やっぱり私も行かなきゃ駄目？」
「当たり前だ。さっさと準備をしろ」

ブツブツ言いながらも、準備のために席を立つ。

こっそり酒を飲まないか見張るよう、穏を見張りに付けさせた周瑜は周泰に向き直る。

「よくやってくれたな。報告書を纏めたら、今日は休んでいいぞ」

「はい！　ありがとうございます！！」

元気良く返事をする姿に感心しつつ、ずっと気になっていた物に視線を向ける。

「ところで明命、その縄は何に使うんだ？」

眼鏡を直しながら問いかけると、目の前の少女の態度が変わる。

真っ赤な顔であわあわと慌て、ボソボソと呟きだす。

「じ、実はその……向こうに行った際、侵入者と間違えられて捕縛されまして。あまりに手際よい捕縛術だったもので、練習用にと街の雑貨屋で」

肝心な部分は喋っていないが、大体は間違っていない。

本当は貸してもらった書物を参考に、自分が楽しむために買ってきたのだ。

わざわざ丈夫そうなのを選んで。

「そうか、熱心な事だ。だが、無理はするなよ」

軽く微笑んで出て行く周瑜を見送ると、ほっと胸を撫で下ろして自室に向かう。

しっかりと扉を閉め、いそいそと本を取り出して開く。

「まずは初心者用から行きますか」

まるで猫を愛でている時のような顔をして、鼻歌を歌いながら延々と一人で新しい世界を楽しむ。
この数分後、部屋を訪ねた呂蒙にその姿を見られ、絶叫が木霊したのは言うまでも無い。
同時に、何かを強く叩く打撃音も聞こえた。
なお、呂蒙はその時の記憶を何故か失っており、妙な頭痛がしていたそうな。

「なんじゃと、それは本当なのか！？」

所変わって袁術の城の玉座。
孫策と周瑜が彼女の下を訪れて、蜀に関する報告をしていた。
ある程度の内政状態と、荊州に攻め込む準備をしているという情報を。
後者も嘘ではなく、本当に準備をしているのだ。
周泰を帰した後で。

「嘘だと思うなら、自分で確かめればいいじゃない」
「七乃！　どうなのじゃ！！」
「なんとも言えませんねぇ。すぐに調べさせておきますよ」

こうなることは予想の内。
そもそも蜀の調査事態、自分達から申し出て許可を貰っている。
賄賂という名の手土産、蜂蜜を与えて。
普通は平行して自分達も調べるのだろうが、目の前の二人はそういう事をしない。
張勲一人ならやるだろうが、彼女は袁術の世話係であると同時に袁術軍唯一の有能者。
やるべき仕事が多く、とてもそこまでは手が回っていなかった。

なので、躊躇無く許可を与えて代わりに調べさせていた。
お陰で孫策側は、隠密を使っての内通も比較的楽にできた。

「それで、どうするの？　本当に攻め込んで来るとしたら」
「無論、戦うのじゃ！　あの広い領土を手にして、麗羽をきぃきぃ言わせてやるのじゃあ！」

高らかに笑う袁術を張勲がよいしょして、余計に笑い声が響く。
耳障りなこの場から退場すべく、孫策は口を開く。

「ねぇ、もう下がっていい？」
「うむ、構わんぞ。下がるがいい」

躊躇うことなく下がれと言う袁術の単純さに、心の中で拍手を打って玉座を去った。

「これで第一段階終了だな」
「えぇ、後は向こうが戦の準備を確認して、私達を先鋒にすれば」
「袁術と張勲の事だ、十中八九私達が先鋒で違いない」

周囲の目と耳を気にしてか、小声で話す二人。
顔には出していないが、独立へ大きく前進できたことに心の中で微笑む。

「さぁ、勝負はこれからね」
「あぁ、これからだ」

大陸の勢力図が、また一つ大きく動こうとしていた。

内通（後書き）

着々と準備を進める蜀と旧孫呉。
大陸内部に、大きな動きが起ころうとしている。

変動の予兆

一刀と孫策が上手く通じ合っている頃、残る勢力も動き出していた。
中でも本来蜀を立ち上げるべき立場にある劉備は、曹操の領土を通過するための話し合いをしていた。
通行料に関羽を貰う、別の道を行こう、甘ったれるな。
二人の王の会話は一方的に曹操が押していたが、結果としてタダで通してもらえることになった。
後で利子を含めて回収すると、いつかは戦うような事を曹操が仄めかせて。

「よろしいのですか、華琳様」
「たった今、言ったでしょう。後で利子も含めて回収すればいいって。それよりも」

軽く微笑んでいた表情を引き締め、王としての指示を口にする。

「彼女達の動きはしっかり探りなさい。私の予想が合っていれば、あの子達はいつか蜀を訪ねるわ」
「なるほど、あいつらを蜀への当て馬にしようと」
「当て馬じゃないわ、情報収集に役立ってもらうのよ。それじゃあ、後は任せるわ」
「はっ！」

部下の荀？に後の事を任せ、袁紹対策のために動き出す。
曹操にとって、袁紹に勝利した時こそ、国を立ち上げる絶好の機会と踏んでいた。
そうすれば一刀と同じ立場に立ち、堂々と戦を仕掛けられる。
戦に勝って、蜀の領土や一刀を始めとした、恋や霞といった名のあ

る将。
さらには劉備や孫策も勝利し、ひれ伏させて自分の配下に入れ、大陸を魏が統率する。
それが曹操の最終目標。

「春蘭、秋蘭。これより私達は袁紹軍を迎え撃つ。すぐに城に戻って、戦の準備をするわよ」
『御意』

相手は単純な思考をするとはいえ、名門で資金と兵力は豊富にある。こういった相手に敗北する最も大きい原因は、僅かな慢心や注意力不足。
調子に乗らせたら怖いだけに、より慎重に戦わなくてはならない。

「さぁ、もうすぐあの男と同じ場に立てるわ。待っていなさいよ、呂迅」

その一方で、通行許可をもらった劉備陣営は楽進隊の誘導で、比較的安全な道を進んでいた。
後ろには自分達を慕って付いて来た民が列をなし、劉備軍の兵の手も借りて移動している。

「なんとかなってよかったね、朱里ちゃん」
「はい。ですが曹操さんは必ず、今回の件の下に私達を攻めて来るでしょう」
「それまでに、どうにか体勢を整えねばならんな」

難しい顔をする関羽と諸葛亮。
これから頼る劉表の下でしばらく力を溜め、再度の独立を目指す。
だが問題は、それまでに曹操がどれだけ力を溜めているか。

領地的に言えば、劉表の治める領地だけでは心許ない。

「なにせ相手は曹操ですからな。おそらく、袁紹に勝って向こうの領地も手に入れるでしょうし」

根拠は無いが、あえて言うなら両者の器の違い。

袁紹が杯ならば曹操は丼。

あまりに大きさが違いすぎて、比較するのもおこがましい。

油断さえしなければ、勝つのは曹操で違いない。

「はわわ……。そうなると、今回の代償は大きかったですね」

「ごめんね、皆。私がこんな事を言わなければ……」

落ち込む劉備の姿に、すぐさま周囲がフォローを入れる。

「そんな事はありません。桃香様がご決断しなければ、我々は今も迷走していました」

「そうなのだ！　お姉ちゃんが決めてくれたから、鈴々達はこうしているのだ」

必死にフォローをする義妹達に、劉備の顔からは笑みが零れる。

ありがとうとお礼を伝え、気丈に振る舞って見せる。

「でも、本当にどうしようか？」

これから向かう北荊州の周りで注意すべきは、曹操、袁術、そして一刀の三人。

曹操はこれから袁紹を相手にして、その後は手に入れた領地整理に忙しくなると思われる。

そうなると注意すべきは袁術と一刀。

どちらも侮れないが、今すぐ注意すべきは袁術。
戦の準備をしているという情報もあるため、警戒は怠れない。
その一方で蜀からは、そういった話はまだ聞いていない。
手に入れた情報から善政をしているのは知っているが、戦に関しては不明。
善政をしていても、曹操のように戦で勝利しての、力による支配を考えているかもしれない。
劉備ようにできる限り戦を避けるかもしれない。
どちらにしろ、向こうに着いたらすぐに情報を仕入れる必要がある。

「ねぇねぇ、いっそ蜀と協力できないかなぁ？　あの人達、悪い人じゃないんでしょ？」
「……あの呂迅という方を詳しく知る必要があるので、すぐに結論は出せません。ですが、それだと桃香様は王になれないかもしれませんよ？」

独立が上手くいっても、せいぜい領主がいいところ。
国相手に協力をするように頼めば、当然自分達の立場の方が下になる。

「いいんだ、私が王様じゃなくても」
「桃香様！？」
「私は争いの無い平和な世の中になれば、誰が王様でも構わないの。皆が笑って暮らせればね」

驚きの声を上げる関羽を尻目に、淡々と語る劉備。
自分が王でなくとも、理想の世界になってくれればそれでいい。
そもそも、元からそういう世界ならば、自分が立ち上がる事も無く王という立場にも無縁だった。
その点を考えれば、別に王という立場に固執している訳ではない。

「それならそれで、桃香様には余計に頑張って貰わねば」
「えっ？」
「ちゃんと働かなきゃ、使えない労働力はすぐに切り捨てられるぞ」
「えぇっ！？」

趙雲と公孫賛の発言に過剰な反応を見せる劉備。
彼女の武力はいわずもがな、政務もあまり得意ではない。
頭は良いので文官ならばどうにかなりそうだが、政に関わる以上はもう少し努力が必要。

「桃香様。蜀と協力するにしろしないにしろ、今後は政務からお逃げにならぬようお願いします」
「うぅ……世の中って世知辛いなぁ」

俯いて軽くいじける劉備に和やかな笑みを向け、劉備軍は劉表の下へ向かうのだった。
ちょうどその頃、話題に上がっていた蜀では。

「恋、何度言ったら分かるんだ。箸はこう持つの」
「……？」
「首を傾げない。そして、箸を突き刺して食べるんじゃない！」
「……アニィ、これ美味しい」

どこか咬み合っていない会話をする呂兄妹。
二人がいるのは、成都の街中の飯屋。
一刀は直に街を歩いて民と触れ合いながら、蜀の政の方向性や政策を決めている。
最初は王の一刀が普通に出歩く姿に民は驚いたが、今ではすっかり馴染んでいる。

王ではなく一人の住人として付き合ってくれ、という根気強い説得の下に。

「呂迅様、酢豚お待たせしました」
「あぁ、ありがとね。腕上げたなぁ、前より美味くなっているよ」
「そりゃあどうも、今後も御贔屓に」

営業スマイルを見せて引っ込む店員。
すっかり常連になっているのか、やけに親しく話している。
そして話が終われば、再び恋の箸教室に戻る。

「こう。分かる？」
「……使いづらい」

正しい持ち方をしながらも、どこかぎこちない箸使い。
ちゃんとした使い方を教わっていないのか、恋は箸を握って使っている。
当然物を挟める訳も無く、ほとんど突き刺して食べている。
麺類も流し込む要領で、器に口を付けて啜って食している。

「アカンよ、一刀。恋は昔っからこうなんや。何度直そうとしても、すぐに握ってまう」
「はあぁ。兄としては複雑だよ。食べている姿は、こんなに癒されるのに」

同席している霞も話に混ざり、どうしても直らない癖に一刀が溜め息を吐く。
箸使いが悪いのに対し、食べている姿は癒し系。
周囲の客も思わず見蕩れるほど、不思議な魅力がある。

「ほら、恋。これも食べな」

すっかりその虜になった、霞と同じく同席している焔耶が、癒されながらシュウマイを差し出す。

「ん……ありがと、焔耶お姉ちゃん」

お礼を言うと、もう握ってしまった箸で突き刺し、黙々と食べていく。

そして焔耶はその姿に見蕩れ、心の底から癒される。

そうしているうちに食べ物がなくなり、また別の注文を取る。

今度はあんまんを頼んだようだ。

「はあぁぁぁ。これは癖になるな」

「ホンマやなぁ。そやけどウチは、一刀の食いっぷりの方が気に入ったで」

「そう？」

首を傾げる一刀の前には、積み重ねられた皿がある。

さすがに恋ほどではないが、既に三人前は食している。

ただし恋と違うのは、量だけではなく食べ方。

恋の食べ方が癒しとするならば、一刀の食べ方は美しい。

ちゃんとした姿勢と箸使いで、決して頬張る事無く淡々と食べ進める。

「まぁ、両親や桔梗さんに散々叩き込まれたからね」

「にしても見事やで。気付いたらこんなに食べてはるもん」

霞が見ている前で、先ほど届いた酢豚もあっという間にたいらげていく。

男女構わず引き寄せられる恋とは違い、その食事する姿は女性だけを釘付けにする。
特に両者に見蕩れている者は、すっかり溶けきって食事の手が止まっている。
やがて食べ終わった皿を重ねると、食後の一杯を飲んで一息吐く。

「ふぅ、ごちそうさま。恋はまだ食べるのか？」
「……これで終わり」

そう言って最後のあんまんを口に頬張って飲み込むと、ようやく箸を置いた。
重ねられた皿や蒸籠の数はハンパ無いが、これが恋にとって普通の量。
お陰で恋の給金の九割は食費に消える。
また、兄である一刀の給金の四割も、恋の食費のために消えている。

「兄妹揃って、ホンマよぉ食うなぁ。旅の間、大変だったんちゃう？」
「そんな事はないぞ。一刀が我慢してくれたから」
「それに野宿している最中に、色々と食材を集めておいたからね。足りなかったらそれを食べていたよ」

話を聞いて興味を持った霞は、野宿でどんな物を食べていたのか尋ねる。
すると焔耶は野宿の食事を思い出したのか、深い溜め息を吐いた。

「知っているか、霞。火を通せば、蝙蝠（こうもり）だって食べられるんだぞ」
「蝙蝠食ったんか！？」
「後、ミミズとか蜘蛛とかモグラとか」
「旅中にどんな食生活送ってたんや、アンタら！」

この場にいる唯一のツッコミ要員だけに、容赦なくツッコミを入れる霞。
関西弁だけに、やけに見事な技に一刀と恋が小さく拍手する。

「ちゅうか、火を通せば何でも食える思うてへんか？」
「……実際に口にするまではな」

それはつまり、今ではそう思っているという事だろうか。
強制サバイバルを経験した焔耶の胃袋は、頑丈さでは恋以上なのかもしれない。
同じ食生活を送っていた、一刀も同じく。
後日、話を聞いていた民の口から今の話が広まり、成都内に何店かゲテモノ系の店ができた。
見た目と材料はともかく、味はなかなかのものらしい。

「そういや、孫策のとこの人は来たんか？」

帰りの道を歩きながら、孫策からの連絡について話す。
前に書を送ってからそれなりに経つが、生憎まだ返事は来ていない。

「いや、まだだよ。そろそろ来ても、おかしくないんだけどなぁ」
「ひょっとして、向こうで何かあったんじゃないのか？」

不測の事態でも起きたのかと、心配そうに話をしながら四人は城に戻る。
すると、目的の人物が一刀の執務室で待っていた。

「あっ。おかえりなさい、ご主人様。お客様がお見えです」

侍女服と笑顔で出迎えた月が紹介した客というのは、待っていた連絡員の一人、甘寧だった。

「お邪魔しているぞ。少し待たせてしまったが、孫策様からの書を届けに来た」

座っていた席を立って、届けに来た書を差し出す。

それを受け取って内容を読むと、策は順調に進んでいるという事が書いてあった。

さらに、そのために自分達が何をしたのかまで。

「上手く袁術の意識をこっちに誘導するのは成功したか。後は、上手くこっちに攻めて来てくれれば」

誘い出しさえすれば、戦場で実行する策の内容はそれほど難しくない。

先鋒に刈り出された孫策軍と合流し、協力して袁術を叩く。

そのためにも、誘い出すまでは慎重にいかなければならない。

前に周泰に書を頼んだ後、すぐに戦の準備を本格的に始め、袁術領に攻め込む噂を流した。

情報に強い詠のお陰で、あっという間に噂は成都内に広まった。

その甲斐あってか、後から調査に来た袁術の細作の情報により、上手く誘導することができた。

おまけに報告した褒美だとかなんとか言って、孫策軍が先鋒を務める事になっているらしい。

「そういう訳で、間違いなく袁術は蜀に攻めてくると思われる」

「向こうに気付かれていない？」

「今のところ、そのような様子は無い。最も、あの主君じゃ気付くのは戦場だろうが」

勇んで戦場に出たまではいいが、あっという間に逆襲されて敗走する。
なんとも想像しやすい様子に、思わず失笑してしまう。

「これが現実に見られるかもしれないんだな」

一人一人の想像の内容は少し違うが、一様に同じことがある。
絶対にその場面は見逃せないと。
自分達の想像通りの光景を、この目に納めるために。
それを現実にするために、なんとしてもこの策は成功させなくては。

「よし、策に変更は無しだ。孫策さんには、予定通りに進めるよう伝えてくれないか？」
「承知した。……そうだ、忘れるところだった」

何かを思い出した甘寧は、足下に置いてあった袋を手に取る。
中に手を突っ込んで探し物を取り出し、それを恋に差し出す。

「呂布殿には、猫の件で周泰が世話になったそうだからな。礼と言ってはなんだが、猫達に食わせてやってくれ。それとこっちは呂布殿への礼だ」

差し出されたのは、大き目の魚が数匹。
それと袋いっぱいの食用キノコや木の実。
これらの礼はあくまで表向きで、実際は恋への点数稼ぎ。
来る途中の道すがら、河原で魚を捕らえ森でキノコと木の実を調達。
部下が世話になったと強調しながら、食欲旺盛な恋の胃袋を攻めようという策だ。
同時に猫にも魚を送り、二重の点数稼ぎを狙っている。

「……ありがとう」

策が功を奏したのか、笑みを浮かべながら恋が食材を受け取る。

「気にするな。仲間が世話になったのだ、これくらい当然だ」

平静を装っているが、心の中では大きくガッツポーズをしていた。

笑ってもらえた、これは点数が大きいぞと、微かに微笑んで見せる。

「アニィ、皆にご飯あげに行こう」

腕にしがみ付いて動物達の所に連れて行こうとするが、これから一刀には仕事がある。

しかも重要な案件があるので、今日ばかりは後回しにできない。

どうにか断ろうとするものの、触覚のような髪と一緒にしゅんと落ち込む恋の姿を見ると、なんとかしてあげたくなってしまう。

「駄目？」

「……ごめん、本当に今日は無理なんだ」

目をウルウルさせながら腕にしがみ付き、首を傾げる姿に思わず頷いてしまいそうになる。

妹ながらに強烈な誘惑に、どうにか打ち勝って堪えきった一刀。

だが、まだ耐性の無い焔耶と甘寧は敗北して床に膝を着いてしまった。

慣れていて耐性のある月と霞が、慌てて二人を介抱する。

「こないな調子で大丈夫なんかなぁ、共同作戦」

色々と不安を残しつつ、計画は着々と進んでいく。
間もなく始まるであろう、袁術軍対蜀軍の戦いに向けて。

変動の予兆（後書き）

変動に向けて各地が動き始めた。
それぞれの想いを実現するために。

開戦　VS袁術

独立に向けて暗躍する孫策軍。
思わぬ縁でできた外部の援護もあり、計画は順調だった。
出陣の準備を整えた孫策が、集まっている仲間達と会話を交わす。

「袁術はどうだった？」
「奴らに仕返しするんだって、煩く喚いていたわ」

煮え湯を飲まされた連合での戦い。
当然、その時に袁術軍も被害を受けた。
特に袁術自身も落とし穴に落とされ、かなり恥をかいた。
その相手が自分の領地に攻め込もうとしている。
しかも理由が、袁術の悪政のせいで苦しんでいる民を救うため。
民の状態を知らない袁術は、何を馬鹿な事をと噂を一蹴するが、実際問題情勢は良くない。
蜀内部にも袁術領の情勢の悪さは伝わっているので、民は何ら不思議に思っていない。
袁術の配下にいて、それを理解してどうにかしたいと思っているのは、残念ながら孫策とその配下だけ。

「妾にたてつく奴は、コテンコテンのギタンギタンにしてやるのじゃあ！」

結果、連合の時の復讐をするのだと喚き散らし、難色を示す周囲を振り切って蜀への侵攻を決めてしまった。

「袁家の者は相手の力量より、自分達が目立てるかで動くからな」
「自分達に汚点を付けた、蜀の奴らを許さないって訳じゃな」

「そういう事だ」

それ故に戦力の質を気にせず、過去の復讐心だけで動く。
唯一止められそうな側近の張勲は、良くも悪くも従順なイエスマン。
袁術の暴走を止めるどころか、逆に煽って持ち上げている。

「ところで穏、小蓮の方はどうなっている？」
「先ほど明命ちゃんから連絡があって、予定通りに到着するようです」

今回の戦いに際し、孫策は自分の配下や妹達全員の招集を取り付けた。
相手をコテンパンに倒すためだとか適当に理由を付け、許可を貰ってきたのだ。
戦力的な意味からも、張勲を始めとする重鎮達も反対しなかった。
彼らに先鋒を任せて相手の戦力を削れば、後は袁家の戦の常套手段、数に任せて押し切れると考えて。
仮に孫策軍が押されても、被害を孫策軍に留めて自分達はすぐに退却。
豊富な資金力と兵数を活かした篭城戦で、持久戦に持ち込めばいいと考えた。
被害を出すのなら自分達ではなく、あくまで部下の孫策の部隊だけに出させる。
そして最後のいい所だけ、自分達が掻っ攫う。
そんな幻想を思い浮かべながら、毒入りの甘い蜜に手を出してしまった。

「しかし、信用してもいいのでしょうか？　直前に裏切って私達ごと倒す、という可能性だって」

未だに疑いの目で孫権。
いかに知り合いがいるからと言って、すぐに信用できないのも事実。
生真面目な性格故の疑心だが、そこに穏が口を挟む。

「一刀さんはそんな人じゃありませんよぉ。以前、屋敷で働いていた時もですねぇ」

昔の事を思い出しながら、仕事の様子や私生活での交流を喋る。
中には完全な惚気や、一緒に旅をしている焔耶を羨む声まで混じっている。
延々と話を聞かされて困ってしまう孫権に対し、後ろに控えている甘寧は聞き入っていた。
冷静な表情を貫いているが、心の中では一刀の昔話を聞けて喜んでいる。

「穏、そこまでにしなさい」
「えぇっ。まだ五刻は余裕で語れますよぉ？」
「そ、そんなにあるのかっ!?」

あまりの話すネタの多さに、孫権は驚きを隠せない。
逆に思春は無言なものの、歓喜の表情を隠せない。

「やめておけ。話すとしても、暇な時にしろ」

周瑜に咎められた穏は、まだ話し足りないと言いながら落ち込む。
その傍らで、甘寧も少し残念そうにしていた。

「それと蓮華様、疑うのは間違いではありませんが、他に手が無かったのも事実です」

差し出された手を掴まないでいるほど、状況が良かった訳でもない。
どうせどこかと戦わされて消耗するくらいなら、この話に乗って袁術を倒す。
仮に罠だとしてもだ。

「最も、穏の話から罠という心配はなさそうですが。それとも、蓮華様は穏を信じられないと？」
「そういう訳ではない！　ただ、こうも簡単に受け入れていいものかと」

俯き気味になりながら告げる、彼女の性格ゆえに生まれる悩み。
王としての素質はあるが、王族としての誇りや振る舞いに縛られて固くなっている思考。
分からない物に歩み寄って知ろうとするか、悪い物じゃないかと最初から疑って距離を置くか。
どちらの器が大きいかと聞かれれば、大抵の人は前者を選ぶだろう。
この点だけを考えれば、現状は孫策の方が優れている。
孫権にもそれだけの器があるのに、本人がそれを自覚していない。
立場や環境、姉妹の性格が、彼女をそうしてしまったのかもしれないが。

「蓮華様、お気持ちは分かります。ですが、他人を信じぬ程度の器では、王という立場は務まりません」
「冥琳……」
「相手を疑うのは部下の役目、受け入れるのが王の役目ですよ」

それだけ伝えると、出陣のために自らの隊の下へ向かう。
一人残された孫権は、今の言葉の意味をしっかりと受け止める。

「受け入れるのが……王の役目か」

誰とだって、最初の出会いは他人だった。
周瑜や黄蓋はいわずもがな、周泰や甘寧、呂蒙に穏も。
最初は他人でも互いに受け入れたからこそ、こうして共に戦っている。
そう考えれば、蜀の気持ちも分かる。
向こうは他人である自分達を受け入れるため、手を伸ばして来た。
ならば王である姉が取るべき行動は、相手を受け入れるために手を伸ばす事。
心配事や相手を疑う事は部下に任せて、自分は警戒心でだけ持って受け入れればいい。
それが王たる物の器というもの。

「はぁ、さすが姉様だな。私などまだまだだ」
「蓮華様、小蓮様がご到着なさいました。お会いになられますか？」
連絡を受けた周泰が内容を伝えると、孫権はどこか晴れたような表情で頷いて歩き出す。

「勿論だ。小蓮に会うのも久々だな」

この日、孫権は次代の王として少しだけ成長した。
場面は変わって蜀の成都。
どうにか戦の準備を整えて、出陣に向けて軍議をしていた。

「いいな、俺達は領の境に展開するだけだ。相手が攻め込むまで、決して手を出さないようにな」

自分達が先に動いては、孫策軍が反転するのに手間が掛かってしまう。

だが相手が先に動いてくれれば、孫策軍が反転するだけのスペースと勢いが出来る。
加えて、先に動いたことによって、袁術軍の間に僅かに隙ができるはず。
数で勝る相手を倒すためには、その隙を逃さない事が重要となる。

「孫策軍が反転した瞬間、相手に動揺が生まれるはずです」
「そこにウチが騎馬隊で切り込むんやな」
「はい。さらに華雄将軍の勢いでもって、混乱する相手を強襲します」

孫策軍の反転と張遼隊の突撃で怯んだところに、勢いなら誰にも負けない華雄隊が突撃。
これで大抵の相手は、一気に呑まれてしまうだろう。
そうなれば敵陣全体に混乱を広め、崩壊を引き起こす事が可能となる。

「それにしても、于吉は奇襲のような策を立てるのが上手いな」
「奇襲とは二度、三度と続けてこそ意味があるのです。そうする事で相手の心に大きな動揺が生まれます。相手の心さえ乱してしまえば、こちらが冷静でいれば勝ちます」

于吉が真に得意としているのは、内政や軍略ではなく、相手の心をかき乱すこと。
まともな心理状態を保てない相手ほど、倒しやすい者はいない。
引っかき回して動揺させ、敵陣を崩壊に導く。
ねねとの勝負の時も、不意打ちでねねの心に焦りを生ませ、見事に勝利した。
それを対局の時に読み取った詠と相談し、大まかな策を考えて連絡を取っていた。

結果、戦場は于吉の得意分野を充分に発揮できる、正に独壇場とも言える状態に整いつつあった。

「于吉の得意分野は、ねねとの対局で大体分かったからね。策を立てやすいようにしておいて正解だな」
「えぇ。お陰で相手の動揺を誘う手段を何十、いや、何百通りも考える事ができましたよ」

含み笑いのような笑みを浮かべ、眼鏡の位置を直す姿は少し不気味だ。
なんというか、独特な雰囲気が滲み出ている気がする。
正直、こういうタイプは敵に回したくない。
性癖の事を除いても。

「于吉、君が味方で良かったよ」
「それはどうも。では、話を続けます」

今回の策で重要なのは、仕掛けるタイミング。
孫策軍の反転、騎馬隊の特攻、そこから華雄隊の突撃。
この三連続の奇襲で相手の心理をかき乱すためには、相手に余裕を与えてはいけない。
その旨は細作を通して孫策軍にも伝えたが、一番重要なのは霞の騎馬隊。
反転を始めた孫策軍に相手が動揺した瞬間に動かなくては、特攻の効果は薄い。
知らない部隊との連携は難しいだけに、ある意味今回の策の要とも言える。

「そういう訳だから、今回は霞の下にねねを付ける。機を見誤るなよ」

「任せろなのです！　見事に指揮をして、恋殿にお褒めいただくのです！！」

動機は不純だが、ちゃんとやってくれるのならば文句は無い。

「華雄、相手は孫策じゃないぞ、袁術だ。もしもそれを忘れたら、俺はお前を斬る」

「分かっている。奴とは今回の決着の後に、ケリをつけるさ」

拳を握り締めた華雄は、今回だけだと自分に言い聞かせて落ち着こうとする。

多少不安はあるが、彼女はそう何度も同じ過ちを繰り返しはしない。

甘寧が始めて現れたときも、自分では駄目だと冷静なうちに判断していた。

ならば、今回の戦も信頼して送り出せる。

「霞、ねねの合図が出たら迷わず突っ込め。いいな？」

「分かっとる。ウチに任せときぃ」

最後に霞に注意を促し、重要な位置に付く三人の目つきが変わる。

この三人がしっかりやってくれれば、よほどの事がない限り負ける事は無い。

連続奇襲さえ成功すれば、後は桔梗の後方支援を受けて一刀、恋、焔耶の部隊が総攻撃を仕掛ける。

「紫苑さん、左慈、留守は頼んだ」

「任せてください、ご主人様」

「任されたぜ」

重要な戦いの一つになるとはいえ、成都を留守にする訳にはいかな

い。
留守は紫苑と左慈に任せ、軍議を終了しようかという時に、細作から一報が飛び込んできた。
袁術軍が動き出したと。
それを聞いた一刀は、王として仲間達に檄を飛ばす。

「いいな、この戦は蜀にとって大事な一戦になる。賊退治と同じように考えるな、気を引き締めていくぞ！」
『応っ！』

号令を呼びかけ、出陣のために走り出す。
留守を預かる二人をその背中を見送り、武運を祈った。
動き出した両軍は順調に行軍を進め、数日後に遂に相対する。
風に揺れて聳え立つ旗の下には、数万の兵士達。
蜀軍が三万、袁術軍が九万。
だが孫策軍二万は蜀に味方するため、実質は五万対七万。
兵数では負けている蜀軍だが、質なら圧倒的に勝っている。
おまけに孫策軍の質を考えれば、充分に数の差は埋められる。

「この程度の差ならば、許容範囲です。勝ち目はありますよ」

兵数で負けているとはいえ、差は二倍でも十倍でもない。
あくまで二万。
これだけの差なら、準備した策でどうにかなる。
さすがに三倍以上の差だと厳しいが。

「さてと、じゃあ戦前の舌戦でもしてくるか」
「アニィ、気をつけて」
「大丈夫だって。向こうが余程の馬鹿じゃ……ないことを祈るよ」

間を置いて微妙な表情をしながら、舌戦に向かう一刀。
気持ちはよく分かると、周囲の面々はすぐにでも飛び出せる心構えだけはしておいた。

「よく来たのじゃ！　妾が全力を持って、貴様など……聞いておるのか！！」

両手を挙げて怒る袁術の目の前で、一刀がキョロキョロと辺りを見渡す。
やがて下を向いて袁術の姿を見ると、笑顔で返事をした。

「あぁ、そこにいたんだ。小さ過ぎて気づかなかった」

笑顔で毒をつき、見事な先制パンチを喰らわせた。
簡単な挑発に乗った袁術は、あれこれ騒いで冷静さを失う。
総大将がこれでは、もう勝ったも当然だ。
ただでさえ兵士は一刀達の旗に、萎縮しているというのに。
兵士の中で平気でいるのは、味方に付いてくれると分かっている孫策軍の兵士だけ。

「覚えておれ！　貴様程度の小物、直ぐにぶっ潰してやるのじゃ！！」

「ごめんねぇ。覚えるも何も、君自体知らないしぃ」

耳をほじって声を掛けると、開戦前の戦場に袁術の声が響く。
その声に笑いを必死で抑える孫策。
周瑜が我慢するようにと注意している間に、出陣の命令が届いた。

「くっ、くくっ、腹筋……腹筋が」

「いい加減にしろ。行くぞ、最初で最大の機、逃すわけにはいかん」
「はぁ、はぁっ。えっ、えぇ、分かっているわ」

どうにか笑いを静め、正面に展開する蜀軍と相対する。
両軍から出陣を告げる銅鑼が鳴り響き、孫策軍と蜀軍が前進を開始する。
勢い良く飛び出した孫策軍に対し、蜀軍の前進は遅い。
袁術達はそれを馬鹿にしたような目で見ているが、実際は孫策軍に反転するスペースを与えるため。
あまり前進し過ぎると、反転するスペースが無くなってしまうからだ。

「頃合いだな。穏、亜莎、今こそ反抗の時だ！」
「はっ！　呂蒙隊転進、反転して袁術軍を強襲します」
「陸遜隊も行きますよぉ」

先頭の二部隊がそれぞれ左右に分かれて反転を開始する。
急な反転に袁術軍が動揺し、孫策軍の中央に道が開いた瞬間だった。

「今です霞、騎馬隊突撃なのです！」
「おっしゃあっ、いくでぇ！」

機を見計らったねねの号令と共に、騎馬隊が霞を先頭に孫策軍の中央を突っ切る。
左右に分かれて反転しているため、面白いように前へ進める。
まるで自分達のために、道を開けてくれているかのように。

「ひゃあ、さすが神速の張遼と言われるだけの事はあるわね」
「は、速いです……」

反転し終えた孫尚香と周泰が見蕩れるほどの速さで駆け抜けた騎馬隊。
その後方からは、勢いに乗った華雄隊が突っ込んで来る。

「蓮華様、華雄隊の勢いに乗ります。前に出ることを恐れず、突撃あるのみです」
「あぁ。これまでの仕返しを、袁術にたっぷり味わわせてやる！」

腰から剣を抜き、機を見計らう孫権。
やがて華雄隊が並ぶと同時に、左側の部隊は孫策、右側の部隊は孫権がそれぞれ号令を出し、一斉に孫策軍が袁術軍に向けて突っ込んで行く。

「な、なんじゃとおぉぉぉっ！」

この突然の反抗に、袁術軍に動揺が走る。
孫策軍が反転した、その間を張遼隊の騎馬が突っ込んできた、華雄隊と一緒に孫策軍が攻めて来た。
三重の動揺の種を与えられた袁術軍の内部は、大混乱を起こした。
どうすればいいのかと迷う兵士。
隊長格の兵も、焦りと動揺のせいで指示を上手く出せず。
正に上へ下への大混乱。

「どうすればいいんですか！」
「ともかく、迎撃準備を……ぎゃっ！」

ついさっきまで話していた仲間の首が飛び、胴体から噴水のように血が吹き出る。
周囲に血の雨を降らせた原因は、先陣を切って突っ込んできた霞。
頬に付いた血を親指で拭い、飛龍偃月刀を構えて吠える。

「やったれお前等！　このまま一気に、袁術を倒したれ！！」

戦場に響く霞の声に従い、彼女の部下が次々と袁術軍の兵士を倒していく。

袁術軍には、ただでさえ速い霞の騎馬隊が、動揺と焦りのせいで倍以上速く見えた。

「きいぃぃっ！　孫策め、妾を裏切りおったのか！！」

「お嬢様、それどころじゃないですよ！　このままじゃ……」

動揺が広がる中に騎馬隊に攻め込まれ、さらに華雄隊と孫策軍が突っ込んで来る。

混乱している袁術軍は対処が出来ず、次々に倒されて数が減っていく。

二万の差をものともしない蜀軍と孫策軍が、一方的に攻め続け袁術軍を呑み込んでいく。

断末魔の叫びと血液を体から流すのは、ほとんどが袁術軍の兵士達。

完全に勢いに乗った両軍の敵では無かった。

「進め進め！　これまでの仕返し、存分に晴らしなさい！！」

周囲にいる兵を三人切り捨て、孫策が南海覇王を掲げて命じる。

そんな押せ押せムードになっている状況で、蜀軍が最後のダメ押しを仕掛ける。

華雄隊と孫策軍の後ろにいた、一刀と恋、焔耶の部隊が上がって来たのだ。

さらに桔梗と于吉の部隊からも矢の雨が降り注ぎ、下がろうとする兵士達を仕留めていく。

どうにか逃げようと側面に走る者は、外側に広く展開した孫権、周

瑜、呂蒙、穏の部隊に捕縛される。
そして満を喫して戦場に現れた深紅の呂旗と、鮮紅の呂旗。
黒混じりの濃い紅が恋、白混じりの鮮やかな紅が一刀の呂旗だ。

「りょ、呂布だぁ！」
「……邪魔」
「うわぁぁっ！　出た、奴が出、ぎゃあぁぁっ！！」
「奴じゃない、呂迅だ。名前ぐらい覚えておけ」

悲鳴を上げる間もなく、恋の方天画戟が心臓を貫く。
対する一刀も、逆手に持った鮮紅と紅蓮で両肘から先を切り落とす。
戦場に呂兄妹が現れると、ここからは完全に蜀軍と孫策軍の流れだった。
もはやこの戦場においての袁術軍に、起死回生の手は無い。

「うぬぬぬぬっ、小癪な奴らなのじゃ！　七乃、なんとかせい！！」
「そう言われましても、ここまで崩れるとさすがの私でも」
「なんじゃとぉぉっ！！」

袁術と張勲が漫才をしている間にも、侵攻は止まらない。
逃げ惑う輩は基本無視しながら、抵抗する者だけを倒して奥へ進んでいく。
逃げようとする者も、外側に待機している部隊に次々に捕縛される。
唯一勝っていた兵数でも、既に向こうに負けている。

「こうなったら逃げましょうか。お城に戻れば、まだなんとかなるかもしれません」
「嫌なのじゃ、今ここで奴らに一泡」
「無理なものは無理なんです。それじゃあ、退却しちゃってくださぁい！」

「ま、待つのじゃ、妾は嫌なのじゃあぁぁぁっ！」

嫌がる袁術を脇に抱え、撤退命令を下す。
それが伝わると同時に、我先にと逃げ出す袁術軍。
各々の戦闘力はそれほどでもないが、どういう訳か逃げ足だけは速かった。
戦闘中の部隊に何も告げずに殿を任せ、後方の部隊が袁術と共に引き上げる。
速い逃げ足であっという間に撤退してしまったので、これでは簡単には追いつけない。
追いつくとしたら、せいぜい霞の騎馬隊くらいだろう。

「ちっ、逃がしたか」
「悔やんでいる暇はありませんぞ、策殿。このまま一気に城へ攻め込みましょうぞ」
「当然よ。全軍、追撃開始！」

追撃命令を出し、城へ向かって進撃を始める孫策軍。
それに続けと、一刀も追撃命令を出す。

「俺達も遅れるな。袁術を倒し、苦しむ民を救うんだ！」
『応っ！』

一気呵成の如く袁術軍を追撃する両軍。
途中で殿を押し付けられた部隊をなぎ倒し、踏み越えていく。
彼らが通った後には、抵抗した者が無残な姿で残っていただけだった。
この両軍は、もう誰にも止められない。

開戦　ＶＳ袁術（後書き）

遂に始まった袁術軍との戦い。
逃げ出した袁術を追って、両軍が追撃を掛ける。

暴走

共同作戦で袁術を撃退した、蜀軍と孫策軍。
逃げ惑う袁術軍を追撃する両軍は、遂に城まで追い詰めた。
袁術達が逃げ込んだ城を包囲し、逃げ道を封じる。
いざ城に攻め込む前に、両軍の重鎮が顔合わせをする。

「かぁずとさぁぁん！」

主である孫策を差し置いて、真っ先に一刀に駆け寄ったのは穏。
咎めようとする孫権の肩に孫策が手を置き、いいからと耳打ちする。
誰よりも彼に会いたかったのは、穏に違いないと告げて。
駆け寄った穏は一刀に抱き抱えられ、焔耶も交えて再会の時を味わっている。
号泣しながら押し付けてくる魔乳の誘惑も、再会の前では無に帰した。

「ふえぇぇん。一刀さんも焔耶ちゃんも会いたかったですよぉ」
「俺達もだよ。元気で良かった」
「ははははっ。ったく、泣き虫だなぁ、穏は」

そう言っている焔耶の目にも、薄っすらと涙が見える。

「だぁってぇ、私は焔耶ちゃんと違って一緒にいた訳じゃないんですよ！」
「穏は両親公認で一刀の嫁か妾になれるんだから、それくらい見逃してくれてもいいだろ！」

感動の再会のはずが、何故か焔耶と穏の言い争いに発展しそうにな

っている。
間にいる一刀はいきなり何をとうろたえ、傍観者の孫策は楽しそうにする。
他の面々は、一刀を巡る修羅場だと分かると、静観を決め込んだ。

「親公認でも油断できないんですよ。基本方針はお嫁さんですから！」

「妾で我慢しろ！　嫁には私がなる！！」
「ちょっと待てぃ！　なんで感動の再会が、いきなり修羅場になるんだよぉ！！」

言い争う二人を仲裁することなく、間に立って額に軽く手刀を落とす。
力ずくでの制止に、二人は額を押さえながら一刀に頭を下げる。

「うぅ……ごめんなさぁい」
「悪かった、一刀。つうぅぅ……」

再会の感動とは別に涙を流す二人に溜め息を吐く。

「嫁にしろ側室にしろ、二人とも俺の大事な家族には違いないんだ。もっと仲良くしろ」

少々照れながら告げる内容に、焔耶と穏は痛みも忘れて表情がとろける。
二人の様子を見届け、笑いを堪えて静観していた孫策の方を向く。

「こうしてお会いするのは初めてですね。蜀王、呂迅です」
「孫策よ。此度の事、感謝するわ」
「いえいえ、俺としても袁術は邪魔だったし、貴方とは仲良くして

損はありませんから」

がっちり握手をしつつ、互いに相手の目をじっと眺める。
顔や態度は嘘を付けても、目は嘘を付けないと踏んで。
しばらくすると二人揃って笑みを浮かべ、握っていた手を離した。

「さて、どうしましょうか？　城門は固く閉ざされているわよ」
「手段ならあります。協力してくれますか？」
「いいわよ。ただし、内容しだいだけどね」
「充分です」

やり取りを終えると、主だった顔が集まって即席の軍議を開く。
その中で一刀が提示した策はこうだ。
如何に強固な城門でも、それは閂（かんぬき）で門を閉じているからこそ。
そこで城門越しに閂を一刀の氣弾で破壊、開閉できるようになった城門から、機動力に優れた部隊を先頭に城内に入るという策だ。

「氣弾で壊せるのか？」
「俺のあの技を忘れたんですか？　人体を貫通する氣弾なら、木も貫通できます」
「なるほどのぉ、その手があったか」

要所で一刀が使っていた、骨や肉を貫く極小の氣弾。
それならば扉を貫通して閂を破壊する事も、決して難しい事では無い。
本来なら、隠密に優れた甘寧か周泰を内部に潜入させる所だが、これには少しリスクがある。
袁術が逃げた城の門は大きく、通常よりも一回り大きく作られている。
つまり、それを押さえる閂も大きいということだ。

通常なら二人でなんとかなるが、目の前の城門の大きさに合わせた閂。
二人だけで閂を外すには、少しばかり無理がある。
忍び込む二人が、よほどの力自慢でない限り。
そうでなくとも、機動力の高い部隊を率いる二人には居てもらわなくては困る。

「破壊と同時に霞さんと甘寧さん、周泰さんの部隊に城門を突破してもらいます」
「そしてそのまま本隊が突撃か。いいだろう、その手で行こう」

于吉と周瑜も納得し、策は決まった。
城の周囲の警戒はねね、于吉、呂蒙、孫尚香の部隊が担当。
抜け道か何かで城を脱出しようとするのを防ぐ。

「それじゃあ、よろしく頼むわね」
「任せておいて」

簡単な打ち合わせを終え、各自が各々の陣営に戻る。
その道中、周瑜が孫策に尋ねる。

「どうだ？　蜀王を見た感想は」
「穏の言う通り、なかなかいい男だったわ」
「姉様！？」

いきなり何を言い出すのか、と驚きの表情を見せる孫権。
当然ですと胸を張る穏と、同意して小さく頷く甘寧はいつもの事だ。

「なによ、本当の事でしょ？　それと、彼は決して悪い人間じゃないわよ。ちゃんと目を見れば分かるわ。それに彼ってなんか、私に

似てそうだし」

言われてみれば、思い当たる節は多い。
妹がいる、王なのに前線に出て戦う。
机に向かうより修練の方が好き、そしてなにより強い。
性別と性格以外は、共通点が意外とあった。
特に立場と関係なく前線で戦う辺りは、意気投合できそうだ。

「あぁ、そうだな。お前と違って、彼は真面目に仕事をするそうだが」
「うっ……。それは言いっこなしで」

やぶへびを突かれた孫策は苦笑いを浮かべ、そそくさと自分の部隊へ逃げる。

「全く姉様は。自分に似ているからって、あんな言い方は」
「そう言いなさるな、権殿。それに奴が何か企んでいる事はないじゃろ」
「何故、断言できるのですか？」

明命の問い掛けに、黄蓋は笑って答えた。
一刀の氣の色が悪いものではないからと。

「氣で分かるものなのか？」
「勿論じゃ。氣の色とは、心の奥底にあるもので決まる。呂迅とやらの氣は、情熱の赤と清い心の白を合わせ持っておる。悪い物は全く見えんかった」

同じ氣の使い手だから分かる、相手の氣の色の見分け。
加えて長年の経験から、黄蓋の目には一刀が悪者に映らなかった。

それでも孫権はまだ納得しきれないのか、もう少し様子を見たいと言って自陣に向かった。

「やれやれ、権殿は疑り深いのぉ」

頭を掻きながら孫権の背中を見送ると、少し怪訝な表情で一刀の陣営に視線を向けた。

「それにしても、あの白い氣は妙な感じじゃったのぉ。まるで上から塗り替えられたような……」

僅かな疑問を浮かべつつも、作戦開始時間が迫っていた事もあり、自陣に戻る黄蓋だった。

四半刻後、両陣営の各部隊の準備が整い、作戦の要の一刀が一時的に先頭に立つ。

合図の銅鑼が鳴り響き、作戦が開始された。

「いっくぜぇ！」

全身の氣を両手に集約し、前に突き出して貫通式氣弾を放つ。

細かい氣弾が城門ごと閂を貫通し、にわかに城内が騒がしくなった。

「今や、突撃ぃ！」

霞の合図と共に、機動力の高い三部隊が突撃する。

上から降って来る矢の雨は、一刀がそのまま氣弾を放って狙撃手を倒して防ぐ。

やがて甘寧隊と周泰隊が城門に激突、弱っていた閂をへし折って城門を突破した。

迎撃に出ようとする袁術兵だが、そこに雪崩れ込んでくる騎馬隊に

一蹴される。
こうなってはもう、他の部隊も続々と城内に進軍できる。
その一方で、外が騒がしくなって来た事に気付いた袁術は、乾いた喉を蜂蜜水で潤しながら首を傾げた。

「七乃、外が騒がしくなったのぉ」
「そうですねぇ。孫策さん達が、攻城戦を仕掛けてきたんでしょうか？」

ちょっと様子を見てきますと、玉座を後にしようとした時だった。
慌しく兵が駆け込んで来て、現状を報告した。
孫策、蜀の両軍が攻撃を開始、城門が突破されたと。

「なんじゃとおぉぉぉっ！？」

城門が突破されては、予定していた篭城戦など出来るはずがない。
まさか、こんなにも早く突破されるとは思わなかったので、上も下も大混乱している。

「拙いですお嬢様、こうなったら早く逃げましょう！」

頭の回転が早い張勲は、もう逃げるしかないと結論を出した。
まだ負けていないと騒ぐ袁術の手を引き、混乱する兵士を落ち着かせ、脱出のために動き出した。

「城の周囲はどうなっていますか？」
「四つの部隊に四方向から囲まれ、逃げ道はありません」
「無いなら作ればいいんです。数の少ない箇所を、一点突破で抜けます」
『御意！』

兵士に指示を出し、移動を開始する。
そこへ迫る、蜀と孫策軍。
歯向かう輩は切り捨て、投降する兵士は捕縛しながら袁術を探す。

「城内は大人数で動くな、固まるとしても二、三人に留めろ」
「可能な限り手分けして袁術を見つけ出せ！」

指示に従い、両軍の兵が城内へ走る。
各将達も城内を駆け回り、袁術を探す。

「えぇい！」

迫りくる袁術兵を紫燕（しえん）で薙ぎ払い、周泰と共に穏が袁術を探す。
やがてどこからか悲鳴が聞こえ、駆け寄ると、袁術兵に仲間の兵が倒されていた。
しかもその袁術兵の後ろには、張勲に守られた袁術がいた。

「明命ちゃん！」
「はい！　袁術、覚悟！！」

背中に背負った魂切（こんせつ）を抜き、二人で袁術目掛けて飛び込む。
狭い廊下にも関わらず、自由自在に剣を振るう周泰の手で、兵士が次々に殺められる。
後ろから来た敵兵は穏が対応し、迎撃する。
ところが、脅える袁術を前に、周泰が最後に残った張勲を斬ろうとした時だった。

「あぁっ！」

鈍い金属音と共に穏の声が響く。
まさかと思い振り向くと、廊下の柱に紫燕が喰いこんでいた。
狭い廊下ではその長さが仇となり、柱に遮られてしまったようだ。

「穏様！」
「動くな！」

武器が使えなくなった隙を突かれ、穏に複数の刃が向けられる。
これでは周泰とて動けない。
どこかに隠れているならともかく、敵の目の前にいてはどうする事もできない。

「あらあら、思わぬ幸運ですね」
「ぬはははははっ、いい気味なのじゃ！」

高笑いする袁術を前にしても、人質を取られていては殺められない。
殺めたその瞬間、穏の命も失われるだろう。
任務中の彼女ならば袁術を斬れるだろうが、今は事情が違う。
人質に取られているのは、先ほど想い人と再会したばかりの穏。
しかもその相手は、この日のために協力してくれた蜀の王。
本当にここで袁術を倒すことを優先していいのか、その判断がつかない。

「うっ、うぅ……」

任務のために非情になることは、何度も経験してきた。
だが今回ばかりは、周泰が判断するには荷が重過ぎる。
下手に手を出して穏を殺されたら、自分達がどうなるか分からない。
悲願のためとはいえ、後々に仲間達を危険にさらすかもしれない。
頭の中であらゆる思惑がぐるぐると回り、やがて周泰は剣を納めた。

「明命ちゃん、私の事は気にしないでください！」
捕らわれた穏がどんなに叫んでも、俯いたまま歯を食いしばる周泰。
「懸命な判断です。彼女も捕まえちゃってください。ここを突破するため、人質になってもらいましょう」
張勲の命令で周泰も捕縛され、武器も奪われてしまう。
このまま人質として、敵陣を突破しようと中庭に差し掛かった所で、兵士を書き分けて孫策と周瑜、黄蓋が現れる。
「穏、明命！」
「申し訳ありませぇん。不覚を取りましたぁ」
涙目で謝る穏の首筋に、刃が押し当てられる。
いかに孫策と黄蓋であろうと、これでは手が出せない。
苦い表情をして、南海覇王と多幻双弓（たげんそうきゅう）を下げる。
憎い相手が目の前にいるのに、何もできない。
それが歯がゆくて仕方が無かった。
「物分りが良くて助かります。それでは、失礼しますねぇ」
陽気にこの場を抜けようとしたが、目の前にいる蜀の兵士達がざわめきだした。
袁術達とは関係なくその場を退くと、一刀と恋が姿を現した。
「穏！？」
「か、一刀さぁん」

まさかの展開に一刀も驚きを隠せない。
猫で繋がりができた周泰も捕縛されているため、恋もおいそれと動けない。
このまま逃がしてしまうのかと、誰もが思った瞬間だった。

「……許さない」

重い声が聞こえると同時に、空気が周囲に重く圧し掛かってきた。
例えようの無い違和感に身を震わせ、声の発生源である一刀に目を向ける。
全身を覆う鮮紅色の氣が、黒く染まりだす。
まるで家族を失った一刀が、敵の盗賊の下に殴りこんだ時のように。

「アニィ！？」

初めてそれを見た恋の顔色が変わる。
あの飛将軍とも言われた恋が、兄である一刀に恐怖を感じる。
だが恐怖しているのは恋だけではない。
黄蓋は自分の目が信じられなかった。
氣の色の変化は、感情によって変化することがあるのは分かっている。
ところが、一刀の変化は明らかに異質。
前に見た氣の白い部分が剥がれ落ち、その下から黒い氣が溢れ出る。
こんな変化は、一度足りとて見たことが無い。

（な、なんじゃあいつは。あのような氣の変化、見たことがないぞ）

氣の変化は見たことが無い。
だが、今の一刀の氣の色は何度も見たことがある。
それは孫策であり、その母親の孫堅に見られた、孫家の血が戦場で

引き起こす時の氣。
見慣れている黄蓋はともかく、正面にいる袁術と張勲が耐えられるはずがない。

「ふ、ふん、何をしようと無駄じゃ。これが見えぬのか！」

必死に強がって人質を指差す袁術。
腰が引けている兵士達も、せめてもの強がりに刃を押し付ける。
その刃が、少しだけ肌を切って血が垂れた瞬間だった。

「駄目……アニィ、それ駄目！」
「あぁぁっ！」

恋の制止も間に合わず、一刀は目にも止まらぬ速さで飛び出した。
一瞬で間を詰め、穏の首筋を傷つけた兵を殴り飛ばし、続けざまにもう一人を蹴り飛ばす。

「なっ！？」

目で追えない速さに驚いている間に、今度は周泰を捕らえていた兵士の腕を掴み、逆関節にへし折る。
仲間の姿に逃げ出そうとする者は、貫通氣弾で頭を打ち抜かれる。
血を流しながら、倒れて脳をぶちまける亡骸に、誰もが戦慄を覚える。

「か、一刀さん？」
「あわ、あわわわわ……」

人質になっていた二人も恐怖から腰が抜け、座り込む。
しかし、今の一刀にはその声が聞こえない。

狂気じみた鋭い目つきと、黒く染まり続ける氣。
感じるのは絶望にも似た恐怖、ただそれだけだった。

「うぅぅ……おぉぉぉぉっ！」

咆哮と共に全身の氣が周囲に拡散し、敵味方関係無く風圧を与える。
砂埃の入った目を開けた時に飛び込んできたのは、張勲の顔を掴んで投げ飛ばす一刀の姿だった。

「づあらあぁぁっ！」
「きゃあぁっ、ぐっ、がはっ！」

気合いの声で投げ飛ばされた張勲が、地面に叩きつけられて息が詰まる。
掴まれた顔には爪が食い込んだ跡が残り、そこから出血している。

「な、七乃ぉ……」

震えながら動かない足で近寄ろうとするが、服を踏みつけられて止められる。

「ぴっ！？」
「……消えろ」

一言発して袁術を蹴り飛ばす。
服が破れて吹っ飛んだ袁術は地面を二転、三転し張勲の傍で止まる。
蹴られた箇所を押さえながら、口から血を吐く姿は凄惨の二文字に尽きる。

「ふうぅ……あぁぁぁぁっ！」

収まるどころか、逆に増大していく一刀の氣。
果たして、何が彼をそこまで駆り立てたのだろうか。

暴走（後書き）

二度目となる、黒い氣を発する一刀。
彼を止められるのは、果たして。

名前の意味

人質を取って逃げようとした袁術だが、掴まった穏と周泰の姿に一刀が激変。
雄叫びを上げて暴走を始めた。
二人を捕らえていた兵士を一蹴し、袁術と張勲を吹っ飛ばした一刀の暴走。
その体から発する赤黒い氣は、見る者全てを震撼させ、戦慄を覚えさせた。

「ヴァアァァァッ！」

獣のような叫びを上げる姿は、戦いに明け暮れる修羅の如く。
倒れている袁術と張勲の下に歩み寄り、首根っこを掴んで持ち上げる。

「ぐ……あぁっ……」
「ぐ、ぐるじ……」

力任せに首を握られている二人は息が出来ず、苦悶の表情を浮かべる。
周囲は止める事無く、呆然とその様子を眺めているだけ。

「……許さない」

一言だけ呟くと、腕に力を籠めて投げ飛ばす。
木に背中をぶつけて地面に叩きつけられた張勲は、咳き込んで荒々しい呼吸を繰り返す。
繁みの中に叩き込まれた袁術は、折れた枝で体を擦りむきながら、

血と涙と汗で顔がぐちゃぐちゃになる。
だが、これだけでは終わらない。
なお歩み寄る一刀に脅えていると、自分達にそれぞれ掌が向けられる。
寒気が背筋に走った瞬間、貫通氣弾が袁術の肩と張勲の脚を撃ち抜く。

「びいぃぃっ！」

悲鳴を上げてのた打ち回り、余計に枝が体に刺さる袁術。
張勲はもう悲鳴を上げる気力も無いのか、白目を向いて痙攣している。

「……とどめだ」

冷たい言葉を紡ぎ、鮮紅と紅蓮を抜いて氣を張り巡らせる。
このまま二人の命を奪うかと思われたが、ようやく正気に戻った袁術の兵士達が動きを見せる。

「はぁっ！　いかん、袁術様をお助けしろ！！」
『えぇっっ！？』
「文句は受け付けん、いくぞぉ！」

隊長らしき男の呼びかけで、不満を言いつつも半ば自棄になって駆け出す。
良くも悪くも軍人であるため、上司の命令には従っていた。
ちなみに隊長の男は小さい子が好きなため、袁術に仕えている事を誰も知らない。

「……邪魔」

恋のように一言だけ呟き、真っ先に突っ込んできた隊長の男の首を刎ねる。
その瞬間に表情が引き攣った兵士達にも、情け容赦なく斬り掛かり殺めていく。
後ろの方にいた兵士は泣きながら逃げ出したが、前の方にいた兵士十人はものの十数秒で地にひれ伏した。
そこに今度は、一刀の仲間が止めに入る。

「何しとるんや一刀！」
「そうだ、これ以上はやめろ！」

兵士達の騒動に駆けつけた霞と華雄。
一刀の前に立ちはだかって声を掛けるが、反応はまるでない。
それどころか、二人でさえ溢れ出る赤黒い氣に中てられる。
久々に感じる恐怖で脚が震え出し、腰が引けてしまう。

「おい、これは冗談か？　できれば夢であってほしいぞ」
「んなわけないやろ。全部、現実や」

訓練でも一度も勝った事の無い相手。
それを理解した上で対峙したというのに、一合も交えずとも敗戦を確信する。

「邪魔だ」

仲間にも遠慮なく殺気が放たれる。
殺気を浴びた二人の体は、まるで金縛りにでもあったように固まる。
頭で動けと呼びかけても、逃げろと呼びかけても一歩も動けない。
圧倒的な存在を前に、横槍を入れようとする孫策も黄蓋も武器を構

えることすらままならない。
燃えそうになっていた孫家の血すら鎮静化され、赤黒い氣に目を奪われる。

「祭……私や母さんもあんな風になるの？」

同じような暴走をしているだけあって、孫策は直感的に一刀と自分の家系に同じ物を覚えた。

「そうじゃ。あ奴の氣は少々異質じゃが、氣の量と迫力なら先代の堅殿以上じゃ」

長年そうしたものを見てきた黄蓋の目にも、それは異質だった。
白交じりが黒交じりに変わり、性格も雰囲気も何もかもが変わった。
こんな変化は、今までに見たことが無い。

「くっ……あんなのが雪蓮のように暴走したら、手に負えんぞ」
「分かっているわよ。けど、動けないのよ！」

勘が鋭い孫策の頭の中で、警報機がけたたましく鳴り続ける。
こういった場面で一番動けないのは、彼女のように勘が鋭い人物。
開戦前に感じた程度ならまだしも、突如目の前に現れては無理もない。
なまじ勘が鋭く、それに従うように生きていただけに、身近すぎる危険を察知すると体が拒否反応を起こしてしまうのだ。

「こうなったら、わし一人でも止めてみせるわい！」

正面から中てられている霞と華雄に比べれば、右後方にいる黄蓋は動ける方。

孫策のように勘が鋭い事も無いので、体が拒否する事も無い。

「無茶です！　雪蓮と協力しても、止まるかどうか……」

「なぁに。堅殿の暴走を止めると思えば、どうという事はないわい」

そう言い残して、一歩一歩進んでいく。

足音に気付いた一刀が振り向いて睨みを利かせると、体の周辺に風が駆け抜けたように感じる。

「くくくっ、こんな感覚は久々じゃのぉ。昔が懐かしいわ」

過去に孫堅が暴走した時、宥める役目は黄蓋が担っていた。

数年ぶりに見る同等か、それ以上の暴走の様子に額から汗が垂れる。

既に若くはないこの身で、どこまで目の前の相手を抑えられるか。

無意識に多幻双弓を持つ手に力が入り、紅蓮と鮮紅を構える一刀から目が離せない。

「さぁ、来い！」

「オアァァッ！！」

雄叫びと共に突進してくる一刀。

周囲からは止まれ、やめろ、逃げろという悲鳴にも似た声が響く。

それでも逃げようとする姿勢すら見せない黄蓋。

矢を構えて弓を引き、いざ勝負が始まろうとした時だった。

何かが黄蓋の横を駆け抜け、一刀を抱き止めた。

「駄目、アニィ！　元に戻って！！」

一刀を抱き止めたのは、今にも泣きそうなほど涙目になった恋だった。

ありったけの力を籠めて一刀に抱きつき、涙を零して元に戻ってと訴える。
すると、一刀の様子に変化が現れた。

「ぐっ、あっ、うぅぅ……れ……ん？」

額に手を当てて苦しみだし、動きが止まる。
溢れ出る赤黒い氣の放出も止まり、徐々に小さくなっていく。

「一刀さん！　もう、やめてください！！」

続いて穏が恐怖に震えながらも、背中から抱きついて呼びかける。

「の……ん……あぁぁぁぁっ！」

呼びかけに反応を見せると同時に、もがき苦しみだす。
纏う氣の量が増減を繰り返し、黒い箇所が徐々に薄まっていく。
そこへ、ようやく彼女も現れた。

「いい加減、目を覚ませ！　この……馬鹿ぁ！！」

どこからともなく現れ、いきなり平手打ちを頬に叩き込む焔耶。
この一撃で苦しむ様子も無くなり、氣が一気に収束して元の鮮紅色に戻る。
がっくりと崩れ落ちる一刀の体を、前後から恋と穏がしっかりと支える。

「はぁ、はぁっ。騒いでいるから袁術を見つけたのかと思ったら、何やってるんだよ一刀！」
「焔……耶？」

一刀の表情は既に元の状態に戻り、暴走の様子は欠片も見えない。
周囲の様子や恋達の様子から、何があったのかを理解した一刀は焔耶に礼を言う。

「ありがとう。元に、戻してくれて」
「あ、当たり前だろ！　道を踏み外しそうなお前を、殴ってでも引き戻すって約束だからな」

照れた焔耶がそっぽを向くと、ようやく一刀の表情にも笑みが戻る。
そんな微笑を浮かべたまま、一刀は気を失った。

「アニィ……よかった」

元に戻った事が嬉しい恋は、寄り掛かる兄をしっかりと抱き締める。
背中にいる穏も、回している腕にしっかりと力を籠め、一刀の体を支える。
一部始終を見ていた周囲もようやく落ち着きを取り戻し、ほっと胸を撫で下ろす。

「ははっ、やるわいあいつら。わしの出番は無かったか」

正直、止めてくれて助かったと心の中で呟く。
自分が止められる自信が無かった訳ではないが、やはり恐怖は感じていた。
後ろにいた孫策達や、後からやって来た仲間達も見守る中、袁術との戦いは幕を閉じた。

戦後、城内では怪我人の手当てや戦後処理に、両軍の兵士が奔走する。

暴走した一刀の被害を受けた袁術と張勲は、一応の手当てをされて牢に投獄された。
そして両軍の主だった顔は、空き部屋で眠る一刀の下に集まっていた。

「アニィ、まだ起きない」
「当然じゃ。あれだけの暴走をして、本人が平気な訳なかろう」

以前の暴走は軽いものだったので、こんな事はなかった。
だが今回の暴走は、本人にも負担が大き過ぎた。
暴走はどちらかというと、起こるより鎮める方が体力や気力を消耗する。
あれだけ暴れた後だけに消耗も激しい。

「それにしても、どうしてこうなったのかしら？　そっちは何か分かる？」

孫策が蜀の陣営に問い掛けるが、焔耶以外の全員が首を横に振る。

「魏延殿は何か知っているのですか？」
「知っているというより、前にも同じような場面を見ていて……。覚えていますか、桔梗様。一刀が里帰りした後の状態を」

焔耶に指摘されて桔梗も思い出した。
現場にいなかったので、何があったのかを把握しきれていなかったが、ようやく事態を把握した。

「なるほど。またあの状態になったのか」
「良ければ教えて貰えるかの？　何があったのか、原因が分かるやもしれん」

「そうじゃな。焔耶、教えてやれ」
「わ、私がですか!?　えぇっと、じゃあちょっと長くなるかもしれませんが……」

説明したのは、里帰りから帰った一刀の様子。
故郷の邑が盗賊に襲われ、両親を失い恋が行方不明に。
その盗賊を一人で討伐して帰って来た一刀は、今回ほどではないが暴走していた。
地獄の業火のような氣を纏い、思考も行動もまともでは無かった。
その時も自分が叩いて説得し、ようやく元に戻ったのだと。

「ちょっと待て！　では呂迅殿と呂布は!!」
「何年も離れ離れだった……ってこと？」

孫権と孫尚香の問い掛けに、桔梗と焔耶が頷く。
穏からは一刀と焔耶との生活しか聞いていなかった。
それだけに、孫策陣営は驚きに包まれている。

「そうや。そんで山ん中にいた恋を、ウチらが保護したんや」
「互いの生死すら知らなかったのです」
「反董卓連合との戦いで、虎牢関で再会するまではな」

最後に華雄が呟いた一言で、周瑜の中でバラバラだったパズルが一つになった。
連合時に見ていた董卓勢の策は見事だったが、所々に補った感があった。
だがそれが、急遽参戦した一刀がいたからだったとすれば。
旅の末に恋の居所を知り、家族を守るために現れたとしたら。

「なるほど、呂迅殿の出現はそちらにとっても、想定外だった訳か」

「まぁな。そんで黄蓋はん、今の話からなんか分かったんか？」
話を本題に戻すと、考え込んでいる黄蓋に視線が集まる。
「うむ、大体は分かった」
小さく頷いた黄蓋の口から説明が始まる。
まず暴走が起きるには、何かしらの条件が必要になる。
孫家の血で孫策や孫堅が暴走する条件は、血や炎など赤いものを長時間見続けること。
それと同じような考えを一刀に当てはめて考えると、一つの条件が見えてくる。
「それはの、家族が命の危機に晒される事じゃ」
昔起きた故郷の悲劇も今回も、家族の命が掛かっていた。
以前の事件では両親が死に、妹が行方不明。
今回は戦前に家族だと言っていた穏が、人質にされていた。
前回は既に起きていた事なのと、初めてという事で暴走は弱かった。
だが氣を習得し、目の前で傷つく様子を見せられた今回は違う。
その結果が、あの修羅のような姿なのだという。
「ではあの暴走は、穏を助けるために起きたと？」
「そうじゃ。その証拠に、呂布殿と共に穏が止めに入った時、暴走が治まろうとしておった」
最終的には焔耶が止めたが、あのまま治まる可能性は充分にあったらしい。
助ける対象が救われていたゆえに。

「でで、ですが、祭様やお仲間の方にも刃を向けようと」
「当然じゃ。あの時の呂迅殿は、穏を命の危機に追い詰めた袁術と張勲、その部下に向いておった」
「なるほど。彼にとっては、あいつらを倒す邪魔をする者全てが敵だったのですね」
「さすがじゃの、冥琳。よく気付いた。じゃが、それだけでは説明できん事があるんじゃ」

怪訝な表情を浮かべて話す気になる事とは、氣の変化の様子について。
同じような氣を発する孫策でさえ、あんな変化はしない。
元々混じっていた黒い氣が増大するか、白い氣が黒に変わるならともかく。
相対する白い氣が剥がれ落ちたように見えたのが、気になって仕方がない。

「まるで元から黒い氣を、なんらかの方法で塗り替えたような……」
「ふむ……。あっ、ひょっとして一刀の村の風習に関係あるんじゃないか？」

ふと思いついた事を華雄が呟き、真名についての風習を説明する。
すると、黄蓋の目の色が変わった。

「そういう事じゃったか！　ようやく分かったわい」
「ちょっと、一人だけ納得してないで教えてよ」

納得した表情をする黄蓋だが、他はさっぱり分からない。
何がそういう事で、どういう訳なのかと説明を求める。

「おぉ、すまんすまん。つまり、こういう事じゃ」

黄蓋の説明によると、一刀の本質は「刃」という文字にある。
刃は敵も味方も、使い手さえも傷つける可能性のある文字。
一度剥き出しになれば、目の前にあるもの全てを切りつける。
暴走した一刀はおそらく、そのせいで家族を傷つけた者、報復を邪魔する者を痛めつけるのだろうと。

「なるほど。じゃがこいつの真名は、それを崩したゆえに」
「うむ。一本の刀という、誰かを守るための力に変わったんじゃ」

さらに一刀という文字と同じ性質を持つ、名と字を授かったのも、刃の衝動を抑える役目を果たしているらしい。

「疾風迅雷の迅、烈火怒涛の烈、威風堂々の堂。これらの武に関する三文字が混ざっておったからこそ、家族の命の危機という、絞られた状態でしか刃が姿を現さなかったんじゃろ」

故に、家族と認識している者が止めれば、暴走は収まる。
崩された真名と、名、字の効果によって。

「偶然とはいえ、上手く本質を抑制する名と字を与えたものじゃ」
「恋も一刀も勘が鋭いからな。親も直感的に感じたんじゃないのかな？」

眠り続ける一刀の額の汗を拭う焔耶が呟くも、真相を知る者はもういない。

「ともかく、後は穏と呂布、魏延に任せましょう。私達にはやる事があるんだから」
「そうだな。穏、呂迅殿が目覚めたら呼んでくれ。今後について、

詳しく話す必要があるからな」

さすがに蜀の王がこの状態で、話を進めることはできない。
手を貸したならともかく、貸してもらって勝手に進めるのは道義に反する。
ともかく今は、やるべき事をこなしつつ、一刀が目覚めるのを待つ事にした。
蜀の陣営も桔梗を中心に戦後処理に動き出す。

「では焔耶、恋、後は頼むぞ」

部屋に残ったのは、心配そうな顔で一刀が目覚めるのを待つ三人。
一刀が家族と認識している事が確認されている、恋、焔耶、穏。
額の汗を拭い、手拭いを取り替え続ける。
献身的な看護が報われ、元の様子に戻った一刀が目覚めたのは、翌朝の事だった。
嬉しさのあまりに泣きつく三人に、一刀はごめんねと呟いた。

名前の意味（後書き）

袁術との戦い、そして一刀の暴走は終わった。
次に彼らを待ち構えているのは、何なのだろうか。

宴の席

袁術に勝利し、予期せぬ暴走が収まった翌日の夕暮れ時、蜀と呉の面々が玉座で対面した。
横一列に並んだ両国の主だった顔が、国王を上座に置いて席に着く。

「まずは此度の事を感謝するわ、呂迅」
「こちらこそ、俺の暴走で迷惑を掛けてすみません」
「結果として被害は出なかったんだから、そんなに深く考えなくていいわよ」

あれだけの暴走にも関わらず、幸運にも味方内に被害は無い。
負傷したのは袁術側だけだったので、互いの今後に大きな影響は出ないと思われる。
それでも、国王として一刀はそれなりの態度を示す。

「そう言われても、何もせずに終わりという訳にはいきません。なので、我々の助力での勝利による貸しは無しという事で構いません」

被害が無いとはいえ、一応のけじめを付けたい一刀は貸しの件の取り消しを提案。
呉も一刀の気持ちを察したのと、貸しが無くなるのは悪い事ではないので、これを承知。
対等な立場になった両者の話し合いが始まる。
互いの紹介を手早く済ませて、まずは互いの今後について話し合う。

「孫策さんとしては、どうしたいですか？」
「できれば同盟を組みたいわ。今の私達に必要なのは、各地の豪族を押さえる事だからね」

領主の袁術を倒し、次に待っているのは領内の貴族や豪族達の反乱。
それを抑えるためにも、外部に味方を作っておいて損は無い。
加えて、皇帝である劉協の力添えで立ち上がった蜀と組めれば、後は時代の封建制度がものをいう。
皇帝がバックに付いている蜀と手を結んだ孫策に刃向かう。
これすなわち、皇帝に刃向かう逆賊に値する行為だと思わせる事ができる。
ただでさえ地位や名誉に拘る貴族や豪族が、反応しないはずがない。
よほどの馬鹿でない限り、反旗を翻す事はないだろう。

「その件は了解した。その代わり、そっちの漁や船の扱いを学ばせてもらいたい」
「いいわよ。蜀にも長江が流れているから、学んで損は無いもんね」
「理解が早くて助かるよ。お礼は岩塩の流通でどうかな？」

蜀は浮浪者対策と天候任せの農業に次ぐ産業として、漁と船についての知識と技術を。
呉は劉協の威光と岩塩を。
同盟を結ぶにあたっての取引としては、特に問題は見られない。

「こちらに異論は無い」
「こちらもです」

互いの軍師の周瑜と于吉からも許可が出た。
頷き合った一刀と孫策が固く手を握り合い、ここに蜀呉同盟が実現した。

「此度の同盟、心から感謝する。信頼の証として俺の真名、一刀をこの場にいる呉の皆さんに預けます」

既に受け取っている穏を除き、他の面々が頷いてこれを承知。
特に甘寧は、見た目は普段通り冷静だが、心の中では歓喜の声を上げて小躍りしていた。

「ならば私も預けないと失礼ね。我が真名、雪蓮を蜀の方々に預けるわ」

これを切欠に、両国の出席者の間で真名の交換が行なわれる。
今後の両国の繁栄と信頼の証が、今ここに交わされた。

「さっ、同盟締結と孫呉復活の宴をしましょうか」
「蜀の皆様もどうぞご参加を。此度の礼も兼ねていますので」
「それでは、お言葉に甘えさせていただきます」

一刀からの返事を受け、冥琳が人を呼んで酒と料理を持ってくるように指示する。
しばしの雑談を挟み、玉座の卓の上にたくさんの料理と酒が並ぶ。
恋の食欲を聞いた厨房が、腕を振るって多量に作ったらしい。
杯に酒が注がれ、一刀と雪蓮が席を立って乾杯の挨拶をする。

「では、同盟と勝利を祝して」
「乾杯」
『乾杯』

乾杯をして杯に口を付ければ、もうここから先は無礼講。
堅苦しい雰囲気を吹き飛ばしての、賑やかな酒宴が始まる。

「んっんっんっ。ぷはぁ！　いい酒じゃのぉ」
「ホンマや。蜀とはちょい風味が違うけど、結構イケるやん」

上機嫌で酒を飲む桔梗と霞に、酒壷を持った祭が歩み寄って声を掛ける。

「ほぉ、よい飲みっぷりじゃのぉ。じゃがわしとて……んぐっ、んぐっ」

壷から直接飲む姿に触発されたのか、桔梗と霞も飲みかけの酒壷を手に取る。
そして祭に負けじと、直に酒を飲んでいく。

「ちょっと待ったぁ！　私も混ぜて混ぜて！！」
「貴様が加わるのなら、私もだ！　注げ！！」

ここに参戦するのは、先の三名に負けない酒好きの雪蓮。
さらに孫策に負けじと、華雄まで参戦する。
勢いよく壷から酒を飲み、五人揃って飲み干した。

「なかなか良い飲みっぷりじゃな」
「かっかっかっ。祭殿とて、よほどの酒飲みと見た」
「うっしゃ、飲も飲も。今日は浴びるほど飲むでぇ！」
「賛成！　さっ、注いで注いで」
「孫策！　貴様には負けん！！」

あっという間に意気投合した酒飲み達と華雄。
上機嫌で杯を交わす様子に、一刀と冥琳が苦笑いを浮かべる。
後日紫苑がこの話を聞いて、参加したかったと駄々をこねたそうな。

「すまないな、一刀殿。我々の王は見ての通りで」
「別に気にしていないよ。気にしてたら、こんな立場できないし」

まったくだと冥琳が溜め息を吐く。
立場上雪蓮が王になっているが、何かと苦労させられているようだ。

「あれとサボリ癖さえなければ、多少能力が足りなくとも文句は無いんだが」

日頃の鬱憤が酒で緩んだのか、ブツブツと愚痴を漏らしだす。
ちょっと目を離せば窓から逃げ出す、気付けば祭と酒盛りをしている。
仕事を自分や蓮華に押し付けて街に出るなど、ネタを上げればキリがない。

「苦労してるんだね」
「おぉっ、わかってくれるか」

同意を示した一刀に、目を輝かせる冥琳。

「俺も色々と、難しいのを扱っているからな」
「そうなのか？　見たところ、それほど問題は無さそうだが」

周囲を見渡せば、蜀の陣営に目立った問題は無いように見える。
于吉は亜莎と軍略について意見交換。
焔耶と恋は、穏と傍観者の思春と蓮華、明命を交えて過去の一刀対談。
ねねは胸が仲間だと言っている小蓮と会話中。
桔梗と霞、華雄は知っての通り酒盛り中。

「そう思うなら、教えてあげるよ。まずは于吉だけど」
「亞莎と話している彼か。言葉遣いも丁寧だし、知的な好青年だと

思うが？」
「あいつ、同性愛者。しかも蜀で留守番している、うちの武将一筋。何度か夜這いを仕掛けるくらい」
「……亞莎の貞操は安全だな」

返事に困った冥琳はそう答えた。
というより、意見交換する様子から、この答えしか導き出せない。
相手の心理を読んだ于吉の策に、目を輝かせる亞莎。
もう一押しすれば、閨に連れて行かれそうだが、その心配は無いと分かりほっとする。

「次にねねだけど……。これは見てもらった方が早いな。恋、この桃まん食べるか？」

楽しく会話している恋を呼び、桃まんを掲げる。
すると触覚のような髪がピンと立って反応し、一目散に一刀の下へ走る。

「……食べる」

上目遣いプラス食事中の恋。
これに初見で耐えられる人は、例え家族内でもまずいない。
あまりの可愛らしさに、冥琳も見蕩れてしまう。
そこへやってくるのは、別名蜀の絶叫系。
雄叫びと共に走ってくるねねだった。

「おのれぇ、またしても兄の特権を利用して恋殿を。食らえ、新技きりもみちんきゅうキッ」
「……アニィを蹴るの、許さない」

飛び上がって横捻りを加えながら繰り出した新技の蹴りも、恋にあっさりと掴まれる。
その先に待つのは、いつもの末路だ。
投げ飛ばされたねねは、縦に回転しながら放物線を描き、狙いすましたかのように于吉と頭をぶつけた。

「れぇんどおぉぉぉぉのぉぉぉぉ！　ぶぎゃっ！？」
「ヘッドバッ！？」

激突した両名はたんこぶを作って気絶。
そのまま医務室に運ばれた。

「なるほど、妹君に御執心か」

一部始終を見た冥琳は、驚きを上手く隠すように酒を呷って呟いた。
そこへ、大量の食べ物を持った焔耶達が押し寄せて来た。
さらにねねと于吉が退場したので、小蓮と亞莎もやって来た。

「一刀さぁん、いくらお兄さんだからって、恋ちゃんを取らないでくださいよぉ」
「そう言うなって穏。私達がこっちにくればいい話だしな」

卓の上に置かれた料理が、次々と恋の口の中に消える。
それを見て一刀以外の全員が萌える。

「はぁ、癖になりそう」
「これはこれは、色々な意味で凶悪だな」
「恋さん、これも。これも食べていいですよ！」
「……ん」

黙々と食べる姿に一刀も空腹を感じたのか、手元にあったシュウマイを食べ始める。
霞も気に入った、美しい食べ姿で。
すると恋だけに向けられていた視線が、一刀にも移りだす。
恋にだけ萌え続けているのは、一刀の食べ姿に慣れている焔耶と穏だけ。
冥琳と蓮華、思春は一刀だけに釘付けになり、小蓮と明命、亞莎は両方に目を奪われる。

「……食事とは、こうも美しく見えるものなのか」
「冥琳。なんだか私、これまでの自分の行儀に自信を失くしたわ」
「さすがです、兄う……一刀殿」

二人の食事風景に蕩けきっている呉のチビッ子三人衆に対し、一刀にだけ目を奪われる三人は自分の行儀に疑問を持つ。

「か、一刀殿。このエビチリもどうだ」
「ん……いただきます」

おそるおそる冥琳が差し出したエビチリに箸を伸ばし、変わらない様子で食べ始める。
人となりを観察しようと思っていた蓮華も、既に目的を忘れて見蕩れている。

「くっ……。こんな風景が見られる、蜀の人が羨ましいわ」

すっかり観察を忘れ、皿を一刀の手元に差し出す。
食事風景に見蕩れ、隣に座る思春とは別の意味で心臓が大きく鼓動する。
特に一刀の隣にいる冥琳は影響を強く受け、誰よりも目が潤んでい

る。
その様子に、恋にばかり見蕩れていた穏と焔耶が気づく。
「あやや、冥琳様と蓮華様まで」
「くっ。何故一刀に恋愛感情を抱くのは、胸のデカイのばかりなんだ」
「あわわ、そうなんですか？」
幾分正気を保っていた亞莎が尋ねると、焔耶は小さく頷いた。
恋愛感情決定的な桔梗を指差し、続いて紫苑、劉協のサイズをジェスチャーで説明。
とどめにそちら側に行きそうな霞も指差して説明すると、亞莎の顔は酒と関係なく真っ赤になる。
「でで、では、冥琳様と蓮華様も？」
「いいえぇ、あれはまだ入りかけの状態です。引き返せる範囲ですよぉ」
とはいえ、どうやって引き返させればいいのかが分からない。
割り込んで妨害しても、所詮は一時的なもの。
継続効果は無い。
だとすれば、出来るのは神頼みだけ。
これ以上、敵が増えないようにと。
「あの……なんだか思春様も同じ目をしているような……」
「ふえ？　あぁ、思春ちゃんは大丈夫ですね」
「うん。あれは恋愛じゃなくて、敬愛とか親愛の目だ」
「め、目を見ただけで分かるんですか。凄いです」
目の悪い自分には無理だと、亞莎は小さく呟く。

「ふぅ、ごちそうさま」

そうしているうちに一刀の食事が終わり、箸を置く音と共に見惚れていた者が正気に戻る。
正気に戻った冥琳と蓮華の目は元に戻ったが、前から親愛を抱いていた思春の目は元に戻らない。

「はっ、私は何を」
「しまった、つい見入ってしまった」
「素晴らしい食事風景でした、一刀殿」

三人の言っている事が理解できない一刀は、不思議そうに首を傾げる。
どうやら今回は敵が増える事が避けられたので、穏と焔耶も胸を撫で下ろす。
だが、それは致命的な油断だった。

「とても美味しかったよ。なぁ、恋」
「……ん」

嬉しそうな笑みを浮かべる恋の頭を撫でる一刀の優しい表情で、心に矢が突き刺さった。
邪推をしていた蓮華の心には、純粋な呂兄妹と兄という存在に。
冥琳は雪蓮とは違う、妹への愛を見せる姿に。
本人達は気づいていないが、二人の心は一刀に支配された。

「むっ、なんか面白そうな予感が」

持ち前の勘の鋭さで、面白い予感を察知する雪蓮。

だが生憎、つぶれかけの華雄の相手をしていて、それどころではなかった。

「ところで、袁術はどうする予定なの？」
「むっ？　あっ、あぁ、袁術か。本当なら殺してやりたい所だが……」

昨夜、一刀が眠っている間に呉の面々が処分を決めた。
それはこれまでのお返しに、好き勝手にコキ使ってやろうという処分。
戦闘中なら殺したところだが、戦が終わって頭が冷えると殺す気が失せてしまった。
そこで、今まで散々好き勝手使ってくれた御礼に、自分達も好き勝手使ってやろうという事にした。

「うわぁ、下手したら死ぬより辛いかも」
「当然だ。まずは袁家の威光で資金を集めてもらい、徴兵にも役立ってもらおう。なんだかんだで名門だからな、それにあやかろうとする者は必ずいる」

要は飼い殺しにするという事だ。
小猿に虎は使いこなせないが、虎に小猿は使いこなせる。
監視の目も耳も、自分たちとは比べ物にならないほど、厳しくする予定だという。
働かなければ、生き地獄な拷問に近い制裁も考えているらしい。

「鬼だね」
「今の時代、それくらいやらないと生き残れないさ」
「同感。じゃあさ、こんなのもどう？」

不敵な笑みを浮かべる冥琳に、他の手を提案する。
勿論内容は、飼い殺しを前提としたものばかり。

「ほぉ、面白い意見だな。だがそうなると」
「いや、ここでね。ああして、こうすれば」

意気投合する二人を面白くない目で見るのは、焔耶と穏と蓮華の三人。
ちょっとした油断をした隙に、いつの間にか仲が良くなっている。
部下にしろ上司にしろ、苦労するという共通点もあるのだろう、話はやけに盛り上がっている。

「それはいい。奴らの調教……もとい躾に是非、使わせてもらおう」

意気投合できる相手が見つかった冥琳の表情は、晴れ晴れとしている。
久々に見るその表情に、三人は嫉妬に近いものを覚えた。
そこで、まずは穏が先陣を切って話に割り込む。

「一刀さん、今夜は私と一緒に寝ましょう！」
「ぶはっ！」

いきなりの爆弾発言に、恋に萌えていた小蓮達も正気に戻る。

「なっ、ずるいぞ穏だけ。私だって！」
「ならば久々に二人がかりで一刀さんを」
「落ち着けお前ら！　何がそこまでお前たちを駆り立てるんだ！！」

原因が全く分からない一刀は、必死になって止めようとする。
そこへ隣にいる恋が。

「アニィ、恋も」
「ちょっ、この流れで加わらないで！　恋が考えている寝ると、焔耶達の言っている寝るは意味が違うから！！」

誤解を招きそうな危機は、一刀の説明台詞で回避された。
こんな緊迫した空気を読まないのは、いつの時代も酔っ払いである。
背後から酔った桔梗と霞が現れ、一刀の背中に抱きつく。

「なんじゃあ、寝るならわしも行くぞぉ」
「ウチもウチも。今ならなんでもやったるでぇ」
「えぇい、黙れ酔っ払いどもー！」

いい加減我慢の限界に達した一刀は、桔梗と霞に手刀を落として気絶させる。
続いて恋を優しい口調で説得し、後日一緒に寝るからと約束をする。
そしていがみ合う焔耶と穏の首根っこを掴み、充てられた部屋に連れて行こうとする。

「すみませんが、俺はこれで。おやすみなさい」
「えぇ、おやすみぃ」

すっかり酔っぱらって上機嫌な雪蓮に見送られ、三人は玉座を出て行った。
翌朝の朝食の席、艶やかな肌とは裏腹に焔耶と穏は目に隈を作り、杖をつきながら現れた。
晴れ晴れとした表情の一刀の後ろから。
そして別れの時が訪れる。

「それじゃあ雪蓮、今後もよろしく」

「えぇ。互いに協力して、いい国を作りましょう」

最後にしっかりと握手を交わすと、蜀の一団は帰路へと着いた。
姿が見えなくなるまで手を振ってくれた穏に手を振り、留守番をしている紫苑と左慈、月に詠の下へと。

宴の席（後書き）

無事に蜀へと戻る一刀達。
次回は拠点フェイズの予定です

拠点フェイズ　音々音・月&詠・左慈&于吉・霞&華雄　編

音々音拠点　新技開発

成都に帰って来た一刀達に待っていたのは、少しばかり溜まった事務仕事だった。
紫苑と左慈、影ながら月と詠が処理していたとはいえ、やはり少し滞り気味になっている。
一刀は主に王である自分の判断が必要な書簡を優先的に処理。
桔梗と于吉、ねねはそれ以外の重要度の高い仕事を。
霞と華雄、恋はその他の事務仕事に当たる。
それらを処理しながらも、彼女は新技開発に余念が無かった。

「くっくっくっ。遂に完成したのです、新型ちんきゅうキックが！」

真夜中に怪しく笑うねねの目の前には、ボロボロになった藁人形が立っている。
翌日の朝、ねねは一直線に一刀の部屋に向かう。
こっそりと中を覗けば、寝巻き姿の兄妹が仲良く健全な意味で寝ていた。
というより、途中から恋が寝床に入り込んでいるのだ。
持ち前の嗅覚で、寝ぼけながらも一刀が一人だけの時を狙って。

「ふっふっふっ。今日こそは奴に、ねねの会心の一撃を浴びせるのです」

思い出すは苦悩の日々。
兄妹がじゃれあう姿に飛びかかり、その度にお約束のように恋に妨害され投げ飛ばされる。

繁みに突っ込むこと十一回、藁の中に突っ込むこと六回、木の枝の中に叩き込まれること二回、そして華雄や于吉にぶつかること三回。

「しかし、それも今日で終わりなのです！」

これらの経験を糧に、新たなる技を開発した。
全ては親愛なる恋のため、兄といえども容赦はしない。
寝込みを襲う辺り、その容赦無さが窺える。

「行くのです。修行の成果、今こそ見せるのです！　ちんきゅうキィック！！」

大げさな事を言っている割には、繰り出したのはこれまでと変わらないキック。
迫り来るに一刀の危機に、恋の触覚髪が反応し目を覚まさせる。

「……させない」

神速の反応速度で上半身を起こし、脚を右手で掴んで投げ飛ばす。
投げ飛ばされた先は、扉の上にある壁。
しかし、ねねはまるで焦っていない。

「ぬっふっふっ。これくらい、想定済みなのです！」

投げ飛ばされたねねは、空中で体勢を変えて壁に脚を着く。
そのまま壁を足場にして、いつもの勢いで再度飛び掛る。
これがねねが編み出した秘策、どうせ投げられるのなら、投げられた先を足場にすればいい。
わざわざ室内で襲ったのも、壁というしっかりした足場を確保するため。

しかも今度は、壁を蹴った勢いで宙返りしての踵落とし。

「これぞ恋殿のちんきゅうキック返しに対応した、ちんきゅうキック返し返しなのです！」

安易なネーミングだが、利には適っている。
しかも恋は投げ飛ばした体勢のままなので、対応ができない。
はずだった。

「……甘い」
「へっ？」

投げ飛ばした右手ではなく、今度は左手がねねの脚を掴む。
掴まれたねねは、目を見開いて驚く。

「恋にはまだ、左が残っている」

目をキランと輝かせ、迷う事無く左でねねを投げ飛ばす。

「ちんきゅうキック返し返し返しですとぉ！？」

しかしそこは問題ない、すぐに体勢を立て直せば、さっきと同じように壁を足場にできる。
そう考えて体勢を整えようとするのだが、少し認識が甘かった。

「なんの、まだま……ぐぼっ！？」

上手く体勢は整えたが、投げ飛ばされた先は壁ではなく、開けっ放しの扉。
しかも上手いこと脚の間に扉が通り、股関節を強打した。

男性陣が見たら、間違いなく股間を押さえるだろう。
何故、こうなったのかというと、答えは至極簡単。
右利きの恋は、左手で投げ飛ばすコントロールが皆無だからだ。

「そ、想定外……でした」

そのまま床に倒れたねねは、ぶつけた箇所を押さえて倒れこんだ。
危機が去った恋は、開きかけの目を閉じて寝床に倒れこんで、何事も無かったように眠ってしまう。

「ふぅ、朝から賑やかだなぁ」

ねねが近づいて来る気配で最初から起きていた一刀は、取り敢えず恋の頭を撫でると、寝床から出てねねを医務室に連れて行った。

月&詠拠点　侍女で影の統制者な二人の一日

ＡＭ６：００　起床

「ふぁ……おはよう、月」
「おはよう、詠ちゃん」

表向き侍女な月と詠の朝は早い。
夜明けと共に寝床から起き、身支度をして他の侍女達と共に仕事を始める。
特に朝食を担当する面々は、この時間に起きなくては間に合わない。
理由は恋が食べる量を作るためだ。
その恋は、たまに寝ぼけ眼で厨房にフラフラとやってくる。

「……おなかすいた」
「へうっ！　駄目です恋さん、つまみ食いは厨房では御法度です！！」
「一刀、一刀！　ねねでもいいけど、ここに恋がいるから早く引き取りに来なさい！！」

ＡＭ８：００　朝議の席に同席

一刀の専属侍女として、朝議の席に書類を持って一刀の後ろに控える。
指示された書類を手渡しながら、影の統制者として朝議を聞く。

「月、この前の治水についての書簡をくれる？」
「はい。えっと……これですね」

ＡＭ９：００　一刀と共に執務室で仕事・午前の部

仕事について口頭で話し合いながら、三人とも手は別の仕事をこなす。
最初はどちらか一方だけしかできなかったのだが、段々とこんな事ができるようになってしまった。

「詠、この前に劉協から届いた視察の件の準備は？　えっと、これは判子が必要だな……」
「お迎えする準備なら順調よ。宴席の食材も酒も、だいぶ集まっているわ。なによこの馬鹿豪族の報告、明らかに粉飾決算じゃない」
苦々しい表情をして、至急調査の旨を一刀に頼んで報告書に纏めてもらう。

「寝泊りしてもらう部屋も用意しましたので、いつでもお迎えできます。へぅ。この予算編成、計算が間違ってる。ご主人様、再提出の旨をお願いします」

月も再提出の注意を一刀に頼み、別の仕事に手を伸ばす。
二人共表向きには侍女なので、こうした事は一刀に頼まなければならないのだ。

「了解。粉飾決算の調査と、予算編成の計算間違えによる再提出だね」

ＡＭ１０：３０　侍女としての仕事・午前の部

ある程度事務仕事をこなし、次に侍女としての仕事に移る。
他の侍女達と共に掃除に選択、昼食の仕込みや買出しにと動き回る。

「詠ちゃん……今なら私、紫苑さんと桔梗さんに強力な呪いをかけられそうだよ」
「だ、駄目よ、月！　こんなのは個人差だし、まだ成長の見込みはあるわ。だから元に戻ってぇ！！」

女性の将軍達の下着を洗濯している月が、二人の下着に殺意を覚える。
原因は主に胸とか胸とか胸とか。
目の色が変わり、薄ら笑いを浮かべる姿は正直怖い。

「ねぇ詠ちゃん、聞いたことある？　東の方の島国には、牛の刻参りっていう呪術があるんだって」
「駄目ぇ！　そんなのに手を出しちゃ駄目よ、戻ってきて月えぇっ！！」

ＰＭ１２：００　一刀と執務室で昼食

「なぁ、さっきねねが泣いて帰って来たけど、どうしたんだろう？」
「恋にお昼をご馳走して、財布がスッカラカンなんですって」
「言ってくれれば、お昼くらい準備してあげたのに……」

ＰＭ１：００　侍女としての仕事・午後の部

午後は一刀が鍛錬だったり調練だったり、街の視察で仕事は一時お休み。
その間に侍女としての仕事をこなす。

「これが一刀さんの上着……」

一刀の上着が乾いたかを確認し、満足そうに頷いて手際よく畳む。
その隣では、詠が四苦八苦しながら恋の上着を畳んでいる。
下は地面なので置いて畳む事ができず、気付けば見るも無残にぐちゃぐちゃになっていた。

「うぅ……」
「え、詠ちゃん。私が畳むから、詠ちゃんは洗濯物を集めてきて」

ＰＭ２：３０　一刀と共に執務室で仕事・午後の部

午後の仕事でまず渡されたのは、呉からの感謝状。
一応外交に関する事なので、優先的に回されてきた。

「これ、呉からの感謝状。此度の同盟のお陰で、豪族達が上手く抑えられたって」

「分かった。返事は俺が書くから、使者を選んでおいてくれる？」
「了解しました。前回、一緒に行けなかった紫苑さんに頼んでおきます」

大事な外交なので、相応の人を選べと言われれば、大抵は紫苑と桔梗、または于吉が思い浮かぶ。
他に上げるとしたら、霞がいいところだろう。
左慈はそういった場の経験不足、華雄が大人しく呉に行くとは思えない。
かといって恋やねねに任せるのも心もとない。

「紫苑さんなら安心だね。前日に深酒しないように言っておいて」
「承知しました」
「後、出発前に俺の部屋に襲撃して、朝駆けしないようにとも」

ＰＭ６：００　夕食準備

「へうぅ、恋さん、まだ作っている最中ですからぁ」
「一刀、ねね！　もう誰でもいいから恋を止めにきなさぁい！！」

ＰＭ７：００　呂兄妹と夕食

「恋さん、ねねちゃんは？」

いつもなら、自分も恋と一緒に食べると割って入る存在がいない。
すると恋がお代わりをしながら喋りだした。

「ちんきゅ、アニィを蹴ろうとしたから池に投げ込んだ」
「ちょっと待ちなさいよ！　じゃあ、夕方の陳宮士左衛門未遂事件って！？」

ＰＭ８：００　詠の裁縫練習

「痛っ！　つぅ、また刺しちゃった」
「大丈夫、詠ちゃん？　ここはこうだよ」

そう言って手際よく裁縫をする。
あまりの早さに、裁縫する手の残像が見える。
縫い目も見事に整っており、レベルの高さを物語っている。

「うぅ……どこでこんなに差がついたんだろう？」

ＰＭ１１：００　就寝

「おやすみ、詠ちゃん」
「おやすみ、月」

こうして侍女で裏の統制者な二人の一日は終わった。

左慈＆于吉拠点　男性陣評判記

何人かが見守る中庭で一刀と左慈が手合わせをしている。
互いに素手でぶつかり合っているが、やはり一刀が優勢で進んでいる。
繰り出された拳や蹴りを軽々受け止め、的確に注意を促す。

「はぁっ！」
「甘い。体勢がしっかりしていないから、速さはあっても攻撃に重みが足りないぞ」

「なら、こうか！」

やや腰を落とし、しっかりした体勢で拳を向ける。
それを受け止めた一刀は、すかさず足払いをして転ばせる。

「どわっ！？」

「体勢にばかり気が行き過ぎ。防御が疎かになったら、意味が無いよ」

倒れた拍子にしりもちをついたのか、尻を押さえながら立ち上がる左慈。
この後は少しだけ氣の訓練をして、この日の鍛錬は終わった。
そこへ近寄ってくる、見学していた文官や侍女の女性方。
我先にと手拭いや飲み水を差し出し、受け取って貰えた人はとても喜んでいる。

「呂迅様が、呂迅様がありがとうって！」

「張栄さんに受け取ってもらっちゃった。うふふ、今日はいいことありそう」

楽しそうに引き上げる女性陣の背中を見詰め、一刀と左慈は首を傾げる。

「なんだ、あれ」

「さぁ？」

訳が分からない二人の下に、とある人物が近寄る。
その人物は気配に気付いて振り向く二人に、いつもの胡散臭そうな笑みを送る。

「てめぇ、俺の後ろに立つなって何度言えば分かるんだ」

怒り心頭の左慈が睨むのは、できれば赤の他人でいたかった昔馴染みの于吉。

「ふふふっ、好きな相手は徹底的に苛めたいんですね、左慈は」

「どこをとう聞いたら、そんな風にとれるんだよ！」

留守番中は平和だっただけに、こうしたやり取りに容赦が無い。

左慈としては、できれば于吉だけは帰って来てもらいたくなかった。

しかし于吉とて、詠が表立って動けない以上は大切な軍師。

いなくなってしまっては困る。

「そうそう、先ほどの女性達についてですが。おそらく、これが原因かと」

そう言って差し出したのは、会報と書かれた木簡の巻物が三本。

それぞれに呂迅報、張栄報、周洸報と書かれている。

何だろうと、自分の名前の書かれた木簡を受け取って開く。

「こ、これは！？」

「なんだぁ、こりゃあっ！？」

驚いた二人の目に映っているのは、それぞれの今月の様子について書かれた文章や挿絵。

一刀の会報には、民と触れ合う様子や、王として毅然と振る舞う仕事の様子が。

左慈の会報は、日々の走り込みや修行等の様子や、さりげなく女性の手助けをした様子が書かれている。

「こ、これってまさか」
「はい。どうやら城内の女性達の間で、私達三人に対する愛好会ができているようで」
「城内だけじゃなねぇだろ！　街中の様子とかって、これ絶対に民も絡んでいるだろ！！」
「家族や友人が城勤めの方から、広まったそうです」

つまりこの会報は、自分達三人のファンクラブの会報なのだと一刀は理解した。
于吉の調査によると、好かれている女性達にも傾向があるそうな。
一刀派は主に同じような年頃の女性が多い。
仕事でくじけていたのを慰めてもらった、街で悩みを聞いてもらったという、入会に至った意見がある。
左慈派に属しているのは、やや年上のお姉様方や年下の夢見る少女達。
口よりも行動で態度を示す左慈は、お姉様方には口下手でぶきっちょな可愛い弟的印象を、少女達には無口で外見のいい大人のような印象を与えている。

「ちなみに私派もいるそうですが、女性には興味が無いんですよねぇ」

むしろそれを期待して、どんな男と絡むのかを知りたい女性が、続々と于吉派に集まっていたりする。
後日、于吉派の一人が左慈を相手にした八百一本を執筆し販売、そういう趣味の女性達の間で流行した。
なお、作中の名前は本人達のものではなかったらしい。
これについての某軍師二名のコメントは。

『はわわ！　こ、これは正に神品の一作！！』

『あわわぁ、これ過激過ぎるよ。出版差し止めになる前に買えてよかったね』

との事らしい。

「それと極秘情報なのですが……。武将の女性陣も、これに入会しているそうですよ」

紫苑は呂迅派の会員番号二番、桔梗は会員番号三番。
さらに焔耶が会員番号五番、霞が三十七番だったりする。
おまけに特別会員扱いで呉の穏が三十五番、皇帝の劉協が十六番に名を連ねている。

「それ、マジ？」
「本当ですよ。それから華雄将軍が、左慈派の会員番号二十番だそうで」

意味ありげな笑みを于吉が向けると、左慈の顔が微かに赤く染まる。

「言われてみれば、最近よく一緒に鍛錬しているような」
「はぁ、華雄将軍が羨ましいです」
「う、うるせぇ！　余計なお世話だっつうの！！」

明らかに照れ隠しな怒鳴り声を残し、左慈は去っていった。

「さぁて、俺もちょっと紫苑さんや桔梗さんを問い詰めてくるかな」

会報を手に、汗を拭いながら事情聴取に向かう一刀。
そんな二人の背中を見送りながら、于吉は呟いた。

「かくいう私も、左慈派の会員番号十一番ですよ」

霞&華雄拠点　目覚めた乙女達の悩み事

武人として生きているつもりだった。
武一筋に邁進し、今後もそうやって生きるつもりだった。
女として見てくれなくとも、それで構わないと思っていた。
それなのに。

「そんでな、ウチみたいなガサツな女、焔耶達と違うて嫁の貰い手がないなって言ったんよ」
「ふむふむ」
「したら一刀が。何言っているのさ、霞は充分魅力的な女の子だよ。俺だったら喜んで嫁にもらうな、って言うてくれたんよぉ」

恥ずかしがって卓を叩く霞の顔は、酒とは関係なく真っ赤になっている。
倒れそうになった酒壷を華雄が押さえ、元通りに立たせる。

「そんで、華雄はいつなん？　左慈に気向いたんは」
「そ、それはだな。奴が来て、しばらくしての事だ」

溜まっていた仕事を片付け、前が見えないほど重ねた書類を持って運んでいる時だった。
床の僅かな窪みに足を引っ掛け、転びそうになった時だった。
ばら撒きそうだった書類の山を上から左手で、倒れそうな華雄の体を右腕で左慈に支えられた。

「そんで？」

「礼を言おうとしたら、手伝ってやると書類を半分奪われた」
当然その時、華雄は自分で運べると抗議した。

「そしたら左慈の奴。俺は困っている女を見過ごせない、戦場以外ではな。と返してきたんだ」
「ほうほう？」
「さらに。女だから、と言うつもりはない。だがな、頼れる男の一人か二人いても悪いもんじゃないぞ……とな。以来、何かと頼らせてもらって、その……」

最後の方は小声になりつつも、どうにか話し終えた華雄。
二人が話しているのは、初めて女扱いされた時の話。
最近その事で悩んでいる二人は、同じように生きていた互いを頼って、話を聞いてもらおうと考えた。
ところが素面では話せないと、酒を飲んで始まったのは互いの初恋暴露。
勿論、酔っている訳ではない。
あくまで酒の力を借りて、喋っているにすぎない。

「はぁ、なんだかんだ言っても、ウチらも女やったんやなぁ」
「……そうだな。捨てようとしていたんだがな、自分が女であることを」

武の道で名を挙げるには、相応の覚悟が必要。
二人共その覚悟として、女として生きる道を諦めようとしていた。
ところがそこへ、一刀と左慈に女扱いされた。
一流の武人になって、捨てたと思っていた女としての道を指摘され、戸惑ってしまう。
こういった事に耐性がないだけに、二人は悩み続けていた。

そして今に至る。

「こうなったら、酔った勢いで迫るか？」
「いいい、いきなり迫るのか！？」
「当たり前や、ウチらを女として扱った責任を取れぇって。てか、華雄は仲良いから必要ないか」

余り者は自分だけだと、溜め息を吐く。
一方の華雄は何を言うんだと反論するが、顔を赤くしては説得力がない。

「第一、余り者なら恋だって」
「あれは一刀がいれば、別にえぇんと思っているんやないか？」

恋の中での愛の順番は、一に兄妹愛、二に家族愛、三四が親愛で五に敬愛。
名前の割に恋愛というものとはまるで縁が無い。

「……言われてみれば」
「まぁ、一刀が兄ちゃんやなかったら、絶対一刀とくっ付いとるやろうけどな」
「確かに」

残念ながらこの外史では兄妹だが、他の世界では所属先次第ではよろしくやっている。
それを知っているのは、マッチョな漢女の管理者だけである。

「ほな、ウチは一刀に襲撃かけてくる」
「ちょっと待て、本気で行くのか！？」

真面目な表情で襲撃に行くと告げる霞に、華雄が慌てて突っ込む。

「当たり前や。せっかく酔っとるんやから、いざとなったら酒のせいにしたる」

「だが、あいつは敵が多いぞ。酔った勢いとはいえ、勝つ見込みはあるのか？」

「大丈夫やって。胸の大きさならウチかて負けてへん」

「そういう意味じゃない。というか、それは私へのあてつけか？」

残念な自分の胸を押さえつつ、杯を強く握る華雄。

確かに一刀に恋愛感情を持っている面々は、何故か胸の大きいのばかり。

紫苑や桔梗、穏に焔耶は勿論、身長は少々足りないが劉協も結構胸囲がある。

さらにこの前の呉での宴の時、冥琳や蓮華も落ちそうになっていた。

霞も紫苑や桔梗には負けるが、劉協や蓮華とはそう変わりない。

つまり、自分のあの巨乳軍団に入って、一刀を巡って争えると確信していた。

「即断、即決、即実行やぁ！」

「お、おい、待てぇ！」

止める間も無く部屋を飛び出していく霞。

さすがは神速だけあって、その姿はあっという間に見えなくなってしまった。

今日は一刀の部屋に恋がいるという事も忘れて。

「はぁ、あぁ見えてあいつは一途でしつこいからな。ふぅ……私も、左慈を尋ねるかな」

ボソボソと呟きつつ、理由はこれでいいかと酒を手に左慈の部屋へ向かう。
翌日、霞は恋に霞お姉ちゃんと呼ばれており、一刀はもう勝手にしろと頭を押さえていた。
これを期に、紫苑や桔梗、果ては事実を知った穏と劉協も、恋にお姉ちゃんと呼ばせたそうな。
なお、華雄と左慈は何も進展が無かったが、二日酔いで一緒に部屋から出てきたのを見られ、色々と誤解を受けた。
この日の夜に噂を聞いた于吉が左慈を襲撃し、一撃の下に沈んだのは言うまでもない。

拠点フェイズ　音々音・月&詠・左慈&于吉・霞&華雄　編（後書き）

今回は拠点フェイズをお送りしました。
次回は本編に戻ります。

二つの思惑　先に成るのは

袁術の敗北と孫呉の復活、蜀との同盟はすぐに大陸に広まった。
袁紹を新兵器の投石器を投入して撃破し、魏を立ち上げた曹操。
無事に劉表の下に辿り着き、仕事に邁進する劉備にも話は伝わった。

曹操陣営

「なるほど、虎と鬼が手を組んだ訳ね」
「華琳様？　鬼とは誰ですか？」

新しく曹操に仕えることになった郭嘉が尋ねる。
彼女は袁紹との戦いの際、友人の程？と共に実行した策で曹操に実力を認められた。
元より曹操に憧れていた郭嘉は、申し出を受けて程？と共に軍師として雇われた。

「あなたも聞いた事がない？　蜀王、呂迅という名を」
「聞いた事があります。反董卓連合の前に立ち塞がり、呂布の兄を名乗った人物ですよね」
「その戦いぶりから、赤い鬼人、轟将軍と呼ばれているそうですね。そして現在は、蜀の王になっているそうで」

頭に人形を乗せて、舐めていた飴を手に持った程？が口を挟む。
一般大衆には蜀王、呂布に兄という印象が強くあるが、あの時戦った将や兵の間では別の呼ばれ方がある。
それが先に告げた赤い鬼人、轟将軍という呼び名だ。
突如として現れ、たった一戦から二戦で名を轟かせたが故に、印象の剛ではなく轟になった。

「その呂迅が、小猿の下から独立した孫策と手を結んだのよ」
「なんと。では、南側はほぼ全域が揃って我らの敵という事に？」
「すぴすぴ、ぐぅ……」
「寝るな！」
いきなり眠りだした程？を小突き、目を覚まさせる。
「おぉっ！？　すみません、あまりに衝撃的な事につい」
悪びれもなく飴を口に咥える姿は、マイペースそのもの。
冷静な判断が必要で、動揺することが許されない軍師にとっては長所かもしれない。
だが、こうした場では空気を読めと言われかねない。
「それで華琳様、我々はどう致しましょう？」
折れた左腕もだいぶ治り、今では包帯を巻いているだけの荀？が曹操に尋ねる。
ここでの動き次第で、今後の魏の流れが決まるとでも言うかのように。
「本当なら、まだ磐石の固まっていない孫策の下へ攻め込むべきでしょう。でも、それは我らとて同じ。今は麗羽の治めていた領地を整理し、磐石を固める事を最優先事項とするわ」
『御意』
君主からの指示に、各将と軍師が返事をする。
この統率力こそ曹操が持つ、最大の力であり特徴。
あらゆる分野に精通し、それらを最大限利用して人心を惹きつける。

惹きつけられた人物達は、曹操の統率力でその能力を存分に発揮する。
これが、魏という国の質の高さを実現している要因となっている。

「では、解散！　あっ、桂花はちょっと残りなさい。相談したい事があるわ」

解散の言葉を受け、ぞろぞろと玉座を退室する将と軍師達。
その中で魏の三羽烏と名高い、楽進、李典、于禁の三人組が一刀について喋っていた。

「次は負けない。もっと修行して、今度こそ勝ってみせる」

静かに闘志を燃やす楽進。
以前に一刀と戦ったときの傷は癒えた。
しかし、心の奥底にはあまりにも高い壁が立ち塞がった。
巷で有名な蜀王、赤い鬼人、轟将軍という二つ名で呼ばれる一刀に、手も足も出せずに負けた。
しかも武器を抜かせる事もできずに。

「おぉ、燃えとるな凪」
「でも無理したら駄目なの。せっかく怪我も治ったのに」
「治ったからこそ、無理をするんだ。そうでないと、あの人には勝てない」

握り締めた拳を睨みつけ、あの戦いを思い出す。
どんな拳も、蹴りも、氣弾も、一度たりとも命中せずに受け止められるか、避けられた。
逆に相手の攻撃は受けきれず、避けきれず、まるで大人と子供のような戦闘だった。

「さすが凪ちゃん、沙和には無理なの」
「何を言っているんだ、二人も鍛えるんだ。でないと、あの人には勝てないぞ」

いつの間にか特訓に参加する事になったので、李典と于禁は驚いた。

「えぇっ！？」
「んな殺生な！　あんな化け物の相手なんて、春蘭様に任せたらえぇやん！！」
「人任せにするな。それに呂布もいるんだ、春蘭様一人にあの二人の相手を任せられる訳ないだろう！」
「それはそうだけど……」

だからこそ、自分達が強くなってどっちか一人と戦うんだと叫び、涙する二人を引き摺っていく楽進だった。
そんな引き摺られている二人のうち、李典は一刀の姿を思い出して、ある記憶を思い起こす。

（そういや、よく似てるなぁ）

以前、浮気をした自分達の師匠が嫁さんに怒鳴られ、旅に送り出されて帰って来た時に聞いた話。
旅先でちょっと氣のコツを教えたら、一発で扱えるようになって悔しい思いをしたそうな。
その人物は赤い髪に白い布を首に巻いて、黒髪の一部が白くなっている気の強そうな少女を連れた少年。
連れている少女はともかくとして、楽進から聞いた蜀王の特徴と、赤い髪と首に巻いた白い布が一致している。

（まさか……なぁ）

若干の嫌な予感を抱きつつ、三人は特訓のために中庭へ出て行った。
その後、楽進に追いかけられて特訓に励む、涙目の李典と于禁の姿が見られた。
一方の玉座では、残るように言われた曹操と荀?が密談をしていた。

「劉備が蜀か呉に向かった情報は?」
「未だありません」
「そう。早く行ってくれないと、向こうに攻め込む理由がつかないわ」

曹操の考えとしては、借りを持たせた劉備を理由に、蜀か呉へ侵攻する切っ掛けを作りたかった。
彼女達が独立せず、どこかを治める事が無い可能性も考慮していない訳ではない。
独立したらその領土を貰いに行き、逃がした劉備達を追い続ける。
今回のように独立の見込みが無い場合も、借りを理由に彼女達の下へ向かう予定だった。

「そうね……いっそ劉表に書を送りましょうかしら?　以前の私と劉備のやり取りを書き記した上で、劉備達を引き渡せって」

相手が容認すれば、ただで関羽を手に入れられる。
容認しなければそれを理由に侵攻する。
容認したが劉備達が先手を打って逃げた場合は、それを理由にして逃げた先へ侵攻。
いずれにしろ、彼女達にこれ以上の安息は与えないつもりだ。

「では、そのように致しますか?」

「お願いするわ。書は私が書くから、使者を選んでおいてくれる？」
「御意」

蜀か呉への侵攻のため、陰ながら動き始めた曹操。
この先にどのような展開が待っているのかと、彼女は嬉々として筆を走らせた。

劉備陣営

劉表の下で仕事をし、休憩の合間を縫って劉備陣営の主だった顔が一箇所に集まった。
話題は勿論、今度の蜀と呉の事について。

「袁術が落ちたか」
「予想出来たことだ。あのような輩が、そう長く生き残れるはずがない」
「これで南東は孫策さん、南西は呂迅さんが治める事になりましたね」

大陸を四分割した場合、南東に雪蓮の呉、南西に一刀の蜀、そして東北に曹操の魏がある。
唯一西北はどこにも属していないが、ここに攻め込めば確実に蜀が間に入ってくる。
そうでなくとも、皇帝のお膝元という事で西涼軍が割り込みかねない。
つまりは西北を支配するためには、西涼と蜀を同時に相手する事になる。
さらに下手をすれば、同盟を理由に呉が加わる可能性もある。

「やっぱり独立は無理かな？」
「はい、残念ながら……。私達が台頭できる領地がないですから」

現在劉表が治めているのは、荊州の北側のみ。
南側は呉の独立と共に袁術の手を離れたが、そのまま呉の領地になっている。
つまり現在いる場所で独立しても、ほぼ四面楚歌な状態。
逃げ道は雍州しかないが、そこで独立しようものなら、先ほど挙げたように蜀や西涼が攻め込んでくる可能性がある。
避けるためには、相当な根回しが必要だが、残念ながら根回しするほどの知り合いもいない。
劉表とて、利用し利用されの間柄、とてもこんな事は頼めない。
それならいっそ、独立は諦めた方が安全といえる。

「申し訳ありません、桃香様。我々が不甲斐ないばかりに」
「皆が悪いんじゃないよ。それに、前に言ったでしょ？　世の中が平和になってくれれば、私は王様なんかじゃなくてもいいって」

正直な事を言えば、劉備は王になんかなりたくなかった。
誰も力でしか世を平和にしないからと立ち上がったが、あまりにも荷が重すぎた。
上の立場ゆえの責任、曹操や雪蓮、一刀との王としての器の違い。
武でも知でも足りない能力。
今日まではどうにか頑張ってこられたが、既に精神的に限界が近かった。

「それじゃあ、これからどうするのだ？　ここに居続けるのか？」

何気ない張飛の質問だが、これは重要な事だ。
劉備が王でなくなるのは、本人も納得済みなので良しとする。

だがそうなると、誰の下で平和な世になるよう、働けば良いのか。
このまま劉表の下を出て行っても、せいぜい義勇軍が関の山。
国同士の争いになりそうな世の中で義勇軍を作っても、できることは少ない。

「いっそのこと、皆がバラバラに動きますかな？」

趙雲の意見にも一理ある。
何も全員で動かなくとも、それぞれが何かしらの形で平和に貢献する。
そういったやり方も有りだろう。

「それは嫌！　今日まで皆で頑張ってきたんだし、これからも皆で頑張ろうよ」
「桃香様、ご安心を。私はいつまでも、桃香様のお傍に」
「鈴々もなのだ！」
「わ、私達もでしゅ！」

関羽に続くように張飛、諸葛亮、鳳統が今後も共に生きる事を望む。
ならば、自分だけが別行動をする訳にはいかないなと、趙雲も同行を希望する。
全員が一緒にいられる事に劉備は感謝し、お礼の言葉を伝える。
そんな和やかな空気はそこそこに治め、行き先を検討する。
このまま劉表の処に留まりつもりは無く、かといって曹操の下に行くつもりもない。
だとすれば、残るは呉か蜀。
しかし蜀の陣営の主だった顔には、連合の時に痛い目を見た。
やっている政は善政だが、以前の事を考えると顔を出しにくい。
となると、行き先は一つに絞られる。

「行き先は呉、孫策さんのところだね」
「はい。しかも呉は、軍師が戦闘を取る場合があるほど、武人が不足しています」
「そこに、我々が雇ってもらえる余地があるというのだな」
幸いにも連合の時に顔を合わせた事もあるため、尋ねやすいと言えば尋ねやすい。

「では、すぐにその旨をお知らせするよう、手を打っておきますね」
諸葛亮の提案に全員が頷いて、呉への移籍が決定した。
だが、今いる劉表の下には曹操の書が届こうとしている。
劉備と曹操、果たしてどちらのが思惑が、先に動きをみせるのだろうか。
一方の蜀陣営はというと、一刀に留守を頼まれて表向きは桔梗が指揮を取っていた。
その一刀は左慈をお供に長安にいる劉協の下を訪れ、呉との同盟についての報告をしていた。

「ほぅ、呉王の孫策と手を結んだのか」
「はい。反乱する恐れのある豪族達を、王朝とゆかりのある我々と手を結んだ事を知らせ、抑え込むと言っていました」
皇帝の劉協と、信頼の置ける新たな重役達の前で報告を続ける。
一応蜀は属国なので、こうした定期報告は欠かせない。
特に今回は重要な事なので、こうして一刀が直々に尋ねて来た。

「話によると、お主達も独立に手を貸したそうじゃが。それは以前の報告にあった理由で相違ないか？」
「ありません」

「よかろう。袁術に関して朕は口出しせん、孫策に好きにするよう伝えるのじゃ」
「承知しました。報告は以上です」

定期報告を終えた一刀達は、別室で少しばかり劉協と談笑し蜀へと戻る。
その道中で襲ってきた賊を二つ三つ潰し、お尋ね者の首を持ち帰った。

「いやぁ、左慈も腕を上げたな。氣の扱いもだいぶ上手くなってきたし」
「あんなのまだまだだ。氣の消費が大きくて、途中で息切れしているようじゃな」
「つかあんたら、早く着替えてきぃや！」

鋭い霞のツッコミを受ける二人は、返り血で真っ赤になっている。
しかもお尋ね者の首も持ち帰ったために、一時城内は騒然とした。
血まみれで人の首を持ち帰って来たら、誰だって混乱するだろう。
その帰って来た人物が、皇帝への定期報告に向かった自国の王だったのだから。

「さすがの私も……貧血になりかけたわ」
「まったく。あんな格好でただいま、なんて明るい笑顔と口調で帰ってこられたら、誰だって驚くわい」

年長者の二名でさえ、驚きかけたその光景。
唯一驚かなかったのは、おかえりと笑顔で出迎えた恋だけである。

「まったく酷いな。元気な姿を見せようと笑顔で明るく帰還したのに、恋以外は悲鳴で出迎えるなんて」

『無茶言うな！』

寧ろ悲鳴を上げなかった恋が、少し変わっている。
恋は盲目という言葉を聞くが、恋の場合はこう言うべきだろう。
恋は兄に盲目と。
一刀という存在だけを目に収め、返り血や生首、その他の兵士達や左慈も目に入らない。

「心臓に悪いのです」
「本気で医者を呼びに行こうとしたぞ」
「別に呼ばなくとも、俺がここにいるっていうのに」

ねねと焔耶に続いて発言したのは、長安にて救出した華佗。
以前の礼を言いに来た処へこの騒動だったので、引っ張ってこられたらしい。

「それはそうと華佗、ようこそ蜀へ。ゆっくりしていってよ」
「そうしたいのは山々だが、どこかにいる患者を助けに行かなくちゃならないから、そう長くはいられないな」

相変らず医者という事に誇りを持っている発言で、混沌としていた場の空気が和む。
できれば彼のような腕のいい医者は手元に置きたいが、彼の性格からそれは無理だろう。
患者が来るのを待つより、自分が患者の下に赴いて治療する。
この世界の華佗とはそういう男だ。
だからこそ、一刀は前世の記憶からある事を思い出した。

「ところで、次の行き先は決まってるか？」
「いや、別に。誰か病人を知っているのか？」

「風の噂だけどね。西涼の馬騰さん、それと呉の冥琳……周瑜さんだ」

冥琳の名に、ほぼ全員の表情が変わる。
前に会った時は、そんな様子は欠片も見えなかった。
どう見ても健康そのものだった彼女が、何故病人なのかが分からない。

「ふむ馬騰の噂は俺も聞いているが、周瑜が病というのは？」
「確信がある訳じゃないんだけど、ちょっと気になる事があって」

さすがに前世の記憶です、とは言えるはずがなく。
周瑜の体の氣の流れがおかしく、妙な動きを見せている箇所があるという事にした。

「疲れていて、そうなっただけじゃないかしら？」
「いや、去り際にも確かめたけど変わっていなかった。むしろ、ちょっとだけど強くなってた」

その話を聞いた華佗の表情が変わる。
にこやかな笑みは消え、真剣な表情で腕を組んで考え込む。

「一刀、それは本当か？」

五斗米道は氣の流れに干渉し、人を癒す医術。
氣の流れがおかしく、それが強くなっていると聞いては放っておけない。
特に今回は自覚症状がまだ無いらしいので、放っておけば手遅れになるかもしれない。

「俺の見た感じだけど、間違いないよ」
「そうか……。分かった、先に既に症状の出ている馬騰を診たら、すぐに呉に向かって診てみよう」
「助かるよ。良ければ、馬も貸すけど？」
「それはありがたい。ぜひ、頼む」

西涼と呉の距離は長い。
加えて一方の治療に時間がかかる可能性もあるので、せめて移動だけは早くしたい。
本当なら冥琳を呼び寄せるべきかもしれないが、今彼女が呉を離れるのは危険すぎる。
かといって、蜀には彼女に代わって送ってやれる軍師がいない。
表に出られない詠に、まだまだ甘いねね、表立って動ける軍師の支柱となっている于吉。
正直言って、動ける軍師が少ないのが蜀の弱点となっていた。
残る手段は冥琳に休んでもらう事だが、性格的に無理にでも仕事をしそうだ。
まだ病と決まった訳ではないと、周囲を説き伏せてでも。

「頼むよ、華佗」
「あぁ、任せておけ。助けてもらった礼だ、周瑜は必ず治してみせる！」

馬に跨って颯爽と旅立つ姿を見送り、間に合うことを祈った。
同時に、呉に行く予定だった紫苑に、冥琳が病の恐れありと書いた書を持たせて旅立たせた。

二つの思惑　先に成るのは（後書き）

劉備と曹操が動きを見せた。
どちらの思惑が先に動きをみせるか、それは外史のみが知る。

迷走

劉備と曹操、二人の思惑が動きを見せた。
それから数日後、先に事を成そうとしているのは、曹操の思惑だった。
魏の王としてある程度は思い通りに動ける曹操に対し、劉備は宮仕えの身。
与えられた仕事をこなしながら思惑を進めるのは、少し難しい立場にあった。
こんなタイミングで、その差が出てしまった。

「はわわぁ！　完全に出遅れてしまいました！！」
「桃香、こっちだ早く！」

気付いた時には、既に曹操からの書が届いていた。
玉座で書を読む劉表から全てを知った趙雲は、すぐにこれを仲間に知らせた。
幸い呉と連絡を取る前だったので、まだ全員が城内にいた。
話を聞いた劉備は、仲間達に手を引かれて半ば強引に城を脱出する。
自分達に付いてきてくれた兵士達の協力もあるが、人数ではやはり負けている。
追っ手を食い止めるために、一人、また一人と人数が減っていく。

「このまま森を利用して、追っ手を撒きます！」
「相分かった。もうじき日も暮れる、なんとしても逃げ切ろうぞ！」

段々暗くなる周囲と地形を利用し、上手く追っ手から逃れる劉備と仲間達。
やがて、ようやく追っ手を撒いた頃には、すっかり人数が少なくな

っていた。

「桃香様、大丈夫ですか？」

「な、なんとかね」

「それにしても曹操め、この時期に引渡し要求をしてくるとは」

曹操の一手に気付いた時には、劉表は劉備を引き渡すと決めていた。

話し合おうと劉備は言ったが、相手は問答無用で捕縛しようと襲ってきた。

関羽、張飛、趙雲、公孫賛の活躍でどうにか切り抜けたものの、状況はあまりよくない。

今回の件を理由に曹操は侵攻を開始すると考えられるので、この地に留まるのは難しい。

城に戻ったところで、取り合う暇もなく捉われて曹操に差し出されるのが関の山。

だからといって、曹操のやり方には賛成できない。

この中で一番偉いのはあくまで劉備なので、彼女が間違っていると否定している先には行けない。

しかし、これからどうすればいいのか。

「いつの間にか、山の中に入ったみたいなのだ」

「あわわ、ここはどこなんでしょう？」

突発的かつ、がむしゃらに逃げてきたので、場所を確認する余裕も無かった。

ともかくこのままでは危険なので、比較的安全そうな場所を関羽と趙雲が探す。

残っている面々は拾えるだけの薪を集め、火種を作っておく。

夜の山中は思ったよりも冷えるので、暖を取るための火は必要不可欠だ。

「桃香様、こちらにちょうど良い場所が」

川から少し離れた場所にある、少し開けた場所。
周囲に敵が身を隠せそうな障害物が無く、川からも距離があるので、足場はしっかりしている。

「川の周囲は地面がぬかるんでいる場合が多いので、ここ辺りがちょうどいいでしょう」
「ついでに少しばかりですが、食糧も見つけてきました」

関羽が集めて来た、本当に少しばかりの食糧。
これに後から張飛が捕ってきた魚を加え、今宵の夕食となった。
劉備達は夕食を食べながら、これからどうするのかを話す。

「できればこのまま、呉に行きたい所ですが……」
「場所が分からないのでは、動きようがないな」
「下手に動いても遭難するだけなのだ」

本当に着の身着のまま、捕縛の手から逃げ出してきた。

「皆、ごめんね。やっぱりあの時にちゃんと断っていれば」
「そんなっ！　私がこの身を曹操に差し出していれば」
「今更そんな事を言っても、仕方がないだろう。少しは落ち着けって」

比較的冷静な公孫賛の仲裁で、劉備と関羽は押し黙る。
本当に今更だなと自虐しながら、膝を抱えて考え込む。
手元には食糧も無く、金も僅かばかりしか無い。

「と、ともかく！　夜が明けたら移動しましょう。近くの邑か町に行ければ、場所も分かりますし」

慌てて諸葛亮が割り込み、この場はどうにか取り繕った。
夜も遅くなってきたので、劉備や数人の兵士達が休みを取り、将と兵が交代で辺りを警戒する。
そんな中で、関羽がこっそりと抜け出そうとしていた。
自分の身を魏に引き渡して、どうにか劉備を見逃してもらおうと。
そのためにこの森を抜け出し、向こうがこちらを見つけるよりも先に劉表か曹操の下へ向かうために。

「すみません、桃香様」
「悪いが行かせぬよ」

魏に向かおうとする関羽の前に立ち塞がる趙雲。
龍牙の矛先を向けて牽制しながら、睨みつける。

「星！？　何故ここに？」
「愛紗の考えなど、手に取るように分かるわ。お前はそういう奴だからな」
「くっ！」

政務で劉備に厳しく言っているものの、それはあくまで勤務態度について。
仕事の内容は口出しした事も無く、口を出せるのは武の訓練でのみ。
加えて忠義心の厚い彼女ならば、深く考えずにこういう行動に出る事は予想できる。
彼女はあくまで、武人だから。

「通してくれ。桃香様を救うには、これしか」

「何故、これしか無いと決め付ける。そもそも曹操が、今更愛紗の身一つで済ますと思うか？」

曹操が要求しているのは、劉備とその配下の主だった顔。
すなわち関羽が身を捧げても、彼女にとっては欲しい物が一つ手に入ったに過ぎない。
他の面々を追い求めるのは、火を見るよりも明らかだ。

「ならばどうしろと言うんだ！」

「そうだな、皆で魏に行くのも有りだな。曹操は才のある者を好むゆえ、閨に引きずり込まれなければ、思う存分に力を発揮できると思うぞ」

正直な所、趙雲はそれでもいいと思っていた。
数日前に劉備が、王という立場に見切りを付けたと聞いた時、次は誰の下に行くのだろうと思案した。
頭に思い浮かんだのは、現在大陸で名を轟かせる、魏、呉、蜀の三人の王。
武人として心惹かれるのは、英雄孫策と赤い鬼人の轟将軍呂迅。
王としての才覚ならば、覇王曹操。
劉備は曹操のやり方が間違っていると言うが、武人に生きているとそうは思わない。
戦うのが当たり前で、戦ってこそ己の存在意義を見出している、それが武人だからだ。
その点、関羽は母性本能が強いのか、強者な主に仕えるより弱者な主を守りたがっている。
だからこそ、劉備の理想に感銘を受けたのだろう。
張飛は張飛で考えがあるのだろうが、もしも劉備より先に先の三人に勧誘さえたらどうなっていたか。

「我らはあくまで武人。他者の考えを読み、口でどうにかするのは似合わぬぞ」
「では、どうしろというのだ！　単身乗り込んで敵を欺き、隙を見て背後から刺せというのか！！」
「武人としての恥も外見も捨てるというのなら、それもよかろう」
「星、貴様！」

睨み合う両者。
互いに武器を手に、今にも一触即発な空気が漂う。
そこへ、劉備の叫び声は響いた。

「駄目ぇ！！」

驚いた関羽と、あくまで冷静でいる趙雲の視線が劉備に向かう。
後ろからはぞろぞろと、諸葛亮や張飛、兵士達も集まってきた。

「二人共、こんな時に喧嘩なんかしないでよ！」
「違います、これは、その」
「違わないよ！　武器持って睨み合って、どう見たって喧嘩じゃない！！」

ただでさえ、あんな事があって逃げ出してきたばかりなのに、この状況。
色々な意味で劉備の精神は限界だった。
いきなり座り込み、もうやだと泣き出し、胸の中に痞えていたものを吐き出す。
王になんてなりたくなかった、これ以上誰かが傷つくのは見たくない。
思いつく限りの想いをぶちまける姿に、睨み合っていた二人も武器を下ろす。

そんな時だった。

「ぐわっ！」
「ぎゃっ！」

音も無く悲鳴が聞こえ、振り向けば兵士が数人倒れていた。
暗闇の中から聞こえた悲鳴に緊張が走る。
全員が武器を持って周囲に目を配り、謎の襲撃者の位置を探る。
だが、襲撃者がいたのは上だった。

「ぐっ！」
「うあっ！？」
「へぶっ！」

木の葉が掠れる音と共に何者かが兵士を襲撃、あっという間に兵士を全て倒してしまった。
残っているのは、身を寄せ合っている劉備と諸葛亮、鳳統。
それを守るように背中合わせで立つ関羽と張飛、周囲を見渡す趙雲と公孫賛。
自分達なら不覚は取らないと警戒するものの、次の瞬間に武人三人が揃って倒れた。

「愛紗ちゃ……うっ！」

倒れた義妹を助けようとした途端、残っていた三人にも衝撃が襲う。
気を失って倒れた劉備達の下に、繁みの中から二つの影が現れる。
月明かりの下に照らされたのは、呉の思春と明命。

「こいつらは確か、劉備だったな」
「はい。どうしますか？」

「このまま天幕に連れて行くぞ。私が部下を連れてくる間に、こいつらを縛っておけ」
「承知しました」

人数がいるので思春が人出を集めてくる間に、明命が劉備達を縛っておく。
最初に関羽を縛る際、最近覚えたエロ方面的な縛り方になりそうになったのは、お約束だ。

「という訳で、捕らえてきたのですが」

未だ気を失っている劉備達を天幕に連れて行き、待機していた蓮華と紫苑に見せる。
この天幕は建業に向かう最中の紫苑と、近くで盗賊討伐から引き上げる最中の蓮華が合流した隊が使っている。
たまたま居合わせたのだが、目的地は同じなので共に行くことにしたのだ。

「ふむ。劉表の放った細作かと思ったのだが」
「えっと、どちら様なのかしら？」
「紫苑殿は顔を見たことが無かったな。こいつらが劉備と、その配下の者だそうだ」

蓮華自身も顔を見ていないが、思春と明命から話を聞いていた。
とはいえ、何故彼女達がこんな場所にいるのだろうか。
ここは同じ荊州とはいえ、劉表の領地ではなく呉の領土内。
そこに兵士と共にいたのでは、怪しい事この上ない。

「ともかく、起きるのを待ちましょうか」
「そうだな。思春、明命、悪いがこいつらを見張っていてくれるか

？」
『御意』

部下と共に劉備達を連れて行く二人を見送り、蓮華と紫苑は相談を始める。

「どう思います？　劉備達の動きを」
「詳しくは分からないけれど、見たところ着の身着のまま、という感じでしたね」
「あぁ、食糧も何も無かったそうだ」
「これはおそらく、何らかの理由で劉表さんの下から逃げ出した、という処ですかね」

理由までは分からないまでも、紫苑の推測はほぼ当たっている。
詳しくは目を覚ました時に聞くとして、問題はその後だ。
本当に逃げ出してきたとしたら、おそらく彼女達には行き先が無い。
ひょっとしたら、そのために呉に助けを求めに来たのかもしれない。
普通なら助けたい処だが、厄介な事に巻き込まれかねない。

「今は待ちましょう。何も知らずに推測しても、解決しないわ」
「そうだな。すまないな、まだまだ不甲斐なくて」

王族として高いレベルの学習を受けている蓮華と、経験豊富な紫苑。
この二人は意外といいコンビなのかもしれない。
そして翌朝、目覚めた劉備達に対しての事情聴取が行なわれた。

「つまり曹操に借りを返せと言われ、領土が無いからその身を狙われたと」

話を纏めた蓮華の発言に、劉備が小さく頷く。

やはり厄介事だったかと、正直頭を痛める拾い物だった。
下手に保護すれば魏に攻め入られるし、かといって放り出すのも考え物。
呉は将軍が少ないので、関羽と張飛、趙雲は喉から手が出るほど欲しい。
対する紫苑のいる蜀は、軍師不足なので諸葛亮と鳳統、後は太守をやっていた公孫賛と劉備が欲しい。
欲しいのだが、魏に狙われる危険がある。

「困ったな。私の判断では手に負えん」
「私にも無理ね。こっちの一存では決めかねるわ」

さすがにここまで大きな話となると、国主の判断が必要となる。
取り敢えずこの場は預かって、一刀と雪蓮に連絡をする事にした。
劉備達は捕らえたまま武器も取り上げられて、蓮華と紫苑、思春と共に建業へ。
明命はすぐに蜀へと向かった。
一方で、劉表が劉備を取り逃がしたという報告を受けた曹操はというと。

「そう、どこに向かったかは分かるかしら？」
「いえ、残念ながらそこまでは。向こうも急な事だったので、逃げ出すのが精一杯だったようで」
「方向を確認している余裕は無かった、という事ね。いいわ、下がりなさい」
「はっ」

報告を終えた兵士が下がると、曹操は面白そうな笑みを浮かべた。
思惑通りに、劉備が逃げてくれたのだから。

「桂花、劉備達がどこにいるのか予想はつく？」
「はっ。今の話から予測するに、おそらく荊州は呉の領土内にいるものかと」
「ならば、ここで私達はどうするべきかしら？」
「情報を集めつつ、しばし様子見をした方がよろしいかと」
「何ぃ？　劉備は呉にいるんだから、呉に攻め入ればいいだろう」

深く考えずに発言する夏侯惇に、荀？はこめかみを押さえて呟く。
この脳筋がと。

「誰が脳筋かっ！」
「あんたよ、あんた！　劉備達がいると予測する地は確かに呉だけど、蜀の近くでもあるの！！」
「それがどうした？」
「もしも私達が呉に攻め込もうとしている間に、劉備達が蜀に入ったらどうするつもり！？」

そうなれば、攻め込む大義名分を失う上に、誤報で戦を起こしたと評判の低下に繋がる。
戦となれば死人が出る以上、後で謝って済む問題ではない。
攻め込むならば、もっと正確な情報が必要になる。
そこまで説明したのだが、どうも夏侯惇は理解しきれていない。

「？　つまり、どういう事だ？」
「姉者、後で私が説明してやる」

キリが無さそうなので、妹の夏侯淵が割って入って言い争いを止める。
秋蘭が言うならと、大人しく夏侯惇は引き下がった。

「まずは劉備達が留まる地を見定める……か。それでいきましょう。稟、引き続き調査を頼むわ」
「御意」
「風は補佐を頼める？」
「御意なのですよぉ」

調査の指示を出し、これからの事を思い不敵な笑みを浮かべる。
まずは劉備を差し出せなかった劉表の下へ攻め込む。
その後でじっくり蜀か呉、どちらに攻め入るかを見定め、勝負を掛ける。
それか、両者が組んだとしてもいいように、先に大陸の北側を支配してしまうか。
どちらにしろ、自分は王として堂々と挑むだけ。

「ふふふ。さぁ、楽しませてもらおうじゃない」

魏が調査に動き始める一方で、蜀の陣営はというと。

「馬騰さんからの使い？」
「うむ、娘の馬超と姪御の馬岱が」

桔梗からの報告に、何の用かと考えながら、月に頼んで二人を通してもらう。
連れて来られたのは、従姉妹の割には結構似ている二人。

「蜀王の呂迅だ。此度は蜀にようこそ」
「馬騰の娘の馬超だ。面会してくれて感謝する」
「ちょっ、お姉様、もうちょっと言葉遣いってものが」
「うるせぇ！　苦手なんだよ、そういうの！！」

いきなり口喧嘩を始める姿に、ポカンと口を開ける。

「あぁもう。すみません、至らぬ従姉で。馬騰の姪の馬岱と申します」

「ん、あぁ、よろしく」

現実に戻ってきた一刀が返事をすると、再びこそこそと口論が始まった。

至らぬが余計だとか、本当の事だとか、小さな声で言い争っている。

「おほん」

仕方なく桔梗が咳き込むと、口論は終わって二人が頭を下げる。

「す、すみません、蜀王の面前で失礼しました」

「気にしなくていいよ。仲のいい従姉妹なんだね」

同じ仲の良い妹がいる身としては、見ていて気分は悪くない。

自分達とも、雪蓮達とも違う姉妹の姿。

従姉妹という点は違うが、こうも似ていると姉妹と言われても違和感がない。

性格は雪蓮と蓮華同様、あまり似ていないようだが。

「それで、今回の来訪のご用件は？」

「華佗という医者から聞きました。叔母を助けてあげてほしいと」

「あぁ、その事か。気にしないでくれよ、あの人には旅の最中に世話になったからね」

「へっ？　母さんと会った事があるのか？」

実を言うと、旅の最中に偶然会った事がある。

恋を探して次の目的地を決める時、呂布といえば董卓だと考えた。
そこで董卓の故郷の涼州に向かったのだが、そこで戦闘中の馬騰と遭遇。
劣勢だったようなので手を貸して、仲良くなったらしい。
ちなみに、月はその時既に天水にいたので、涼州にはいなかった。

「へぇ、不思議な縁だな」
「そういえば叔母様、何年か前に面白い奴に出会ったって言っていたような」

当時は留守番を任されていたので、二人とは会っていなかった。
だが、影ながら馬騰の事は心配していたので、今回華佗に頼んでおいたのだ。

「だから気にする事はないよ。あの時、俺と焔耶はご馳走になったんだし」
「そう言われても、そういう訳にはいかないぞ。涼州の民は、受けた恩は決して忘れないんだ」
「姉様、言葉遣い、言葉遣い」

馬岱の注意も聞かずに、今回のお礼を告げる馬超。
楽しい二人が来たと、一刀は笑顔で現状を楽しんでいた。
蓮華の指示を受けた明命が、城に駆け込んでくるまでは。

迷走（後書き）

迷走する劉備達を捕らえた蓮華と紫苑。
果たして彼女達は、どこに向かうのだろうか。

劉備達の行方

深い、それは深い溜め息を吐き、どうしようかと一刀が思案する。
真向かいの席に座る雪蓮も同じ様子で、深く考え込んでいる。
周りの席に座っている、冥琳と蓮華、焔耶に霞も同様だ。
ここは建業にある雪蓮達の城の玉座。
翠と蒲公英と面会中に飛び込んできた明命の一報を受け、すぐに会談をする事になった。
急ぐ必要があるので、お供は霞と焔耶の速度重視メンバーを選んだ。
神速の霞と、旅で馬術を磨いた焔耶との移動は早く、あっという間に建業に到着。
現状を穏に聞いて、こうして会談の場に両国から三人ずつ集まった。
そんな二人の王と四人の部下の悩みの種は、先日捕まえた劉備とその仲間。
どうやって預かろうか、預かった後でどうなるか。
預かるのは構わないのだが、問題はその後の事。

「一番の悩みの種は、やはり関羽だと思うのだが」
「そうやなぁ、まだ劉備に拘っておったようやし」

劉備自身は既に王という立場に見切りを付けていたが、下が全員そうとは限らない。
特に関羽は、未だに劉備の目指していた世界に未練があるのか、もう一度やり直そうと呼びかけている。

「他の奴はどうなんだ？」
「我々に引き取られる事に、納得はしているようだ」

軍師の諸葛亮と鳳統は、現状を理解して仕方がないと判断している。

趙雲は前々から見切りをつけ始めていたので、迷いは無かった。
途中から転がり込んで来た公孫賛も、それほど劉備に固執している訳ではない。
残るは義姉妹の二人だが、張飛は劉備が決めたならそれでいいと言っている。
だが、問題はやはり関羽になってしまう。

「やはり力ずくでも、分散して預かるべきかしら？」
「うん、俺もそれが一番だと思う。少なくとも、劉備と関羽は引き離そう」
「ならば、文官と太守経験者を蜀に、武官を呉に分配だな」

正直なところ、曹操に狙われているとはいえ、どっちの陣営も戦力が欲しい。
蜀は表立って動ける、優秀な軍師が。
呉は戦場を任せられる、腕の立つ武将が。

「そうなると、魏との戦いはどうする？」

地形的に言えば、真っ先にぶつかるのは呉。
しかも曹操お目当ての関羽を引き取るというのならば、なおさらだ。

「実はその事について、一つ考えがあるんだ」

考えがあると言い出した一刀に、一同の視線が集まる。

「どのような考えだ？」
「その前に聞くけど、曹操みたいな人が一番嫌うのはなんだと思う？」
「曹操が嫌うこと？」

分からないと首を傾げる雪蓮と霞、焔耶。
蓮華は何だろうと懸命に考えるが、妙案は浮かんでこない。
しかし、さすがは呉の大都督。
冥琳は答えに行き着いたようだ。

「完璧に物事を行えないこと、だな」
「正解」

曹操という人物は、常に万全を喫して完璧を求める。
戦の手段もそうだが、後に大陸を支配するつもりでいるなら、風評すらも完璧を求める。
故に手元の人材も優秀な者を求める。
完璧を求め続けるために。

「なるほど。だが、それをどう利用するんだ？」
「勿論、これだけじゃ駄目だ。強大になっていく魏に対抗するには、もう一つ必要なんだ」
「何が必要なんだ？」

焔耶の問い掛けに、一刀は薄ら笑いを浮かべる。
どことなく不気味な様子に、何を言い出すのかが気になる。

「人が誰しも嫌がること、思い通りにいかないようにしてやるんだよ」
「ほぉ。それは面白そうだ」

内容を聞き、冥琳まで黒く染まった笑みを浮かべる。
誰しもが嫌がる、思い通りにいかない世の中の流れを利用し、曹操の求める完璧に罅を入れる。

後は自分達の手でそこを叩けば、崩壊に導く事ができる。
力で支配を目論む曹操を、力以外で弱めてトドメを刺す。
軍師としては、これほど痛快で愉快なことはない。

「でも、どうやるんや？」
「やり方はいくらでもあるよ。まずはね」

一刀が説明し、所々で冥琳が修正を加えながら策を構築していく。
その内容に雪蓮と霞は面白そうにしているが、焔耶と蓮華は別の事を考えていた。
曰く、この二人が手を組んで敵にならなくてよかったと。

「概ねはこれでいいな？」
「そうね。じゃあ劉備ちゃん達を呼びましょうか、あの子達にも協力してもらわないと」
「なら、私が呼んできますね」

蓮華が出て行ってしばらくすると、監視に祭と明命、思春を付けた劉備達が連れて来られた。
取り敢えず劉備だけを席に座らせて、たった今決まった事を伝える。

「結論から言うわ。あなた達の身柄は私達で保護します」

保護してもらえると分かって、劉備達の表情に笑顔が戻る。

「その代わりと言ってはなんだけど、早速手を貸してもらえないか？」
「何をすればいいんですか？」

ただで保護してもらえるとは思っていない。

何かしら条件や仕事を押し付けられるのは、最初から覚悟していた。
どんな無茶を言われるのかと、固唾を飲んで次の発言を待つ。

「俺達に協力して、魏を倒す手伝いをしてもらいたい」
「……へ？」

絶対服従だとか、領地の貴族や豪族のご機嫌取りをしろ。
そんな事を言われるかと思っていた。
下手をすれば慰みものやお偉方と縁を作るため、引き取られた上で嫁に出されるとも。
ところがそんな予想を全て覆し、頼まれたのは魏に勝つための手伝い。
拍子抜けした劉備は、ポカンと口を開いたまま固まる。

「あ、あの、それは、私達に魏を誘き出す餌になれという意味ですか？」

慌てて諸葛亮が割って入って、固まっている劉備に代わって尋ねる。
しかし、一刀と雪蓮は厳しい視線と言葉を返す。

「悪いけど、黙っていてくれない？」
「俺達は劉備と話しているんだ。如何に諸葛孔明であろうと、割って入るのは無粋だぞ」

天下の轟将軍と英雄の気迫に、軍師が耐えられるはずがない。
まるで蛇に睨まれた蛙のように身動きが取れない諸葛亮は、カタカタと震えながら謝罪する。

「す、すみません。差し出がましい事をして」

侘びを入れてすぐに下がる諸葛亮だが、ここで関羽が食い付いてきた。

「呂迅殿、孫策殿！　朱里は桃香様に代わってそちらの真意を聞こうと」

「へぇ、あなた達の大将は自分の意見を部下に代弁させるの？」

「な！？　そういう訳ではなく」

「そう言っているんだよ。俺達が求めているのは、劉備さんの口から劉備さんの意思で答える返事だ。配下の者は一切喋らずにいてもらいたい」

この場で求められているのは、彼女達の代表の劉備の答え。

本人が目の前にいるのに、わざわざ部下が喋る理由は無い。

実際、蜀と呉の陣営で喋っているのは、王たる一刀と雪蓮だけ。

傍に控える部下達は一言も発せず、警戒をしながらこの会談の行方を見守っている。

発言をするにしても、一言入れてからというのが常識だ。

「ぐっ……。余計な口を挟んだ事を、お詫び申し上げる」

大人しく引き下がる関羽に、諸葛亮と鳳統もほっとする。

いざとなれば、力ずくでも止めようとしていた趙雲も力を抜く。

唯一人、張飛だけは状況がよく分からずに首を傾げている。

「さて、返事はどうなのかな？　劉備さん」

「へっ？　あっ、はい。えぇっと、ちょっと尋ねてもいいですか？」

「いいわよ」

発言の許可を貰い、彼女が尋ねた事。

それは、彼女が最も重要視している点について。

「どうやって魏を倒すつもりなんですか？」
「策を用いて開戦前に弱らせ、そこを蜀と呉の共同作戦で叩く」
「やっぱり、力を使うんですか」
「決まっているじゃない。曹操は力でもって攻めてくるでしょうから、こっちも力で迎え撃つのは当然でしょ」

目には目を、力には力を。
相手が強大な力で押し潰そうとするなら、こちらも同等かそれ以上の力で当たる。
今の世の中を生き残るには、それが当然である。
しかし、劉備の理想はそれに反する理想。
力で支配する世の中に終止符を打ち、話し合いで全てを解決したいがために。

「他に解決の方法は無いんですか？」
「無い。俺達に話し合う意志があったとしても、向こうに話し合う意志が無い」

曹操の性格やこれまでのやり方を考えれば、話し合いの場に持ち込んでも永遠の平行線になるのは目に見えている。

「曹操に勝つには、彼女のやり方以上の力でねじ伏せる。それしか無いわ」

争わずに済めば、それにこしたことは無い。
しかし、世の中の流れはそれを求めていない。
歴史に名を刻んできたのは、常に勝者のみ。
敗者は敗者としてしか扱われず、歴史にはたいした名を残せない。
それを地で行く曹操に勝つには、こちらが勝者になるしかない。

「やっぱり、私の理想は甘いんですか？」
「甘いわ、大甘よ」
「少なくとも今の時代ではね。君の理想が実現するには、この時代じゃ早すぎる。千、いや、二千年ぐらい経たなきゃね」

ここで甘やかしても為にならないと、厳しい言葉を投げかける。
特に一刀は未来の知識があるので、重みを感じる。

「二千年ね。もっとかかるんじゃないの？」
「そうかな？　でも、少なくともそれくらいは必要じゃないかな？」

一刀の前世の千八百年後でさえ、争っている場所は争っている。
それを知識として知っているからこそ、一刀も戦いの道を選んで武を鍛えた。
ゆえに戦う道を選んでも迷わない。
曹操の覇道を潰すには、同じく力でもって潰すしかないと理解して。

「……最後に一ついいですか？　孫策さんと呂迅さんが目指す世界は何ですか？」

二人の王が目指す世界。
そこを尋ねる辺り、劉備の考えは協力に傾いているのだろう。
となると、ここでの答えが決定打を決める要となる。

「私が目指す世界？　そんなの決まっているわ。昔みたいに冥琳や蓮華、小蓮や祭達と一緒に笑って過ごせる世界よ」

雪蓮が望む世界、それは乱世に入る前の過去の幸せに似た世界。
過去とは違って成長し、力をつけ、一時は故郷さえ追われた。

しかし、故郷を取り戻し、少しずつだがあの時の楽しさを取り戻してきた。
時間は取り戻せなくとも、あの時と同じ世界は取り戻せる、
そう信じて、雪蓮は過去の思い出の続きを実現する世界を目指している。

「次は俺だね。そもそも俺が国を作ってこんな立場についたのは、恋を、焔耶を、大事な家族を守りたかったからだ。だから俺が目指すのは、大切な家族と、それを守るための力と、帰ってこれる場所がある世界だよ」

武の道に進んだのは、大事な妹の恋を歴史通りに戦いの道に出したくないため。
連合の前に立ち塞がったのは、妹とその仲間を守るため。
国を作ったのは、月や詠、果ては霞や華雄、ねねを外部の手から守るため。
一刀が目指す世界は、守って築き上げてきた家族とその思い出。
それを守り、今後も共に過ごせる世界が一刀が目指す世界。

「さぁ、劉備ちゃん。私達二人は質問に答えたわ。そろそろ返事を聞かせてもらえる？」

蜀と呉の陣営から劉備に厳しい視線が刺さる。
何を言われても、先の事から発言できないと理解した関羽は拳を握り締め、恨めしい目をする。
心配そうに見詰める諸葛亮と鳳統は、手を握り合って劉備の判断を待つ。
張飛は自分が考えても仕方ないと義姉の考えに全てを預け、趙雲と公孫賛は腕を組んで静観を貫く。

「私は、私達は……」

小さな声で紡ぎだした、弱々しい口調。
それでも今から告げる内容が、全てを握っている。
そういう気持ちで、劉備を除く全員が耳を傾ける。

「協力……します」
「桃香様!?」
「その代わり、約束してください。お二人の目指す世界に、私達も、曹操さんも一緒にいられるようにしてくれるって」

二人の目指す世界は、どちらにしても平和な世の中。
家族と、仲間と笑って過ごせる世界。
劉備の理想とは似て異なるが、劉備はそれで構わなかった。
己の理想を語る二人を信じ、自分達や曹操達も共に手を取り合う。
そしてこの大陸を、平和な世の中を作って守る。
皆が協力して平和を守るという、新たな理想を目指して。

「私は構わないわ。平和のために、優秀な人はいて困らないしね」
「俺も同意見だ。西涼の方は俺がなんとかするよ、ちょっとツテがあるんでね」

一刀と雪蓮は劉備の要求を受け入れた。
ならば、もう劉備に迷いはない。

「でしたら、私達も協力します。皆、いいかな?」

久々に見た劉備の笑みに、まずは張飛が。
続いて趙雲、公孫賛、諸葛亮に鳳統が賛同の意を示す。
そして問題の関羽は。

「桃香様は、その世界でいいんですか？」
「うん！　皆が一緒に頑張れるなら、私はそれでいい」
「ならば、私も異存はありません。我が武は、桃香様の御心の下に」

一番の難関と思われた関羽も、良い方向で期待を裏切ってくれた。
彼女ほどの戦力にごねられるのは正直困るが、心から味方になってくれれば心強い仲間となる。

「本当にいいの？」
「えぇ。嘘は無いでしょうし、似て異なるとはいえ桃香様の望む世界に近い理想を掲げていますからね」

最もごねていた彼女が賛成の意を示したので、劉備と張飛も喜ぶ。
そんな良い雰囲気の中、冷静に場をみている趙雲が口を開く。

「ところで、一つ確かめたい。我々はどちらに引き取られるのですかな？」

趙雲の質問に、劉備陣営の表情が変わる。
特に頭の切れる諸葛亮と鳳統は、あらゆる状況を想定している。
たった今、告げられる内容さえも。

「戦力的な面から考えて、武官は呉に来てもらうわ」
「軍師、及び太守をしていた公孫賛さんと劉備さんは、蜀の文官不足を補ってもらう」

やはり、という思いが劉備達に立ち込める。
蜀と呉の戦力を考えれば仕方がない采配だが、何も今すぐという話ではない。

「ただし、これは魏に勝ってからの話だ」
「……えっ？」
「魏に勝つまでは、君達には七人纏まった状態で動いてもらう。それと、別々に分かれてもきちんと仕事をして許可さえ取れば、会うのは許すぞ」

完全に引き離そうとすれば、当然反発心が起きる。
ならば、そうさせないために条件を課した上で、会う事を許す。
それでも抗う場合は力ずくを考えたが、見たところ劉備達に不満な様子は無い。

「本当ですか！？」
「勝利の要因に支払う、当然の対価だ」

離れ離れにはなるが、一緒になる時間を与えられた。
これは劉備達の気持ちを盛り上げた。
分かれるまで一緒にいられて、その後も会う事の許可を得た。
仲間達の絆を第一とする劉備達には、これほど嬉しいご褒美は無い。

「よし、じゃあ早速作戦を伝える」
「明命、穏達を呼んで来て。なるだけ急いで！」
「霞、焔耶。すぐに動ける準備をしてくれ」

協力体制が決まれば、後は動くのみ。
仕込みが必要なだけに、できるだけ早く動かなくてはならない。
すぐに呉の主だった顔が集まってきての軍議が開始された。

「まずは、曹操の思惑を外してやりましょうか」
「だな、思い切った奇策でな」

この会談と軍議の数日後、魏に予想外の報告が届いた。

「西涼ですって!?」

玉座に曹操の驚きの声が響く。
滅多に見ない光景に、周囲も驚いている。

「確かなの?」
「はっ。細作の情報によると、最初は呉の領土に入ったそうなのですが」

その後、蜀王の一刀を呼んでの会談。
これは劉備達の扱いをどうするかだと予想できるが、問題はその後だった。
予想では蜀か呉、または離れ離れになって両方に引き取られると読んでいた。
ところが劉備達は、最近蜀と友好な関係にある西涼に引き取られた。
理由は五胡対策と、病で動けない馬騰に代わる政務をこなす人材、軍師の派遣らしい。
配下に入ったのではなく、客将扱いらしいが、だとしても予想外には違いない。

「まさか、こう来るとはね」
「いかがなさいます?」

魏から西涼では、距離もある上に間に皇帝のいる長安がある。
簡単には手を出せない上に、向こうの長の馬騰は病持ちとはいえ、漢王朝に従う名の知れた人物。

「下手に手を出せないわね」
「まさか奴ら、これを狙って西涼に送ったのでは？」
「可能性はあるわ。劉備の動きに気をとられ、蜀と西涼の関係を知り損ねたわね」

冷静に分析する曹操だが、こうなってはやる事はほとんど無い。
予定を大きく覆した、新しい計画が必要になってきた。

「桂花、すぐに風と稟を。一から策を練り直すわ」
「御意！」

見事に曹操の狙いを外す事に成功した。
だが、蜀と呉の共同作戦はまだ始まったばかりだ。

劉備達の行方（後書き）

魏との戦いのため、蜀と呉が動き出す。
全ては互いが目指す理想のために。
ここからは、魏との読み合いが勝負を分かつ。

魏への揺さぶり　南蛮との激突

魏を弱らせるために蜀と呉、さらに西涼も手を組んで作戦が開始された。
まずは曹操の思惑を外すため、桃香達を西涼へ送り込んだ。
協力体制を組むにあたって真名を交換しあい、磐石の協力体制で作戦は開始された。

「なんですって？　馬超と馬岱が？」
「はい。馬超が呉、馬岱が蜀で馬術を教えているそうです」

魏に持たされた情報は、西涼の馬術が蜀と呉に伝わったというもの。
馬術に優れた部下も数人連れ込み、徹底的に仕込んでいるとのこと。
もしもそれが本当なら、野戦で大きな脅威になる。
決戦をするならば最初に呉を攻め、場合によっては水上戦も考えていた矢先にこの情報。
野戦ができるならそれにこしたことはないが、向こうは野戦に備えた準備をしている。
しかも蜀に至っては、霞が鍛えた騎馬隊に西涼仕込みの馬術が加わっている。

「練度が足りなければ、馬超がそのまま騎馬隊の指揮を取るかもしれません」
「教育と同時に、こちらに足りない騎馬隊を知り尽くした者か。ちょっと厄介ね」

腕を組んで考え込む曹操に、控えていた夏侯惇が提案をする。

「ならば、当初の予定通り水上戦を仕掛けてはどうだ？」

「何言っているのよ、この馬鹿。そう思わせて水上戦に持ち込むのが、向こうの思惑かもしれないのよ？　そんな事も分からないの？」

現状、魏には水上戦を知る者がいない。
そんな状態で、敵に優位な状況に持ち込む訳にはいかない。
相手もそれを分かっているからこそ、野戦に備えて揺さぶりをかけているのかもしれない。
言い争いをする夏侯惇と荀？を放っておいて、思考に耽る曹操。
ひょっとしたら、相手はこの展開を予想して劉備達を西涼に送ったのではないか。
馬術に詳しい二人が蜀と呉に赴いて、馬術の指導をできるようにするために。

「となると、野戦も油断ならないわね。桂花、これを踏まえて」
「軍議中失礼します！　蜀が南蛮討伐に出陣、戦闘に入っているとの事！」

突如舞い込んできた蜀の情報に、玉座に緊張が走る。
確かに地形的に考えれば、まだ蜀に手を伸ばすには時間が掛かる。
その間に力を溜めておくならともかく、南蛮討伐に動くなど考えもしなかった。
正確には南蛮側が先に仕掛けてきたようだが、だとしてもこの時期に動くとは。

「風、あなたはこれをどう読む？」
「ぐぅ……」
「寝るなっ！」
「おぉっ！？」

寝ていた程？は、いつものように郭嘉に起こしてもらい目を覚ます。

「そうですね。どうせ力を溜めるなら、南蛮に勝ってその勢いを得ると同時に強さを広めたいのかと」

現状のまま力を溜めるより、南蛮に勝ったという風評で徴兵に拍車を掛ける。
同時に異民族に勝ったという勢いで士気を高め、来るべき魏との戦いに備える。
それが程?の読みだ。

「ならば華琳様、すぐに呉に攻め入るべきです。今なら蜀が救援には来られませんから」
「報告！　蜀の南蛮討伐に伴い、馬岱が部下と蜀の兵士一万を引き連れて呉に入りました！！」
「はぁ、相手も先刻承知という訳ね」

郭嘉の考えは読まれ、戦の合間を縫って蒲公英が呉に入った。
戦になれば当然、先に呉に来ていた翠と共に騎馬隊を指揮するのだろう。
しかも、しっかりと蜀の兵士を引き連れて。
詳しい情報によると、その蜀の兵士一万人は遠乗りの練習も兼ねているとのこと。
成都から建業までなら良い訓練になる上、戦闘にならなければそのまま騎馬隊訓練に組み込めば良い。
どう転んでも、決して無駄な行動にはならないという訳だ。

「くっ。騎馬隊を率いられる者が二名に加えて、練度が増すのですか」
「これでは少し厳しいですねぇ。ここは動かずにいるべきか、それとも早めに動くべきか」

動かずに戦いに備え力を溜めるか、相手の調練が不完全なうちに攻めるか。
どちらにせよ、リスクはある。
力を溜めれば、その間に敵も力を溜めてしまう。
今すぐ攻めるとしても、調練が不完全とはいえそれを補う将が二人もいる。
その人員が故郷に戻るのは、おそらく調練が済んでからになるだろう。

「勝機があるとしたら、今がその時かもしれないわね。早速出陣の準備を」
『御意！』

早い段階で叩く方向に決まり、出陣の準備を始める。
ところが。

「報告！　先ほど戻った細作より、呉が我々を迎え撃つ準備をしているとの情報が！！」
「なんですって？」
「詳細は不明ですが、向こうは我々が出陣してくると読み、多数の罠を仕掛けている模様」

報告を聞いて曹操と三軍師はようやく気付いた。
これらの情報が手に入ったのは、おそらく相手が意図して流したもの。
そうすることで自分達を呉に攻め入るよう仕向け、罠とやらにかけようとしたのだと。

「で、その細作の者は？」

「任務中に敵に発見、攻撃を受けて傷つきながら戻ってきましたが、なんとか命はあります」
「稟、その者には十分な報酬を」
「御意」

持ち込んでくれた情報のお陰で、罠に掛からずに済んだ。
その礼をしっかりするように伝え、改めて自陣の動きを相談する。

「やってくれるわね、上手く誘導されかけたわ」
「普通なら情報の流出を防ぎ、虚偽の情報を流すものですが、まさか本当の情報をあえて流す事で我々を呉への侵攻に誘導していたとは」

これまでとは違う、情報の扱い方。
これも全て、三勢力が手を組んでの策だからこそできる。
呉は迎撃準備と野戦に備えて鍛え、同時に馬超と馬岱の騎馬隊を率いる二名を借りた。
蜀も兵士一万を呉に提供し、今後の為に南蛮討伐に動いた。
西涼は劉備達を迎え入れて戦力を強化したので、馬超と馬岱を余所に貸してもなんともない。

「うへぇ。あの三勢力が連携すると、ここまで厄介やとはな」
「沙和、感心しちゃうの」
「真桜、沙和、暢気に相手を褒めている場合か！」

こうしている間にも、敵は野戦に備えて騎馬隊を鍛え上げている。
下手をすれば迎撃部隊は自分達を動かさないための罠で、調練の時間を稼ぐ策かもしれない。
こうなってくると、まるで意図が読めなくなってきた。

「いいわ、この話は一旦止めましょう。すぐに新たな情報を仕入れ、それを踏まえた上で考え直しましょう」

『御意』

取り留めのない思考の海に溺れそうな場の空気を感じ取って、この件は預けられた。

一方の呉ではというと。

「とまぁ、こういった感じで魏の動きは鈍るだろうな」

主だった顔に翠と蒲公英を加え、行なわれている軍議。

その中で冥琳は、魏の状況を全て読みきっていた。

まるでその場にいたかのように。

「本当なのか？」

「あぁ。曹操は物事に万全を敷いて戦いに挑む傾向があるからな、罠があるとしてもどういう物か程度は知りたがる」

だからこそ、細作の迎撃をしつつも逃がしておいた。

罠を仕掛けているという情報を、魏に流すために。

「ところで、その罠って何なの？」

「ハッタリだ」

「は、ハッタリ！？」

あの冥琳がまさか、ハッタリなどという手を使うとは。

長年の付き合いの雪蓮と祭も、驚きの表情を隠せないでいる。

「確かに長江付近に工作隊を放ち、溝は掘らせている。だがそれは、一刀に教わった治水工事の一環だ」

掘っているのは、前世の記憶から一刀が提案した用水路と溜め池。
蜀ではこういうのを計画していると持ちかけ、それを冥琳がハッタリに利用したのだ。
川付近に大きな溝を掘れば、敵は勝手に警戒してくれる。
足止め、通過中に水攻め、優秀な者ならば掘っている最中の溝だけでも、勝手に罠かと画策する。
そうして余計な時間を食ってくれれば、こちらの思惑通り。

「気づいた時には既に遅い。余計な時間をくったと、屈辱的な気分になるだろうな」

今回の策は、相手を弱らせる事を第一に考えている。
なので、直接的な打撃ではなく間接的にジワジワ痛めつける事が目的。
そのために、まずは時間を無駄に使わせてあざ笑ってやる。

「そうなれば、多少なりとも冷静さを失うだろう。そこから更に、痛めつけてやるのさ」

鼻歌でも歌いそうな笑顔だが、言っていることは腹黒い。
面白そうだと呟いている雪蓮、祭、穏、蒲公英はともかく、他の面々は呆気にとられている。
何が彼女をここまで黒くしたのかと。
そしてその原因の一端には、現在南蛮と戦闘中であろう、彼がいる。

「はあぁぁっ！」

襲い来る南蛮兵を掴んで投げ飛ばし、敵の陣形を崩していく。
投げ飛ばした先に突っ込んで鮮紅と紅蓮を抜き、逆手に持って陣形

を直そうとする前に斬り捨てる。

「みゃあっ！」
「にゃあっ！」

猫のような泣き声と服装をした南蛮兵は、小柄な者が多い。
一人一人の力は弱いが、すばしっこさと連携と物量でそれを補っている。
ならば、そのうちのどれかを機能しなくすれば勝てる。
一刀達が狙ったのは、連携力の寸断と陣形の崩壊。

「焔耶は右翼、華雄は左翼から突撃だ！　お前達の勢いで、敵陣形を突き崩せ！！」
『おぅっ！』
「左慈は華雄の、霞は焔耶の援護に！　恋、陣形が崩れた所で一気に攻めるぞ！！」
「……ん」

左右から焔耶と華雄が突撃し、陣形を立て直そうとしている南蛮兵達は混乱する。
南蛮の強さが陣形や連携による有形の強さなら、今の一刀達は勢いと突進力で突き進む無形の強さ。
形を作ることでようやく戦える南蛮勢は、前へ前へ押し進むだけの戦い方に一方的に押される。
敵は陣形が崩れようと連携が取れなかろうと、己が武力で挑んでくる。
一人一人の戦闘力がそれほど高くない、南蛮相手だからこそできる戦い方。

「どうりゃあぁっ！」

「はあぁぁっ！」

力任せに焔耶と華雄が敵陣形を崩し、連携を寸断する。
逃げようとしても鈍砕骨に叩かれて骨を砕かれるか、金剛爆斧に血祭りに上げられるか。
足りない味方内の連携は霞と左慈がカバーし、上手く敵陣に食い込んでいく。
そうなると逃げる先は、自然と中央になる。
呂兄妹が控えている中央に。

「子猫ちゃん達を、血祭りにご案内！」
「……またのお越しを」

例え動物好きの恋でも、敵には情け容赦ない。
というより、またのお越しは永遠に来ないと思われる。

「だいおー、あいつら無茶苦茶だじょ」
「力押しじゃこっちが不利だじょ」
「がねーしゃも、あいつら怖いって逃げたじょ」
「ぬぬぬ、こうにゃったら美衣も動くにゃ！」

痺れを切らした南蛮大王こと孟獲が自ら動き出すが、戦況は変わらなかった。

「食らうにゃ！」

手に付けている虎王独鈷（こおうどっこ）で攻撃するものの、一刀には触れるどころか掠りもしない。
小柄な体格を活かして足元を狙うが、全てを避わされ逆に蹴り飛ばされる。

「ぎゃぶっ！」

蹴飛ばされた弾みで地面を二転、三転して味方に受け止められる。

「お、覚えてろなのにゃ！　皆、引き上げ」

「逃がすかよぉ！」

撤退命令が出る前に、貫通氣弾を南蛮軍に向けて放出する。

次々と脚や腹部を撃ち抜かれ、倒れていく南蛮兵に孟獲の顔が青ざめる。

一歩一歩、ゆっくりと歩み寄る一刀の迫力に押され、地面に座り込んでしまう。

血に染まった鮮紅を首筋に当てられ、見下すような目で睨みつける。

頬にある返り血を拭った跡が、その迫力を否応なしに引き上げる。

「降伏しろ。降伏するなら、命までは取らない」

殺気丸出しで言われても説得力は皆無だ。

それでも気迫負けした孟獲は泣き顔で何度も頷き、蜀に降伏の意を示した。

「南蛮軍の総大将、孟獲は蜀王呂迅に降伏した！　これ以上の戦闘は無意味だ、戦闘を停止せよ！！」

総大将の敗北と南蛮本陣の陥落に、南蛮勢はおとなしく戦闘を放棄する。

蜀の勝利が決定し、降伏した南蛮勢は手当てを受けて一刀の天幕に通された。

そこで出された提案は、自分達と手を組まないかというものだった。

「にゃ？　美衣達を仲間にするのかにゃ？」
「うん、どうかな？　そっちはこれ以上戦えないみたいだし、今俺達が南蛮を攻めればどうなるかな？」

正確な歴史的にも、孟獲は蜀に敗北して従った。
ただし、正史通りに七回も戦っていては魏への策が甘くなる。
そこで一刀は、この一回で勝負を決めようとしていた。
なので圧倒的な力による蹂躙で撃破し、この場で論破する覚悟でいる。
そのために敵側の被害を甚大にして、軽く脅しも掛ける。
これで頷いてくれなければ、心苦しいが本当に叩きのめす。
改めて顔を合わせたときの優しい表情は、脅しが入った辺りから殺気が混じる。
動物的感が鋭い孟獲は、寒気を覚えながら何度も頷く。

「うん、ありがとう。じゃあこれで、俺達は仲間だ」

殺気を消し、代わりに満面の笑顔で右手を出す。
先ほどまでのギャップもあり、孟獲は本当は優しい人なのかと思い込む。
敵対していれば怖い方で、仲間なら優しい方。
孟獲の頭の中にそんな答えが刻まれ、おずおずと手を差し出す。

「よ、よろしくなのにゃ」
「あぁ、よろしく頼む」

しっかりと握手を交わした手から、少しずつ氣を流す。
戦闘中のとは違う、暖かい氣に孟獲に残っていた疑念も吹き飛ぶ。

またたびに酔ったような表情をする孟獲に、一刀は心の中で思った。
ギャップ萌え作戦成功と。
戦闘では強い印象を、仲間になろうという会合では優しい印象を。
そうすることで、相手に仲間になった方がいいと思わせる。
勿論、仲間になったからには相応の扱いはする。
要は相手に心を開かせればいいのだから。

「じゃあ早速だけど、互いの文化交流というか、国交の交渉でも」
「にゃ？　何をすればいいにゃ？」
「まずは君達の連携、陣形の形成について指導してもらいたいね。
それとそちら独特の生活の知恵の提供。後は変わった食材とか。それに対するこちらの見返りは」

矢継ぎ早に繰り出す内容に、孟獲の頭は処理が追いつかない。

「にゃ、待つにゃ！　もっとゆっくり、分かりやすく言ってほしいにゃあっ！！」

こうして一刀達が南蛮勢に勝利し、交渉をしている頃、成都で留守番している面々は。

「ぬおぉぉぉっ！　何故ねねが恋殿だけでなく、霞や華雄の仕事までぇぇっ！！」
「仕方ありませんよ。私は左慈と焔耶さんので手一杯ですし、桔梗さんと紫苑さんは一刀様の仕事と魏への策に動いていますから」

大量の仕事にてんてこ舞いな軍師二人。
手一杯と言いながら余裕がありそうな于吉に対して、ねねは最早職場放棄寸前。
ちなみにねねの方が仕事が多い理由は、もっと精進しろとの事らし

い。
そこへ、手に書類を持った紫苑と桔梗が通りかかる。

「あらあら、大変そうねぇ」
「そう思うなら少しは手伝うのですぅ！」
「無理じゃ。わしらはこれから、一刀の書類の整理と陛下への定期報告書を纏めなければならんからの」

すまぬなと言い残し、紫苑と桔梗はさっさと出て行く。
先に仕事をしている月と詠を待たせてはならないと。

「おのれあの男め！　帰ってきたら新技、ちんきゅうキック改・二段式を喰らわせてやるのです！！」

静かだった場内に、ねねの悲鳴とも呼べる叫びが響く。
後日、帰ってきた一刀にその蹴りが飛んだが、いつものように恋に投げ飛ばされてしまった。
その時のねねは池に叩き込まれ、それは見事な犬神家的な状態になっていたという。

魏への揺さぶり　南蛮との激突（後書き）

力ずくで南蛮を平定した一刀達。
ここから三勢力による、魏への揺さぶりは本格化する。
次回の拠点フェイズを挟んで。

拠点フェイズ　桔梗・紫苑・焔耶・恋　編

桔梗拠点　今も昔も変わらない

ある日、一刀と桔梗はとある牢屋の前で頭を抱えていた。
その原因というのが、牢屋の中で不満不平を惜しげもなく、偉そうに言っている人物だ。
彼女の名前は袁紹。
しばらく前に曹操に敗れた彼女は、流れ流れて蜀に辿り着いたらしい。
その後、一緒に旅をしていた文醜と顔良と街中で逸れ、無銭飲食をして捕まったのだ。
一刀が南蛮と戦っている間に捕まったので、一応顔合わせをしておくという事でここに来たのだが、相手はこっちの話をまるで聞こうとしない。

「いい加減に私をここから出しなさい。蜀王だが何だか知りませんが、三公を輩出した袁家の」

長々と続く話に飽きて、さっさとその場を退散する。
二人の態度に袁紹が怒鳴っているが、聞こえないフリを貫いた。

「全く。何で袁家というのは、あぁも跡取りに恵まれぬのじゃ？」
「さぁ……。どうしてでしょうね？」

不思議に思いつつも、煩い声を聞き流して地下牢から出る。
するとそこへ、慌てた様子で月がやってきた。
一言二言、言葉を交わして一刀と桔梗は執務室へと戻る。
そこで待っていたのは。

「お待たせ、文醜さん、顔良さん」

先ほどまで顔合わせをしていた袁紹の部下、文醜と顔良。
彼女達は数日前に行方不明になった袁紹を探し、今日になってようやく捕まった事を知った。
そして自分達がどうなるのかを覚悟した上で、こうして身元引受人として名乗り出たのだ。

「すみません、呂迅様。この度は麗羽様がご迷惑をお掛けして」
「姫も姫だよな。財布も持っていないのに、飯なんか食べて」
「文ちゃん！　蜀王様の前なんだから、言葉遣いに気をつけてよ！」

注意をする顔良の背中に哀愁が漂う。
まだ若いというのに、随分と苦労しているように見える。

「なんか、大変そうだね」
「そうなんですよ。麗羽様も文ちゃんも、本当に好き勝手にやってくれて」

さめざめという言葉が今の顔良には合っている。
いったい、どれほどの苦労をしてきたのだろうか。

「よく分かるよ、その気持ち。俺も桔梗さんの下で修行していた時は」

思い出される幼き日の有様。
酔って騒ぐ桔梗を宥め、部屋に連れて行き、寝かしつけ後片付けに奔走。

事務仕事が苦手な桔梗に、重要書類以外の仕事を押し付けられ四苦八苦。
そして現在も、酒を求めて食糧庫に忍び込むこと十数回。
師であっても部下であっても手の掛かる桔梗に、一刀は深い溜め息を吐いた。

「お、男がそんな細かいことを言うのはいかんの」
「同じ台詞を何度聞いたことか」

改めて肩を落として溜め息を吐くと、さすがに桔梗もばつが悪そうな表情になる。

「今後は……その、気をつけよう」
「今すぐ気をつけてください」
「い、今すぐじゃと！」

前は食糧庫に忍び込んだ理由を、三行以内に纏めろと言われたことがある。
師弟の仲だった頃も、仕事を溜め込んだ理由を二行で答えろと言われた。

「どうしてお前は、そう無茶を言うんじゃ！」
「言われたくなければ、もう少し真面目になってください」
「それは断る！」

胸を張って堂々と返す姿は潔いが、一刀としては許すわけにはいかない。

「……給金九割減、それと無期限の禁酒。破ったら、相応の罰を受けてもらうから」

「な、なんじゃとおぉぉっ！？」

無情で悲痛な宣告に桔梗が悲鳴を上げる。
給料を九割も削られると、本当に生活費が立ち行かなくなる。
加えて禁酒、しかも無期限。
バレなければとも思えるが、同じ事を考えてこれまでに二回捕まっている。
そしてその度に、相応の罰を受けていた。

「一回目の時のように、欲情するお香を焚いた密室で一人、縛られたまま放置されたい？」
「い、いや、その」
「それとも二回目の時みたいに、後ろのお菊ちゃんを一晩掛けて開発してあげましょうか？」
「それも勘弁じゃあああぁぁぁぁっ！」

絶叫して頭を抱える桔梗はいいとして、その場にいる文醜と顔良、見張りの兵士は言葉に困る。
減給と禁酒はいつもの事だからいいとしても、問題はその後の罰の内容。
どこをどう聞いても、真っ黒な笑みを浮かべた一刀が楽しむ姿と、桔梗が悶える姿を想像してしまう。

「へぇ、あんた達ってそういう仲なんだ」
「文ちゃん！」
「気にしなくていいよ。今更隠す気は無いから」

あっけらかんと言う一刀に対し、まだ桔梗は頭を抱えている。
過去の罰を思い出しては絶叫して、忘れろと叫びながら頭を振る。

「ぬおおぉぉぉっ！　忘れるんじゃ、忘れるんじゃあぁぁぁっ！」
「煩いですよ、桔梗さん。嫌なら真面目に仕事してください。手始めに部屋に溜まっている書類を、明日の朝議までにお願いします」
さりげなく言っているが、内容は結構厳しい。
確か机の上で崩れそうなほど溢れていたなと、兵士の一人がその量にぞっとする。
それを明日の朝議までに片付けるならば、今夜は完全に徹夜だ。
「その言葉、忘れるんではないぞおぉぉぉっ！」
勢いよく席を立って部屋を出て行く桔梗。
多分おそらく、自室の仕事を片付けに行ったのだろう。
「まったく桔梗さんは、昔から変わらないなぁ」
「あのぉ、それで私達はどうすれば……」
「おっと、そうだったね。それじゃあ……」
この後、文醜と顔良は袁紹の食事代を弁償するため、しばらく一刀の下で働く事になった。
するとあまりの仕事のやり易さに二人が感激し、行き先も無いのでここに置いてくれと言いだした。
正直、顔良がかなりの事務処理能力をもっていたので、軍師不足の蜀には大助かりだった。
文醜の武もまだまだ伸びると見込み、一刀はそれを受け入れて二人を歓迎した。
誰もが袁紹を閉じ込めたままにしていた事に、気付く事無く。
ちなみに桔梗があの後、どうなったのかというと。
「一刀！　どうじゃ、朝議までに全て終わらせたぞ！！」

「やればできるじゃないですか、今後も頑張ってください。と言いたいところですが、急いでやったせいか誤字脱字が目立ち過ぎます」

にっこりと笑ってそんな事を言うものだから、桔梗の背筋に寒気が走る。

「という訳で、軽く罰を受けてもらうという事で」

「ちょっ、終わらせたのだからいいじゃろ！」

「ただ終わらせるだけなら、誰にでもできますよ。結果を残してくれなくちゃ」

「お前は何でそう、昔から真面目なのじゃ！　あっ、待て、やめろ！　それはわしのとっておきの酒……あぁぁぁっ！！」

とっておきの酒をほとんど飲まれた桔梗は、いじけて寝所で枕を濡らしたのだった。

紫苑拠点　新しい魅力探し

「最近、一刀君との夜伽に刺激が足りないと思うの」

やぶからぼうにそんな事を言い出した紫苑に、一緒にお茶を飲んでいた月と詠が噴き出す。

咳き込んだことによって乱れた呼吸を整え、怪訝な表情で紫苑に詰め寄る。

「ちょっと、いきなり何を言いだすのよ！」

「ごめんなさいね。でも、本当に刺激が足りないような気がして」

これが倦怠期というものかしらと溜め息を吐く姿は、本気で悩んで

いる。
内容は少しアレだが。

「そういうのは本人の前で言いなさいよ」
「言ったら言ったで、変な方向に走りそうなんだもの」
「そういえばこの前、焔耶さんが変に一刀さんを挑発して誘ったせいで、お尻が痛くなったとか」

月が三日ほど前の出来事を思い出して告げると、紫苑と詠も思い出した。
椅子に座るのも辛いほど尻を痛めた焔耶が、申し訳無さそうに謝る一刀に怒鳴っていたのを。
誘ったのは焔耶なので、自業自得とも言えるが。

「あれは悲惨だったわね。結局寝所で横になりながら、仕事をしていたものね」
「私も興味はあるけど、あぁはなりたくないわね」

思い出して呆れる詠と、自分がされた姿を想像してぞっとする紫苑。
そんな中で話題を振ってしまった月は、どうしようかと悩んで別の話題を振った。

「ち、ちなみに、紫苑さんは一刀さんと普段はどのように伽を？」

まずはそこから解決の糸口を見つけようとしたのだが、少しやり方を間違えてしまった。
詠が止める間もなく告げられる、数々の夜伽の内容。
初めての時は自分が優しく教えてあげて、から始まり、現在に至るまでの全ての情報。
聞いている方が恥ずかしくなるが、尋ねた手前、月は逃げることが

できない。
そんな月を一人にできないと、詠も色々と我慢して話を聞く。
結局、この話は半刻にまで及んだ。

「ていう感じだけど？」
「へう……へうぅ……」
「月、しっかり！　しっかりするのよ、月！！」

恥ずかしさで昇天しそうな月を、必死に詠が現実に呼び戻す。
取り敢えず落ち着くまで一息入れ、改めて話を再開する。
話を聞き終えた月が、恥ずかしそうにしながら自分なりの答えを出す。

「あ、あの、思ったんですけど、基本的に紫苑さんが攻めていますよね？」
「そうね。そう言われてみれば、そうかもしれないわ」

基本は紫苑が誘ってそのまま攻め、たまに何かの拍子で切れた一刀が強引に攻める。
内容は微妙に異なっていても、大本がそこから離れていない。
おそらくは、それが紫苑の悩みの原因なのだろう。

「つまり、普段のまま一刀君に攻めさせればいいのかしら？」
「知らないわよ、そんなの」
「ともかく、試してみたら如何ですか？」

それもそうねと呟き、席を立った紫苑はありがとうとお礼を言って退室する。
その翌日、紫苑の部屋にて。

「で？　腰が抜けて動けない紫苑さん、ご気分は？」
「ご気分も何も、溺れそうよ。普段のままの一刀君に攻めさせると、快楽に溺れて逃れられないのよ」

寝所に横たわって、動けないでいる紫苑を世話する月と詠。
その視線の先には、腰が抜けて動けない割には、満面の笑みと艶々の肌をしている紫苑がいた。
酒も飲んでいないのに、何かに酔っているような陶酔した表情で。

「これは本当に新しい快楽だわ。これならしばらく、いえ、ずっと飽きる事はないわ」

自分が攻め手の場合の知識と技は使い果たした。
しかし、立場を逆にした途端に溺れた快楽の海。
この海を紫苑が抜けだせる日は、永遠に訪れないだろう。

焔耶拠点　焔耶の好感度上昇作戦Ｐａｒｔ２

前回は胃袋を攻めようとして、偶然にも見事に粉塵爆発を起こし、調理場の立ち入りを禁止させられた。
そこで次に焔耶が選んだ、一刀の好感度上昇作戦はというと。

「男は普段の印象とはかけ離れた仕草、行動にときめきを感じる事がある……か」

今で言う女性専門誌を手に、寝所に寝転がりながらそれを読み耽る。
そもそもそんな物を買った理由が、男を落とす四十八手という特集に釣られて。
見事に餌に食いついてしまった焔耶という魚は、現在でいうギャッ

プ萌えの方法を学んでいた。

「よし、やってやろうじゃないか」

ぐっと拳を握り締めて起き上がり、早速行動に移した。
とはいえ、どうすれば良いのかが分からない。
そこで、そういうのに詳しそうな人物に協力を願った。

「なるほどね。そういうのなら、私に任せなさい」

自信満々に了承する、蜀の隠れたご意見番の丁原。
最近は療養の方も順調で、多少の運動は許可されている。

「そんなあなたにお勧めするのはこちら！」
「そ、それは！？」

丁原が箪笥から出したのは、ほとんど紐の下着。
隠すべき処を、辛うじて隠す程の小ささだ。
しかもサイズ的に、胸に食い込むこと間違い無し。

「これを着れば、間違いなく一刀君は堕ちるわ！」
「そんなのを着たら、落ちる前に私が一刀に襲われます！　というか落ちるじゃなくて堕ちる！？」

ツッコミ所は多々あるが、国王に堕ちられては困る。

「そう？　普段は素直じゃない焔耶ちゃんが、これを着て誘惑すれば一発なのに」

確かに効果は抜群そうだが、効き過ぎて逆襲されかねない。

そうなったら、翌朝には黄色い太陽が拝めそうだ。

「じゃあ仕方ないわね。私が知る限り、全ての伽に関する知識と技術を」

「丁原様は私をどうしたいんですか！」

当初の目的通り、普段の印象とはかけ離れているものの、どこかズレている。

というか、何かが間違っている。

しかし、ここからは年の功、丁原の話術の出番だった。

「そんな事を言っていていいの？　敵には紫苑さんや桔梗さんもいるのよ？　あの二人を押しのけて一刀君を独り占めするには、相応の知識と技がね」

次々と繰り出される巧みな話術に、焔耶の中の芯がブレ始める。

ゆらゆらと決心が揺れ、やがて陥落した。

「よろしくお願いします」

「えぇ、任せなさい」

丁寧に頭を下げる焔耶に、にっこりと楽しそうな笑みを浮かべる丁原だった。

翌朝、焔耶は昇天しきった表情で一刀の部屋で寝ているのを、起こしに来た月に発見された。

その時の状況を、月はこう語った。

人は情事で真っ白になれると、色々な意味で。

恋拠点　義姉（仮）との触れ合い

恋は一時、大事な家族を失った。
しかし何年かして、ようやく唯一残っていた兄と出会えた。
それも義姉と呼べと言い出す女性を連れて。
その後も数人の女性が兄に言い寄っていると知り、義姉と呼べと言われてきた。
普通なら、兄に何をしているのかと詰め寄る。
ところが両親を失った恋は、家族が増えるのに何の異論もなかった。
例え何人もの女性が、義姉になったとしても。

「……お義姉ちゃん、いっぱい」

満面の笑みを浮かべながら、一緒に食事をする義姉（仮）を眺める。
最初に会った焔耶は、本当の姉のようだった。
ちょっと素直ではないが、いつも一刀の事を大事に想ってくれている。
次に出会った紫苑と桔梗。
最初は母親のような雰囲気だったが、今では義姉というのにも慣れた。
溢れる母性で包まれると、母親に抱かれたように暖かい気持ちになれる。
そして袁術との戦いで出会った穏に、最近義姉と呼べと言っている霞。
少し変わっている穏は、不思議な雰囲気に流されて受け入れた。
霞は昔からの顔なじみなので、今更な話。

「どないしたんや、恋。そんな楽しそうに」
「恋の家族いっぱい、嬉しい」
「あぁ、そういうことか」

普段は無表情な恋が微笑んでいたので、何事かと思ったら自分達に微笑んでいた。
家族と認識されているのもそうだが、義妹の笑みは本当に癒される。
食べる姿もそうであるように、この義妹は戦闘以外は底無しの癒し系だ。
そんな恋も、たくさんの家族に囲まれて幸せだ。

「恋ちゃんは、もっとお姉さんが増えたらどうする？」
「？　気にしない。家族が増えるの、いいこと」

遠まわしに兄にもっと女ができると言っているのに、分かっているのかいないのか。
恋にとっては家族が増えることが重要なので、兄が何人女性を囲おうが気にしない。
ただし、相手がいい人ならの話だが。

「でも、アニィやお義姉ちゃんを馬鹿にする奴は、真っ二つ」

傍に置いてある方天画戟を手に、鋭い目つきで物騒な事を言ってくれる。
しかしそれも家族を思っての事なので、誰も文句は言わない。
ただし、偶然それを聞いた人を除けば。
この日以降、一刀を陰で種馬と呼んでいた人の数が急激に減った。
こうして恋は、今日も周囲に癒しを振りまき、兄を蹴ろうとするねねを投げ飛ばしていた。

「れぇんどのぉぉぉぉぉっ！？」

拠点フェイズ　桔梗・紫苑・焔耶・恋　編（後書き）

策略の合間の一時。
それは僅かながら、気持ちに余裕を与えた。
次回から、本編に戻ります。

魏を狙う三勢力

南蛮との戦いを終えて、魏の攻略の基盤作りを続けようとする一刀の下に、呉からの報告が届いた。

「魏の細作の数が減った？」

「はっ。おそらく、我々の情報が多いのを罠と警戒し、情報収集の手を緩めたのかと」

呉から報告にやってきた思春からの話を聞き、小さく笑みを浮かべた。

前世では情報が大きく発達した未来にいたお陰で、一刀は情報の重要性を誰よりも理解している。

流れてくる情報の多さを罠と読んで、一旦手を緩めて様子を見るのはこの時代では有りだが、未来なら違う。

逆により一層詳しく調べる手を打って、緩めるどころか厳しく調べさせる。

「元々三箇所から情報を流していたんだ、信用性の問題も出てきたんだろうね」

「この後は確か、魏の細作を徹底して叩くんじゃったかの？」

一緒に話を聞いていた桔梗の問い掛けに、力強く頷いて答える。

「そうです。敵の細作の数が減った今こそ、徹底して駆除しましょう。こんな風にね！」

以前明命に使った天井の仕掛けを使い、潜んでいた細作を床に落とす。

上手く着地はしたものの、顔を上げた瞬間に一刀の投げた鮮紅が喉に突き刺さった。
さらに、とどめを刺すかのように恋が追撃を掛け、細作は命を落とした。

「いいか、今回は敵の細作の数を減らす事に徹するんだ。また増えたと思ったら、今度は本当に誤情報を流すように伝えてくれ」

一刀の指示に思春も了解の返事をする。
最初の頃に流した情報は、真実だったり少しだけ真実を混ぜたりした情報を流す。
だが、これは向こうに罠かと勘違いさせるためのもの。
警戒した魏は様子を見ようと、放つ手駒を減らす。
当然放つのは数を減らす分、優秀な人物を使うだろう。
そんな優秀な細作達を叩ければ上出来。
優秀な細作の数が減るという事は、それだけで仕入れる情報の量、質、真偽に問題が出る。
現代に例えるなら、大規模停電でネットとテレビが使用不可になったようなものだ。
そうなると魏は、残った細作でやりくりをしなければならなくなる。
いわば、ネットとテレビが使えないので、携帯とラジオに頼るような状態。

「頼る物が限定されれば、おのずと行動は読みやすくなるからね」
「同感です。そうやって見えない糸でじわじわと相手の動きを限定するというのも、軍師としては面白みを感じますよ」

同席している于吉が眼鏡の位置を直しながら口を挟む。
倒された魏の細作は兵士達によって回収される中、この部屋にいる五人での会話が続く。

「アニィ、敵の細作を倒したら、次は何するの？」
「次？　俺の考え通りにいけば、何も仕掛けないが正しいかな」
「でしょうね。それが一番です」

何も仕掛けないと言い出す一刀と、それに同意する于吉。
これだけ色々と仕掛けておいて、今更何もしないのかと首を傾げる。
しかし、ちゃんと意味はある。

「俺達がさっき言った行動をすれば、当然向こうは報復してくるだろうね」
「えぇ。私達と同様に、こちらの細作を潰しにくるでしょう」

ここまで言えば、隠密のプロの思春は気付いた。

「なるほど。こっちが向こうに何も仕掛けなければ、報復も何もできない」
「そういうこと。加えて、こっちの細作は敵側の細作を迎撃する仕事に当てられる」
「敵は欲しい情報が得られず、報復もできず。対するこっちは、情報漏洩の防御にだけ集中する、か。面白いではないか！」

よく分かっておらず、首を傾げる恋の頭を撫でながら桔梗も理解した。
要は敵だけイラつかせて、自分達は防御に徹してあざ笑っていようという意味だ。

「なんかさ、こういうのってやっていて凄く楽しいよね」
「そうですね。私もいつか、左慈相手にこんな気持ちを……」
「そういえば、冥琳様もこの策を使い出してから、凄く生き生きし

だしたな」

妄想をする于吉をスルーして、話を続ける思春。
勿論、一刀達も華麗にスルーして会話を続けている。

「そういえば、華佗が呉に着いたようじゃの」
「はい。すぐに冥琳様を診て貰ったところ、初期の段階なのですぐに治療すれば平気だそうです」
「それは良かった。まだまだ、彼女の力は必要だからね」
「……力だけ？」

お茶菓子を食べながら尋ねる恋。
何が言いたいのか一刀には分からないが、他の面々はひょっとして、似たような予想をする。
そしてそれは現実となる。

「恋、それはどういう意味？」
「冥琳は恋のお義姉ちゃんにならないの？」
（言ったあぁぁぁぁっ！）

予想を裏切らなかった恋の発言に、未だ妄想をしている于吉以外は心の中で叫ぶ。

「いや、あのね、恋。冥琳はそういうつもりじゃないかもしれないし」
「アニィを好きになる人、皆胸が大きい。だから、冥琳もお義姉ちゃんになると思う」
「いやさ、意識してそういう女性を狙っているんじゃなくて、向こうがいつの間にかね」
「あっ、そしたら雪蓮も蓮華も祭もお義姉ちゃん……。えへへ」

家族が増える事には何の疑問も持たない恋は、他国の王の名前すら挙げて微笑む。
おそらくあの頭の中には、たくさんの義姉に囲まれている自分がいるのだろう。
一方の一刀は、もうやめてくれと叫んで頭を抱える。
純粋な妹の願いと気持ちと考えは分かるが、そうなると自分がどうなることやら。
如何に妹が大事な兄でも、やれる事には限界がある。

「あ、あのさ恋。悪いけどそんなにお嫁さんをもらったら、俺の身が保たな」
「駄目なの？」

ウルウルと目を潤ませて見上げる恋の表情に、落ちない兄がいるか。
否、いないと断言できる。
故に一刀も。

「あぁもう！　分かった、こうなったらやってやるよコンチクショウ！！」
「さすがアニィ。頑張って」

ぐっと親指を立てて応援する恋は、キランと目を輝かせた。
狙ってやったのか、そうでないのかは不明だが、どちらにしろ末恐ろしい妹だ。
しかも、それに思春が援護射撃を加える。

「ではその旨、雪蓮様達には伝えておこう」
「えっ、ちょっ、待っ」
「どうした。今更怖気づいたのか？」

「そうじゃないけど、今は魏への対応に集中しているわけだし、こういうのは後の方が」

どうにかこれ以上の発展は止めようとするが、思春も簡単には転ばない。

「ふむ。ならば、私が一刀殿を兄上と呼ばせてもらえるなら、考えておこう」

「……えっ、なにそれ。ていうか思春って、そういう趣味なの？」

「わ、悪いか？　それとも……お兄ちゃんの方がいいのか？」

恥らった顔でお兄ちゃんと呟く思春。

これに萌えない人がいるだろうか、否、いないと言い切れる。

なぜなら一刀が鼻血を垂らし、膝を地に着けているからだ。

ちょうどその頃、魏では。

「……はっ！」

「どうかしましたか、稟ちゃん」

「今、私の個性を揺るがす事態が起きたような気が……」

「はぁ？」

そんな事が起きているとも知らず、鼻血を拭った一刀は思春に返事をする。

「ぐっ。だ、駄目だ。お兄ちゃんは破壊力が強すぎる。ここは一つ、兄上で手を打とう」

「承知した、兄上」

納得してもらえて良かったと心の内で小躍りしつつ、平静を装ってお茶を啜る。

すると、無表情のまま首を傾げた恋が問い掛けて来た。

「思春も、アニィの妹になるの？」
「ふむ。それもいいかもしれ……」
「駄目。アニィの妹は恋だけ」
「……恋？」

思春が言い切る前に恋が割り込み、一刀の妹は自分だけと言い出す。
しかもその目からは、とんでもない圧力を感じる。
隣に座っている思春も、思わず身構えてしまうほどに。

「お義姉ちゃんは何人増えてもいい。でも、妹は恋だけのもの、他の人は絶対に駄目」

どうやら恋は、妹の座だけはどうしても守りたいらしい。
その反面、義姉は何人いても良いと言う。
それはつまり、半ば一刀のハーレム作りが家族承認となったと言えよう。
後は本人達の気持ち次第だ。

「安心しろ。私は一刀殿を兄と呼びたいだけであって、妹になりたいわけではない」
「ならいい」

妹になるつもりは無いと分かると、あっさり闘志を引っ込める。
そのまま何事も無かったかのようにお茶菓子に手を伸ばし、癒しを与えながら食べ始めた。

「何なのじゃ、この温度差は」
「恋さんにとって、一刀さんの妹である事は誰にも譲れない事なん

でしょうね」
「兄として、これ以上の幸せは無い！」
拳を握り締めて力説する一刀に、周囲は思わず苦笑いを浮かべずにはいられなかった。
そんな事が起きているとも知らず、共同作戦に当たっている呉では。
「元気になれえぇぇぇっ！」
氣の輝きを放つ鍼を打たれ、体が軽くなる間隔に浸る冥琳。
傍らでは雪蓮が華佗の治療をじっと眺めている。
「経過は良好だ。三日ほど様子を見て悪化していなければ、後一回鍼を打ち込んで完治だな」
「そう、良かったわ」
親友の経過が良好だと聞いた雪蓮はほっと胸を撫で下ろす。
「とはいえ、油断は禁物だ。仕事は極力控えるよう、心がけてくれ」
「う、うむ……」
「いい機会じゃない冥琳。こういう時くらい、ちゃんと休みなさいよ」
普段から仕事一筋に生きてきた冥琳は、仕事をしていないと落ち着かない。
人任せにしたせいで不安もあるが、体調を悪化させたら雪蓮と華佗、さらに一刀になんと言われるやら。
泣く泣く職場を離れて療養しているが、どうにも落ち着かない。
「どうしても駄目か？」

「駄目だ。後三日、ちゃんと辛抱するんだぞ」

そう言い残した華佗は、街にいる患者を診てくると部屋を後にする。
部屋に残った雪蓮は近くの椅子に座り、冥琳と向き合って話し合う。

「華佗もああ言っているんだし、仕事はさせないわよ」
「うむ。だが、頭で分かっていてもな」
「言い訳は聞かないわよ。冥琳に死なれたら、皆が困るし悲しむんだから。勿論、私もね」

親友同士の会話には、それだけで充分だった。
一分にも満たない短い会話で互いの想いを知り、一方は諦め、もう一方は緩んだ表情に安堵する。

「はぁ。こうも仕事をしないでいると、逆に体調を崩しそうだ」
「ふふふ。療養中の身で何を言ってるんだか」

病を治すはずの療養で逆に体調を崩す。
仕事好きな人間だからこその発言は、なんとも医者泣かせだ。
世のワーカーホリックな人達は大抵そうなのだろうか。

「さてと、それじゃあ冥琳の分も仕事しなくちゃね」
「ほぉ、お前からそんな事を言い出すとはな」
「当然じゃない。冥琳が動けない間ぐらい、しっかり政務を支えなくちゃね」

それは自分が復帰したら、また怠業するのかと冥琳が微笑む。
久々に見た親友の心の底からの笑顔に、雪蓮は微笑で返して部屋を出る。
そして廊下で待っていた蓮華、小蓮の前で自分の頬を叩いて気合い

を入れる。

「さっ、行くわよ。冥琳がいないせいで策が失敗したなんて、そんな言い訳は無しよ！」

「はい！」

「わかってるって。シャオにお任せ！」

筆頭軍師の療養が逆に火を付けた呉の陣営。

そして残る一つの協力体制にある西涼では。

「うえぇぇん、できないよぉ」

「できないじゃない、この能天気娘がぁ！」

書類の山に泣く桃香の頭を、容赦なく引っぱたくスタイルのいい茶髪の女性。

彼女こそここの長で翠の母、蒲公英の叔母の馬騰こと珀（はく）。

対面した時は温和で、歓迎会まで開いてくれた良いお母さんの典型。

それが政務や修行に移ると修羅と化した。

「ひいぃん、だってぇ」

「だってじゃない！　自分からやると言い出したんだ、責任もってやれ！！」

「ぐすっ。はぁい」

「泣くな！　それから返事は元気よく、はいと言え！！」

「はいぃぃっ！」

完全に鬼教官となった珀の勢いに負けている桃香。

政務をしながら、その様子を見ていた朱里と雛里の手も止まっている。

「あ、あの、珀さん、もう少し穏便に」
「黙らっしゃい、頭でっかちのオチビ共！　うちにはうちのやり方があるんだよ！！」
「オチ……」

オチビ発言に自覚はあったが固まってしまう二人。
背や胸など足りない部分に触れながら、大きくなれとうわ言のように呟いてマッサージする。
廊下から一部始終を見ていた帰郷中の翠と蒲公英は、呆れた表情を浮かべた。

「叔母様、すっかり元気だね」
「そういう問題じゃないだろ。寧ろ、病になる前より凄い事になってるぞ」

こそこそと小声で喋る二人は、以前の珀も知っている。
情け容赦ない部下の教育、それとは打って変わったプライベートの顔。
二面性を持っている彼女の下で暮らしている今でも、たまにギャップに戸惑うことがある。
しかしそれも、教える人物に才能があるからこそ。
その才能を良い方向へ極限まで伸ばすため、彼女は鬼となる。

「桃香達も悲惨だよね、なまじ才能があるから叔母様に目をつけられて」
「あぁ。おまけに……」

ふと窓から外を見れば、珀に訓練を受けた愛紗、鈴々、星、白蓮が倒れていた。
他にも数十人の兵士が倒れており、衛生兵に救出されている最中だ。

しかも何かの罰なのか、四人とも顔に墨で落書きがされている。
愛紗に「巨乳のせいで動きが緩慢」。
鈴々には「お調子者は要注意」。
白蓮は「普通すぎて面白くない」。
そして星が「メンマに注意」。
倒れている星の周辺には、割れた壷の破片とメンマが散乱していた。

「……星姉様に何があったんだろう、凄く気になる」
「おふくろ、何をしでかしたんだよ」

尋ねてみたいものの、そしたらお前達もやってみるかと言いそうで怖い。
せっかくの帰郷の休日を、興味本位の行動で潰したくない。
翠と蒲公英は長年の経験からその答えを導き出し、黙ってその場を後にする。
その直後、桃香の悲鳴と珀の怒号が場内に響き渡った。

「ところでお姉様、一刀さんに聞いている策はどうなっているの？」
「ん、順調に進んでいるらしい。そのうち、新しい動きについても指示があると思う」

廊下を歩きながら喋るのは、蜀と呉と共に進めている魏への策。
前の借りもあるからという珀の一言で協力をし、今では友好的な関係にある。
連合のときの出来事を清算、という訳にはいかないが徐々に良い方向には動いている。

「そうそう、叔母様ってば翠お姉様を嫁に出そうかなんて言っていたような」
「んなぁっ！？」

突然の事に驚きを隠せず、わたわたと慌てる翠。
その様子を見た通りがかりの侍女は後に語った。
あんな可愛い反応をする馬超様を、もっと見ていたいと。

「ななな、何で私が」
「嫌なら蒲公英が行く！」
「どうしてそうなるんだよ！」

廊下で始まった言い争いを、いつもの事だと流す兵士と文官、侍女達。
そこへ鬼がやってきた。

「何やってんだい、あんた達。いくら休みだからって、他の働いている奴の迷惑を考えな！」

仕事モードのスイッチが入ったままの珀の登場に、従姉妹の背筋が凍りついた。

「ごごご、ごめんなさい叔母様。翠お姉様を一刀さんの嫁にやろうかって話をしたら、急にお姉様が騒ぎ出して」
「あたしのせいかよ！」
「なんだ、そんな事かい。翠、お前もちったぁそっち方面を鍛えなきゃな」

困ったもんだと呟く母親に、娘は何も言い返せない。
実際問題、自分の男勝りな性格のせいで、いくつかの見合い話が破談になった。
そのせいで、今では見合い話の一つすら来ない。

「いつになったら、私は孫の顔を拝めるんだか」
「余計なお世話だ！」
「そこで考えたんですけど、お姉様じゃなくて私が一刀さんの」
「却下だ」
先手を取って却下され、何でと言い返す。
すると珀は。
「簡単な事だ。一刀殿に想いを寄せている女達が、皆巨乳だからだ！」
至極真面目な顔でアホらしい事を言い出したので、翠と蒲公英の頭にクエスチョンマークが浮かぶ。
「蒲公英はできるのかい？　荒ぶる巨乳達を打ち倒し、一刀殿の気持ちを勝ち取ることが！」
そう言われると、さすがに蒲公英も自信を失くしてしまう。
自分も年相応の物は持っているが、敵は規格外ばかり。
しかも実際に会ってきて、色々な意味で勝てそうにない。
熟練した技を持っている桔梗と紫苑。
一刀の全てを知り尽くしている焔耶。
歩く発情期の穏。
他にも多数いる敵を倒すほどの技も知識も、今の蒲公英は持ち合わせていない。
「翠ならば巨乳な分、勝ち目はあると踏んでいるんだけどねぇ」
「何度も巨乳巨乳って言うな！」
胸を隠して騒ぐ翠だが、生憎誰も聞いていない。

「そこで私は考えた。一刀殿に頼み込んで、子種だけでも貰えないかと！」

「馬鹿な事言ってるんじゃねぇよ、おふくろ！」

「だったらなおさら、蒲公英が貰う！」

「お前も便乗しているんじゃねえぇぇっ！！」

城内どころか、街中に響きそうな翠の叫びが廊下に響き渡った。

この後、どうなったかは定かではない。

魏を狙う三勢力（後書き）

順調に策を進めながらも、それぞれ独自の様子を見せる三勢力。
次なる一手は、どのように魏を追い詰めるのか。

お詫びとご報告

皆さん、だいぶログインしていなくてすみませんでした。
実は先日の地震の際、家は無事でしたがパソコンが被害にあって使えなくなってしまったんです。
なので、現在は家の近くにある、最近営業再開したネットカフェからログインしています。
ちなみにパソコンですが、机から落ちていた上に本棚の下敷きになっていて、ものの見事に壊れていました。
さらにパソコンに刺しっぱなしだったＵＳＢまでもが被害に……。
パソコン内には、現在連載中の「転生無双」と「萌侍伝」の二作品に関する詳細かつ綿密なプロットが保存してあったんです。
しかもバックアップ用のコピーデータは、刺しっぱなしだったＵＳＢに保存していて……。
皆様のご指摘や、それを踏まえた上で手を加えた今後の展開なども細かく書き記していた分、このデータがバックアップも失われたのは痛いです。
二作品に関するプロットを、全てパソコンとＵＳＢに保存していたのが仇になりました。
何より、プロットのデータが失われたために、今後の作成が無理になりました。
なんとかできないかと手は尽くしましたが、無理でした。
内容を記憶していればよかったのですが、細かく、二作品分の膨大な量だったのでとても覚えていません。
書くこと自体は少々古い型ですがノートパソコンが残っていますし、投稿はネットカフェで問題ありませんが、肝心要のプロットがありません。
大元となるプロットが失われた作品の今後の展開では、読者の皆様の期待に添えられるとは思いません。

なので、心苦しいですが「転生無双」と「萌侍伝」の連載は停止とさせて頂きます。
誠に勝手ながら、本当に申し訳ありません。

読者の皆様、当作品は帰ってきた！

結論から言いましょう。

転生無双、復活です！

皆様からの復活をというお言葉に、練っている最中の新作を一時凍結し、転生無双の復活を決断しました。
とはいえ、前に使用していたプロットも無いので、正直チグハグ感が多く目立つかもしれません。
中には、勢い任せに書く話もあるかもしれません。
そういった点が嫌という方には申し訳ありませんが、今はこれが精一杯なんです。
どうかご理解願いたいです。
どうにか続きを書いてみますが、ご期待に添えない場合もあります。
それでも、自分的には一生懸命書いてみます。

どうぞ、これからもよろしくお願いします。
それと、長らくご心配をおかけしました。
大変申し訳ありませんでした。

P．S
ネギま！側とリアルの兼ね合いもあり、更新は亀だと思っていてください。

進化する女殺し　そして新武器（前書き）

大変ご心配をおかけしました！
皆様の復活をというお声にお応えし、復活です。
とはいえ、復活一話目なので、今回は軽めです。

進化する女殺し　そして新武器

互いに牽制し合い、睨み合いが続く情報戦となっている魏と他国。
今のところは、未来の情報に関する知識と詠の助力のある一刀率いる蜀がやや有利にある。
次いでその助言を受けている呉、そして西涼も、魏よりは有利な位置にいる。
それだけに、魏には焦りが見え始めていた。

「またやられたの？」
「は、はい。先日送り込んだ細作の者が」

報告を聞いた曹操は深く溜め息を吐き、頭を抱える。
流れ込んでくる情報の多さを罠と読んで様子をみれば、今度は情報を渡さないとばかりに細作を全滅させてくる。

「まるで掌の上で弄ばれているようね」
「ひょっとしたら、向こうはこれを狙っていたのでは？」
「わざと情報を流し、様子見に移ったと見るや強襲。そして私達の手元に残るのは、役に立たない過去の情報と、質の落ちる細作。策としては間違っていないわね」

とはいえ、さすがの曹操も頭を痛めていた。
送る人数は減らしても、質を落とすわけにはいかないので優秀な者を選んで送った。
それを全滅させられては、今後の情報収集にも支障をきたす。

「今頃向こうはあざ笑っているでしょうね、私達が思い通りに動いてくれて」

半ば自虐にも似た言い方に、報告をしていた郭嘉は驚きの表情を浮かべる。
常に王として振る舞い、争いの時は挑戦者の気持ちを忘れない曹操が、初めて自虐にも似た言葉を出す。
それは即ち、僅かながらも弱気になったということだ。

「華琳様、どうかお気を確かに。後手にこそ回ってしまいましたが、後手には後手のやり方があります。どうぞその辺りをご理解して」
「分かっているわよ、稟。部下を心配させた上にあんな事を言うなんて、私がまだまだな証拠よ」

瞬時に表情をいつものものに切り替え、態度も改める。

「だからあんな事も言うし、弱気になる事もある。だからこそ、あなた達が必要なのよ。だから、これからもよろしくね」
「ぎょ、御意！」

必要と言われて笑みを見せられた郭嘉は、声を強張らせて返事をし、退室する。
その背中を見送った曹操は、大きく息を吐いて背もたれに寄り掛かる。

「ホント、私もまだまだね」

小声でそう呟き、仕事に戻ろうとすると廊下から兵士の声が聞こえてきた。

「うわぁぁっ！　郭嘉様がまた鼻血を！！」
「誰か衛生兵、いや、程？殿を呼べ！」

「……こうなる事は予想できたはずなのに。本当にまだまだだね」

少しずつだが、内面的に壊れてきたような曹操であった。

ちょうどその頃、蜀では。

「新しい武器？」

修行の合間の休憩をしている最中、紫苑が一刀に新しい武器を調達してはどうかと切り出す。

「見たところ、紅蓮と鮮紅も随分とガタがきているようですし」

地面に置いてある紅蓮と鮮紅に目を向ける。

度重なる戦闘と、その度に行なっていた砥ぎなどの手入れで、強度も落ち、刀身の長さも大きさも随分と縮んだ。

新しくするのならば、今の内に新調して慣らし、魏との決戦に備えたい。

「確かにね。ちなみに、これを作ってくれた人は？」

「それが、お亡くなりになっていて。息子さんはいるらしいんですけど、まだ修行中の身で帰っていないそうです」

返ってきた言葉に一刀は難しい表情をする。

できれば似たような武器を使いたいが、この型の双剣はそうそう無い。

しかも逆手持ちを前提としているので、形状にも微妙な癖がある。

作るにしても、相当の腕前が必要になる。

「なら、心もとないけど、紅蓮と鮮紅を使い続けるしか」

「その心配はない」

不安げに武器を見詰めていた一刀に、大きめの箱を抱えた桔梗が歩み寄る。

「先ほど届いた、これを使ってみろ。わしの知る中でも、一番の武器職人に作らせた」

開かれた箱の中にあるのは、紅蓮と鮮紅同様に濃淡の違う赤を基調として作られた双剣。
ただ、紅蓮と鮮紅が炎を思わせるなら、こちらは龍を思わせる。
端に輪のついた柄に刻まれた、龍の顔の模様がそれをより一層感じさせる。

「銘は飛龍（ひりゅう）と轟龍（ごうりゅう）。戦場でのお主と恋の印象を基に作らせた」

説明を受けながら、赤黒い色彩を施した轟龍を手に取る。
さすがは元師匠の特注だけあって、手にしっくり来る。
形状も紅蓮と鮮紅に似ているので、文句の言い様が無い。
僅かに重い気がするが、刀身を軽く叩いた音からして、強度は上がっている。

「いつの間にこんな物を……」

「なぁに、お主の使い方からして、いつかはこんな事になると思っての」

「ありがとうございます、桔梗さん。お礼に今月の給金、少し上乗せしてあげますよ」

上乗せという言葉に桔梗の目が輝く。
いつもなら減給としか言い渡されなかった給金の変化が、今回は上乗せ。

ここで喜ばずして、いつ喜べというのか。

「どれくらいじゃ。どれくらい、上乗せしてくれるんじゃ！」
「普段の給金の二分です」
「待てぃ！　たったの二分か！？」

二分とは、零割二分の事。
要するに今月の桔梗の給金は普段の１．０２倍。
これを現代の基本給、約二十万円に例えると、１．０２倍は二十万四千円。
つまり、四千円が二分という事になる。

「いいじゃないですか。下げられ続けた今までに比べれば、上乗せしただけ大きな一歩ですよ？」
「その一歩がしみったれておるのじゃ。どうせなら、五割くらい上乗せせい！」
「あっ、それは無理です。今までの仕事態度が真面目だったら、考えますけど」
「ぐっ……」

痛い所を突かれ、言葉に詰まる。
そして、これ以上反抗して上乗せの話を無くされ、逆に減らされては困ると判断する。

「わ、分かった。二分の上乗せで我慢するわい」
「了解しました」

勝ったとばかりに笑みを浮かべる一刀と、悔しそうな桔梗に思わず紫苑は苦笑いを零す。
そんなやり取りの後、一刀は受け取った飛龍と轟龍を手に修練を開

始。
重みの違いにより違和感が生じるが、すぐに対応して修正していく。
逆に重みを利用して遠心力で技の威力を高めようとも考えたが、そちらは動作が大きくなってしまったので却下。
しかし、修練が終わる頃には普段とあまり変わらない動きができた。

「ふぅ、なんとかなったか。これなら実戦でもどうにかなるな」
「というより、いきなりここまで使いこなす一刀さんが恐ろしいわ」
「普通なら何日も掛かるというのに」
「お二人の指導が良かったからですよ」

さりげなくリップサービスとスマイルを送れば、お姉様二人はもう何も言えない。
微かに照れながら、桔梗は当然だと胸を張り、紫苑は頬に手を添えて笑みを浮かべる。
その後、仕事のために一刀が迎えに来た月と詠と共に引き上げると、二人は溜め息を吐いて呟く。

「なんだか、奴の女殺しの力が日々増しているように思うんじゃが？」
「激しく同意するわ。はぁ、これ以上好敵手が増えなければいいんだけど」

そんな心配をされているとはいざ知らず、一刀は自室で月と詠と共に仕事に励む。
部屋の隅っこで仕事が終わるのを待っている恋に、じっと見詰められながら。

「……」
「あ、あのさ、恋。今日の仕事は？」

「できるのはやった」
「……できないのは？」
「ちんきゅに全部頼んだ」

おそらく部屋で恋殿の頼みならと、書類と格闘しているであろうねねに、月と詠は小さく合掌した。

「駄目だろ、恋。恋ならできると思って頼んだんだから、ちゃんとやってくれなきゃ」
「そしたら、アニィと遊ぶ時間が減る」
「えっ、問題そこ？」

恋らしいズレた発言に、思わず詠の仕事の手が止まる。
同様に月と一刀の仕事の手も止まる。

「？　違うの？」
「いや、聞かれても困るんだけど」

首を傾げる仕草に悶えそうになるのを堪え、平常を装って返事をする。
しかし月の手は抱きつきたい情動で震え、詠も下唇を噛んで必死に自制をかける。
そういった事をせずに耐えていられるのは、影響を一番受けやすいポジションにいる一刀くらいである。

「ここにいちゃ駄目？」
「いてもいいけど、せめて仕事しような」
「……やだ」

しばらくの間考えたのはちょっと成長したと評価するが、拒否した

時点で評価はマイナスになった。

「なら、どうしたら仕事してくれる？」

めげずに仕事してくれないかと交渉する一刀。

すると恋はしばし考え、条件を出した。

「アニィが膝の上に座らせてくれるなら」

「そしたら俺、仕事できないよね？」

恋が膝の上にいては、それこそ仕事などできない。

しかも今日は大事な案件の書類が多いので、提出が遅れるわけにはいかない。

仕事の邪魔をしてしまうと理解した恋は、俯いて体育座りをして落ち込む。

「ごめんなさい」

「わかればよろしい」

「じゃあアニィが恋の膝の上に」

「そういう問題じゃないから」

顔を上げてボケた恋に、詠が鋭くツッコミを入れる。

こうした兄妹のやり取りの中にいるせいか、最近詠のツッコミレベルが急激に上昇している。

本人もその事を気にしているらしく、たまに月に愚痴っている。

今も、またやってしまったと頭を抱えている。

「……じゃあ、どうすればいい？」

「いや、俺に聞かれても。普通に仕事してほしいとしか」

「それじゃあ、面白くない」

近頃、恋が仕事に何を求めているのかが、よく分かる一言だった。
確かに仕事が楽しければそれもいいだろうが、そうもいかないのが仕事である。
とはいえ、それを恋が理解できるように伝えるのは難しい。
そこで一刀は、禁断の一手を放つ。

「……我が侭言っていると、三日間ご飯抜き。それと一緒に寝てあげない」
「お仕事してくる」

素早い動作で立ち上がり、早足に部屋を去っていく。
相手が恋だからこその一手に、思わず月と詠も苦笑いする。

「二人も恋で困ったことがあって、手に負えない事があったら、今みたいにしろよ」
「ご飯抜きはともかく、一緒に寝てあげないは、アンタじゃなきゃ通用しないわよ」
「というより、一緒に寝ているんですか？」
「たまにおねだりされた時にね」

それだけ伝え、仕事の手を動かす。
顔を見合わせた月と詠も、恋ならありうるかという結論にたどり着き、何事もないように仕事を再開する。
しばらくは静寂な時間が過ぎていき、夕方くらいになると、今度は焔耶が書類を片手にやって来た。

「一刀、桃香達から最近の報告が届いたぞ」
「うん、ありがとう。どれどれ」

受け取って封を開け、最初に目に飛び込んで来たのは。

助けて

の一言だった。

（なんのこっちゃ）

首を傾げながら続きを読むと、意味を理解した。

書かれているのは向こうで鍛えられている日々の泣き言ばかり。

死人に鞭を打つかのような毎日に、疲れました。

止めようとした愛紗が、空の星になって翌朝帰ってきました。

朱里と雛里のはわわ、あわわの回数が倍に増えました。

などなど、涙を垂らした痕のある報告書に、これでもかと泣き言が書かれていた。

肝心の報告は、ほとんど書かずに。

追加で添付されていた星と白蓮の報告書のお陰で、連絡はなんとかなるが、これの事を知られたらまた怒鳴り声と悲鳴が向こうの場内に響くだろう。

（……とりあえず、合掌しておくか）

報告書を机に置いて合掌する一刀に、焔耶達は理解した。

向こうはまた泣き言を言っていると。

顔を見合わせて頷いた三人は、今も向こうで怒られているであろう、桃香に向けて手を合わせた。

ちょうどその頃、馬術の訓練中に落馬した桃香に、珀の怒号が飛んでいた。

進化する女殺し　そして新武器（後書き）

復活一話目はここまでです。
今回は軽めにまとめましたが、次回からはどうにか以前の感覚を取り戻したいです。

歌姫現る

平穏な日々が続く蜀に、旅芸人の三人組がやって来た。
しかも、普通の旅芸人ではない。
かつてはちょっとした行き違いから黄巾党の党首を務め、現在は魏で人気ナンバーワンアイドル。
後援者に曹操を持つその旅芸人の名は、張角、張宝、張梁。
現在は数え役満姉妹として、徴兵活動を兼ねた公演を魏の国内で開いている。
その彼女達が、何故敵国であるはずの蜀にやって来たのか。

「ふえぇぇ、やっと着いたよぉ」
「ちぃ、もう疲れた！」
「もうちょっと頑張ってよ、姉さん。せめて宿が決まるまでは」

姉二人の我侭を慣れた様子で流し、街へ入る手続きを済ます。

「じゃあ、宿が決まったらお休み？」
「そうもいかないわよ。街中を見て回って、華琳様へ報告しなくちゃいけないんだから。それと、公演できそうな場所の目星もつけておかないと」

彼女達の目的は蜀の調査と、公演により相手の動きを鈍らせる事。
魏でも抜群の人気を誇る彼女達の歌で、蜀の兵士や将を引き付ける。
そうなれば、少なからず蜀を内部から崩すきっかけが作れる。
思うように事が進まない曹操はそう考え、彼女達を呼んで送り込んできたのだ。
念のためにと、商人に扮装させた兵士を十名ほど、彼女達の近くに付けさせて。

「にしても、人が多いわねぇ」
「そうだね。これなら、お客さんもたくさん来てくれるかも」
人ごみの多さに感心しつつ、アイドルとしての使命感に燃える。
先ほどまでの疲れも忘れはしゃぐ様子に、お目付け役の張梁も笑みをこぼす。
その後、どうにか宿を取った三姉妹は、宿の人にどこかいい公演場所がないか尋ねてみた。
「そうですねぇ、私達にはなんとも。町役場に行ってみてはいかがです？」
「町役場？」
聞きなれない言葉に、三姉妹は首を傾げる。
「この街では交通の妨げにならないよう、行商人や旅芸人のお方の商売場所を管理しているんですよ」
「えぇ？　じゃあ、もしも勝手に道端で歌ったり、物を売ったら？」
「他所から来て初犯なら、厳重注意で済みましょうけど、二度目以降は違法行為として裁かれるでしょうねぇ」
のんきな口調で喋る宿の人の話を聞き、三姉妹はその辺で歌わなくて良かったと胸を撫で下ろす。
万が一にも捕まって曹操との関係を知られたら、それこそどうなるか分からない。
「じゃあ、その町役場ってどこにあるんですか？」
「すぐそこの十字路を右に行って、大通りをしばらく行った先にある、看板付きの大きな建物ですよ」

「ありがとうございます。じゃあ姉さん、ちょっと行ってくるわね」
『いってらっしゃい！』
後のことを頼りになる妹に任せ、姉二人はお茶とお茶菓子で雑談を開始。
そんな姉を支えるために役場へ向かった張梁だが。
「申し訳ありませんが、現在お貸しできる場所が全て埋まっているため、お待ちしていただくことになります」
「えぇっ！　そんなっ……」
いかに実力があろうと、場所が使えなくてどうしようもない。
かといって無許可で路上公演して捕まり、万一にも曹操との背後関係を知られる訳にもいかない。
「じゃあ、次に空くのはいつ頃なんですか？」
「明日にも一箇所空きますが、先にお待ちしている方もいますので。今からお待ちいただくと、明々後日（しあさって）にお貸しできます」
「明々後日……」
借りられる日にちを聞き、手持ちの路銀と合わせて滞在可能かを思案する。
財布は自分が握っているので姉が浪費することはない。
念のためにと余分に持たせてくれたので、宿代にも余裕はある。
場所代とその他経費を加えても、計算上はなんとかなる。
「じゃあ、それでいいです」
「お待ちになられるんですね。では、こちらにお名前と宿泊先をお願いします」

差し出された竹簡に必要事項を書き込むと、一安心して役場を出る。

「これでどうにかなったわね。とはいえ、予定が遅れることは伝えておかな……きゃっ！」

早足に宿へ戻ろうとし、角に差しかかったところで何かとぶつかる。

「痛っ！」

しりもちを付くと同時に聞こえた相手の声に、そっちへ目を向ける。視線の先には、腰の辺りを擦っている侍女服の子、大喬がいた。すぐ傍には同じような格好と顔をした子、小喬がいて、張梁を睨んで問い詰めてくる。

「ちょっと、どこ見て歩いてんのよ！」

「ご、ごめんなさい。大丈夫？」

「あっ、はい。大丈夫です」

大喬が大丈夫と告げるのでほっとするものの、小喬の剣幕は納まっていない。

「何言ってるの、お姉ちゃん！　お姉ちゃんは大丈夫じゃなくても大丈夫って言うでしょう！　せめてこういう時くらい、大丈夫じゃないって言わなきゃ！」

会話の内容からこの二人が姉妹だと分かった張梁は、二人の様子を自分と姉に重ねる。

少し性質は違うが、姉よりも妹の方がしっかりしている姿を。

「……何笑ってんのよ」

「えっ、あっ。ごめんね」

いつの間にか笑っていたのに気付き、慌てて謝る。
そして自分と姉の関係にどこか似ている事を教えると、小喬は納得したように頷く。

「うんうん。よく分かるよ、その気持ち。しっかりしてない姉がいると、妹は苦労するよね」
「ちょっと小ちゃん！　しっかりしていなかったら、侍女なんて職業やってないよ！」

妹の言い分に、姉として抗議の声を上げる。
普段の仕事ぶりからすれば、確かに大喬はしっかりしているし、真面目に働いている。
しかし、どこか頼りなさそうな雰囲気を持っているのも確かだ。

「そりゃそうだけどさ。だったら、もうちょっと頼れそうな雰囲気持ってよ」

そうは言われても、簡単に身につくものではない。
言い返せずに、アタフタしている大喬の仕草に再び微笑んでいると、背後から声を掛けられる。

「どうかしたのか、大喬、小喬」
「あっ、ご主人様」

ご主人という言葉に、張梁は正気に戻る。
ここは敵陣で、ぶつかった相手はどこかの侍女。
もしも雇い主が立場か性格的に、とんでもない人物だったら。
ともかく一言謝ろうかと振り向いた先にいたのは、一番上の姉と同

じ歳くらいの青年だった。

「……この人が、あなた達のご主人様？」

想像よりもずっと若いので、思わず大喬に聞いてしまった。
しかしそれが結果として、とんでもない答えを聞くこととなる。

「はい。私達の雇い主、蜀王の呂迅様です」
「……えっ？」

少しの間を置き、頭の中で言葉の意味を分析する。
この二人の雇い主は誰か、蜀王の呂迅。
目の前にいる相手は誰か、同じ蜀王の呂迅。
こっちに来る前から何度も聞いていた蜀王の名は何か、これもやはり呂迅。
つまり、目の前で小喬と話しているのは、敵国の王。

（何か大変な事しちゃったぁぁぁぁぁぁっ！？）

隠密までとは言わないが、仮にも敵陣に立ち入っての任務中にこの出来事。
あまりの想定外にして突然の事態に、どうすればいいのか分からず、張梁の頭の中はパニックになる。
外見は呆然としているだけだが、脳の中では何通りもの最悪の展開が繰り返される。
何かにつけて連れて行かれ、正体がバレて聴取の毎日。
泣いても止まぬ拷問、尋問、欲望のはけ口にされる日々。
ところが、そんな心配は無用だった。
何故なら、いかに蜀王とはいえども、彼は一刀なのだから。

「いやぁ、俺の部下が悪かったね。怪我は無い？」
「へっ？　えっ、あっ、は、はい」

掛けられた声に動揺したまま返事をすると、目の前に手が差し伸ばされる。
反応に困って一刀の顔と手に、何度も視線を往復させていると、首を傾げた一刀が口を開く。

「どうかしたのかい？」
「い、いえ、その。一国の王に手を貸していただけるなんて、恐れ多いと思いまして」
「あぁ、なるほど。いいから、いいから。別にそんな事、気にしなくて」
「あっ――」

そうこうしている内に一刀に手を握られ、立ち上がらされる。
膝や腕を見て怪我が無い事を確認し、一刀は大きく頷く。

「うん、本当に怪我はないみたいだね」
「え、えぇ。どうも」

反応に困る張梁は半ば呆然としながら、頭を下げる。
その間に一刀は大喬と小喬の様子を確認し、怪我が無いと分かると二人の頭を撫でる。
親切を受けて部下にも優しい姿を見せているが、張梁にとっては敵。
無防備な背中を見ながら、どう対応すべきかを考える。

（護衛の人は……うん、いるわね）

そっと後ろを確認し、物陰に隠れて警護している兵士の姿を確認す

る。
相手も頷き、既に連絡員が動いている事を手で示す。
それに頷いて返して正面を向くと、ちょうと一刀が振り返ったタイミングだった。

「いやぁ、悪かったね。お詫びに何かしないとね」
「いえ、そんな。蜀王様からお詫びだなんて、畏れ多い」

腰の低い態度に一瞬戸惑いそうになりながらも、それらしい返事を返す。
敵国とはいえ相手は国王で、自分は一般人を装っているのだから。

「そんな事言わずにさ。……そういえば見ない顔だけど、他所から来た人？」
「えぇ、この町にはついさっき到着したばかりで」

自分の事を悟られないように、必死に表情を作り、それを崩さずに会話をする。

「そっか……。ここには行商しに来たの？」
「いえ、歌を売り物にした旅芸人です。宿にいる姉二人と三人で」
「なるほど。でも、今は場所が空いていなかったはずだけど」
「そうなんです。先ほど町役場に行ったら、明々後日まで待ってほしいと言われて」

困った振りをしつつも、これは絶好の好機ではないかと考える。
上手く言い包めれば、彼の権力で公演場所を貸してもらえるのではないかと。
このまま泣き落とし作戦を決行しようとした、その時だった。

「だったらさ、歌の仕事をお願いしたんだけど。お詫びも兼ねて、依頼料と成功時の報酬は多めに払うから」
「……へっ？」
作戦決行の前に、向こうから話が転がり込んで来た。
しかも依頼料と成功報酬付きで。
ところが当の張梁は、あまりに突然の話にポカンと口を開けている。
「えっ？　あの、歌の仕事……ですか？」
「うん。実は明後日に城で大事な接待があるんだけど、何か出し物をしようと思っていてね。勿論、君とお姉さん達の歌唱力次第だけど。どうかな？」
おおまかな内容を聞き、張梁は腕を組んで考え込む。
歌唱力という点は、これまで通りにやれれば問題は無い。
仕事先が城だというのなら、城の内部構造や、主だった人物を調べることが可能。
加えて依頼料と報酬も貰えるのならば、余計に文句は無い。
唯一不安要素を挙げるのならば、接待相手。
もしもその相手が自分達を知っていたら。
その可能性は否めないし、万が一そうだった場合、自分達は捕まるだろう。
さすがに護衛に来てくれた兵士を、城内へは連れ込めないだろうから、なおさらだ。
「……少々お尋ねしますが、接待するお相手はどなたで？」
「呉の王族の孫権さんと、護衛の甘寧さん。それと軍師の陸遜さんも」
「えっ……」

自分達の事を知らない相手だったのは幸いだが、接待相手はこれまた敵国の重鎮。
果たして本当に幸いなのかは分からないが、これまた情報収集の好機。
しかし、相手が悪すぎる。
どこかの貴族か豪族ならともかく、乱世に生きる豪傑では、僅かな油断も隙も許されない。
さすがにこれは自分一人では決めかねると判断し、返事をする。

「あ、あの、そんな大事な席での仕事なら、姉とも相談したいのですが」
「それもそうだね。じゃあ、もし受けてくれるなら、明日の昼までに城に来てよ。話は通しておくからさ」
「分かりました。では、失礼します」

深々と頭を下げた張梁が足早に去っていくのを見送ると、一刀は厳しい目つきをする。

「……左慈」
「分かっている」

一言呟くと、物陰から顔を隠した左慈が現れる。
目を合わせて頷き、左慈は張梁の後を何食わぬ顔で付いて行く。

「ふぅ。二人共、お疲れ様。協力ありがとうな」

息を吐いて大喬と小喬の頭を撫でる。

「はぁっ！　ど、どういたしまして」
「でもさぁ、本当にあの人が魏の密偵なの？」

疑いの眼差しを向ける小喬に、小さく笑みを浮かべた一刀が返答する。

「あぁ、間違いないよ。なにせ、確かな筋から掴んだ情報だからね」

実は既に、張三姉妹の情報は掴んでいた。

国としての筋ではなく、詠独自の筋から。

向こうがこちらの細作潰しに注目している隙に、蜀とは別の動きで魏の動きは察知しておいた。

徴兵活動をしている芸人を密偵に送るという動きさえ分かれば、後の対応は簡単。

向こうをこちらに誘い込み、近くにいるであろう敵兵は、追跡しておおよその位置を把握。

後はこちらの誘いに乗れば、三姉妹を城で捕縛。

城の傍で見張る事になるであろう護衛は、その隙に捕らえるか、倒すかすればいい。

万一向こうが罠か何かと気付いて警戒しても、できるのは早めに町を出ること程度。

密偵がさっさと退散してくれるのならば、蜀の側にとっては好都合。

「後は宿を調べて、見回りを装ってしっかり警戒しておけば大丈夫だろうな」

「それよりも！　協力したんだから、何かご褒美ちょうだいね」

「分かっているよ。今度、月と同じ日に休暇をあげるから、それでいい？」

「はぁ。お姉様との休日……」

何を妄想しているのか、恍惚の表情をした二人は上の空になる。

その二人を気にすることなく、一刀は追跡に向かった左慈を気にす

る。

（頼んだぞ、左慈）

一方、一刀に仕事を頼まれた張梁は、近寄ってきた護衛に小声で先ほどの事を報告する。
報告を聞いた護衛は小さく頷いて、歩く速度を上げて先に進む。
直前に、他の仲間に目配せをするのを忘れずに。
しかしその様子は全て、追跡中の左慈に見られている。
距離を置いているお陰で、その様子がはっきりと見える。

（さて、あいつらの宿はどこだ？）

兵士は捨て置き、予定通り張梁の追跡を続ける。
やがて彼女が宿に入ると、その前を素通りして近くの詰め所へ走る。
そこに詰めている兵士に事の次第を説明し、すぐに城へ向かわせる。
残っている兵士達には、宿の位置と今後の事を説明する。

「いいか、あそこが魏の密偵のいる宿だ」
「了解です。では、あそこを警戒するんですね？」
「いや、密偵そのものは放っておけ。あの女達には、とても戦闘力があるとは思えん」
「では？」
「周囲の別の宿、及び女達とは別の客に注意しろ。そいつらが護衛か、本物の密偵かもしれん」
「承知しました」

頷いた兵士達は、見回りの振りをして護衛と密偵の捜索に動き、左慈は詰め所の中から宿を見張る。
その頃、城へ報告に向かっていた兵士は、大喬と小喬と共に帰る最

中の一刀と遭遇、事の旨を伝えた。

「分かった。君はすぐに詰め所に戻って左慈の指揮下に」
「はっ！」

指示を受けた兵士は敬礼し、詰め所へと戻っていく。

「二人共、悪いけど俺は先に帰るよ」
「はい。お気をつけて」
「ちゃんと約束のお姉様との休暇、手配しといてよね」
「はいはい」

二人に返事をすると、急ぎ足で城へと駆け戻る。
戻った一刀はねねと于吉を呼び出し、現状を通達。
すぐに警戒態勢へと走らせた。

「さぁてと、どう動いてくれるかな？　この時代のアイドルさん」

久々に未来の言葉を呟いた一刀は、不敵な笑みを浮かべた。

歌姫現る（後書き）

復活二話目、やっぱり勘が鈍っている。
お読みになってくれた皆様、誤字脱字などありましたら、どうか教えてください。

約束

一刀から誘いを受けた張梁は宿へ戻り、事の顛末を姉に報せる。
最初は二人とも驚いたが、それも落ち着くと意見を交し合う。

「お姉ちゃんは行ってもいいと思うな。お城の中が見られて、間取りも分かるんだし」
「ちぃもそう思う！　それを伝えれば、華琳様だって褒めてくれるわよ」
「でも、万が一向こうが私達の事を知っていたら？」

可能性の一つを告げると、騒いでいた二人も押し黙る。
しばしの沈黙を挟み、おそるおそる張角が考えを述べる。

「で、でもさ。知っていたら、私達はもう捕まっているか、殺されているんじゃないかな？」

珍しくまともな意見を出した姉に、妹二人は揃って考え込む。
言われてみればその通りだし、捕まえるにしても、わざわざ城に迎え入れる意図が分からない。
万が一にも町人を巻き込む訳にはいかないから、といえばそれまで。
だとしても、それは向こうの誘いが罠であるという前提があって成り立つ。
その点が不確かな以上は、判断ができない。

「ともかく、時間は明日のお昼までであるわ。それまでに、護衛の人の意見も聞いて、しっかり話し合いましょう」
「華琳様に意見聞かなくていいの？」
「……今から向こうに伝令を走らせて、明日のお昼までに間に合う

と思う？」

溜め息を吐いた張梁が、窓の外を指差す。
空は夕焼けになり、東の空から段々と暗くなってきている。

「あはは、これじゃあ無理だね」

今からどんなに馬を走らせても、明日の昼までに返事を貰って戻ってくるのは難しい。
ただでさえ、この町は蜀王一刀の政策により外部の出入り管理等が厳しい。
そこへ蜀とは無関係な早馬を往復させるなど、伝令する人間を変えたとしても不自然極まりない。
自分達から、怪しい人物だと告げているようなものだ。

「そういう訳で、私は今から警護の人達の所へ行ってくるわね。姉さん達は、ここで大人しくしていて」
『はぁい』

方向性を決めて部屋を出る張梁。
だが、その様子は隣の部屋からしっかりと見られていた。
三姉妹の隣の部屋には、ねねと霞が部屋を借りて監視しているからだ。

「例の奴が動いたので。どこに行くんや？」
「おそらく、警護の人の意見を聞きにいったか、魏へ連絡をさせに行ったかでしょう。どちらにしろ、仲間の居場所は分かりそうなのです」

そう言って、部屋に残っている二人の監視を霞に任せ、ねねは部屋

を出る。
動揺しているのと急いでいるせいか、辺りを気にすることなく廊下を歩く張梁。
一つ上の階の手前の部屋に着くと、ここで初めて辺りを見回して三回扉を叩く。
それが合図なのか、扉が開いて中に招き入れられた。

（どうやら、あそこが護衛の寝泊りの部屋ですね）

階段に身を潜め、死角となる場所から護衛の物と思わしき部屋の位置を把握すると、すぐに部屋へと戻る。
隣の部屋に変化が無い事を確認し、窓の外に顔を出す。
少し先にある詰め所にいる左慈と目が合うと、腕や頭等に触れる、所謂ブロックサインで何かを伝える。
勿論、これは一刀が考案して教えたものだ。
サインが上手く伝わったのか、小さく頷いた左慈は兵の一人に指示を出し、事がばれない様に歩いて城へ向かわせる。
その様子を見届けると、ねねは部屋の中へ引っ込む。

「伝わったんか？」
「当然なのです。今しがた、兵が城へ向かいました」
「ほな、何か新しい動きがあるまでは待機と、隣の部屋の監視やな」

それからしばらくして、報告を受けた城では一刀を中心に主だった顔が集まっての会議が行われる事になった。

「じゃあ会議を始めるけど。焔耶、今のところ、新しい情報はさっき聞いたのでいいんだな？」
「あぁ。あれ以降、新しい報告はない」
「分かった。じゃあ、これを踏まえた上で動きを決めようか」

『応っ』

于吉を進行役に、会議は始まった。
相手が話を受けた場合の対策、受けなかった場合の対策。
何も伝えずに町を出た場合の対策。
順番に対処を決めていき、問題点を洗いながら話を詰めていく。

「とまぁ、こんなところでしょうかね？」
「うん、俺も異論は無いよ。皆は」
『異議無し！』

ならばこれで会議は終わりにしようかとした、その時。
けたたましい音で扉が開き、息を切らした兵が駆け込んできた。

「何事じゃ、騒がしい」
「はっ。軍議中に失礼します。ですが、陳宮殿より新たな報告がありましたので」

新しい報告と聞いて、緩みかけていた空気が再び引き締まる。
どうするべきかと振り向いた桔梗に、一刀は小さく頷く。

「よし、聞かせてくれ」
「はっ。報告によりますと」

まず、三姉妹は話を受ける事にしたらしい。
加えて、当日は付き人と偽って兵士が数人一緒に付き添って来るとのこと。

「なるほどね。それにしても、ねねちゃんもよく調べられたわね、こんな事」

「大方、壁に耳でも当てて聞き取ったじゃろう」

ちょうどその頃、ねねと霞のいる部屋では。

「へくちっ！」

「なんや、風邪か？」

「いやいや、これはおそらく、ねねがいないので恋殿が寂しくて噂をしているのです」

根拠も無く自信満々に告げる姿に、そりゃないなと心の中で呟く霞だった。

ちなみにその恋は、一刀の隣の席に座れてご満悦真っ最中だったりする。

「くしゅ」

「どうした、恋。風邪か？」

「……ん？　……違う。多分、ねね辺りが恋の噂してる」

さすがは野生の勘が鋭い恋だけに、こういった勘も鋭かった。

「ともかくだ。あいつらは護衛を付けて来るんだろ？　対策は決まっているんだし、それでいいだろ」

「うん、そうだね。一応予測の範囲内だから、慌てる事はないね。となると、後は蓮華達が着くのを待って」

「失礼。ご報告します！　呉より孫権様一行がご到着です」

駆け込んできた兵士が、タイミングよく蓮華の到着を告げる。

噂をすればなんとやらか、と小声で囁いた一刀は、出迎えのために紫苑と桔梗を向かわせる。

張三姉妹対策には于吉と焔耶を指名し、左慈達の応援に行かせる。

残る恋と華雄はこの場に残り、必要無いとは思うが一応一刀の警護。しばらくすると向かわせた紫苑と桔梗に連れられ、蓮華と思春、穏がやって来た。

「やぁ、いらっしゃい。よく来てくれたね」
「あぁ、久方ぶりだな。ところで、先ほど于吉殿と焔耶殿が急ぎ足に出て行かれたが？」
「ちょっと捕り物の準備をね。それはそうと、何で穏は拘束されているの？」

久々の再会を喜びたい反面、実はそれが一番気になっていた。
部屋に通された穏は何故か縄で拘束され、手綱を思春に握られている。
一刀の名を呼びながら欲情した雰囲気を見れば、なんとなく察しはつくが聞かずにはいられなかった。

「……控え室で待っている間に、久々に一刀殿と再会するからか、色々と妄想していたらしくてな。危険だと判断し、拘束した」

正直、ナイス判断としか一刀は思えなかった。
もしも拘束していなければ、今頃一刀目掛けて突進してそのまま事に及びかねない。
現在も、まるで興奮した大型犬を静止させるかのように、暴走する穏を思春が縄で引っ張って抑えている。

「私達にはこれ以上、手に負えなくて。どうすればいいかしら？」
「……とりあえず、俺がどうにかするから、俺の部屋まで連れて行ってくれる？」
「分かった。悪いな、不甲斐ない主で」

何も出来ない自分を不甲斐なく思い、蓮華は深く溜め息を吐く。

「気にすることはないよ。だって穏だから」

「……そうね、穏だものね」

どういう理由かはいまひとつ分かり難いが、拘束された穏はそのまま一刀の部屋へと連行。

後のことを紫苑に頼み、室内で穏の暴走の対応に動き出した。

一方で紫苑達は、今回の張三姉妹の件を伝え、蓮華達に協力を要請した。

「別に私達がいなくとも可能なのでは？」

「それはそうですけど、相手もまだ疑っている可能性が否めないので、念のために」

「そういう事なら引き受けるわ」

何も戦線に出る訳でもなく、ただ一緒にいるだけでいい。

当日は警護に恋も付けて、という条件なので別段危険な雰囲気はない。

寧ろ、警護に恋を付けてもらう辺りで、もう心配する要素が見当たらない。

「じゃあ、よろしくお願いします」

「あぁ、任せておけ。ところで、その、見返りと言ってはなんだが、一つ頼みがある」

急に歯切れが悪くなり、頬を染める蓮華に、恋の直感が何かを感じ取ったのか触覚のような部分の髪がピクッと反応を見せる。

「はい、なんでしょうか？」

「え、えっとだな。何も無理な事を頼むわけではない。ただ、その、な。こちらに滞在している間、一日！　一日でいい。一刀殿と二人で過ごさせて……もらえないだろうか？」

恥じらいながら頼む姿に、年長者の紫苑と桔梗は思わず娘のように可愛がりたい衝動に駆られる。
うずうずした気持ちと手を押さえ込み、どうしようかと思案する。
蓮華の傍に付いている思春も、外面は冷静にしているが内面ではこれでもかというくらい悶えている。
そんな微妙な雰囲気を一掃したのは、やはりというか恋だった。

「今すぐ恋のお姉ちゃんになるって約束できるなら」

いつもの眠そうな目を光らせて言い切った恋に、今度は蓮華が焦る。
同時に、今すぐという言葉に紫苑達も焦りだす。

「はぁ、やっぱりこうなったか。悪いが、私は見回りの時間だから席を外すぞ」

唯一冷静だった華雄は、予想通りの展開に溜め息を吐いて部屋を出る。
それを聞いていようがいまいが、室内の混沌は治まらない。
いきなりの交渉に蓮華は顔を真っ赤にして冷静さを失っている。

「ま、待って！　あなたのお姉さんになるということは、えっと、その。しかも、今すぐって」
「今なら、アニィが作った制度でこの婚姻届に署名して役所に届ければ、その瞬間にアニィのお嫁さんに」
「はい、恋ちゃん。そこまでよ」

どこからともなく取り出した、婚姻届と筆を紫苑と桔梗が取り上げる。
このまま、なし崩し的に結婚させるかと必死の形相で。
取り上げられた恋は、念願の姉ができるかと思っていたので、寂しそうに部屋の隅で落ち込む。
現在一刀もねねもいないので、慰めているのは思春だ。
そんな二人をよそに、取り上げた婚姻届を前に紫苑と桔梗の言い合いが勃発する。

「放さんか紫苑。わしが書けん」
「桔梗は書く必要無いわ。私が書くから」
「ちょっ、ちょっと待て。私だって書かないとは言っていない！」

さらに、自分と一刀の立場も忘れて蓮華も参戦し、場は混沌と化した。
唯一の救いは、この場に焔耶や穏といった顔がおらず、さほど騒ぎが大きくない事くらいだろう。
そんな、三人が一本の筆を取り合っている様子を見て、ようやく顔を上げた恋が歩み寄る。
そして。

「誰も書かないなら、恋が書く」
『それは駄目！』

本当にどこに持っていたのか、もう一本の筆を取り出して婚姻届に署名しようとしている恋を、三人は争っていたとは思えないチームワークで制止する。

「……冗談」
「恋ちゃんのは冗談に聞こえないのよ」

「一瞬、兄妹という事を忘れそうになったぞ」

冗談とはいえ、恋ならばありえそうな言動に三人は頭を抱える。
残る一人の思春は、さすが一刀兄上の妹だと、心の中で賞賛と拍手を送る。

「……で、結局どうするのじゃ、これは」

額に当てていた指先を、机の上に放置された婚姻届に向ける。
このまま争っていても、堂々巡りなのは目に見えている。
おまけに焔耶や穏が加われば、争いが激化するのは目に見えて明らか。
正直、ここに雪蓮や冥琳といった、他の一刀狙いの面々がいないだけマシな方。

「ともかく、これをどうにかしましょう。私達にとって、これは争いの火種でしかないわ」

紫苑の言い分に桔梗と蓮華も同意するように頷く。
そんな、ようやく沈静化してきた室内に、騒動の原因の一端となった人物の声が響く。

「じゃあそれは、俺の方で厳重に保管させてもらうよ」
『っ！？』

声のした方向を振り向くと、そこにいるのは一刀。
穏と共に部屋に入ったからそれほど時間も経っていないのに、どうしてここにいるのか。
どこから聞かれていたのか、気になる事は多々ある。
だが、まずはこれを聞かずにはいられなかった。

「の、穏はどうしたんだ？」
「宥めようとしたけど収まらなかったから、悪いけど一撃入れて気絶させてもらった。今頃は医務室だろうね」
「なんじゃ、てっきり欲求解消でもしておったのかと思ったぞ」
「重要な案件の最中、俺だけそんな事、している訳にもいかないでしょ」

そう言って、放置されていた婚姻届を回収する。
別に破いてもいいのだが、紙が貴重なこのご時勢。
一枚たりとも無駄にはできない。
使い道など、身を固める際に使えばいい。
こうして丁寧に折りたたまれた婚姻届は、一刀の懐へと納められた。

「さて、俺がさっき頼んだ件がどうなったか聞きたいけど、それ以上に何で婚姻届を巡って争いが起きたのか、まずはそっちを聞こうか」

黒い笑みを浮かべ、拳を握る一刀に争っていた三人は冷や汗を流す。
しかし、彼女達はこの状況を無事に切り抜ける。
一刀に対する最終兵器、恋の介入によって。

「アニィ、皆は悪くない。恋が、早くお姉ちゃんになってって強請ったから……」

袖をくいくいと引っ張りながら割り込んできた恋は、触覚のように跳ねた髪がしゅんと垂れている。
これには一刀の黒いオーラも消え去り、代わって穏やかな空気に包まれる。

「なんだ、そんな事か。この前も言っただろう、恋。せめてこの戦乱が治まるまでは、嫁さん貰う暇は無いって」
「……分かった」
僅かに頬を膨らませながらも、渋々納得して袖から手を放す。
なにはともあれ、無事に状況を切り抜けた三人は、ほっと胸を撫で下ろす。
これで万事解決かと、誰もが思ったが。
「なら、恋が今すぐ曹操を倒してくる」
物騒な発言をして顔を上げ、武器を手に飛び出そうとする恋を一刀が捕まえて引き止める。
単独なのもそうだが、こんな時にいきなり攻め込んでは、他国間での外交問題も出てしまうからだ。
「ちょっ、待って恋！　いくら恋でも、単独で行ってなんとかなる相手じゃないから！　というか外交問題に！」
「でも、早くお姉ちゃん欲しい」
「だからって駄目！　我侭言うなら、俺は嫁を貰わないぞ」
それを聞いて停止したのは、恋だけではなかった。
後ろで様子を見守っていた三人は、心の中で行くな、やめろと叫び、いざという時に抑えられる構えを取る。
対する恋は、足りない頭の中で思考を巡らせる。
兄が嫁を貰わない、つまりは焔耶や穏達が家族にならない、姉ができない、家族が増えない。
「……それは嫌」
「じゃあ、我慢してくれるね」

「……ん」

しばしの沈黙を挟んでの頷きに、誰もがほっと胸を撫で下ろす。
しかし、これで終わらないのも恋クオリティ。

「いつか、お嫁さんたくさん貰って、お姉ちゃんいっぱいつくってくれるなら」

この一言で、今日一番の沈黙が室内に包まれた。
今後の事などを考えて、一刀が了承せざるを得なかったのは、言うまでもない。

約束（後書き）

後半からは、ずっと恋のターンでしたｗｗ
誤字脱字等ありましたら、どうぞご指摘お願いします。

拠点フェイズ　思春・蓮華・穏・霞　編

思春拠点　交渉人思春

皆が寝静まったと思われる夜中、思春は用意された客室ではなく恋の部屋にいた。

「という訳で、そろそろ一刀殿を兄上とお呼びしたいのだが」

「……駄目」

どうやら未だに一刀を兄と呼ぶ事を認められていないため、恋の説得に来たらしい。

「どうしても駄目か？」

「……お嫁さんは構わない。けど、妹は駄目。アニィの妹は恋だけのもの」

シスコンかどうか紙一重な発言だが、生憎なところ思春はそんな事を分からない。

仲のいい、ちょっと独占欲が強い妹程度にしか思っていない。

とはいえ、このままでは永遠の平行線でしかない。

いっそのこと、恋の知らぬ場所でこっそり兄と呼ぼうかと考えるが、それも無駄に終わる。

「……恋のいない場所で呼んでも、真っ二つ」

「ハハハ、ヨブワケナイジャナイカ」

本気の殺気を発する恋に、考えている事を空の彼方に飛ばす思春だった。

「……ならいい」

明らかに動揺しているが、恋にとってはどうでもよかった。
相手が否定してくれれば。

「はぁ、恋殿が羨ましい。あのような兄上がいてくれて。恋殿も、一刀殿が兄上で良かっただろう？」
「……（コクッコクッ）」
「私にもあのような兄上か、姉上が欲しかった。そうすれば、もう少し素直になれたかもな」
「……？」

半ば愚痴のような言い回しを、どういう意味か理解できない。
目の前にいる思春は、軽い溜め息を吐いて自身の過去を振り返っている。
どう振り返っても、素直だったのは幼少の頃のみ。
一刀や蓮華への、憧れや敬愛の気持ちを除いて。

「……思春は素直じゃない？」
「あぁ、そうだな。私は人前で素直になれん。心に留めておくだけで、口にはせん。だから尚更、恋殿が羨ましい」

これまでに見てきた人物の中で、幼子を除けば恋は素直な性格の部類に入る。
しかもこれほど純粋な素直さは、そうそうお目にかかれない。

「……何で素直じゃない？」
「……聞かれても困る」
「……ん」

沈黙が室内を包み、どことなく気まずい雰囲気が漂う。
しかしそれは思春だけで、恋は眠っているセキトを膝の上に乗せて毛づくろいをしている。
そんな沈黙がしばらく続き、そろそろお暇(いとま)しようと思った頃、どこからか寝息が聞こえる。
俯き気味だった顔を上げてみると、向かいの席に座っている恋が船を漕いで眠っていた。

「……いつの間に」

規則正しい寝息を立てる恋をじっと眺めてみる。
食事中の姿も良いが、眠る姿も案外癒される。
それも食事中とは違い、ずっと見ていても飽きない雰囲気がある。
机に身を任せて眺めていると、うとうとと眠くなる。
やがて思春の意識は夢の世界に落ちた。
それからしばらくして、部屋の扉が開いて桔梗が現れた。

「やれやれ、灯りが付きっぱなしだから様子を見に来てみれば」

仕方ないとでも言うような表情をして、ほとんど融けかかっている蝋燭の火を消す。
恋とセキトは寝所に寝かせ、思春の体を揺する。

「んうっ」
「ほれ、思春殿。寝るのなら、客室へ戻って眠りなされ」
「んっ、すまない。いつの間に寝てしまったのだ」

眠気の残る目を擦り、ぼんやりながらも意識を起こす。

「手を貸すか？」
「いや、大丈夫だ。では、失礼する」
少々おぼつかない足取りで出て行く思春の後姿を見送りながら、ふっと息を吐く。
「全く、姉妹のように寝おってからに。少々起こしにくかったぞ」
桔梗の呟きは静かな月夜に溶けていった。

蓮華拠点　あなたの寝顔を見てみたい

暗い廊下を手にしている灯りで足元を確認しながら進む、一組の男女。
一方は仕事に関する竹簡を数本脇に抱えている一刀。
もう一方は、灯りの蝋燭を持っている蓮華。

「悪いな、蓮華。こんな遅くまで仕事が伸びさせちゃって」
「構わないさ。互いの国の今後のため、貿易に関する案件は詰めておくべきだからな」
「そう言ってもらえると助かるよ。そういえば、思春は？」
「何か用事があるとか言っていたわ。どこに行ったのかしら？」

普段はいつも近くにいる側近の不在に首を傾げる。
すると、噂をすればなんとやら。
話題になっていた思春が前方からやって来た。
やけに覚束ない足取りで。

「あっ、蓮華様」

「どうしたの、思春。足取りが悪いけど、気分でも悪いの？」
「いえ、少々眠くて。ついさっきまで、転寝（うたたね）をしていたもので」
そう言って欠伸をするのを我慢し、目を擦る。
「珍しいわね。あなたが転寝なんて」
「恋殿の寝顔を見ていたら、つい誘われるように」
「あぁ、なるほど。そりゃ眠くなるのも仕方ないな」
一刀も何度か恋と添い寝をした事があるので、寝顔による眠気を体感したことがある。
どんなに眠気が無い時でも眠気を誘い、いつの間にか夢の中へと旅立たせる恋の寝顔。
食事中の雰囲気に次いで、恋の人気の一端を担っている。
とはいえ、まさか徹夜も当たり前の隠密さえ眠りに誘うとは。
「そういう訳で、すみませんが蓮華様、一刀殿、お先に失礼します」
「えぇ、転ばないように気をつけてね」
軽く一礼した思春が去っていくと、蓮華は一刀の顔をチラリと見る。
「どうかした？」
「い、いえ、なんでもないわ」
なんでもないと否定したが、どう見ても様子がおかしい。
何かに好奇心を煽られているように、何度も一刀の顔に視線を向ける。
「えっと、俺の顔に何か付いてる？」
「べ、別に……」

「じゃあ、何でそんなに俺の顔見てるんだ？」

疑問に思った事を率直に口にする一刀に対し、蓮華はどうしようか戸惑う。

言うべきか、言わないでいるべきか、何度も表情を変え、顔を上下させて悩む。

どこか可愛らしい、そんな仕草に一刀の兄魂にほんの少し火が灯る。

溺愛する妹を抱き締めたい、そんな衝動を彷彿させる兄魂に。

しかし相手は他人の妹であり、他国の王族。

簡単にそんな事できるはずもないため、必死に火が燃え上がらないように耐える。

「実はその……恋殿の寝顔で眠気を誘うなら、一刀殿の寝顔も眠気を誘うのではと、思って……その」

恥ずかしそうに告げる様子に、一刀は心の中で叫んだ。

なんだ、この可愛い妹キャラは、と。

余計に抱き締めたい気持ちが沸き出て来るのを、理性を総動員して封じ込める。

「どう思う？」

「いや、寝ている本人に聞かれても困るんだけど」

一番根本的な点を忘れて尋ねたせいか、指摘された蓮華は恥ずかしそうに俯く。

その姿がまた可愛らしく、燃え上がりそうな兄魂を必死に抑える一刀であった。

二人の織り成す摩訶不思議な様子に、見回りの兵士達は一様に首を傾げた。

その後の話し合いの結果、検証してみようという事で蓮華は一刀の

部屋を訪ねる事になった。

穏拠点　暴走の残り火

部屋に戻った一刀と、同行してきた蓮華の目の前に何故か笑顔の穏がいた。

「あっ、おかえりなさぁい。あや？　なんで蓮華様が？」
「それはこっちの台詞なんだけど？」

招待した蓮華はともかく、穏は今のところ招待されていない。
だとすると、不法侵入という事になりかねない。

「いいじゃないですかぁ。私と一刀さんの仲じゃないですか」
「……穏、親しき仲にも礼儀有りって言うだろう」
「それはそうですけど、あんな事があったのでつい」

申し訳なさそうに頭を掻く穏に対し、一刀はつい先ほどのやり取りを思い出す。
暴走を止めるためとはいえ、一撃入れて気絶させてしまった。
その辺りを考えれば、この侵入はそのお返しという事になるのだろうか。
考えが読めない笑みに若干の恐怖を抱きつつ、一刀は決断する。

「ま、まぁ今回は大目に見ようか」

妥協という選択を。

「あははぁ、さすが一刀さん。話が分かりますねぇ」

「さすがは穏、強かな子……」

額に手を当てた蓮華の呟きに、一刀は心の中で同意した。

「それで、蓮華様はどうしてここに？」

「ん、あぁ、実はな」

変に隠し立てしても怪しまれるし、勘繰られても困る。

知られても別段困ることでもないので、正直に話すことにした。

すると穏は、目を爛々と輝かせて饒舌に喋りだす。

「そおおぉですかぁ！　ならば是非、見てみるべきですよ！」

寝顔を見たことのある穏は、普段からは信じられないほどハイテンションになる。

同時に、この様子が解答ということになる。

一刀の寝顔は、恋同様に周囲に眠気を誘う。

となると、言いだしっぺとして蓮華は余計に寝顔が見たくなる。

その結果。

「だからってなぁ。まさかこうなるとは」

寝所で横になっている一刀の寝顔を見るため、蓮華と穏が部屋の椅子に座って眺めている。

「いいじゃないですかぁ。眠れないのなら、私と一戦交えて適度に疲労しますかぁ？」

「ちょっ、ちょっと！　私の目の前で！？」

艶かしく下唇を舐めながら衣服を緩める穏の様子に、蓮華が慌てる。

正直、嬉しい提案ではあるが、大事な捕り物を翌日に控えているのでお断り願う。

「ふえぇ、そんなぁ」

残念そうにする穏に対し、必死に止めようとしていた蓮華はほっと胸を撫で下ろした。
しかし、これで終わるはずがない。

「ならば、せめて添い寝を」

そう言って、許可を取る間も与えずにいそいそと寝所に潜り込む。
この行動力に一刀も蓮華も驚くが、気が付けば既に一刀の体にしがみ付いていた。

「ちょっ、なんでこういう時だけ素早いの！？」
「そうよ、普段からそれだけの身軽さを見せないよ！」
「蓮華、論点違う！」
「愛の力です」
「穏もそう言えば許されると思っているのっ！？」

傍目から見ればドタバタコメディなこのやり取りは、三人揃って疲れて眠るまで続いた。

霞拠点　嫉妬して女の子して悩み悩んで

正直なところ、霞は目の前の光景に苛立っていた。
見回りを終えて部屋に帰ろうとしたら、一刀の部屋の扉が開いていたので中を覗いた。

するとそこには、静かに眠る一刀に抱きついて眠る穏と、病人の看護中に寝てしまったかのように眠る蓮華がいた。

「なんやのん、これ」

何がどうなってこうなったのか理解できない霞は、しばしその場を眺める。

ところが、なんだか段々と一刀に腹が立ってきた。

着衣が乱れていない事から、捕り物前夜に情事に耽った訳ではないのは分かる。

ならば一緒に寝るくらいは特に問題はないはず。

それなのに腹が立って仕方が無い。

「……アカン、このままやったら一刀斬りそうや」

どうにか自制して、近くにあった掛け物を蓮華に羽織らせて部屋を出る。

機嫌が悪いせいか、足取りに少々乱暴さを滲ませながら廊下を歩く。

「あぁ、もう。なんなんや、この気持ち。訳わからんわ」

苛立ちが余計強くなったのか、頭を強めに掻く。

「……ウチはどなしてしもうたんや」

「どうかしたの、霞」

揺れる心を宥めるような優しい声に振り向くと、蜀のご意見番である丁原こと香織が杖を片手に立っていた。

「……おかん」

正直なところ、今の霞には一番頼りになる人物だった。
話を聞いてもらうために香織の部屋へ向かい、事の顛末を話す。
すると香織は意外にも笑みを浮かべた。

「あらあら、霞もすっかり女の子しているのね」
「はぁ？　どういう意味や」
「あなたは嫉妬しているのよ、一刀君が他の女の子と仲良くしている姿にね」

嫉妬。
その言葉を聞いて、なんとなく今の自分の気持ちを理解した。
昔馴染みの穏はともかく、後から交流を持った蓮華が一刀の部屋で寝ている。
それが気に入らないのだと。

「……ウチ、こない気持ち初めてやったから」
「そうやって、女の子は女性へと成長していくものよ」

亀の甲より年の功。
蜀の陣営でも最年長である香織が言うだけに、説得力がある。
彼女に育ててもらった霞でさえ、人としての部分では未だに教わる事が多い。

「人生って難儀やなぁ」
「あら、年寄りくさいこと言っちゃって。霞はまだ若いんだし、まだまだこれからよ」

そう言って差し出したお茶を、霞はチビチビと飲む。

「……それで、ウチはどないしたらええぇねん」
「それはあなた次第よ。私に出来るのは助言だけ、結局最後にどうするかを決めるのは、霞なんだからね」

それはそうなのだが、それはそれで困ってしまう。
初めての嫉妬にどうすればいいのかと、頭を抱える霞の姿ににこにこ微笑む香織。
そんな二人の姿は、傍目には普通の母娘に見えた。
この後、悩んだ霞がどうしたかというと……。

「ええぇぇっ！？」

明朝、一刀の悲鳴が場内に響いた。
原因は、昨夜はいなかったはずの霞が穏とは反対側に添い寝していたからだ。

「なんで霞がいるんだよ！」
「んあ？　おはよ、一刀」
「あぁ、おはよう……って、そうじゃなくて！」

朝からの騒ぎに一緒に寝ていた穏と蓮華も目覚める。
寝ぼけ眼を擦る二人は気付かなかったが、霞は二人に好戦的な目を向けていた。

（ウチかて、負けへんで）

霞なりに出した結論。
それは徹底抗戦。
仮に負けても、後悔しないようにと。

「うんうん、これで霞も女の子として一人前に近付いたわね」

一刀の叫びを聞いて集まった野次馬の中、香織は微笑みながら呟いた。

拠点フェイズ　思春・蓮華・穏・霞　編（後書き）

今回は少し短めでしたが、如何だったでしょうか？
誤字、脱字などありましたら、お教えください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1141m/

転生無双　至高の武人伝

2011年11月9日23時08分発行